

写真図版

(田鎖遺跡)



調査区全景（西から）



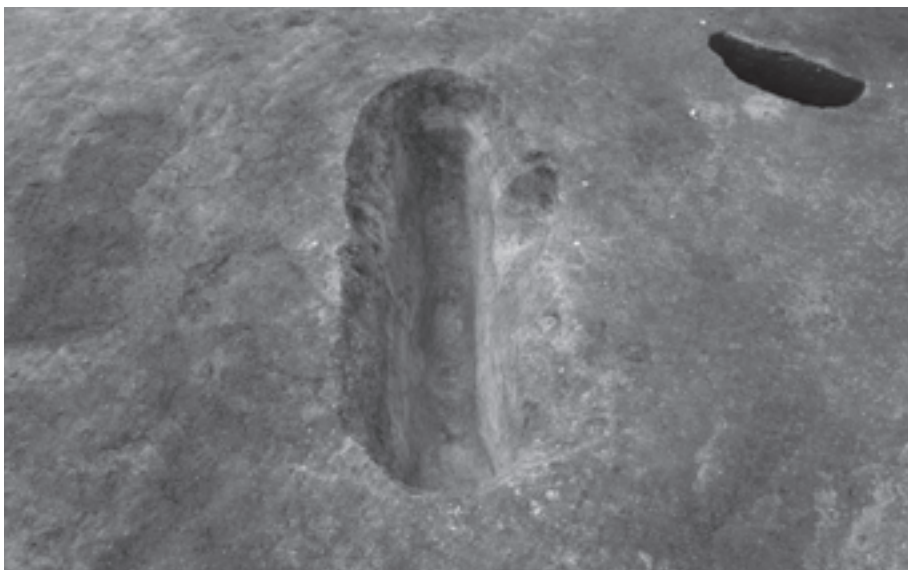
調査前現況（南東から）



陥し穴 1 全景（北西から）



陥し穴 2 全景（北西から）



陥し穴 3 全景（南から）

写真図版 2 陥し穴 1～3 全景



陥し穴 1 断面 (東から)

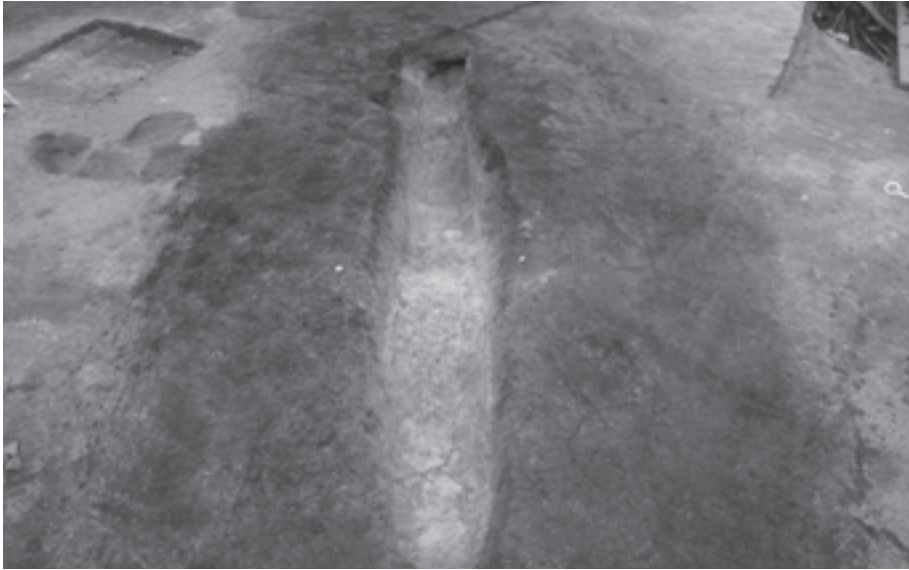


陥し穴 2 断面 (東から)

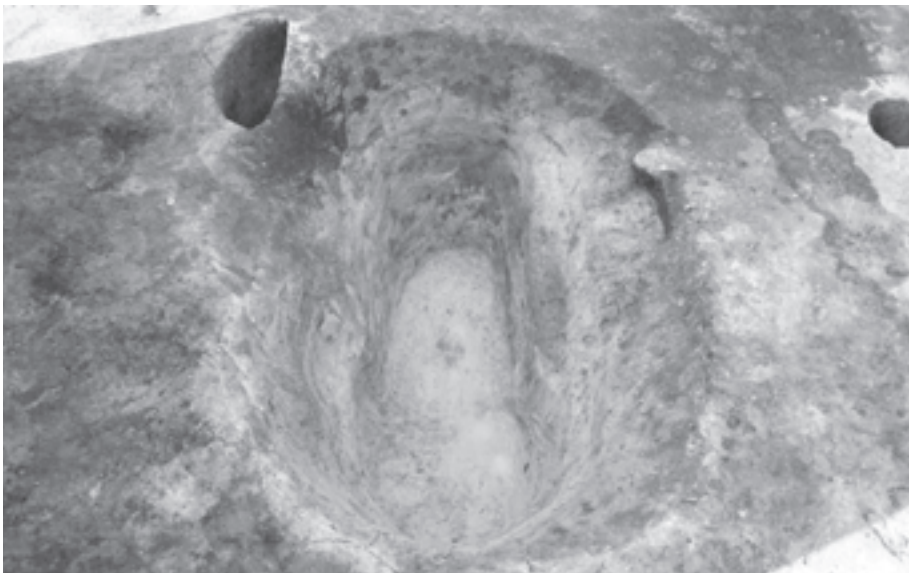


陥し穴 3 断面 (南から)

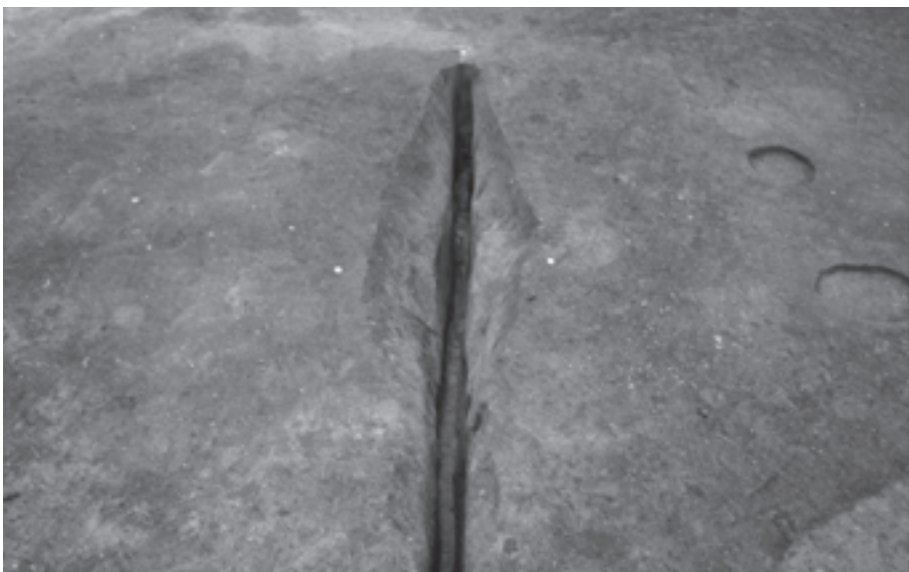
写真図版 3 陥し穴 1～3 断面



陥し穴4全景（東から）



陥し穴5全景（南から）

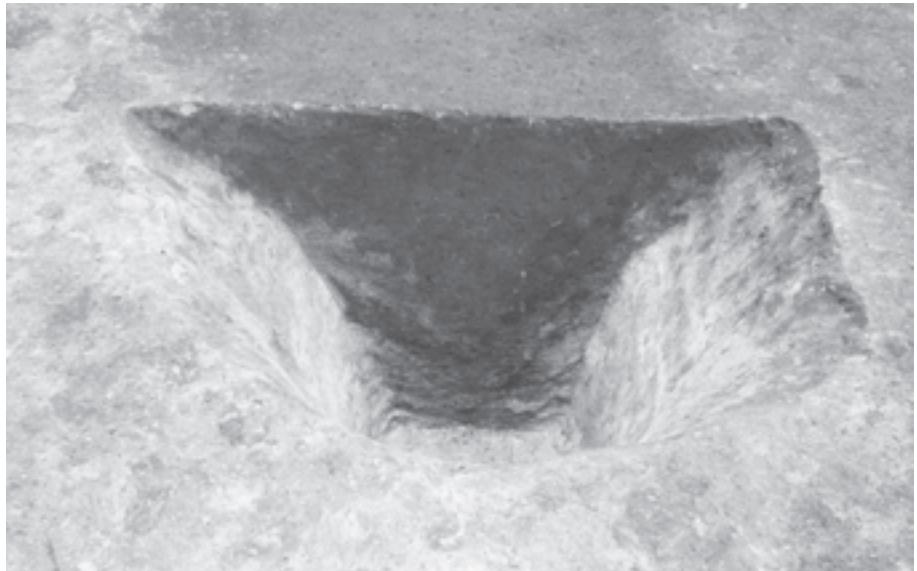


陥し穴6全景（南から）

写真図版4 陥し穴4～6全景



陥し穴4断面（東から）



陥し穴5断面（南西から）



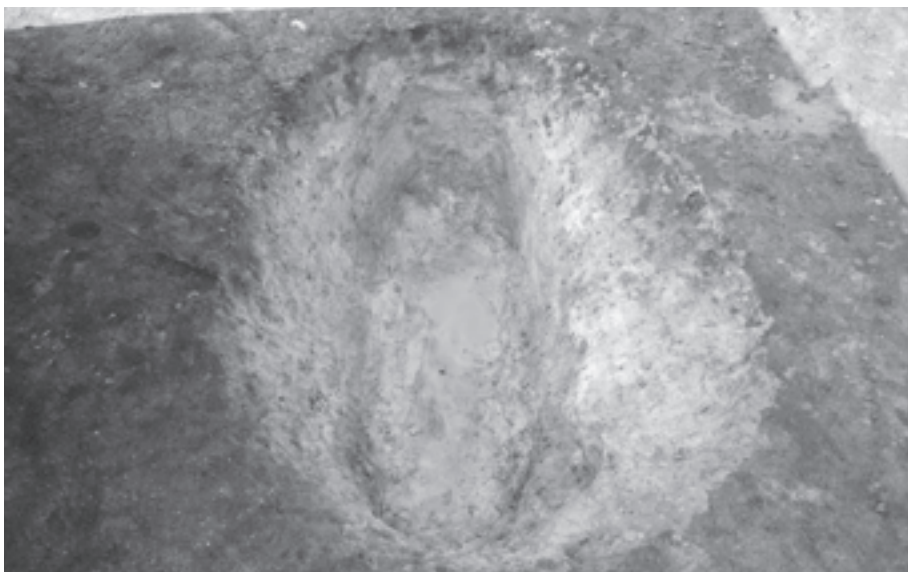
陥し穴6断面（南から）



陥し穴7全景（北から）

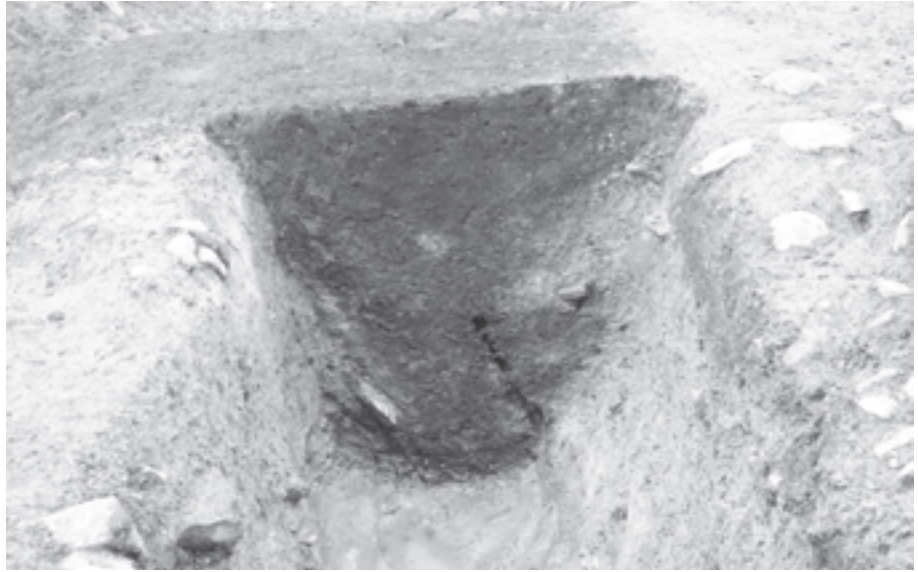


陥し穴8全景（南から）



陥し穴9全景（南から）

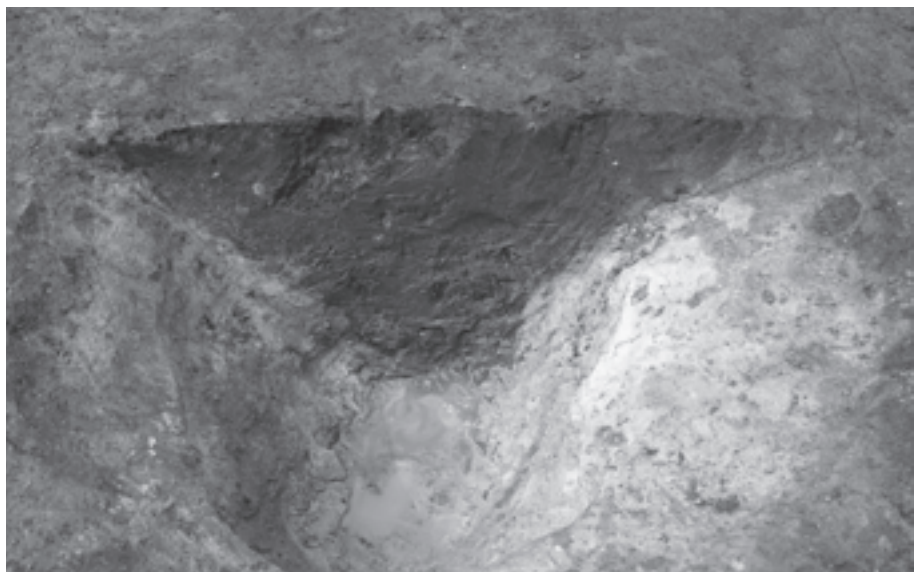
写真図版6 陥し穴7～9全景



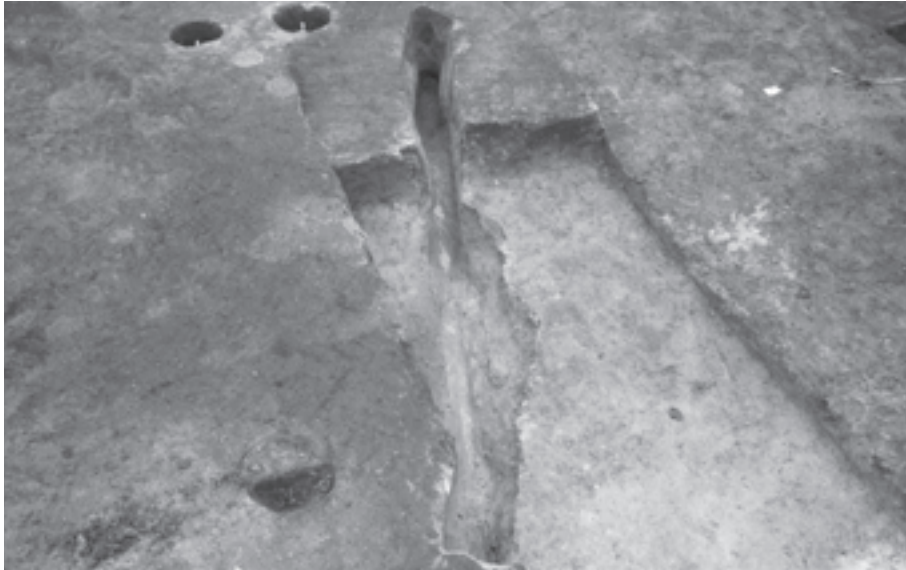
陥し穴7断面（北から）



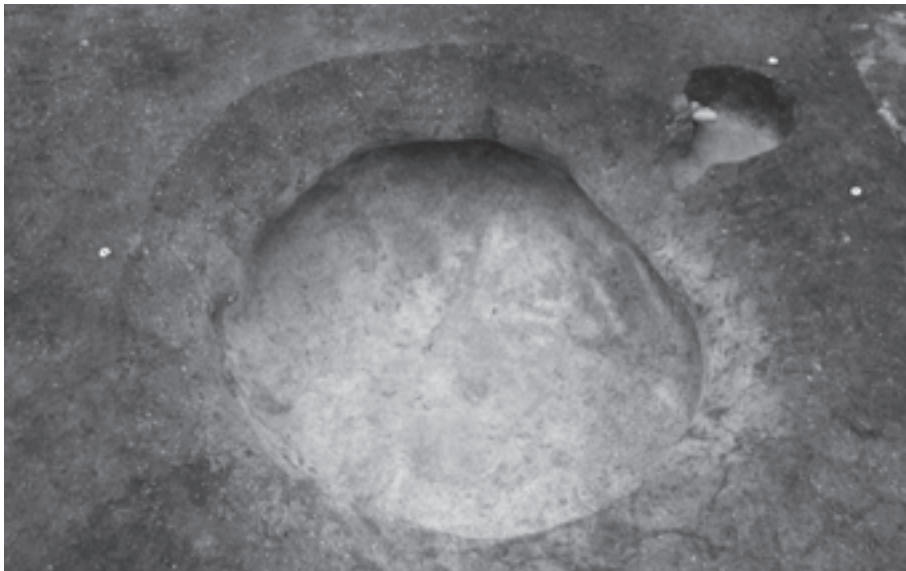
陥し穴8断面（南から）



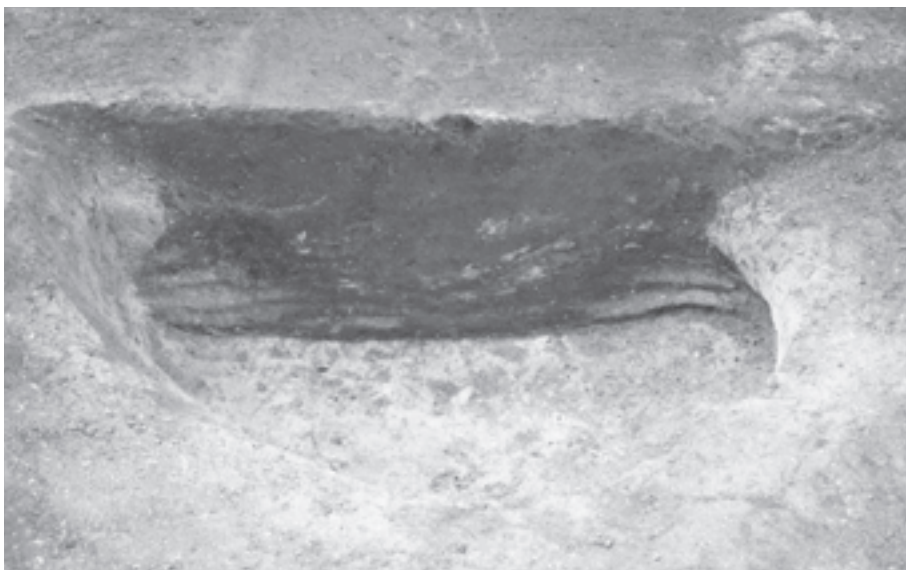
陥し穴9断面（南から）



陥し穴10全景（南から）



貯蔵穴1全景（南から）



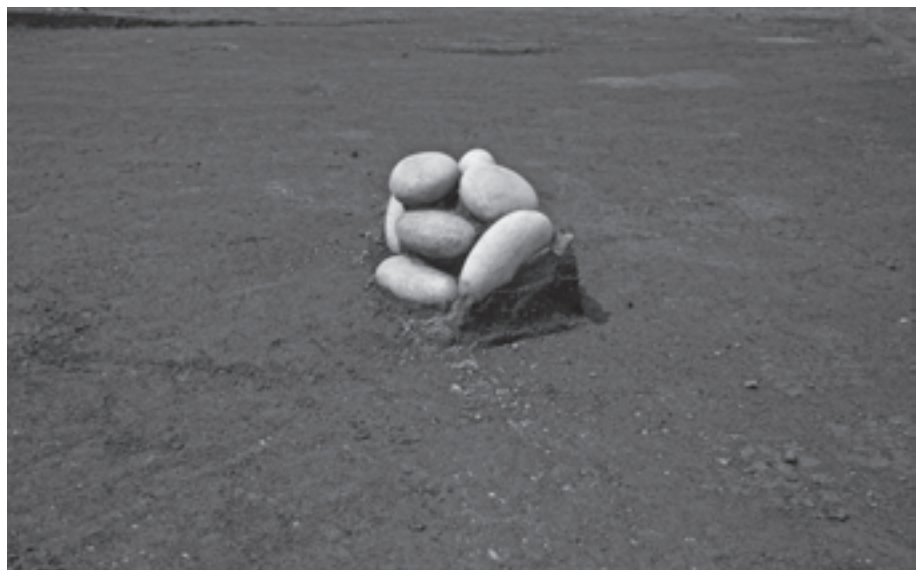
貯蔵穴1断面（南から）



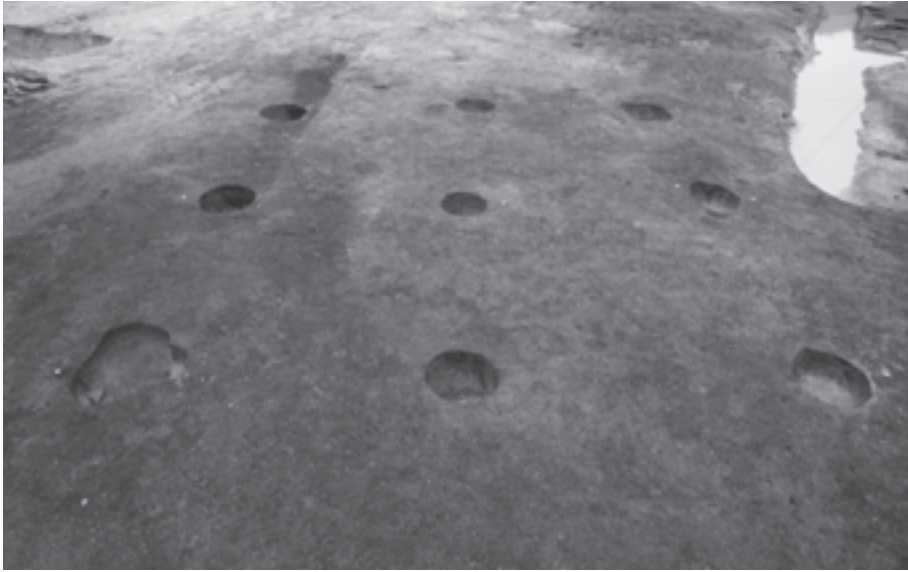
石組炉 1 検出（東から）



石器集積遺構 1 全景（東から）



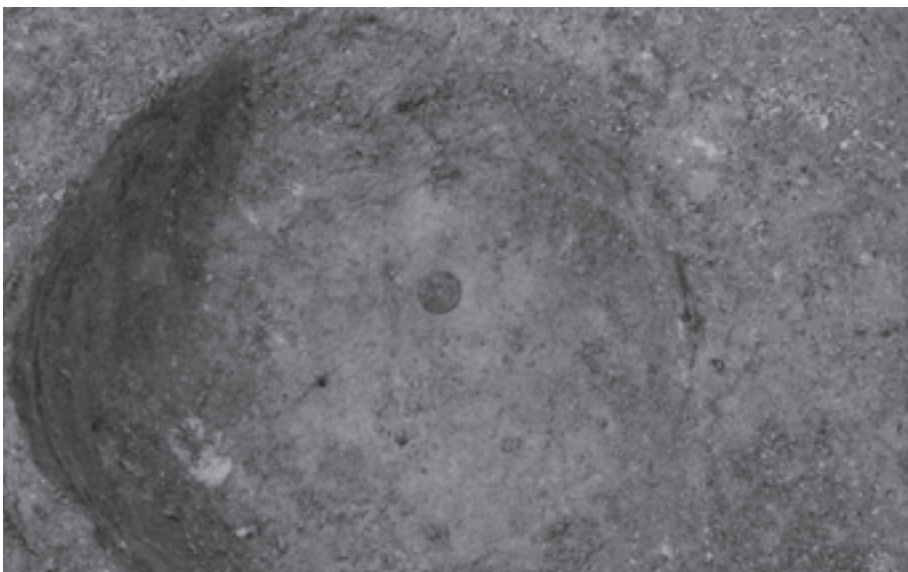
石器集積遺構 1 側面（東から）



掘立柱建物1全景（南から）



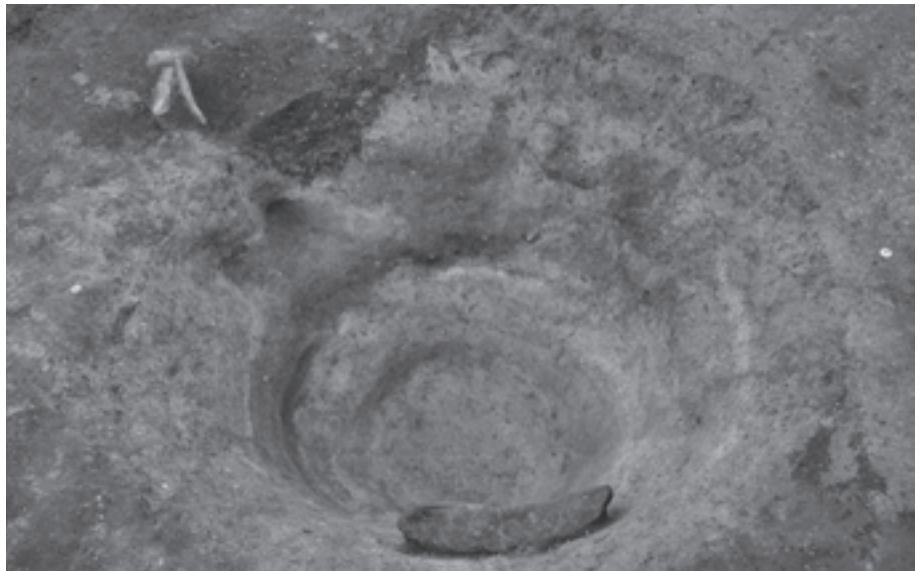
掘立柱建物2検出（北から）



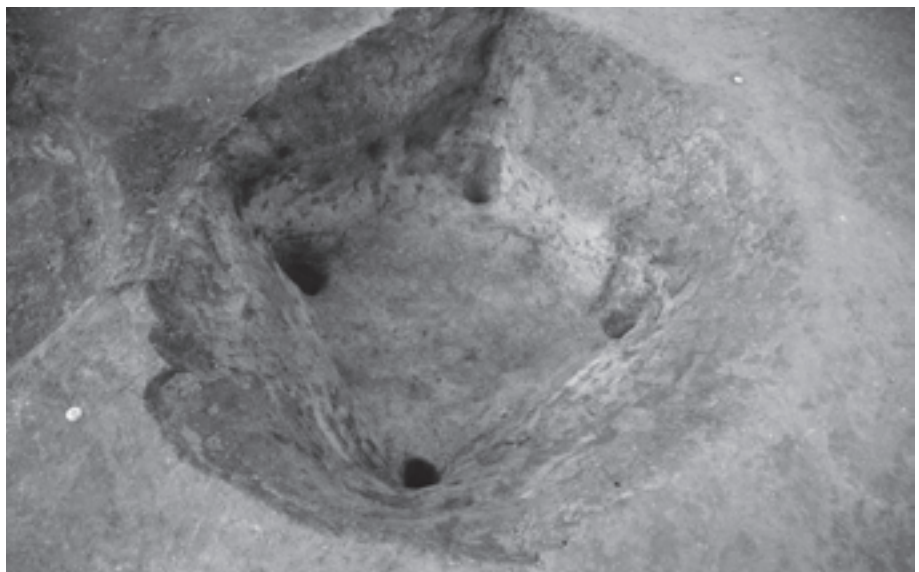
掘立柱建物2柱穴7底面錢貨出土状況（南から）



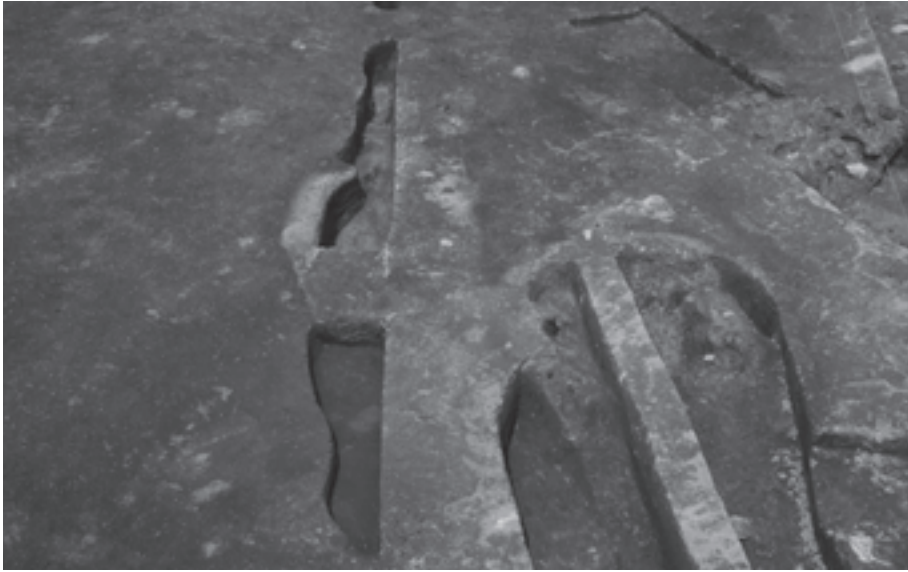
掘立柱建物3全景（北から）



井戸1全景（東から）



井戸2全景（南から）



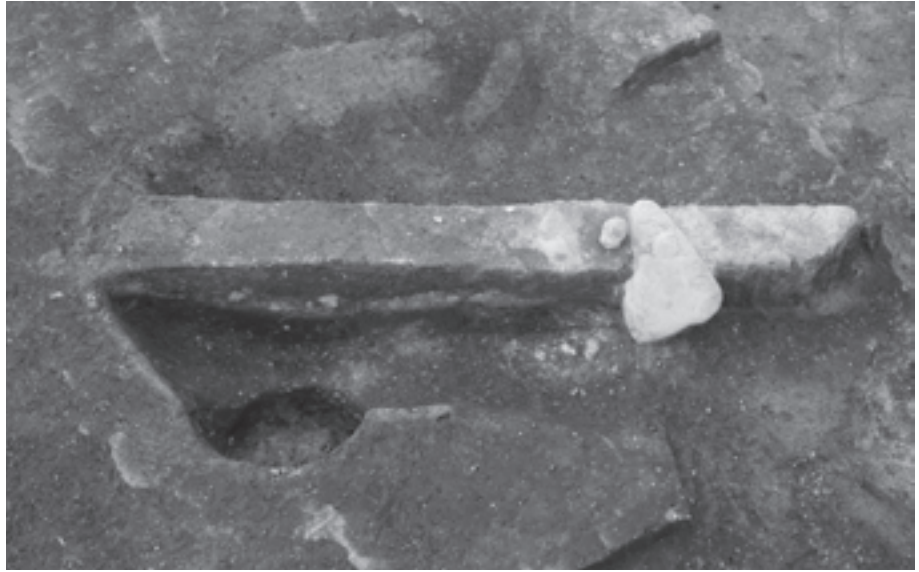
屋外カマド群（南から）



屋外カマド1断面（南から）



屋外カマド2断面（南から）



屋外カマド3断面（南から）



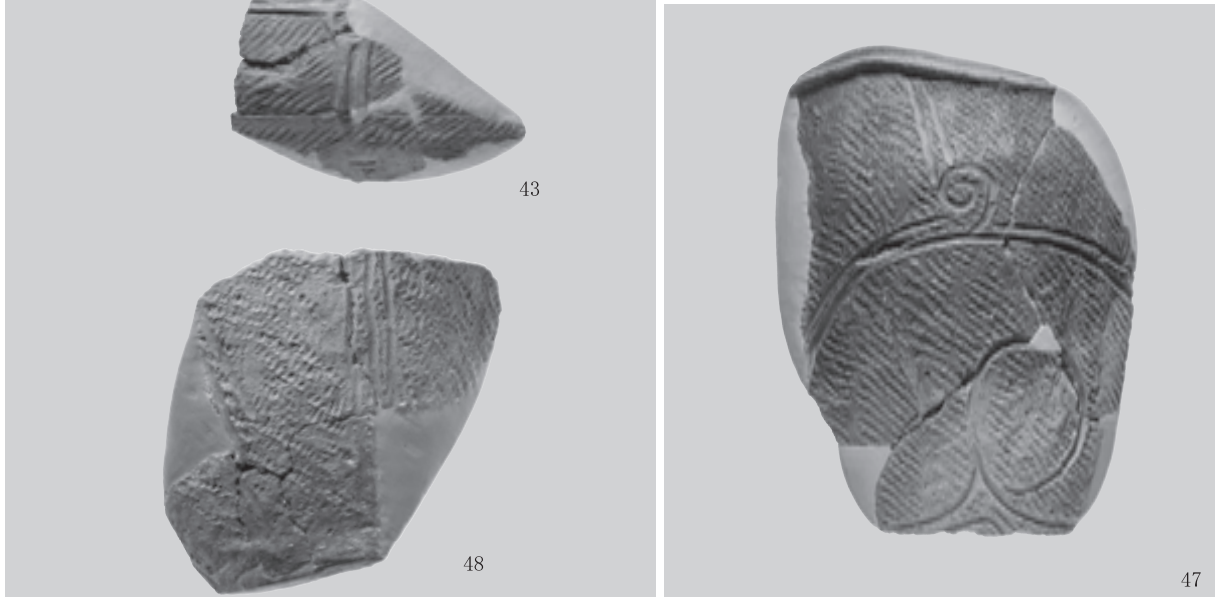
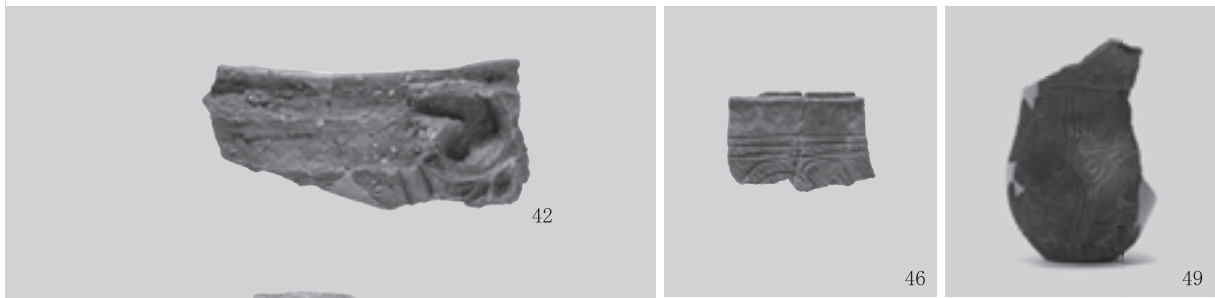
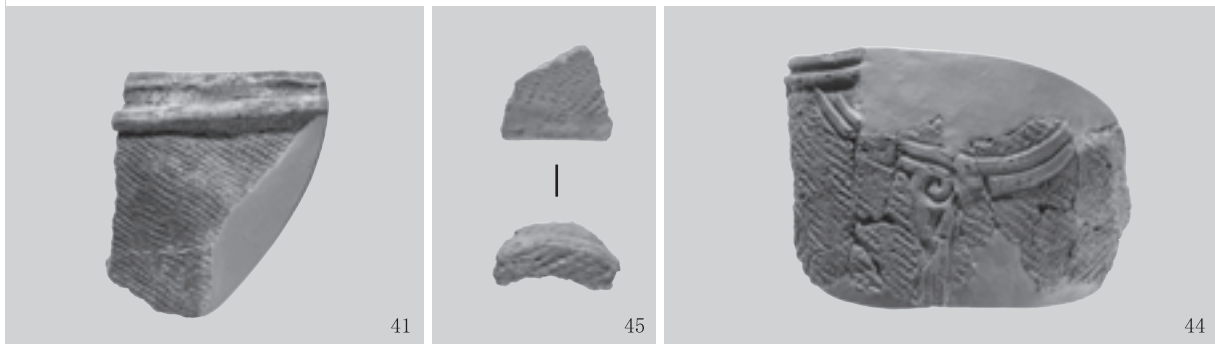
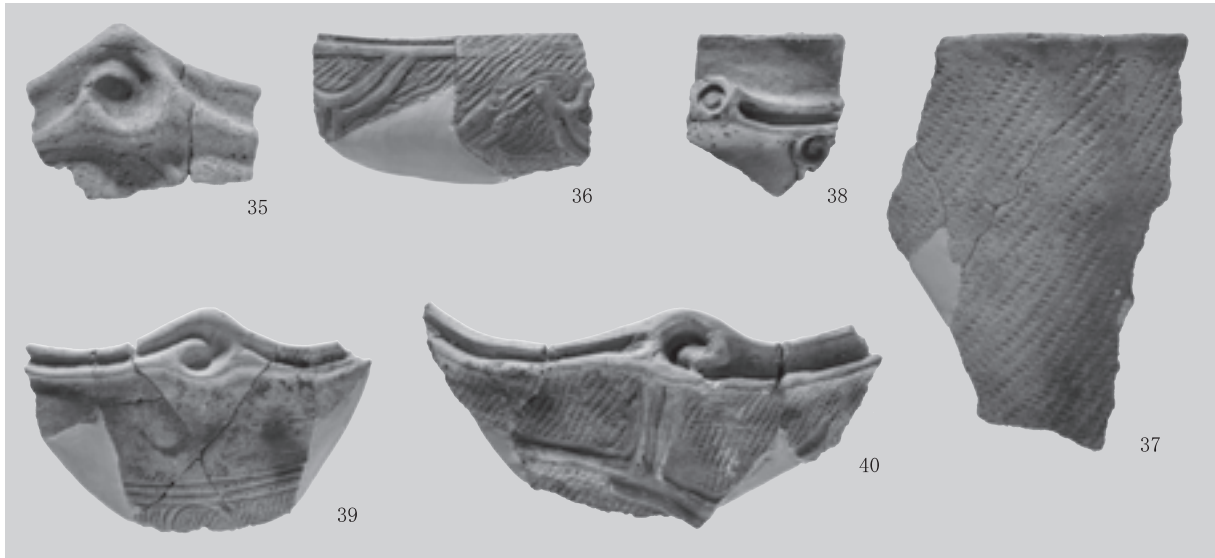
屋外カマド4断面（北から）



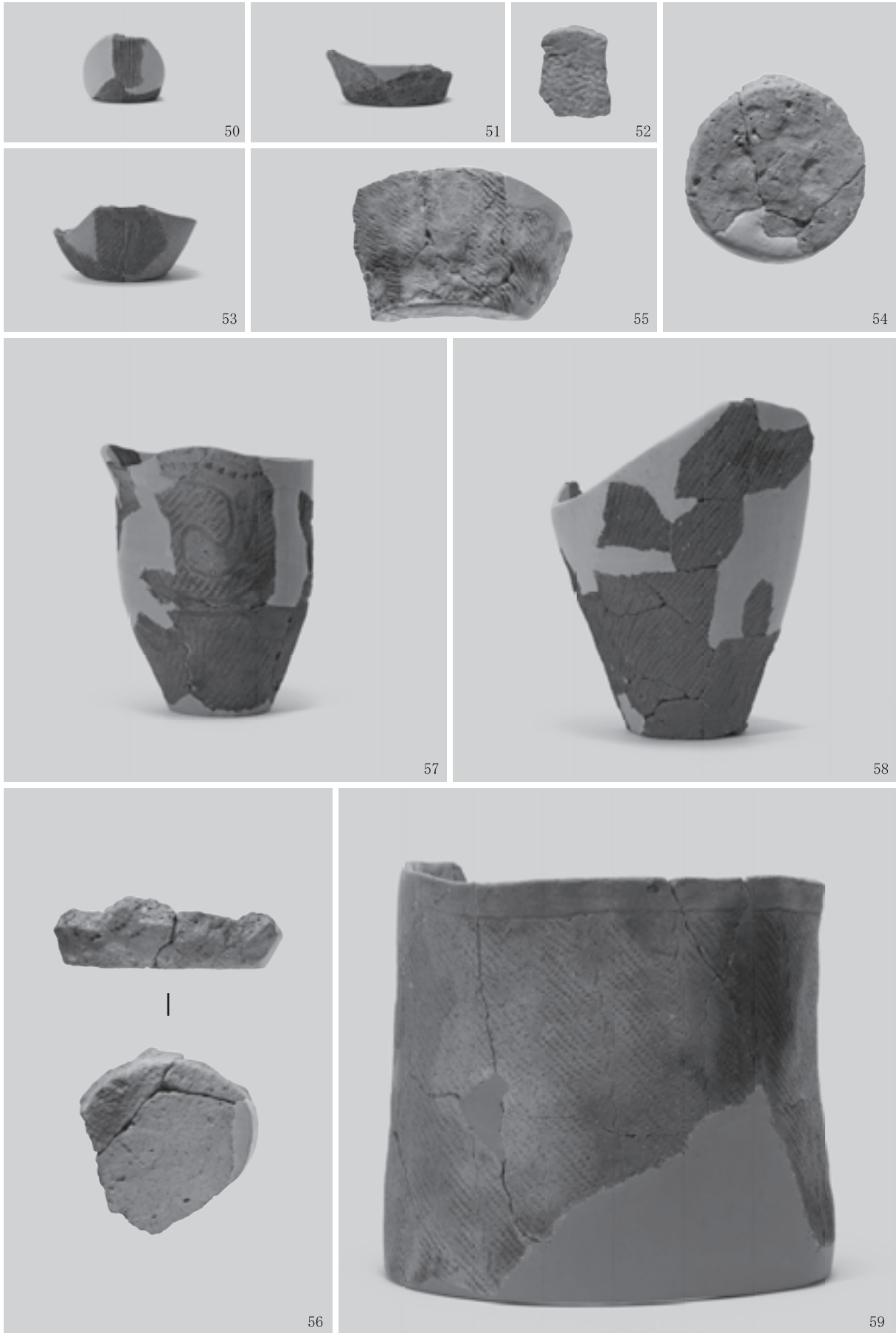
屋外カマド5断面（東から）



写真図版14 弥生土器(1~3)・縄文土器(4~34)



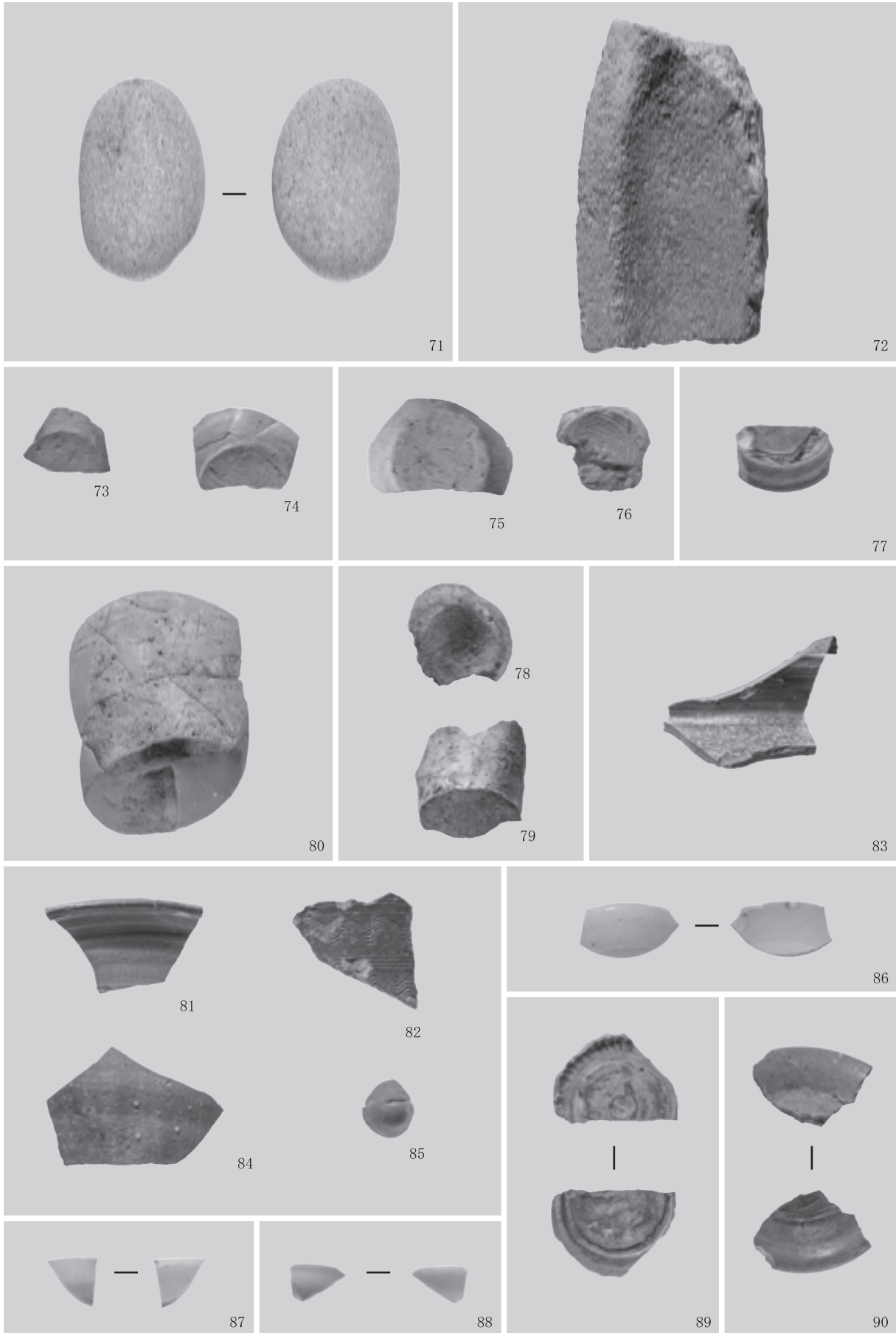
写真図版15 縄文土器 (35~49)



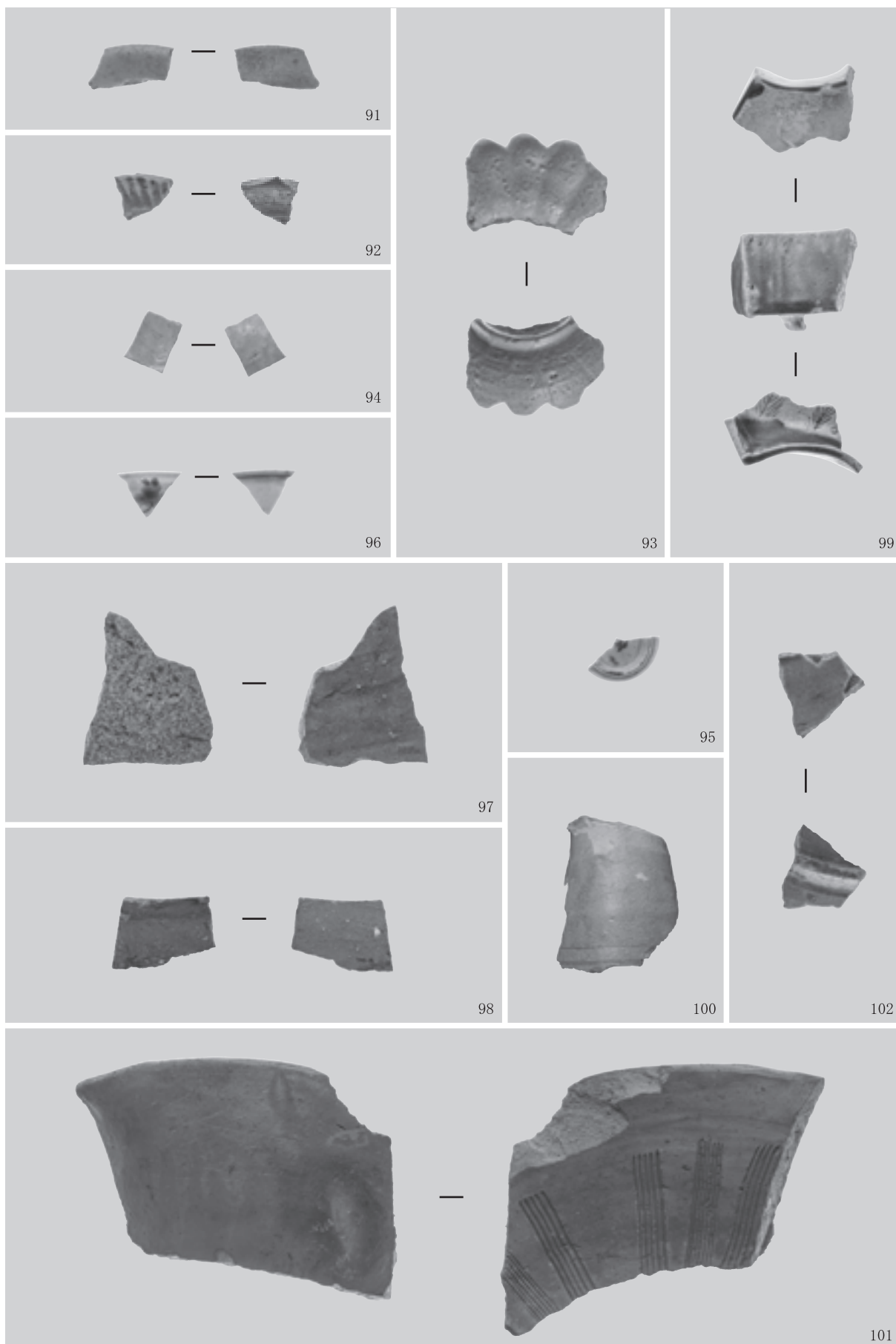
写真図版16 縄文土器(50~59)



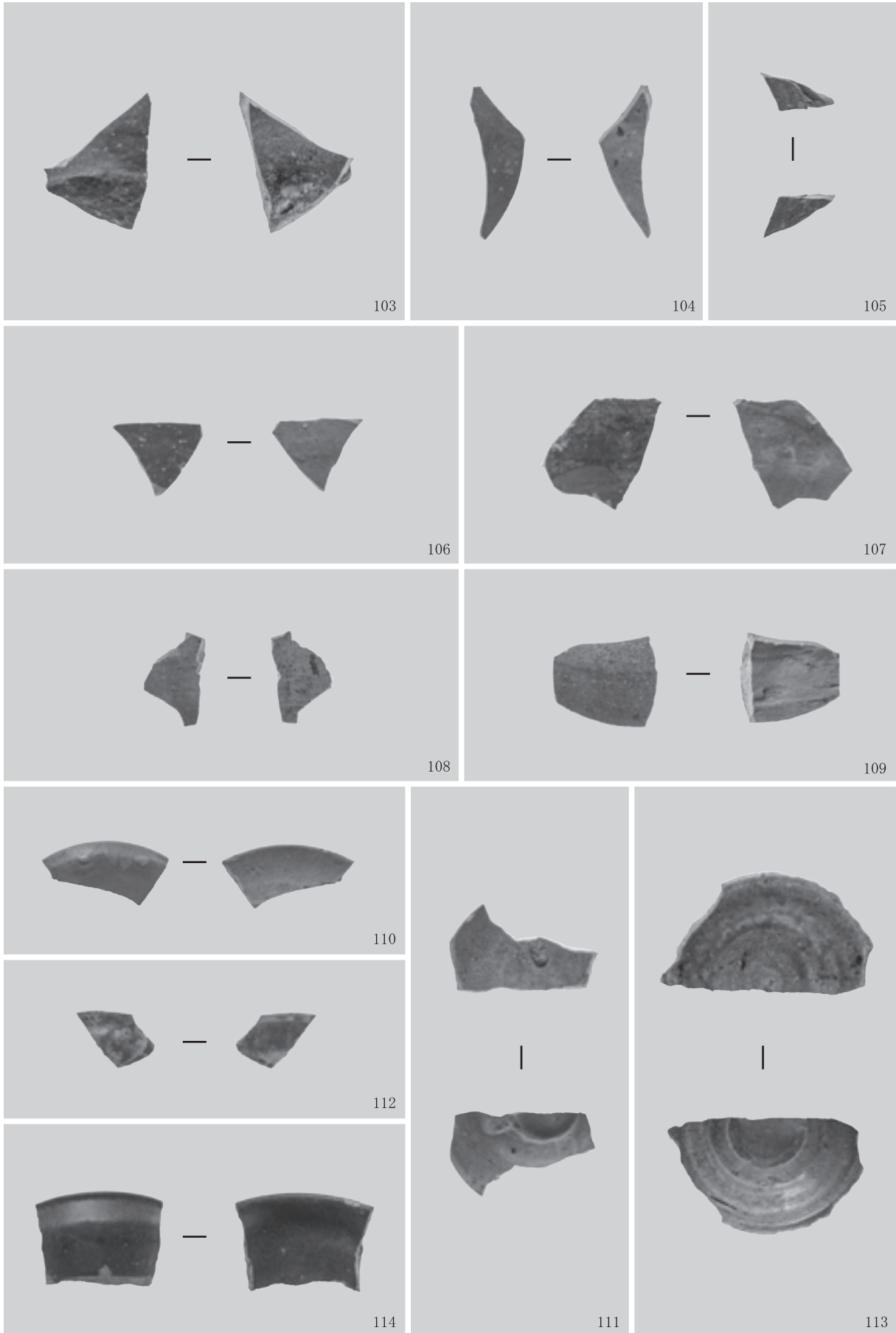
写真図版17 土製品(60)・石器(61~70)



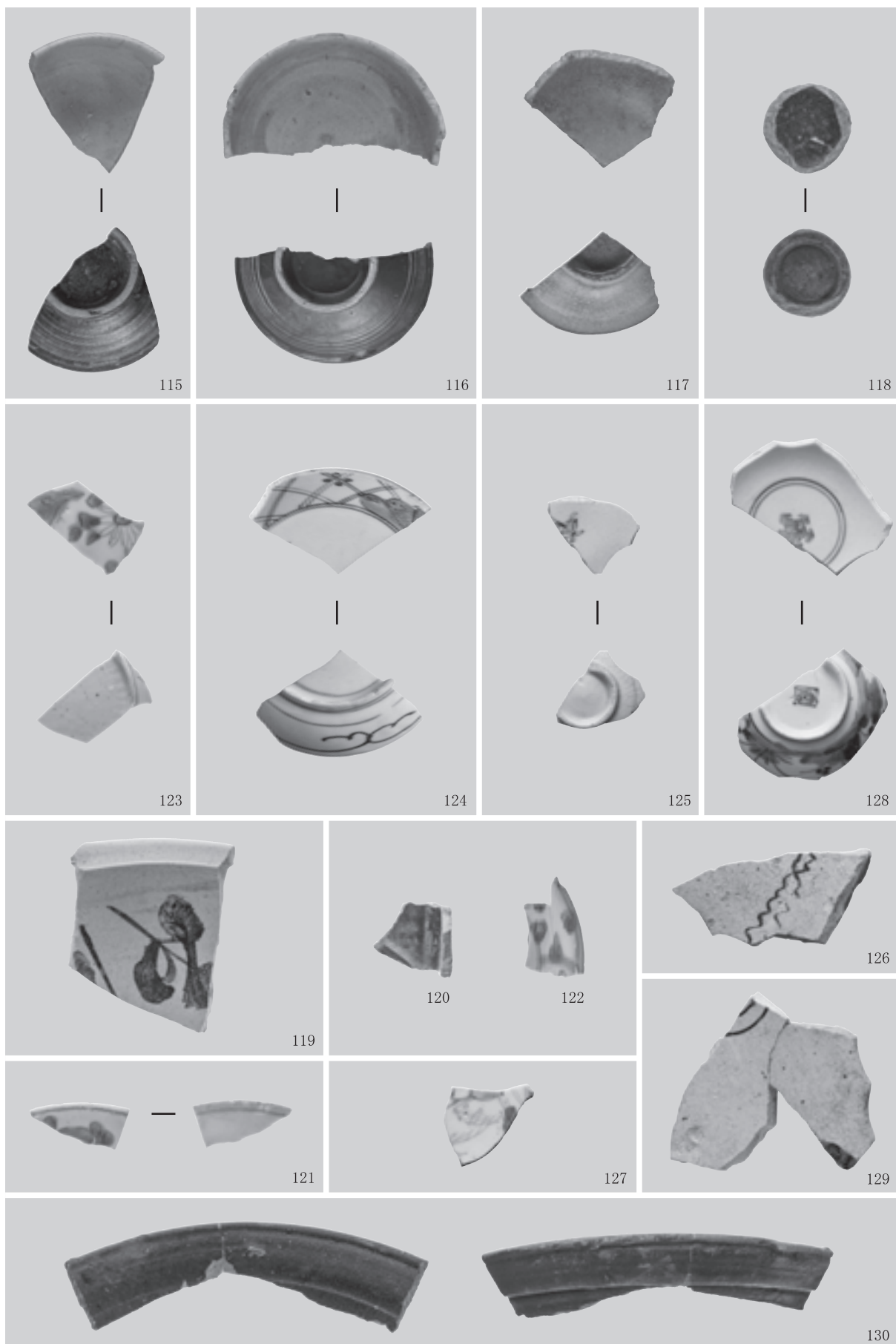
写真図版18 石器(71・72)・古代の土器(73~85)・中世~近世陶磁器(86~90)



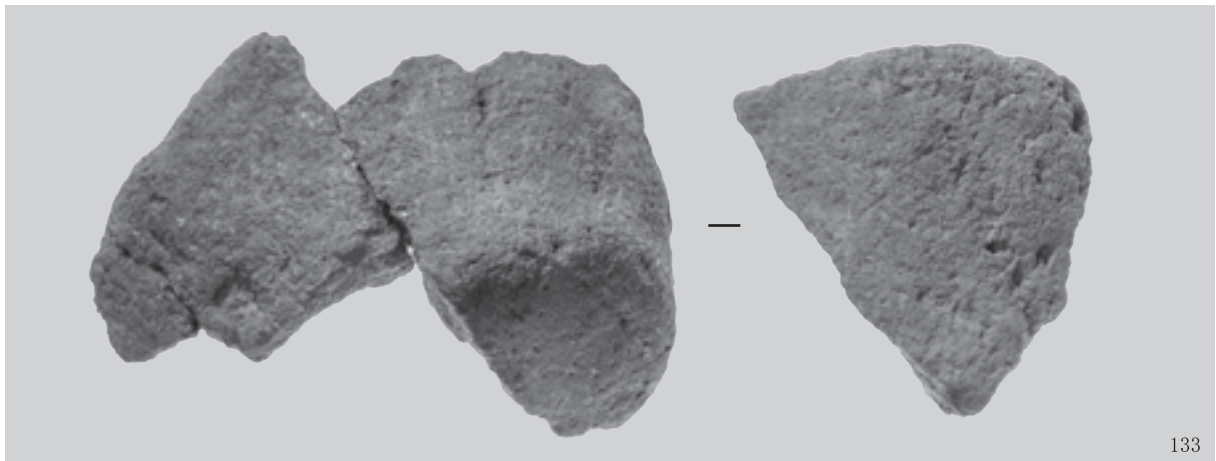
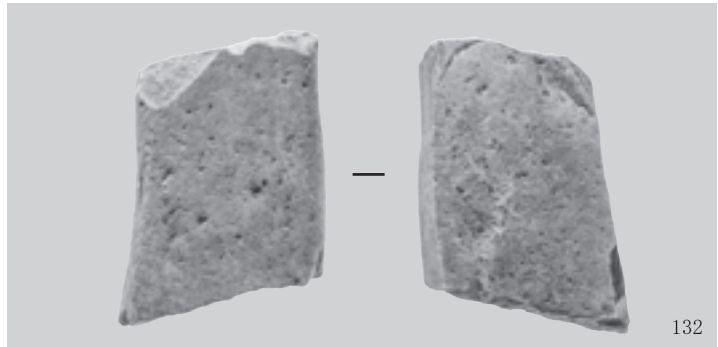
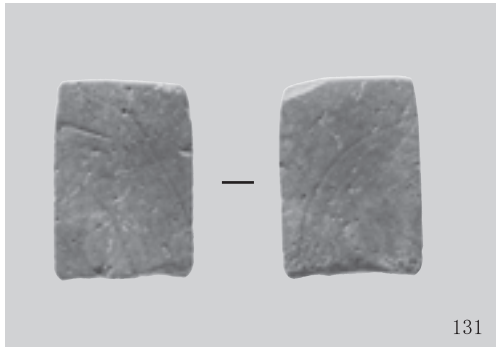
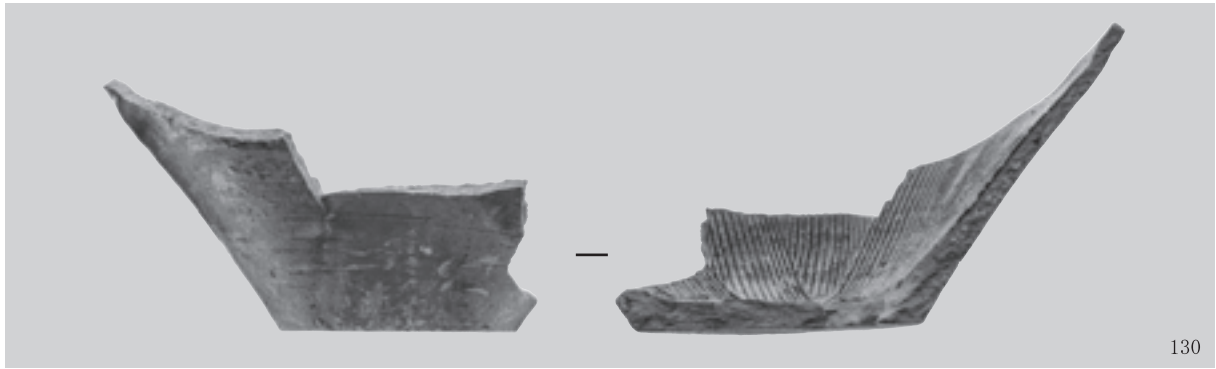
写真図版19 中世～近世陶磁器(91～102)



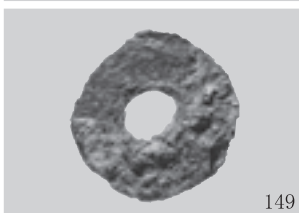
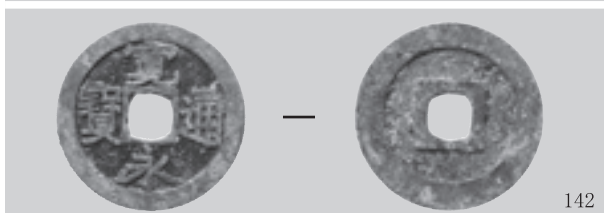
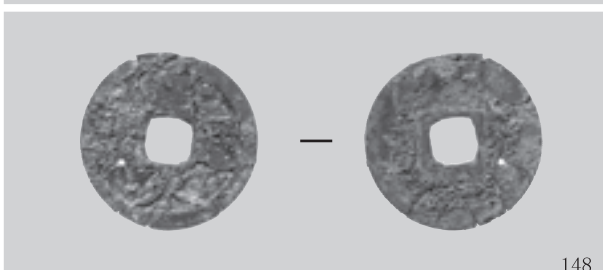
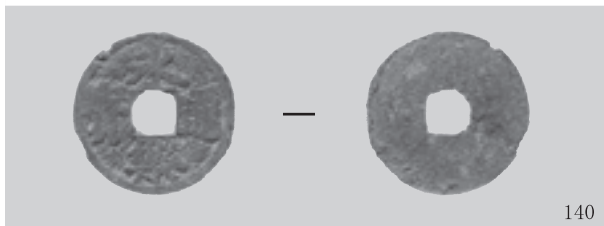
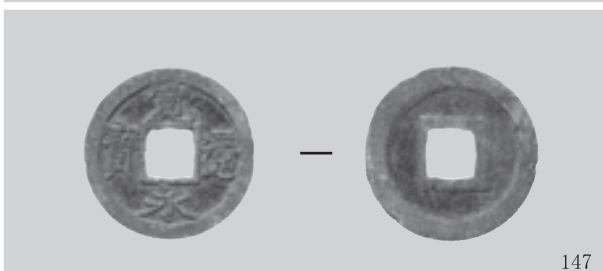
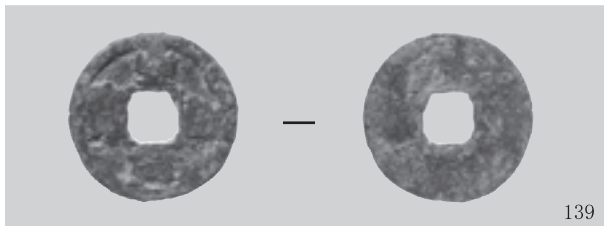
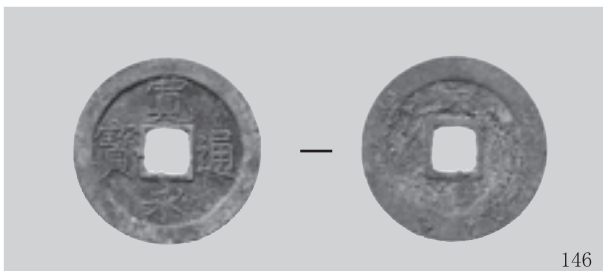
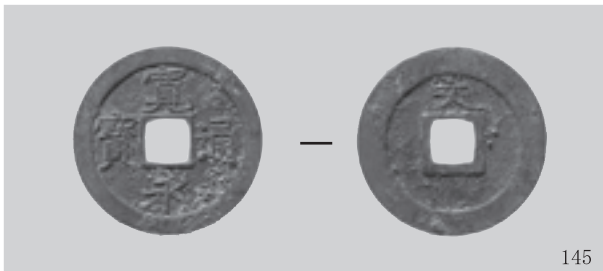
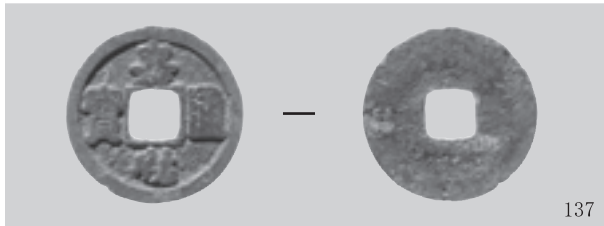
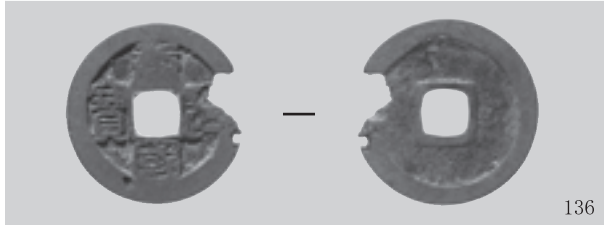
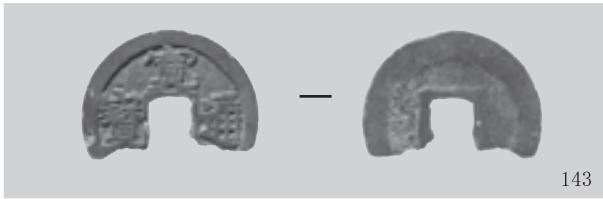
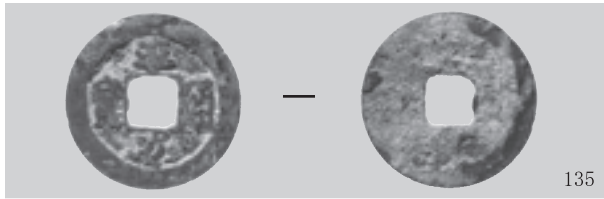
写真图版20 中世～近世陶磁器 (103～114)



写真图版21 近世陶磁器(115~130)



写真図版22 近世陶磁器(130)・石製品(131~134)



写真図版23 銭貨(135~150)

田 鎖 館 跡

V 田鎖館跡の調査

1 概要と層序

概要

本遺跡は宮古市田鎖第1地割69-6ほかにある。遺跡の範囲は東西約500m×南北約550mと広く、現況は標高が71mから12mの山林と、山裾に点在する宅地からなる。東側の尾根部をA区、沢を挟んだ西側をB区、B区の更に西側の尾根をC区と呼ぶこととし、遺跡全体からみれば東辺部を調査したことになる。

遺構は縄文時代中期後半の竪穴建物1棟、古代の竪穴建物47棟・土坑66基、中世の竪穴建物5棟・堀1条、性格不明遺構1基、柱穴254個が確認されている。

出土遺物は縄文土器と土師器が大コンテナ10箱、中世陶磁器9点、鉄製品が小コンテナ2箱、近世銭貨約50枚、羽口小コンテナ1箱、鉄滓大コンテナ6箱、石器が大コンテナ1箱出土した。

層序

A区山裾にある沢跡からは近代・近世・古代・縄文時代の遺物が出土した。調査前には住宅があり、広範囲に攪乱をうけている。平安時代の竪穴建物も検出されたことから、10世紀頃には沢がほぼ埋まり緩斜面地形になっていたことが分かった。この沢跡には、場所によって中礫火山灰もきれいに堆積しており、この火山灰層を境に上層と下層で分層して遺物を取り上げることとしたが、縄文時代前期や早期の土器は出土しなかった。遺構もなかった。

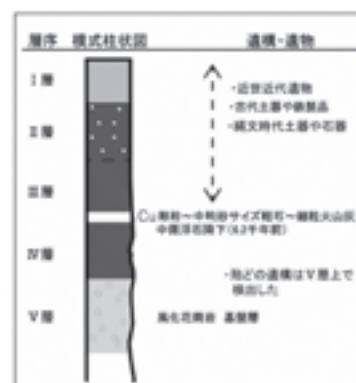
I 10YR4/4褐色シルト 粘性やや有り、締まっている。攪乱をうけているところも多い。

II 10YR3/1黒褐色シルト 風化花崗岩を多く含む。粘性・締りやや有り。場所により厚いところと薄いところがある。攪乱が及んでいるところも多く、縄文時代、古代、近世、近代の遺物が出土する。

III 10YR2/2黒褐色シルト 主に山裾付近では中礫火山灰が他の土と混じらずに堆積していた。沢中央ではブロック状となり、東側にいくほど見られなくなる。粘性やや有り、締まっている。縄文時代前期の遺構・遺物は見つからなかった。

IV 10YR3/2黒褐色シルト 粘性・締りやや有り。

V 10YR6/6明黄褐色風化花崗岩 粘性なし、締まっている。基盤層。



第1図 基本土層

2 遺構と遺物

(1) 縄文時代

竪穴建物

S I 2 6 (第29図、写真図版20)

<位置・検出状況> A1区山裾から沢部にかけて位置し、II～III層面で検出した。 <新旧関係> S I 2 0・S K 3 7・7号墓より古い。 <規模> 東西283×南北275cm <平面形> 径5m弱の

円形と思われる。〈堆積状況〉自然堆積。〈壁〉北西壁では外傾して立ち上がり、底面からおよそ64cmを測る。〈床面〉地山を床面にしている。あまり硬く締まっていない。〈炉〉北西壁から248cm南東寄りに位置し、範囲は30×10cmで焼土厚2cm。〈柱穴〉なし。〈周溝〉検出されていない。〈付属施設〉特になし。〈出土遺物〉縄文土器2～3個体分の破片が床面付近からまとまって出土した(9990g)。何れも本遺構に伴う。〈時期〉出土遺物から縄文時代中期後半とみられる。

(2) 古 代

竪穴建物

S I O 3 (第13図、写真図版7)

〈位置・検出状況〉A12区、山頂のすぐ下に位置し地山面で検出した。〈新旧関係〉なし。〈規模〉北東-南西312×南東-北西107cm 〈平面形〉隅丸方形であったと推測される。〈主軸方向〉N-60°-W 〈堆積状況〉自然堆積。〈壁〉やや外傾して立ち上がり、底面からおよそ30cmを測る。〈床面〉地山を床面にしている。貼床は見られない。〈カマド〉北西壁には設置されていなかった。〈柱穴〉検出されていない。〈周溝〉なし。〈付属施設〉なし。〈出土遺物〉なし。〈時期〉周囲の遺構状況から平安時代とみられる。

S I O 4 (第14図、写真図版7)

〈位置・検出状況〉A13区山頂からすぐ西下に位置し、地山面で検出した。〈新旧関係〉S K 1 4より新しい。〈規模〉東西538×南北323cm 〈平面形〉隅丸方形と思われる。〈主軸方向〉N-25°-W 〈堆積状況〉自然堆積。〈壁〉やや外傾して立ち上がり、底面からおよそ65cmを測る。〈床面〉地山を床面にしている。貼床は見られない。〈カマド〉南東壁には設置されていなかったようである。〈柱穴〉なし。〈周溝〉床面から長さ300cm、幅15～23cm、深さ約11cmを測る、弧状の溝が見つかった。南東壁とはやや離れているので、本遺構は改築された可能性もある。〈付属施設〉未検出である。〈出土遺物〉なし。〈時期〉平安時代若しくは中世であろう。

S I O 5 (第15図、写真図版8)

〈位置・検出状況〉A6区、山の中腹に位置し、地山面で検出した。〈新旧関係〉S I O 6と重複していたようだが新旧関係は不明である。〈規模〉東西145×南北420cm 〈平面形〉隅丸方形であったと推測される。〈主軸方向〉N-54°-E 〈堆積状況〉自然堆積。〈壁〉ほぼ垂直に立ち上がり、底面からおよそ10cmを測る。〈床面〉地山を床面にしている。貼床は見られなかった。〈カマド〉具内的な位置は不明である。火床面が南西壁から90cm内側からみつかった。範囲：36×30cmで焼土厚3cm。〈柱穴〉7個検出した。〈周溝〉なし。〈付属施設〉なし。〈出土遺物〉なし。〈時期〉周囲の遺構分布から平安時代の可能性が高い。

S I O 6 (第16図、写真図版8)

〈位置・検出状況〉A6区、山の中腹に位置し、地山面にて検出をした。〈新旧関係〉S I O 5と重複していたようだが新旧関係は把握できなかった。〈規模〉東西131×南北582cm 〈平面形〉隅丸方形であったと考えている。〈主軸方向〉N-70°-E 〈堆積状況〉自然堆積。〈壁〉西壁はやや外傾して立ち上がり、底面からおよそ25cmを測る。〈床面〉地山を床面にしている。貼床は見られない。〈カマド〉西壁の中央部からやや南寄りに位置し、袖部は残っていないか

った。火床面範囲：49×35cmで焼土厚8cm、煙道部は火床面から緩やかに浅くなっており、地山を削り貫いて構築されていた（長153／幅34／深54cm）。〈柱穴〉2個検出した。〈周溝〉南壁に沿って床面で検出した（幅25cm前後／深4～10cm）。〈付属施設〉なし。〈出土遺物〉土師器（非ロクロ甕2個体分とみられる細片89g）、鉄製品（玉状1点）、煤の付着した角礫1点が出土した。〈時期〉出土遺物から平安時代とみられる。

S I O 7（第17図、写真図版9）

〈位置・検出状況〉A1区沢跡が埋まり平坦になった場所に位置し、Ⅱ～Ⅲ層面で検出した。〈新旧関係〉なし。〈規模〉北東－南西514×南東－北西450cm 〈平面形〉隅丸方形。〈主軸方向〉N-64°-W 〈堆積状況〉自然堆積。〈壁〉ほぼ垂直に立ち上がるものの、底面からはおよそ18cmしかない。〈床面〉沢堆積土である黒褐色シルトを床面にしている。貼床は見られない。〈カマド〉北西壁の中央部からやや南寄りに位置し、本体部は黄褐色粘土と垂角礫で構築されていたようだが意図的に壊されたかのように潰れた状態で検出された。火床面範囲：160×110cmで焼土厚14cm、煙道部は火床面と概ね並行になっており、削り貫いたのか、掘り込んでいたのか分からなかった（長165／幅35／深17cm）。〈柱穴〉2個検出した。〈周溝〉なし。〈付属施設〉特に持たない。〈出土遺物〉何れも少量の破片であるが個体数では土師器が内黒坏1、非内黒坏1、非ロクロ甕2～3、須恵器では壺2、甕1が出土している（3285g）。〈時期〉出土遺物から平安時代とみられる。

S I O 8（第18図、写真図版10）

〈位置・検出状況〉A1区山裾部に位置し、地山面で検出した。〈新旧関係〉S I 12より新しいが、S K 3 3とは新旧関係不明。〈規模〉東西178×南北355cm 〈平面形〉隅丸方形と推測される。〈主軸方向〉N-76°-W 〈堆積状況〉自然堆積。〈壁〉ほぼ垂直に立ち上がり、底面からおおよそ34cmを測る。〈床面〉地山を床面にしている。貼床は見られなかった。〈カマド〉西壁の中央部寄りに位置し、袖は黄褐色粘土と垂角礫で構築されていたが、殆ど潰れた状態（範囲200×70cm）で見つかっている。西壁に接する両袖の一部分だけが残存していた。火床面範囲：45×40cmで焼土厚7cm、煙道部は火床面から緩やかに低くなっており、地山を削り貫いて構築されていた（長157／幅29／煙出までの深さ87cm）。〈柱穴〉1個検出した。〈周溝〉西壁に沿って床面で検出した（幅20／深4～10cm）。〈付属施設〉なし。〈出土遺物〉非ロクロの土師器甕3個体分の破片（519g）。〈時期〉出土遺物から平安時代とみられる。

S I O 9 = S I 1 2

S I 1 0（第19図、写真図版11）

〈位置・検出状況〉A6区、山の中腹部に位置し、地山面で検出した。〈新旧関係〉S K 3 9より新。〈規模〉南東－北西280×南西－北東260cm 〈平面形〉不整形。〈堆積状況〉自然堆積。〈壁〉ほぼ垂直に立ち上がり、底面からおおよそ4cmを測る。〈床面〉地山を床面にしている。貼床は見られない。〈カマド〉明瞭な痕跡がない。火床面範囲：40×30cmで焼土厚2cm。〈柱穴〉なし。〈周溝〉なし。〈出土遺物〉土器類は細片が少量出土しただけであった（60g）。推定個体数はロクロ土師器内黒坏1、非ロクロ甕1である。〈時期〉出土遺物から平安時代とみられる。

S I 1 1 (第15図、写真図版12)

<位置・検出状況> A 1 区山裾部に位置し、地山面で検出した。 <新旧関係> S K 3 0 より新。 <規模> 東西150×南北120cm <平面形> 隅丸方形と推測される。 <主軸方向> N-18°-W <堆積状況> 自然堆積。 <壁> やや外傾して立ち上がり、底面からおよそ40cmを測る。 <床面> 地山を床面にしている。貼床はない。 <カマド> 北西壁隅に位置し、袖は殆ど壊れて残っていない。火床面も確認できなかつた。煙道部は火床面から緩やかに高くなっており、地山を削り貫いて構築されていた(長96/幅15/深45cm)。 <柱穴> 未検出である。 <周溝> なし。 <付属施設> なし。 <出土遺物> なし。 <時期> 遺構の構造から平安時代とみられる。

S I 1 2 (第20図、写真図版12・13) =SI09

<位置・検出状況> A 1 区山裾部に位置し、地山面で検出した。 <新旧関係> S I 0 8・2 0 より古。S K 3 0 と重複。 <規模> 東西380×南北658cm <平面形> 隅丸方形であろう。 <主軸方向> N-82°-W <堆積状況> 自然堆積。 <壁> ほぼ垂直に立ち上がり、西壁は底面からおよそ70cmを測る。 <床面> 貼床はなく、地山面を床にしている。 <カマド> 西壁のほぼ中央部に位置し、袖は黄褐色粘土と垂角礫で構築されていたようであるが、殆ど壊れており垂角礫が3個残るだけであつた。火床面も確認できなかつた。煙道部は床面から僅かに高くなっており、地山を削り貫いて構築されていた(長150/幅40/深130cm)。 <柱穴> 8個検出した。 <周溝> なし。 <その他> 北側に角礫や土師器破片(1450g)が他所より多く分布していた。 <出土遺物> ロクロ土師器内黒坏2個体分破片、非内黒坏1個体分の破片、非ロクロ甕4個体分の破片、鉄製品1点、羽口、敲石1点が出土した。 <時期> 出土遺物から平安時代とみられる。

S I 1 3 (第13図、写真図版13)

<位置・検出状況> A 1 区山裾の斜面に位置し、地山面で検出した。 <新旧関係> S K 3 1 と重複するが不明である。 <規模> 東西160×南北140cm <平面形> 不明。 <主軸方向> 不明である。 <堆積状況> 自然堆積。 <壁> やや外傾して立ち上がり、底面からおよそ30cmを測る。 <床面> 地山を床面にしている。貼床は見られない。 <カマド> 北側の調査区外にあると思われる。 <柱穴> なし。 <周溝> なし。 <付属施設> 西隅付近で土坑らしき掘り込みを検出した。 <出土遺物> なし。 <時期> 周辺でみられる遺構の状況から平安時代であろう。

S I 1 4 (第21・22図、写真図版14)

<位置・検出状況> A 1 区山裾南側に位置し、地山面で検出した。 <新旧関係> S I 1 5 より古。 <規模> 東西118×南北386cm <平面形> 隅丸方形であろう。 <主軸方向> N-81°-W <堆積状況> 自然堆積。 <壁> ほぼ垂直に立ち上がり、西壁は底面からおよそ45cmを測る。 <床面> 地山を床面にしている。貼床は見られない。 <カマド> 西壁の中央部からやや南寄りに位置し、本体部は黄褐色粘土と垂角礫で構築されていたが意図的に壊されたかのように潰れた状態で検出されている。火床面範囲: 48×21cmで焼土厚4cm、煙道部は火床面から一段高くなっており、地山を削り貫いて構築されていた(長130/幅20/深45cm)。 <柱穴> 見つからなかつた。 <周溝> 西壁に沿って床面で検出した(幅22/深4~12cm)。 <付属施設> S K 3 4 は本遺構に付属する土坑とは考えていない。 <出土遺物> 土師器は破片が少量で図化できるものは僅かであつた(1575g)。個体で言えばロクロ内黒坏2、非ロクロ甕2~5で奈良時代のような甕もあつた。須恵器は甕2、壺1。羽口3点、鉄製品(釘状)5点、石の剥片が1点、 <時期> 出土遺物から平安時代とみられる。

S I 1 5 (第21・22図、写真図版13~15)

＜位置・検出状況＞A 1 区山裾の南側に位置し、Ⅱ～Ⅲ層面で検出した。＜新旧関係＞S I 1 4・1 6・1 7・1 8より新。S K 3 4との関係は不明。＜規模＞東西243×南北230cm ＜平面形＞隅丸方形。＜主軸方向＞N-87°-W ＜堆積状況＞自然堆積。＜壁＞西側ほぼ垂直に立ち上がり、東側はやや外傾して立ち上がり、底面からおよそ55cmを測る。＜床面＞地山及び6層を床面にしている。＜カマド＞西壁の中央部からやや南寄りに位置し、袖は黄褐色粘土と亜角礫で構築されていたが殆ど壊れて残りが悪い（範囲90×30cm）。煙道部は床面から緩やかに深くなっており、地山を削り貫いて構築されていた（長95／幅18／深84cm）。＜柱穴＞検出されていない。＜周溝＞なし。＜付属施設＞特になし。＜出土遺物＞微量しかないが個体数をみるとロクロ土師器内黒坏1、非ロクロ甕1、須恵器甕1、須恵器壺1、鉄製刀子1点が出土した。＜時期＞出土遺物から平安時代とみられる。AMS試料。

S I 1 6 (第21・22図、写真図版13・14)

＜位置・検出状況＞A 1 区山裾の南側に位置し、Ⅱ～Ⅲ層面で検出した。＜新旧関係＞S I 1 7より新。S I 1 5・1 8より古。＜規模＞東西195×南北155cm ＜平面形＞隅丸方形。＜主軸方向＞N-79°-W ＜堆積状況＞自然堆積。＜壁＞やや外傾して立ち上がり、底面からおよそ25cmを測る。＜床面＞地山を床面にしている。貼床は見られない。＜カマド＞西壁の北端部に位置し、カマド本体は黄褐色粘土と亜角礫で構築されていたようだが殆ど壊れて残りが悪い。煙道部は床面から緩やかに高くなっており、地山を削り貫いて構築されていた（長82／幅19／深58cm）。＜柱穴＞検出されていない。＜周溝＞なし。＜付属施設＞持たない。＜出土遺物＞なし。＜時期＞遺構の構造から平安時代とみられる。

S I 1 7 (第21・22図、写真図版13~15)

＜位置・検出状況＞A 1 区、山裾の南端部に位置し、Ⅱ～Ⅲ層面で検出した。＜新旧関係＞S I 1 5・1 6より古。＜規模＞一辺300~400cmと推測される。＜平面形＞不明。＜堆積状況＞自然堆積。＜壁＞検出できなかった。＜床面＞地山を床面にしている。貼床は見られない。＜焼土＞S I 1 5のやや東側に焼土の広がりを確認した。範囲は120×70cmで焼土厚3cmを測る。＜柱穴＞なし。＜周溝＞なし。＜付属施設＞調査した範囲には見られない。＜出土遺物＞少量の破片が出土したが、推定個体数で土師器非ロクロ甕2、ロクロ甕1、須恵器甕1、鉄鏃1、縄文土器が数片出土した。＜時期＞出土遺物から平安時代とみられる。

S I 1 8 (第21・22図、写真図版13・14)

＜位置・検出状況＞A 1 区山裾の南側に位置し、Ⅱ～Ⅲ層面で検出した。＜新旧関係＞S I 1 6より新。S I 1 5より古い。＜規模＞東西134×南北203cm ＜平面形＞隅丸方形と推定。＜主軸方向＞N-67°-W ＜堆積状況＞自然堆積。＜壁＞垂直気味に立ち上がり、底面からおよそ54cmを測る。＜床面＞地山を床面にしている。貼床は見られない。＜カマド＞西壁の中央部からやや南寄りに焼土の広がりがある。範囲は50×40cmで焼土厚3cmを測る。煙道は検出されなかった。＜柱穴＞なかった。＜周溝＞なし。＜付属施設＞調査範囲内には見られない。＜出土遺物＞少量の破片のみであるが、推定個体数では土師器非ロクロ甕2、羽口1が出土している。

＜時期＞出土遺物から平安時代とみられる。

S I 1 9 (第23図、写真図版15・16)

<位置・検出状況> A 6区、山の中腹の先端付近に位置し、地山面で検出した。 <新旧関係> S K 1 8との新旧関係不明。S K 3 2より新。 <規模> 東西628×南北250cm <平面形> 隅丸方形と推測される。 <主軸方向> N-1° -W <堆積状況> 自然堆積。 <壁> やや外傾して立ち上がり、底面からおよそ40cmを測る。 <床面> 基本的には地山を床面にしているが、一部で貼床が認められた(断面図を参照)。 <カマド> 南壁のほぼ中央部に位置し、袖は殆ど壊れて残っていなかった。火床面範囲: 50×40cmで焼土厚9cm、煙道部は火床面から緩やかに深くなっており、地山を削り貫いて構築されていた(長155/幅23/深68cm)。 <柱穴> 3個検出した。 <周溝> 部分的だが南西壁、南壁に沿って床面で検出した(幅25~12/深8~20cm)。 <付属施設> 南半部には設けられなかったようである。 <出土遺物> 土器類は少量しか出土していない。個体数を推測すると土師器非ロクロ甕3~4、須恵器壺1の他に羽口2点、細い棒状の鉄製品1点が出土した。 <時期> 出土遺物から平安時代とみられる。

S I 2 0 (第24図、写真図版16・17)

<位置・検出状況> A 1区、山裾に位置し、地山面で遺構検出した。 <新旧関係> S I 1 2より新しいがS I 2 4・S I 2 6との新旧関係は不明。S K 3 6・4~8号墓より古い。 <規模> 北東-南西570×南東-北西242cm <平面形> 隅丸方形と推測される。 <主軸方向> N-67° -W <堆積状況> 自然堆積。 <壁> ほぼ垂直に立ち上がるものの、底面からおよそ26cmを測る。 <床面> 地山を床面にしている。検出した範囲に貼床はない。 <カマド> 北西壁の中央部に位置し、本体部は黄褐色粘土と亜角礫で構築されていたようだが殆ど壊れて残りが悪い。粘土は無く、角礫が3点残っているが原位置を留めたものではない。火床面範囲: 48×47cmで焼土厚3cm、煙道部は火床面から緩やかに深くなっており、地山を削り貫いたのか、掘り込んだのかは不明である。(長150/幅40/深24cm)。 <柱穴> 1個検出した。 <周溝> 検出されなかった。 <付属施設> なし。 <出土遺物> ロクロ土師器内黒坏1個体分の細片、土師器甕2個体分の細片、須恵器壺1片、縄文土器片少量が出土した。 <時期> 出土遺物から平安時代とみられる。

S I 2 2 (第25・26図、写真図版17)

<位置・検出状況> A 6区、山の中腹に位置し、地山面で検出した。 <新旧関係> S I 2 1より古い。 S I 2 7より新。S K 4 0・4 4より新。S I 3 1とは不明。 <規模> 北西-南東466×北東-南西75cm <平面形> 隅丸方形か。 <主軸方向> N-63° -E <堆積状況> 自然堆積。 <壁> やや外傾して立ち上がり、底面からおよそ53cmを測る。 <床面> 地山を床面にしている。貼床は見られない。 <カマド> 本遺構は南西壁しか残っておらず、検出されなかった。 <柱穴> 19個検出した。 <周溝> なし。 <付属施設> なし。 <出土遺物> なし。 <時期> 周囲にある遺構の状況から平安時代の可能性が高い。

S I 2 3 (第25・26図、写真図版17)

<位置・検出状況> A 6区、山の中腹に位置しており、地山面にて検出した。 <新旧関係> S D 0 1より古。S I 2 1との関係は不明である。 <規模> 東西185×南北181cm <平面形> 隅丸方形か。 <主軸方向> 不明。 <堆積状況> 自然堆積。 <壁> やや外傾して立ち上がり、底面からおよそ45cmを測る。 <床面> 地山を床面にしている。貼床は見られない。 <カマド> 検出されていない。 <柱穴> 5個検出したが本遺構に伴わないものを含む。 <周溝> なし。 <付属施設> なし。 <出土遺物> 非ロクロの土師器甕(約3個体分)の細片が出土した。 <時期> 出土遺物から平安時代とみられる。

S I 2 4 (第27図、写真図版18・19)

＜位置・検出状況＞A 1 区、山裾部に位置し、地山面にて本遺構を検出した。＜新旧関係＞S I 2 0、S I 2 5、4・5・8～1 0 号墓より古い。＜規模＞北東—南西410×南東—北西235cm ＜平面形＞隅丸方形の可能性が高い。＜主軸方向＞N-61°-W ＜堆積状況＞自然堆積。＜壁＞やや外傾して立ち上がり、底面からはおよそ8cmを測る。＜床面＞地山を床面にしている。残存部に貼床は見られない。＜カマド＞北西壁のほぼ中央部に位置し、カマド本体部は壊れて残っていなかった。火床面範囲:60×45cmで焼土厚9cm、煙道部は火床面から緩やかに深くなっており、地山を削り貫いて構築されていた(長202/幅19/深35cm)。＜柱穴＞1個検出した。＜周溝＞なし。＜付属施設＞残存部では検出されなかった。＜出土遺物＞重複するS I 2 0の遺物を含むかもしれないが、ロクロ土師器内黒坏1個体分の細片、非内黒坏1個体分の細片、非ロクロ甕1～2個体分の細片、須恵器甕1片、羽口5片、縄文土器片少量が出土。＜時期＞出土遺物や遺構の構造から平安時代とみられる。

S I 2 5 (第28図、写真図版18・19)

＜位置・検出状況＞A 1 区山裾から沢跡部に位置し、地山面で検出した。＜新旧関係＞S I 2 4より新。＜規模＞東西95×南北490cm ＜平面形＞隅丸方形と思われる。＜主軸方向＞N-73°-W ＜堆積状況＞自然堆積。＜壁＞ほぼ垂直に立ち上がるが、底面からおおよそ4～10cmしか残っていない。＜床面＞地山を床面にしている。貼床は見られない。＜カマド＞西壁の中央部からやや南寄りに位置し、本体部は黄褐色粘土と垂角礫で構築されていたが、意図的に壊されたかのように潰れている。火床面範囲:220×90cmで焼土厚15cm、煙道部は火床面から緩やかに深くなっており、地山を削り貫いて構築されていた(長124/幅28/深68cm)。＜柱穴＞なし。＜周溝＞西壁は見られなかった。＜付属施設＞なし。＜出土遺物＞ロクロ土師器内黒坏1個体分の細片、土師器非ロクロ甕2個体分の細片が出土している。＜時期＞炭化物の年代測定により奈良時代。

S I 2 7 (第30～32図、写真図版21)

＜位置・検出状況＞A 6 区、山の中腹に位置し、地山面で検出した。＜新旧関係＞S I 2 2・S I 3 1・S I 2 8より古い。S K 4 1より新。S X 0 1より古。＜規模＞東西285×南北196cm ＜平面形＞隅丸方形。＜主軸方向＞N-85°-E ＜堆積状況＞人為堆積。＜壁＞ほぼ垂直に立ち上がり、底面からおおよそ75cmを測る。＜床面＞地山を床面にしている。貼床にはなっていない。＜カマド＞2基検出。西壁の中央部から南寄りに位置し、袖部は残っていない。火床面範囲:24×19cmで焼土厚3cm、煙道部は火床面からほぼ水平に掘り進められており、地山を削り貫いて構築されていた(長136/幅28/深105cm)。煙出しのところを角礫で取囲んでいた。もう一つのカマドは南壁の中央からやや東に寄ったところに設置されていた。袖部は残っていなかったが燃焼部には垂円礫が置かれていた。火床面範囲:31×25cmで焼土厚7cm、煙道部は火床面から緩やかに立ち上がっており、地山を削り貫いて造られていた(長115/幅20/深64cm)。＜柱穴＞なし。＜周溝＞なかった。＜付属施設＞煙出し部にある礫の集積とS K 4 1の底面が同じ面になるため本遺構に伴う可能性がある。＜出土遺物＞土師器は細片のみであったが、口縁部の特徴から非ロクロ甕が3～4個体、壺?が1個体分はあった。鉄製品も1点出土した。＜時期＞炭化物の年代測定や出土遺物から奈良時代とみられる。

S I 2 8 (第30～32図、写真図版21・22)

＜位置・検出状況＞A 6 区、山の中腹に位置しており、地山面で検出している。＜新旧関係＞S I 2 7・S I 3 1より新。S K 4 1とは不明。S X 0 1より古。＜規模＞1辺が300cmを少し超えると推

測される。〈平面形〉隅丸方形であろうか。〈主軸方向〉不明。〈堆積状況〉自然堆積。〈壁〉ほぼ垂直に立ち上がり、底面からおよそ34cmを測る。〈床面〉地山を床面にしている。貼床は見られない。〈カマド〉なし。〈柱穴〉なし。〈周溝〉なし。〈付属施設〉見つかっていない。〈出土遺物〉非ロクロの土師器甕の細片が少量出土している。口縁部の特徴から2～3個体に分けられる。〈時期〉出土遺物から平安時代とみられる。

S I 2 9 (第30～32図、写真図版21～23)

〈位置・検出状況〉A 6区、山の中腹に位置し、多くの遺構が重複する中で検出された。〈新旧関係〉S I 2 2、S I 3 1等と重複するが新旧関係は不明である。〈規模〉不明である。〈平面形〉不明。〈主軸方向〉N-13° - E 〈堆積状況〉自然堆積であろう。〈壁〉残っていない。〈床面〉地山を床面にしている。貼床は見られない。〈カマド〉南側に位置し、袖は殆ど壊れて残りが悪い。火床面範囲:28×27cmで焼土厚5cm、煙道部は火床面より僅かに高くなっている(長143/幅42/深26cm)。〈柱穴〉なし。〈周溝〉未検出である。〈付属施設〉不明である。〈出土遺物〉なし。〈時期〉カマドを有することから平安時代とみられる。

S I 3 1 (第30～32図、写真図版21・22) = SI30

〈位置・検出状況〉A 6区、山の中腹に位置しており、地山面で検出した。〈新旧関係〉S I 2 7・S I 2 8・S K 4 1・S X 0 1より古い。S I 2 9カマドとの新旧関係は不明。〈規模〉東西395×南北345cm 〈平面形〉隅丸方形であったと推測される。〈主軸方向〉N-35° - E 〈堆積状況〉自然堆積。〈壁〉ほぼ垂直に立ち上がり、底面からおよそ35cmを測る。〈床面〉地山を床面にしている。貼床は施されていない。〈カマド〉南壁の中央部からやや東寄りに位置し、袖材として使われていた亜角礫が3個残っていた。この角礫を覆うように粘土を張ってカマドを構築していたと考えられるが、その粘土は殆ど残っていない。火床面範囲:31×25cmで焼土厚9cm、煙道部は火床面から緩やかに低くなっており、地山を削り貫いて構築されていた(長132/幅35/深60cm)。〈柱穴〉検出されていない。〈周溝〉南壁、カマドのすぐ脇で検出した(幅16～18/深2～6cm)。〈付属施設〉なし。〈出土遺物〉煤の付着した円礫が1点出土している。〈時期〉遺構の構造や他遺構との重複関係から奈良時代から平安時代とみられる。

S I 3 2 は欠番

S I 3 3 (第33図、写真図版23)

〈位置・検出状況〉A 6区山中腹部の先端付近に位置し、地山面で検出した。〈新旧関係〉S K 4 2より新。〈規模〉南東-北西218×南西-北東90cm 〈平面形〉隅丸方形と思われる。〈主軸方向〉N-69° - E 〈堆積状況〉自然堆積。〈壁〉ほぼ垂直に立ち上がり、底面からおよそ22cmを測る。〈床面〉地山を床面にしている。貼床は見られない。〈カマド〉南西壁の中央部に位置し、袖部は殆ど壊れて残っていない。煙道部は驚くほど長い。床面から緩やかに低くなっており、地山を削り貫いて構築されていた(長290/幅30/深47cm)。〈柱穴〉検出されていない。〈周溝〉南西壁にはない。〈付属施設〉なし。〈出土遺物〉なし。〈時期〉遺構の構造から平安時代とみられる。

S I 3 4 (第25・26図、写真図版24)

〈位置・検出状況〉A 6区、山の中腹に位置し、地山面で検出した。〈新旧関係〉なし。〈規模〉不明である。〈平面形〉不明である。〈主軸方向〉N-82° - W 〈堆積状況〉埋土は残ってい

ない。〈壁〉なし。〈床面〉地山を床面にしている。貼床は見られない。〈カマド〉西壁とみられるように位置し、袖は黄褐色粘土と垂角礫で構築されていたと推測されるが殆ど壊れてしまい残りが悪い。煙道部は床面から緩やかに低くなっており、地山を削り貫いて構築されていた(長113/幅17~20/深48cm)。〈柱穴〉検出されていない。〈周溝〉なし。〈付属施設〉未検出である。〈出土遺物〉なし。〈時期〉カマドを持つ構造から平安時代とみられる。

S I 3 6 (第29図、写真図版24・25)

〈位置・検出状況〉A12区山頂のすぐ下に位置し、基盤となる岩盤の面で検出した。〈新旧関係〉S I 3 7、S K 4 7より新。〈規模〉北東-南西97×南東-北西80cm 〈平面形〉不明である。〈主軸方向〉不明である。〈堆積状況〉自然堆積。〈壁〉外傾して立ち上がり、底面からおおよそ25cmを測る。〈床面〉硬い岩盤を床面にしている。〈カマド〉なし。〈柱穴〉なし。〈周溝〉なし。〈付属施設〉見つからない。〈出土遺物〉なし。〈時期〉周辺の遺構分布状況から類推すると古代~中世の可能性はある。

S I 3 7 (第34・35・39~41図、写真図版24・25・28)

〈位置・検出状況〉A12区、山頂のすぐ下に位置しており、複数の遺構が密集している中で見つかった。〈新旧関係〉S I 4 2より新。S I 3 6・S I 3 8・S K 4 8より古い。S I 4 7・S I 4 9・S I 5 2・S K 4 6との重複関係は不明である。〈規模〉北東-南西609×南東-北西364cm 〈平面形〉隅丸方形とみられる。〈主軸方向〉N-25° -W 〈堆積状況〉自然堆積。〈壁〉やや外傾して立ち上がり、底面からおおよそ40cmを測る。〈床面〉北西側は硬い岩盤を床面にしているが、斜面地形であるため南東側は貼床になっていた可能性が高い。その痕跡は一部確認されている。〈カマド〉北西壁の中央部からやや北寄りに位置している。カマド本体は壊れて残っていなかったが、袖部の芯材には礫を用いていたようで、礫を据えるための掘り込みが4箇所並んで見つかった。火床面範囲:35×27cmで焼土厚3cm、煙道部も残りは悪い。火床面から緩やかに浅くなっており、地山を掘り込んで構築されていた(長50/幅30~18cm)。〈柱穴〉14個検出した。〈周溝〉カマドを挟んで北西壁に沿って床面で検出した(幅23~28/深5~15cm)。〈付属施設〉西隅付近に焼土(36×35cm、深さ4cm)が見つかった。〈出土遺物〉土器類は細片のみが少量出土した。個体数を推定すると土師器非ロクロ甕2~3・ロクロ内黒坏1、須恵器壺1、鉄製品は出土していない。〈時期〉出土遺物から平安時代とみられる。

S I 3 8 (第34・35図、写真図版24・25)

〈位置・検出状況〉A12区、山頂のすぐ下に位置しており、基盤となる岩盤の面で検出した。〈新旧関係〉S I 3 7より新。S K 4 8より古い。S K 4 6との新旧関係は不明。〈規模〉北東-南西500×南東-北西209cm 〈平面形〉隅丸方形と推測される。〈主軸方向〉N-50° -W 〈堆積状況〉自然堆積。〈壁〉少し外傾して立ち上がり、底面からおおよそ55cmを測る。〈床面〉北西側は硬い岩盤を床面にしている。斜面下となる南東側は盛土と貼床にしていたと考えられる。〈カマド〉検出されなかった。〈柱穴〉1個検出した。〈周溝〉なし。〈付属施設〉北西部には無かったようである。〈出土遺物〉土器類は細片となって出土した。推定個体数は土師器非ロクロ甕3~4、須恵器なし、鉄製品では細い棒状のものが1点出土している。〈時期〉出土遺物から平安時代とみられる。

S I 4 0 (第36図、写真図版25・26)

＜位置・検出状況＞A 7区、山中腹の南側にあたり、地山面で検出した。＜新旧関係＞S I 3 9と重複していたはずだが斜面地形にあるため、埋土断面による新旧関係は把握できなかった。＜規模＞東西196×南北650cm ＜平面形＞隅丸方形と思われる。＜主軸方向＞N-71°-W ＜堆積状況＞自然堆積。＜壁＞やや外傾して立ち上がり、底面からおよそ25cmを測る。＜床面＞西側では地山を床面にしているが、斜面下方になる東側では盛土や貼床を施していた可能性が高い。＜カマド＞東壁の中央部からやや北寄りに位置し、袖は壊れて残っていなかった。火床面範囲:55×45cmで焼土厚11cm、煙道部は火床面からほぼ水平に掘り進められており、地山を削り貫いて構築されていた(長148/幅24/深51cm)。＜柱穴＞1個検出した。＜周溝＞西壁に沿って床面で検出した(幅60~20/深5~20cm)。＜付属施設＞火床面の南東付近で焼土を検出した(33×24cm)。＜出土遺物＞土器類は203g出土している。この中から推定される個体数は土師器非ロクロ甕2~3である。鉄滓が少量出土した。＜時期＞出土遺物から平安時代とみられる。

S I 4 1 (第37・39~41図、写真図版26~28)

＜位置・検出状況＞A12区山頂のすぐ下に位置し、II~III層面で検出した。＜新旧関係＞SK 0 3より新、S I 4 3より古。S I 4 4・4 6より新。＜規模＞北東-南西770×南東-北西155cm ＜平面形＞隅丸方形か隅丸長方形と思われる。＜主軸方向＞N-48°-W ＜堆積状況＞人為堆積の可能性あり。＜壁＞やや外傾して立ち上がり、底面からおよそ50cmを測る。＜床面＞北西部は地山を床面にしている。南東部は他遺構埋土であったところを整地して床面としていたと考えられる。＜カマド＞北西壁の中央部からやや北寄りに焼土の広がりを確認した。火床面範囲:68×47cmで焼土厚2~7cm、煙道部は確認されていない。＜柱穴＞北西壁沿いに6個検出した。＜周溝＞なし。＜付属施設＞北西壁付近には特に何もない。＜出土遺物＞少量しか出土していないが、個体数で見ると非ロクロの土師器甕が3~4、須恵器壺1・甕2~3・坏1、鉄製品では刀子や不明な鉄製品、羽口1点、石器類では敲石が1点出土している。＜時期＞出土遺物から平安時代とみられる。10世紀中葉か。

S I 4 2 (第39~41図、写真図版27・28)

＜位置・検出状況＞A12区、山頂のすぐ下に位置しII~III層面で検出した。＜新旧関係＞S I 3 7・4 3・4 6・4 9より古い。S I 4 8・4 9・5 0、SK 5 1・5 7・5 8・5 9より新。＜規模＞北東-南西540×南東-北西345cm ＜平面形＞隅丸方形と推測される。＜主軸方向＞N-36°-W ＜堆積状況＞自然堆積。＜壁＞ほぼ垂直に立ち上がり、底面からおよそ70cmを測る。＜床面＞地山を床面にしている。貼床は見られなかったが、南側が斜面下部にあたるために盛土・貼床をしていた可能性がある。＜カマド＞北西壁の中央部から北寄りに位置し、袖は黄褐色粘土と角礫で構築されていたが壊れて殆ど残っていない。南側袖付近に10数個の角礫があり、袖材であったと考えている。火床面範囲:25×20cmで焼土厚4cm、煙道部は火床面と概ね平坦になっており、地山を削り貫いて構築されていた(長181/幅24/深80cm)。＜柱穴＞13個検出した。＜周溝＞北西壁、北東壁に沿って床面で検出した(幅22~14/深3~14cm)。＜付属施設＞床面に焼土の広がりを2箇所を確認した。中央部の焼土は45×38cmで焼土の厚さは3cm、北東部の焼土は61×35cmで焼土の厚さは4cmあった。＜出土遺物＞土師器は3.815kgと量が多いが残りの良いものはない。個体数で見ると非ロクロ甕6~7、坏はない。須恵器甕1・壺1、種別不明の鉄製品1点、羽口3点が出土した。＜時期＞出土遺物から平安時代とみられる。10世紀前葉。

S I 4 3 (第39~41図、写真図版28・29)

＜位置・検出状況＞A12区、山頂のすぐ下に位置しており、地山面で検出した。＜新旧関係＞S I 4 1・4 2・4 6・4 9より新。S I 4 4より古。＜規模＞北東-南西700×南西-北東197cm ＜平面形＞隅丸方形と推測される。＜主軸方向＞N-38° -W ＜堆積状況＞自然堆積。＜壁＞やや外傾して立ち上がり、底面からおよそ45cmを測る。南東壁は残っていなかった。＜床面＞北西部は地山を床面にしている。南東部は貼床であった可能性が高い。＜カマド＞北西壁には設置されていなかった。＜柱穴＞3個検出した。＜周溝＞なし。＜付属施設＞北西壁付近には付属施設の痕跡はない。＜出土遺物＞土器類は細片のみの出土であった。個体数にして土師器非ロクロ甕2~3、須恵器なし、鉄製品なし。＜時期＞AMS年代測定では縄文時代となった。これは混入した炭化物であったのだろう。出土遺物から平安時代とみられる。

S I 4 4 (第37・38・42図、写真図版30)

＜位置・検出状況＞A12区、山頂のすぐ下に位置しており多くの遺構と切り合った中で確認された。＜新旧関係＞S I 4 6・S I 5 1より新。S I 4 1より古。SK 6 0より新。SK 6 1とは不明。＜規模＞北東-南西535×北西-南東256cm ＜平面形＞隅丸方形と考えている。＜主軸方向＞N-40° -W ＜堆積状況＞床面付近は自然堆積、埋土上位は人為堆積。＜壁＞ほぼ垂直に立ち上がり、底面からおよそ60cmを測る。＜床面＞北西部は地山を床面にしていた。南東部は貼床となっていたと推測される。＜カマド＞検出された範囲内にカマドは設置されていない。＜柱穴＞8個検出した。＜周溝＞北西壁では検出されていない。＜付属施設＞なし。＜出土遺物＞なし。＜時期＞周囲の遺構分布状況から平安時代とみられる。

S I 4 5 (第13図、写真図版28・30)

＜位置・検出状況＞A12区山頂のすぐ下に位置し、基盤である岩盤の面で検出した。＜新旧関係＞SK 5 2より古い。＜規模＞東西450×南北131cm ＜平面形＞隅丸方形か。＜主軸方向＞N-22° -W ＜堆積状況＞自然堆積。＜壁＞ほぼ垂直に立ち上がり、底面からおよそ20cmを測る。＜床面＞北側は硬い岩盤を床面にしている。南側は流出しているが盛土して貼床をしていた可能性が高い。＜カマド＞北壁には設置されていなかった。＜柱穴＞2個検出した。＜周溝＞なし。＜付属施設＞なし。＜出土遺物＞土器類は細片が少量であった。個体数を推定すると土師器非ロクロ甕1、須恵器なし。鉄製品は出土していない。＜時期＞出土遺物から平安時代とみられる。

S I 4 6 (第39~42図、写真図版29~31)

＜位置・検出状況＞A12区、山頂のすぐ下に位置し、多くの遺構が重複する中で見つかった。＜新旧関係＞S I 4 2・S I 4 9・S I 5 0より新。S I 4 3・S I 4 4より古。＜規模＞今回の調査では最大規模となる。北東-南西860×南東-北西182cm ＜平面形＞隅丸方形であろう。＜主軸方向＞N-39° -W ＜堆積状況＞自然堆積。＜壁＞やや外傾して立ち上がり、底面からおよそ55cmを測る。＜床面＞北西部は地山を床面にしている。南東側は貼床になっていた可能性が高い。＜カマド＞北西壁のかなり北寄りに位置し、カマド本体は殆ど壊れており残りが悪かった。火床面も検出されていない。煙道部は床面から緩やかに浅くなっており、地山を掘り込んで構築されていた(長138/幅66/深60cm)。トンネルのようになっていたかは不明である。＜柱穴＞10個検出した。＜周溝＞北西壁には設けられていなかった。＜付属施設＞なし。＜出土遺物＞土器類は細片のみの出土であった。その中から個体数を推定すると土師器非ロクロ甕2、須恵器なし、鉄製品なし。＜時期＞年代測定では八世紀後半となった。出土遺物は平安時代であり、他遺構との重複関係からも平安時代に位置付けたい。

S I 4 7 (第29図、写真図版30)

＜位置・検出状況＞A12区、山頂のすぐ下に位置し、基盤である岩盤面で検出した。＜新旧関係＞S I 3 7、S K 4 7と重複するが新旧関係は不明である。＜規模＞東西360×南北84cm ＜平面形＞隅丸方形であったと推測している。＜主軸方向＞N-29°-W ＜堆積状況＞埋土は僅かしか残っていなかったが、人為堆積であった。＜壁＞ほぼ垂直に立ち上がり、底面からおよそ20cmを測る。＜床面＞北側は硬い岩盤を床面にしている。南側は斜面下で低くなるため、盛土と貼床をしていたと考えられる。＜カマド＞なし。＜柱穴＞1個検出した。＜周溝＞なし。＜付属施設＞北壁付近には見られない。＜出土遺物＞土器類は細片が少量出土した。推定個体数は土師器非ロクロ甕2である。須恵器や鉄製品は出土していない。＜時期＞出土遺物から平安時代とみられる。

S I 4 8 (第39～41図、写真図版28・31)

＜位置・検出状況＞A12区、山頂のすぐ下に位置し、複数の遺構が重複する中で検出された。＜新旧関係＞S I 4 2より古。S K 5 9との新旧は不明。＜規模＞北東-南西268×南東-北西140cm ＜平面形＞隅丸方形であったと考えている。＜主軸方向＞N-40°-W ＜堆積状況＞自然堆積。＜壁＞ほぼ垂直に立ち上がり、底面からおよそ30cmを測る。＜床面＞地山を床面にしている。斜面下となる南東部は貼床にしていたと想定される。＜カマド＞北西壁の中央部に位置していたと推測されるが、カマド本体は殆ど流出して残っていない。煙道部は床面から緩やかに高くなっており、地山を掘り込んで構築されていた(長158/幅62/深20cm)。＜柱穴＞2個検出した。＜周溝＞北西壁の南側には設けられていなかった。＜付属施設＞なし。＜出土遺物＞土器類は細片が少量出土しただけであった。個体数を推定すると土師器非ロクロ甕2、須恵器なし。鉄製品では刀子1点・紡錘車1点が出土した。＜時期＞出土遺物から平安時代とみられる。

S I 4 9 (第39～41図、写真図版28・31)

＜位置・検出状況＞A12区、山頂のすぐ下に位置しており非常に多くの遺構と重複する中で見つかった。＜新旧関係＞S I 4 2より新。S I 4 3・4 6より古。S I 3 7、S K 4 9との重複関係は不明。＜規模＞北東-南西270×南東-北西46cm ＜平面形＞隅丸方形か。＜主軸方向＞N-26°-W ＜堆積状況＞自然堆積。＜壁＞ほぼ垂直に立ち上がり、底面からおよそ35cmを測る。＜床面＞北西側は地山を床面にしている。その一方、南東部は貼床であったと推測される。＜カマド＞北西壁にあるが、多くの遺構との重複により殆ど壊れて残りが悪い。火床面も残っていない。煙道部は床面から緩やかに浅くなっており、地山を掘り込んで構築されていた(長108/幅27/深40cm)。＜柱穴＞1個検出した。＜周溝＞北西壁の南隅に沿って床面で検出した(幅15～10/深2～14cm)。＜付属施設＞検出されなかった。＜出土遺物＞細片のみの出土であった。推定個体数では土師器の非ロクロ甕2、須恵器なし、鉄製刀子2点が出土した。＜時期＞年代測定では9世紀中葉となり、出土遺物からも平安時代とみられる。

S I 5 0 (第39～41図、写真図版30)

＜位置・検出状況＞A12区山頂のすぐ下に位置し、非常に多くの遺構と重複する中で見つかった。＜新旧関係＞S I 4 2より古。S I 5 1より新。S I 4 6との重複関係は不明。＜規模＞北東-南西400×南東-北西112cm ＜平面形＞隅丸方形か。＜主軸方向＞N-29°-W ＜堆積状況＞自然堆積。＜壁＞やや外傾して立ち上がり、底面からおよそ40cmを測る。＜床面＞北西部は地山を床面にしているが、南東側は貼床になっていた可能性が高い。＜カマド＞北西壁の中央部からやや北寄り

に位置し、カマド本体は他の遺構との重複により殆どが壊れて残っていない。火床面も検出できなかった。煙道部は床面から緩やかに高くなっており、地山を削り貫いて構築されていたが非常に短い。当時から急斜面の地形であったことが窺える(長80/幅36/深50cm)。<柱穴>1個検出した。<周溝>北西壁には造られていない。<付属施設>南西隅付近で焼土(47×37×4cm)を検出した。<出土遺物>細片が少量出土した。推定個体数は土師器非ロクロ甕1である。<時期>出土遺物や遺構の構造から平安時代とみられる。

S I 5 1 (第37・38図、写真図版30)

<位置・検出状況>A12区、山頂のすぐ下に位置しており、多くの遺構と重複する中で検出された。<新旧関係>S I 5 3より新。S I 4 4より古。S I 5 0・SK 6 0・6 1との関係は不明。<規模>北東-南西423×南東-北西115cm <平面形>隅丸方形であろう。<主軸方向>N-48° -W <堆積状況>床面付近は灰白色シルトブロックを多量に含む人為堆積。本遺構は14層と11層を境に上層は別遺構となる可能性があるものの、他遺構との重複が多く詳細は不明である。<壁>ほぼ垂直に立ち上がり、底面からおおよそ70cmを測る。<床面>北西部は地山を床面にしているが南東側は貼床であったと推測される。<カマド>北西壁の中央部からやや南寄りに位置し、カマド本体部は殆ど壊れて残りが悪い。火床面範囲:40×31cmで焼土厚8cm、煙道部は火床面とほぼ水平に掘り進められており、地山を削り貫いて構築されていた(長163/幅16/深95cm)。<柱穴>3個検出した。<周溝>なし。<付属施設>本遺構に伴うか判然としないが、南隅付近で焼土(50×42cm、厚さ3cm)を検出した。<出土遺物>土器類は細かな破片のみの出土であった。推定個体数は土師器非ロクロ甕2~3・内黒坏1、須恵器甕1、鉄製品では刀子2点・用途不明製品1が出土している。<時期>出土遺物から平安時代とみられる。

S I 5 2 (第39~41図、写真図版28・31)

<位置・検出状況>A12区山頂のすぐ下に位置し、S I 3 7の床面で検出した。<新旧関係>S I 3 7他と重複するが新旧関係不明。<規模>不明。<平面形>不明。<主軸方向>N-42° -W <堆積状況>不明。<壁>残っていない。<床面>基盤となる硬い岩盤を床面にしている。<カマド>煙道部と火床面のみが残っていた。火床面範囲:63×46cmで焼土厚8cm、煙道部は火床面から緩やかに高くなっており、地山を掘り込んで構築されていた(長138/幅45~22/深20cm)。<周溝>なし。<付属施設>なし。<出土遺物>なし。<時期>遺構の構造から平安時代とみられる。

S I 5 3 (第37・38図、写真図版30・31)

<位置・検出状況>A12区、山頂のすぐ下に位置し、多くの遺構が重複する中で検出した。<新旧関係>S I 5 1より古い。<規模>北東-南西290×南東-北西275cm <平面形>隅丸方形であろうか。<主軸方向>N-46° -W <堆積状況>自然堆積か人為堆積か不明である。<壁>やや外傾して立ち上がり、底面からおおよそ30cmを測る。<床面>北側は地山を床面にしているが斜面下にあたる南側(調査区外)は盛土と貼床を施していたと推測される。<カマド>未検出である。<柱穴>なし。<周溝>検出されていない。<付属施設>なし。<出土遺物>なし。<時期>遺構の新旧関係から平安時代初期か奈良時代の可能性が高い。

S I 5 4 (第43図、写真図版32)

＜位置・検出状況＞C区山頂のやや東側に位置し、地山面で検出した。＜新旧関係＞SK66・67より新しい。＜規模＞南東―北西482×南西―北東239cm ＜平面形＞隅丸方形であったと推測される。＜主軸方向＞N-56°-E ＜堆積状況＞自然堆積。＜壁＞やや外傾して立ち上がり、底面からおよそ35cmを測る。＜床面＞地山を床面にしている。貼床は見られない。＜カマド＞南西壁の中央部からやや南寄りに位置し、袖は黄褐色粘土と亜角礫で構築されていたようだが、殆どは壊れており残りが悪い。壊れたカマドの広がり:128×94cmで焼土厚は10cmほどであった。煙道部は見つからなかった。＜柱穴＞なし。＜周溝＞検出されなかった。＜付属施設＞南西部には見られない。＜出土遺物＞なし。＜時期＞出土遺物から平安時代とみられる。

S I 5 7 (第47図、写真図版34)

＜位置・検出状況＞C区の山頂に位置し、地山面で検出している。＜新旧関係＞中世帯曲輪より古い。＜規模＞南東―北西538×南西―北東240cm ＜平面形＞隅丸方形であったと考えている。＜主軸方向＞N-47°-E ＜堆積状況＞自然堆積。＜壁＞やや外傾して立ち上がり、底面からおよそ110cmを測る。＜床面＞南西部は地山を床面にしているが斜面下側になる北東部は盛土と貼床をしていた可能性が高い。＜カマド＞南西壁の中央部に位置し、袖は黄褐色粘土と亜角礫を組み合わせで構築されていたが、殆ど壊れて残りは悪い。火床面範囲:50×28cmで焼土厚4cm。煙道部は注意して精査したがはっきりしたものは見られなかった。＜柱穴＞5個検出した。＜周溝＞南西壁、北西壁に沿って床面で検出した(幅40~23/深5~12cm)。＜付属施設＞南西部には設けられていなかったようである。＜出土遺物＞土器類は細片が少量出土しただけである。それらから個体数を推定すると土師器非ロクロ甕2~3、須恵器・鉄製品なし。＜時期＞出土遺物から平安時代とみられる。

S I 5 8 (第48図、写真図版35)

＜位置・検出状況＞B区の山頂に位置し、地山面で検出した。B区では唯一の竪穴建物である。＜新旧関係＞なし。＜規模＞北東―南西307×南東―北西295cm ＜平面形＞隅丸方形であったと想定される。＜主軸方向＞N-48°-W ＜堆積状況＞自然堆積。＜壁＞ほぼ垂直に立ち上がり、底面からおよそ40cmを測る。＜床面＞地山を床面にしている。貼床は見られない。＜カマド＞北西壁のほぼ中央部位置し、袖は黄褐色粘土と亜角礫で構築されていたが殆ど壊れて残りは悪い。火床面もはっきりとは残っていなかった。煙道部は床面から緩やかに深くなっており、地山を削り貫いて構築されていた(長140/幅18/深51cm)。煙出部には礫がまとまって詰まっていた。＜柱穴＞検出されなかった。＜周溝＞なし。＜付属施設＞見つからない。＜出土遺物＞土器類は少量しか出土しなかった。推定される個体数は土師器非ロクロ甕2~3、須恵器なし、羽口1、鉄製品の出土はない。＜時期＞出土した遺物から奈良時代とみられる。

(3) 中 世

竪穴建物

S I 2 1 (第25・26図、写真図版16・17)

＜位置・検出状況＞A6区、山の中腹に位置し、地山面で検出した。＜新旧関係＞S I 2 2より新。S I 2 3・S D 0 1との重複関係は不明である。＜規模＞北西―南東718×北東―南西346cm ＜平面形＞隅丸長方形か。＜主軸方向＞N-55°-E ＜堆積状況＞自然堆積。＜壁＞やや外傾

して立ち上がり、底面からおよそ45cmを測る。〈床面〉地山を床面にしている。貼床は施されていない。〈焼土〉ほぼ中央に1箇所見つかった(50×30×8cm)。〈柱穴〉多数の柱穴を検出したが本遺構に伴わない柱穴を含んでいる。〈周溝〉なし。〈出土遺物〉非ロクロの土師器甕(2～3個体分か)の細片が少量出土した。〈時期〉遺構の規模・形態から中世と考えている。

S I 3 5 (第13図、写真図版21)

〈位置・検出状況〉A 6区、山の中腹に位置し、地山面で検出した。〈新旧関係〉SK 3 8との新旧関係は不明。〈規模〉東西569×南北82cm 〈平面形〉隅丸長方形だったか。〈主軸方向〉N-81°-W 〈堆積状況〉自然堆積。〈壁〉やや外傾してたち上がり、底面からおよそ22cmを測る。〈床面〉地山を床面にしている。貼床は見られない。〈カマド〉なし。〈柱穴〉4個検出した。南側の壁に沿って直線的に3個、北側の1個とも直角に交わる。〈周溝〉なし。〈付属施設〉なし。〈出土遺物〉非ロクロの土師器甕の口縁部細片(1～2個体)が微量出土した。〈時期〉遺構の構造から中世に位置付けた。

S I 3 9 (第36図、写真図版26)

〈位置・検出状況〉A 7区、山中腹の南縁辺部に位置し、地山面で検出した。〈新旧関係〉なし。〈規模〉東西173×南北645cm 〈平面形〉隅丸長方形。〈主軸方向〉N-76°-W 〈堆積状況〉自然堆積。〈壁〉やや外傾して立ち上がり、底面からおよそ30cmを測る。〈床面〉西側は地山を床面にしているが東側は斜面の下方になるため、盛土や貼床を行っていた可能性は高い。〈カマド〉なし。〈柱穴〉西壁に沿って等間隔で3個検出した。〈周溝〉なし。〈出土遺物〉なし。〈時期〉遺構の形態から中世と考えている。

S I 5 5 (第44・45図、写真図版33)

〈位置・検出状況〉C区北側、山の中腹に位置し、Ⅲ層面で検出した。〈新旧関係〉なし。〈規模〉南東-北西462×南西-北東244cm 〈平面形〉隅丸長方形か隅丸方形であったと考えている。〈主軸方向〉N-17°-E 〈堆積状況〉自然堆積。〈壁〉やや外傾して立ち上がり、底面からおよそ50cm以上を測る。〈床面〉南西部は地山を床面にしているが、地形的に低い北東部は盛土・貼床となっていた可能性がある。〈カマド〉なし。〈柱穴〉7個検出した。特に壁に沿って配置されている。〈周溝〉未検出である。〈付属施設〉なし。〈出土遺物〉土器類は1406g出土したが本遺構に伴うような状態のものではない。推定個体数は土師器非ロクロ甕4～5、須恵器甕2である。他に羽口1点、鉄製品2点(錫杖状鉄鐸の一部か)、鉄滓が少量出土した。〈時期〉遺構の形態から中世とみられる。

S I 5 6 (第46図、写真図版33)

〈位置・検出状況〉C区、山の中腹に位置し、Ⅲ層面で検出した。〈新旧関係〉なし。〈規模〉南東-北西455×南西-北東235cm 〈平面形〉隅丸長方形か隅丸方形と考えている。〈主軸方向〉N-34°-E 〈堆積状況〉自然堆積。〈壁〉やや外傾して立ち上がり、底面からおよそ50cm以上を測る。〈床面〉地山を床面にしている。貼床は見られないが北東側は斜面下となるため、盛土・貼床となっても不思議ではない。〈カマド〉なし。〈柱穴〉壁に沿って3個検出した。〈周溝〉未検出である。〈付属施設〉なし。〈出土遺物〉土器類は216g出土している。推定個体数は土師器非ロクロ甕2、須恵器なし。鉄滓が少量出土した。〈時期〉遺構の形態から中世とみられる。

(4) その他

土坑 (第14・15・18・19・25・26・29～35・43・49～55図、写真図版36～50、第1表)

66基の土坑を検出した。遺構の検出面は何れも地山上面 (V層) である。多くは古代の土坑であるが、それ以外の時期の土坑も含めて記載する。また、近世墓も10基検出されている。

A 1 区 の山裾部からは平安時代の土坑 9 基と近世の墓壇10基が見つかった。この地区には奈良・平安時代の竪穴住居が13棟分布しており、土坑群とも重複するものが多い。斜面地形にあること、遺構間の重複も多いことなどから遺構の残存状況は良くない。本来であれば深さも100cm以上あって、断面形は袋状になると推測されるが、底面から20～40cm程度しか残っていない。埋土に土師器の細片を数点含むものも多く、縄文時代の土坑とはならないと判断した。平安時代には住居と土坑が近い位置関係で在ったことが窺えよう。

A 6 区、山の中腹部からは25基の土坑が見つかった。この場所からは平安時代の竪穴住居が数多く見つかっており、中世の竪穴建物は1棟のみである。こうした状況から土坑群は何れも平安時代に位置付けるのが最も妥当と考えている。A 6 区とした山の中腹部は長さ約30m、幅約14mの周囲よりも平坦な面が北東方向へと張出す地形となっている。多くの土坑はその張出しの先端から中央部に分布している。A 6 区には、平安時代の竪穴住居が11棟あり、土坑群と重複はあるものの、本来は互いに分かれて占地していたようである。

A 12区は山頂の南東直下の斜面地形である。16基の土坑が平安時代の竪穴住居17棟と重複しながら検出された。円形または隅丸方形を基調とする土坑は、他遺跡の事例から平安時代の可能性が高い。平面形や断面形が不整形な土坑は時期がよく分からず、古代から中世のものと大きく捉えることとした。同様の地形は調査区外の南西部へと続いている。

A 14区、山頂から北西へ少し下りたところで見つかったSK 1 4は、本遺跡で検出された土坑の中では最も残りが良い。深さは145cmあり断面形は袋状を呈する。他の土坑の多くもこのような規模・形態であったと推測される。

C 区でも竪穴住居の比較的近くに土坑が分布しているが、A 区ほど密な分布ではなかった。

平安時代とした土坑の殆どは縄文時代のフラスコ状土坑のような形態であったと推測される。その用途も貯蔵穴と思われるが、そういった状況を示すような遺物が出土していたわけではない。墓の可能性も念頭に置いて調査したが、埋土は自然堆積であった。貯蔵穴であったとする根拠は殆ど無いわけだが、それでもこれらの土坑群は堅果類の保存を主目的としていたとするのが最も妥当と考える。稲作は普及していたであろうが、山の斜面に営まれた集落で、稲作は不可能であったであろうから、米が手に入らないことを想定して常に堅果類の保存施設は準備されていたのではないだろうか。

個々の土坑の規模や形態、埋土の状況や出土遺物などについては観察表にまとめている。

溝

SD 0 1 (第25・26図、写真図版17)

<位置・検出状況> A 6 区、山中腹部に位置しており、地山面で検出した。南東から北東へ張り出す平坦面に直交するように溝は延びている。 <新旧関係> S I 2 1 との新旧関係は不明。S I 2 3 より新しい。 <規模> 北西-南東方向。長さ945cm、上幅92～37cm、深さ20cm。 <断面形> 隅丸逆台形。 <堆積状況> 自然堆積。 <底面> 概ね平坦であった。 <出土遺物> なし。 <性格・時期> 何らかの区画溝であろう。遺構の位置や形態から平安時代とみられる。

堀

1号堀（第57図、写真図版51）

＜位置・検出状況＞西側山の山頂部、B区とC区の境で尾根筋が最も幅が狭くなる場所に位置している。地山面で検出した。＜新旧関係＞なし。＜規模＞長さ310cm、上幅220～195cm、深さ36cm 痩せ尾根の頂部にあたるため、かなりの土砂が流失している。本来はもっと深い堀であった可能性が高い。＜断面形＞隅丸逆台形。＜堆積状況＞自然堆積。＜底面＞概ね平坦で段差や間仕切り等はない。＜出土遺物＞なし。＜性格・時期＞曲輪と曲輪の間を堀切したもので、遺構の位置や形態から中世と考えている。

柱穴（第59図、第2表）

259個の柱穴を検出したが、個々の柱穴の特徴については観察表に整理した。

A1区の沢跡（第11・55・56図、写真図版51）

調査区の東端部（A1区）に位置し、標高12～13mと最も低い場所でもある。山裾部分にあたり、南西から北東方向へと流れていたことが分かった。検出面での上幅は南西部で13m、北東部は35m以上あり調査区外へと続いている。沢が埋まり切った段階で平安時代のS I O 7が造られる。S K 2 4・6 3も沢跡よりも新しい。沢跡からは断続的ではあるが縄文時代中期～晩期末の土器及び平安時代の土器が大コンテナ2箱程出土した。

断面図A-A'の5層は中礫火山灰である。この堆積状況からして、縄文時代前期前半の段階でこの沢跡はかなり浅くなっていたことが分かる。また中礫火山灰層より下部から遺物は出土しなかった。

S X O 2（第56図）

A5～A6区に位置し、地山面で検出した。上幅1.4～4.1m、下幅0.3～1.4m、深さ0.6～1.5mを測る。時期は不明だが、自然流路と見られる。

（5）出土遺物

縄文・弥生土器（第60～63図、写真図版52～55）

S I 2 6とA1区沢周辺から大コンテナ2箱程（46, 196. 10g）出土している。山頂部A13区やB区、C区では出土しなかった。A1区沢の埋土には中礫火山灰が良好な状態で堆積していたが、その中礫火山灰より下位から遺物は出土しなかった。一方、中礫火山灰より上位は宅地であったこともあり攪乱をうけていた。それでも出土した遺物については、元位置から動いてはいるものの、A1区沢にあったものであることには変わりはなく、別の遺跡の土器が混入しているわけではない。

1～4はS I 2 6から出土したもので遺構に伴う。1は今回の調査で出土した土器の中では最大のものとなった。文様は無く結束の複節斜行縄文を施している。3や4も完全な形であれば1と同じくらいの大きなようになっていたであろう。3・4・13も恐らくはS I 2 6に関連する遺物と考えている。5～14は中期後半に位置付けられる。隆沈線による区画或いは磨消縄文を持ち、5のように口縁部に沈線による渦巻文が施されるものもある。12や14の口縁部は波状口縁となるようである。

15～17は後期前半の土器で、19は沈線内に朱が僅かに残る浅鉢で、縄文時代晩期か弥生時代初頭と考えている。19～25は弥生土器とみられる。出土した殆どの個体を掲載している。今回の調査では、弥生時代の遺構は見つからなかった。

各土器の特徴については遺物観察表を作成し、整理している。

土製品（第63図、写真図版55）

1点のみ出土した。801は円錐に近い多角錐形状で底面は少し膨らみを持ち、器面の半分は焼成時の煤がある。模様は無く、中空でもない。時期不明である。

土師器・須恵器（第64～73図、写真図版55～63）

土師器は奈良時代のものや平安時代のものがある。須恵器は全て平安時代のものである。総量は土師器が72,448.02g、須恵器は8,561.11gの出土である。遺構ごとに掲載しているため、時期が前後することがある。奈良時代の土師器としてはS I 2 7出土の球胴甕（127、128）や長胴甕（129、130）、S I 5 8出土の球胴甕（150）、遺構外出土の甕（159、160）などがある。何れも甕類であった。出土した土師器片を全て見て仕分けしたが、明らかに非ロクロの坏であるという個体はなかった。また、7～8世紀代の須恵器も出土しなかった。

他は平安時代の土師器・須恵器であるが、やはり坏類は少ない印象を持つ。坏に限らず甕類もかなり細かく割れてしまい立体に復元できる個体は少なかった。竪穴建物群が複雑に重複していたこと、カマドを意図的に壊している例も複数認められ、建物を放棄する際に土器類をそのまま残してはいかなかったのではないかと推測される。

坏類はロクロ整形で底面糸切無調整のものも多く、内面黒処理を施すものと（109、118、122、124、145、158）、施さないものがある（106）。甕類は口縁部が短く、外への折り曲げも弱いものが多い。器面の調整は基本的に口縁部をヨコナデとし、胴部はヘラナデとしているようだが、もともとしっかりとした器面調整ではないようで、不明瞭だった。ヘラケズリやハケメを施すものも見られた。

須恵器も数は多くない。173は高台付坏だが高台部は欠損している。底面付近を再調整している。103は壺類の胴部、176は大甕の口縁部である。

其々の法量や器面調整、その他特記事項は観察表にまとめている。

鉄製品（第74～76図、写真図版63～66・73～75）

大半が竪穴建物や土坑といった遺構内からの出土であった。201はS I 1 0床面から出土した鋤先でほぼ完品である。202は手斧であろうか。206・217・229・230・は紡錘車である。208はカコで比較的残りもよい。205・231は銚頭か鎌と考えている。刃物類は最も多く12点出土している。215は腐食が進んでおり判然としないがハミの可能性もある。221・235は鐸の一部かもしれない。其々の鉄製品の特徴や計測値については遺物観察表に整理している。

羽口・鉄滓（第76・80図、写真図版66・71～73）

羽口は小コンテナ1箱、鉄滓は大コンテナで6箱出土している。何れも平安時代とみられる。但し、遺構に伴っているものはない。今回の調査では鉄生産関連の施設が見つからなかったが、これ

らの遺物を使用していた施設が調査区外に存在している可能性は極めて高い。特に調査区の南側には山の斜面が雛段状に造成されている場所が続いており、古代の遺構があることは疑いない。鍛冶関連施設については、検出された竪穴建物の多くが複雑に重複していること、斜面に建てられていたため斜面下方が流出して残っていない遺構が多いことなどから判然としなかった。

陶磁器（第77・78図、写真図版67・68）

陶磁器は中世と近世及びそれ以降のものに分けられる。前者は主に山頂及び山の中腹から、後者は山裾部から出土している。山裾部には最近まで民家が建っていた。

403は渥美産陶器広口壺で12世紀代とみられる。本遺跡出土中世陶器の中では最も古く、城館の築かれる以前のもので、近くの田鎖車堂前遺跡との関連が窺われる。401・402・404～407は陶器甕片で同一個体と考えている。口縁部の形態から13世紀後半から14世紀頃の東北在地産とみられる。410は中国産染付皿片で16世紀代である。これらは田鎖館が機能していた時期を考える上で重要な資料といえる。408・409は瓦質の火鉢と思われ、中世なのか近世なのかよく分からなかった。

412～417は近世の陶磁器で一部は近代まで遡るものを含む。染付は肥前産、陶器は瀬戸美濃産や大堀相馬産等が多い。また陶器の中には生産地のよく分からななものも散見された。調査区東端のA1区には民家が建っており近現代の陶磁器が多量に出土したが整理期間が短かったため不掲載とした。

個々の産地や釉薬、生産年代等は観察表を作成し整理している。

銭貨（第79・80図、写真図版69～71）

出土した銭貨は中世のもの、近世のものに大別される。前者は遺構外から、後者はその殆どが近世墓から出土したものである。近世の銭貨は複数枚が密着した上に錆に覆われたものが多くあり、正確な点数は求められなかった。複数枚が密着している資料は剥がすと壊れてしまう恐れがあったため、そのままの状態に掲載することとした。布が僅かに残っているものや、種実が付着しているものもあった。種実の種類は分からないが、混入ではなく、埋納である。細かく割れた資料以外は掲載している。中世の墓壙は無かった。

石器（第80・81図、写真図版71・72）

石器類には縄文時代のもの、古代のものがある。縄文時代の石器は殆どがA1区から、古代の石器は多くが竪穴建物から出土している。縄文時代の石器には石匙（701）、石篋（702）、磨製石斧（703～705）、敲磨石（706～708）がある。古代の石器は砥石（709～711）である。個々の石器類の特徴や産地は観察表に記載した。

3 小 結

田鎖館跡から検出された遺構は竪穴住居53棟、土坑67基、堀1条、帯曲輪1箇所、性格不明遺構1基、近世及びそれ以降の墓壙10基である。出土遺物は縄文土器、平安時代の土師器・須恵器、中近世陶磁器が10箱、金属製品2箱、鉄滓6箱、石器類1箱他である。

縄文時代 調査区東側、山裾部分から中期の竪穴住居が1棟検出されているが残りは良くなかった。中期の小規模な集落であったようだが詳細は不明である。この山裾のすぐ東側は沢地形となっており堆積土の中には縄文時代の遺物の他に古代、近世、近現代のものまでが含まれていた。沢堆積土を掘下げると中礫火山灰層が確認される。これは攪乱を受けず良好な状態で堆積していたが、火山灰層より下位からの遺物出土はなかった。

古代 竪穴住居47棟、土坑66基が検出されている。竪穴住居が密に分布していたのは調査区東端の山裾部分と、これより少し西側に登った山の中腹にある平坦な尾根の張り出し、更に山頂の少し手前まで登ったところの斜面部である。これらの他に、奥の山には山頂の細長い尾根部に数棟点在している。地形に合わせて建てられており、等高線と竪穴住居跡の軸が極端に振れるものは無かった。カマドは斜面上方に設置されるものが多い。そのため煙出しが極端に短いもの、煙道から煙出しへの立ち上がりがとても深いもの等も見られる。

土坑は平面形が円形で上場よりも下場のほうが大きい、断面形がフラスコ状のものが主体となる。縄文時代の貯蔵穴と規模・形状がよく似ているが、埋土には土師器・須恵器が含まれるため縄文時代の遺構ではない。それでも土坑の使用目的は縄文時代のフラスコ状土坑と同じく堅果類の貯蔵穴であったと思われる。

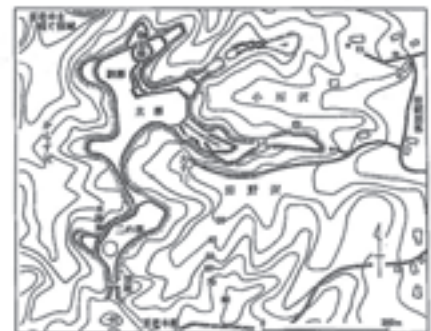
土師器・須恵器はその大半が竪穴住居の埋土から出土しているものの、床面から残りの良い状態で出土したものは無い。坏類は少なく、甕類は複数個体を有する住居が多い。甕類は非ロクロ整形で口縁部の幅が短いものが中心である。金属製品も竪穴住居からの出土が殆どであった。最も多いのは刀子類で、他には鋤先、紡錘車、銚頭、カコ等が出土しているが、小鍛冶の施設は検出されていない。但し、この時期の遺構は調査区外へと続いているため、調査区外に鍛冶関連施設が存在する可能性は十分ある。鉄滓は遺構内外から広範に出土している。外部から持ち込まれたものではないので、調査区外の何処かに製鉄炉や製鉄に必要な木炭を供給する炭窯が存在することは疑いない。

遺構が山裾から斜面部に立地すること、出土遺物の中に鉄滓を一定量含んでいること、これまでの県沿岸部の調査事例などから、本遺跡には平安時代に於いて鉄生産を生業とする規模の大きな集落が存在していた可能性が高い。その具体的な時期はAMS年代測定によると8世紀後半～10世紀代であることも判明した。

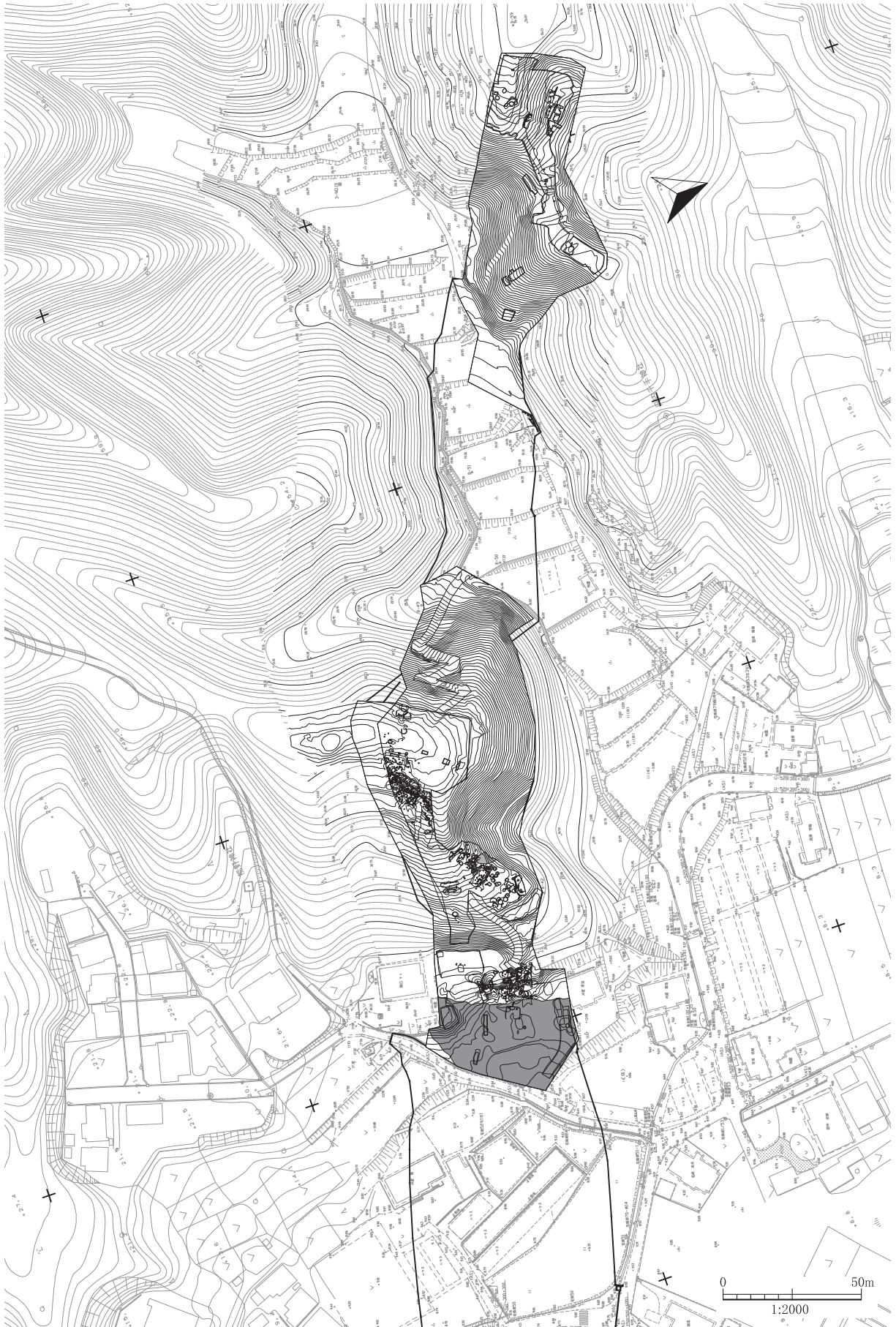
中世 田鎖館跡は中世に於いて、この地域に勢力を有していた田鎖氏(閉伊氏の宗流)の居城と伝えられている。現在の田鎖地区は長沢川が北流して閉伊川へと合流する地域を指すが、中世にはもう少し広範の長沢川流域がそうだったと推測される。ここには宮古地域でも有数の広い沖積地がある。また、長沢川沿いに上流へ向かうと、石峠地区や豊間根地区といった津軽石地域へとつながっている。閉伊川も河口から6km程で、舟での往来も可能である。田鎖館跡は閉伊川のすぐ傍まで張り出した山地の尾根上にあり、田鎖地区だけでなく北西側の花原市地区も眼下に、また閉伊川は河口の少し手前、対岸は千徳地区までを望むことが出来る。城館の範囲は東西約500m、南北約550mで城域はこの地域ではやや広い。しかしながら山頂部に広い平場を有する部分は殆ど無い。縄張図は『日本城郭体系』2巻に掲載されたものがあり、これによると主郭の南側に二の郭(主郭より標高は高い)、北側に副郭を設け、東側へ延びる複数の痩せ尾根部分にも小規模な郭を連ねている。田鎖館跡の西側に隣接して老木館が

あるがその縄張は田鎖館跡とほぼ同規模である。また、田鎖館跡の南側にも城館としても良さそうな尾根筋がみられる(遺跡としての田鎖館跡はこの南側の尾根までを含めている)。これらのことから、田鎖館跡の縄張についてはこれまで周知されているものに、南側の尾根筋と西側の老木館を含めた範囲と考えたい。但し、調査区以外の部分は大半が民有地で、立ち入りは許可されなかったため縄張図作成は行っていない。中世城館に関連する遺構としては堅穴建物が4棟、堀1条、帯曲輪1箇所が検出されている。堅穴建物跡は東側の山で、堀と帯曲輪は奥の山で見つかった。この他に東側の山の山頂直下には柱穴群があり、遺物は出土していないものの斜面を切盛りして平場を造成し、建物を建てていた場であった。何れにしても遺構の密度は薄く遺物も殆ど出土しない。こうした状況はこの山城の性格をよく表しているともいえる。日常の居所は山裾の何処かにあり、必要な時にだけ山城部分を利用するといった使われ方であったと推測される。閉伊氏は源氏ゆかりとされるが確証はないようである。宇多源氏の佐々木氏を祖とし、奥州合戦での功で奥州に所領(閉伊郡)を得たとされ、鎌倉時代に閉伊川流域に移り住んだ。閉伊光員は1288年に遺言状を残しており、この内容について10年後に不服の訴えが幕府に対してなされた。幕府は約30年間審議した結果、遺言どおりとの沙汰を下した。これにより閉伊氏は員連系の河北閉伊氏と嫡子光頼系の河南閉伊氏とに分裂したという。室町時代になると閉伊三郎へ石塔義房が軍勢催促の書状を出している。閉伊氏は永和年間(1375-1379)に田鎖城を築き、老木地区の根城から移ったのを機に田鎖氏を名乗るようになることとされる。そして15世紀前半(永享の頃)には南部氏の配下になったとされている。その間にも一族は郡内に広がっていった。16世紀末、九戸政実の乱の際、南部信直からの出陣要請に応えず、奥州再仕置の時にも動かなかった。これにより所領は没収され城は破却された。『尺素往来』(室町時代後期)には「多久佐理之本牧…」と田鎖牧の馬についての記載がある。他にも複数の文献に田鎖産の馬が登場する。文献資料によると田鎖城(遺跡名は田鎖館跡)は14世紀後半築城、16世紀末に廃城(破却)とある。発掘調査では僅かではあるが13後半から14世紀前半の東北在地陶器の甕片、16世紀の中国産染付皿片が出土し、城館の成立やその後の展開を具体的に示す考古資料を初めて得ることが出来た。その一方、廃城(破却)の痕跡は、遺構としては確認されなかった。「田鎖牧」に関連する遺構・遺物については、平安時代の堅穴建物から馬具(ハミ)とみられる鉄製品が1点出土している。その後の「田鎖牧」成立が想定されるような遺物といえるだろう。

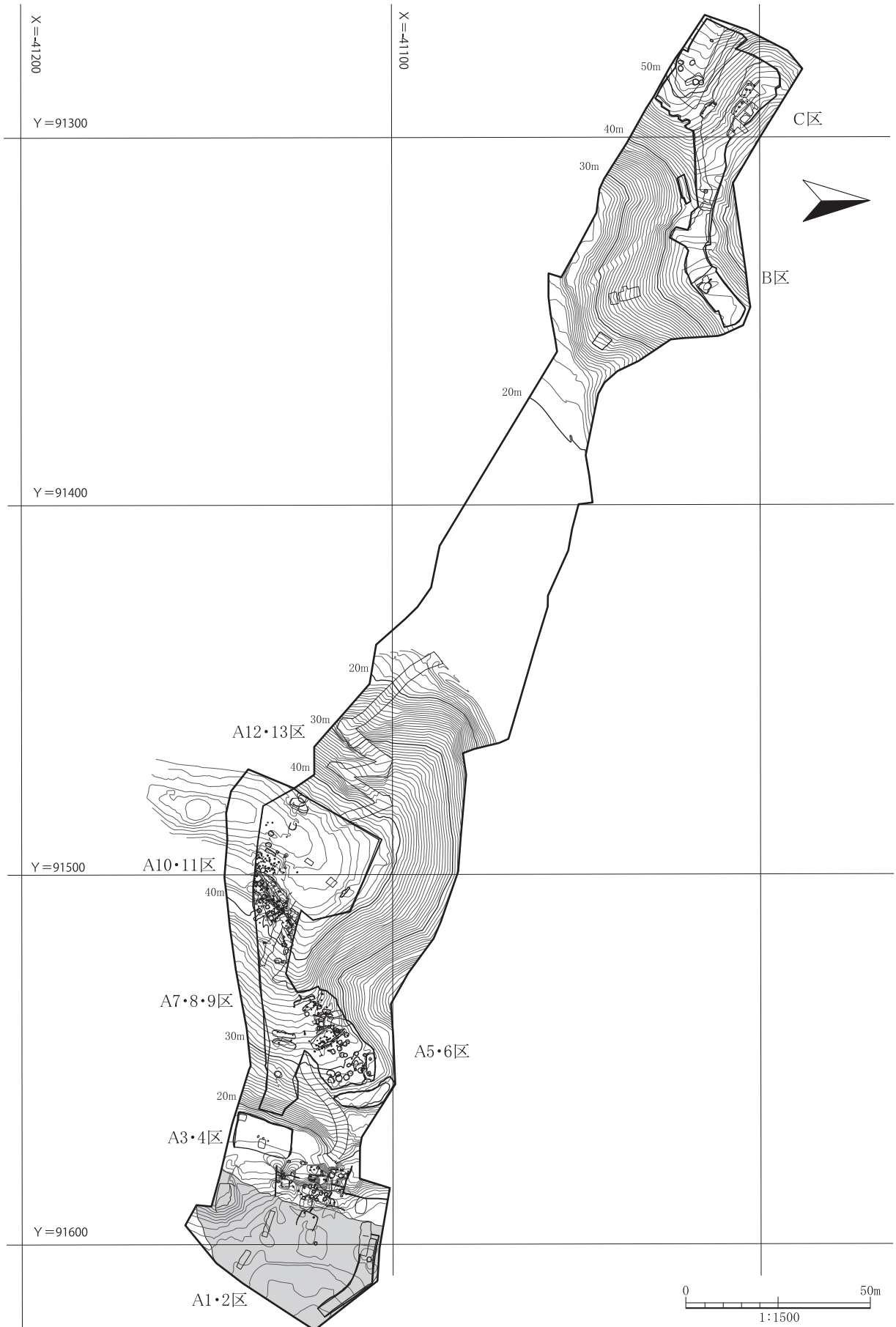
本遺跡に隣接する田鎖車堂前遺跡では、12世紀後半頃の大規模な堀を巡らせた居館跡が見ついている。平泉藤原氏配下の地元有力者の居館と考えられる。本遺跡の東側の山には、調査区外のすぐ南側の山頂部に石積の「塚」が残っていた。現況での観察ではあるが散在する礫群は10cm前後の川原石であった。この塚は田鎖車堂前遺跡の居館から西側にあたるため経塚の可能性が高い(第5図)。塚の周辺に近現代陶磁器は見られなかった。調査区からは12世紀の渥美産大甕の破片1点が出土している。



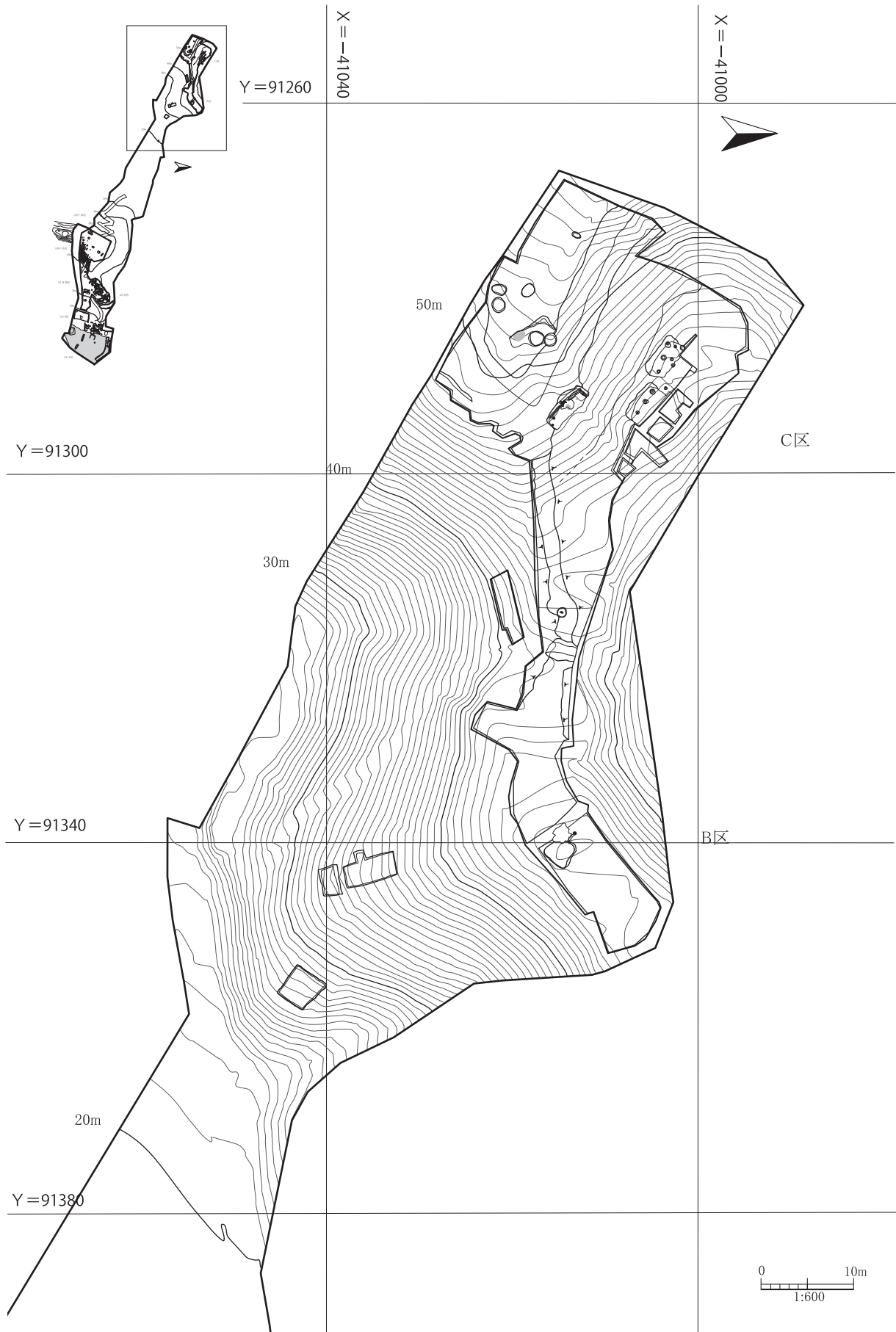
田鎖城図



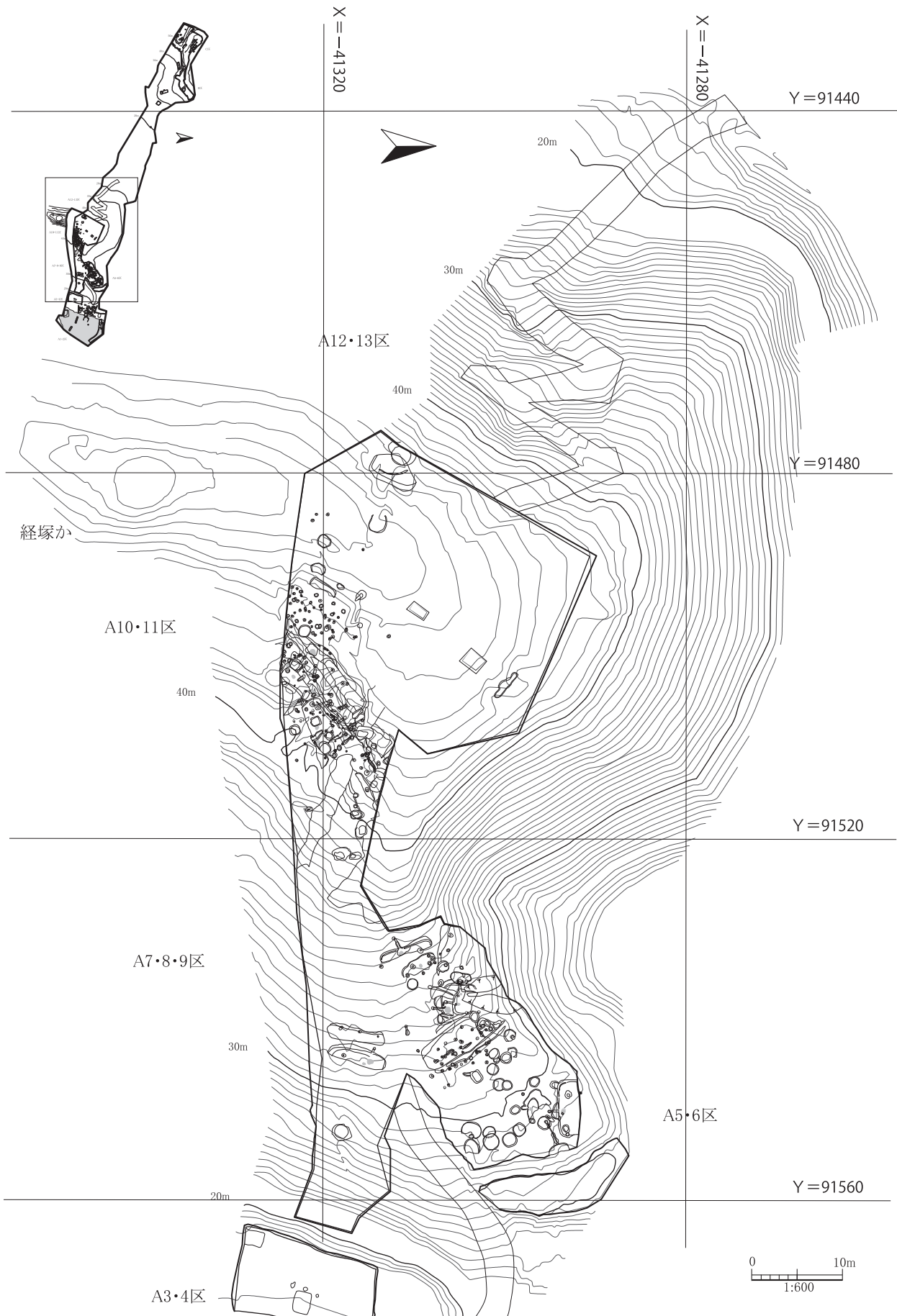
第2図 遺構配置図1



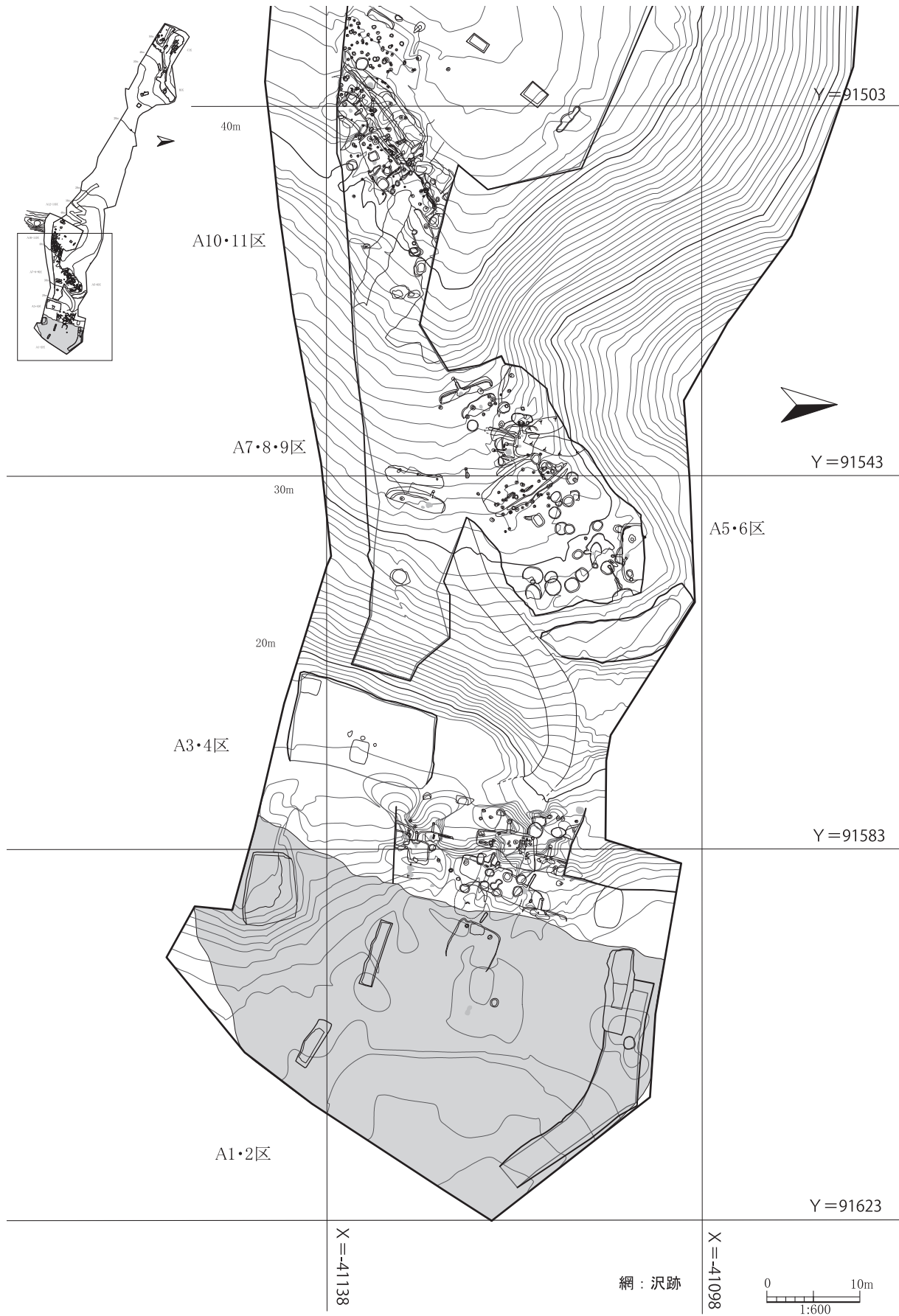
第3図 遺構配置図2



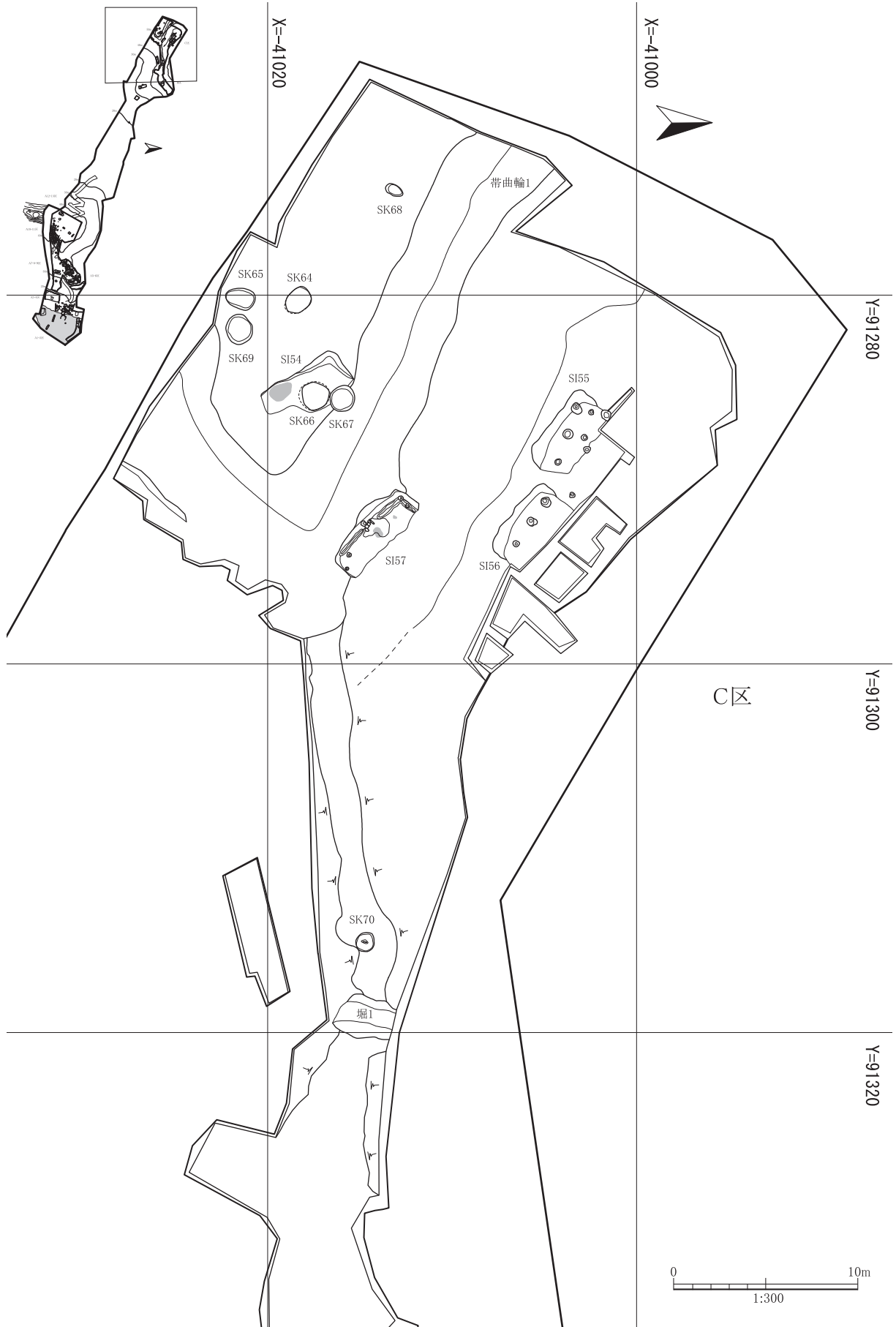
第 4 図 遺構配置図 3



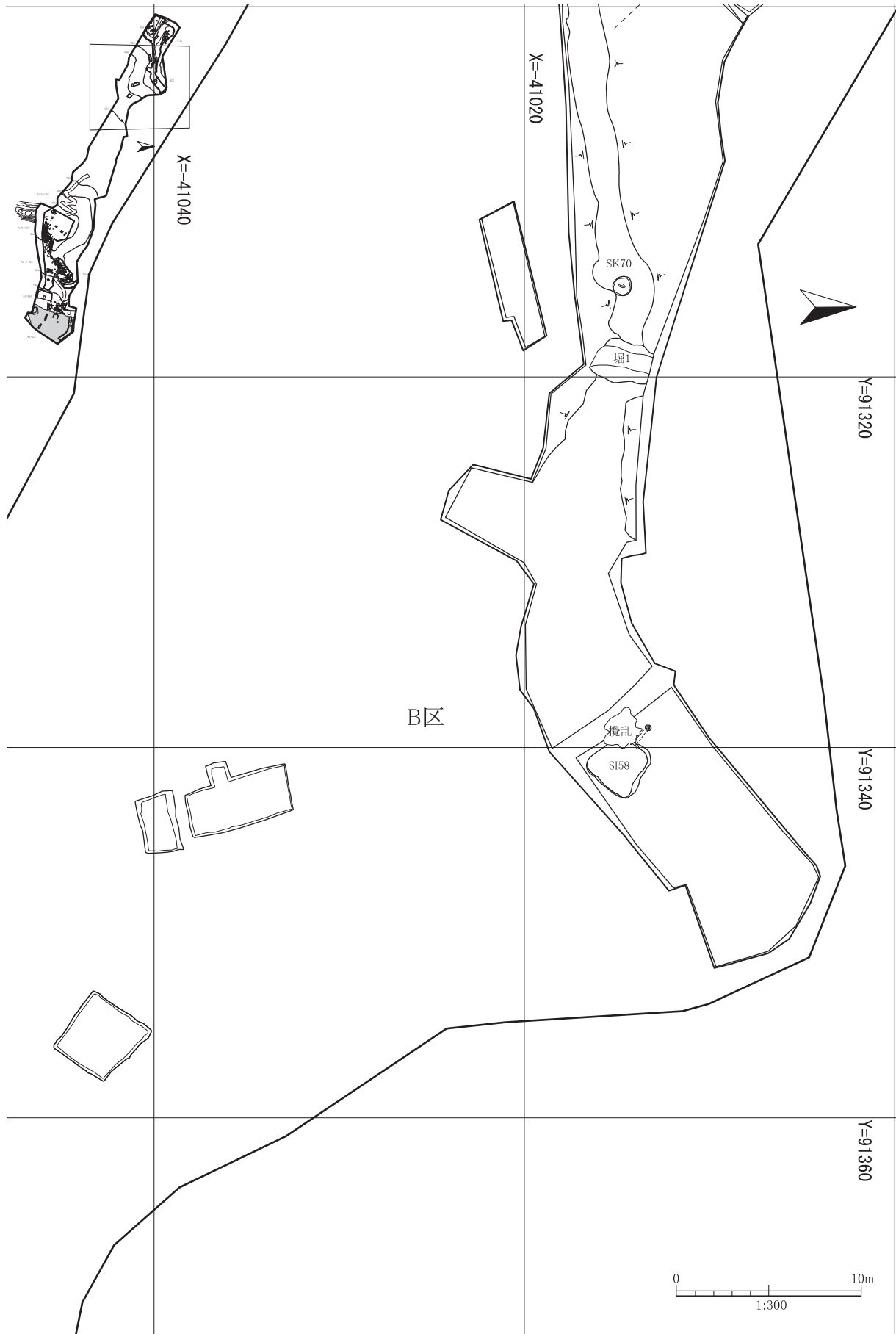
第5図 遺構配置図4



第6図 遺構配置図5



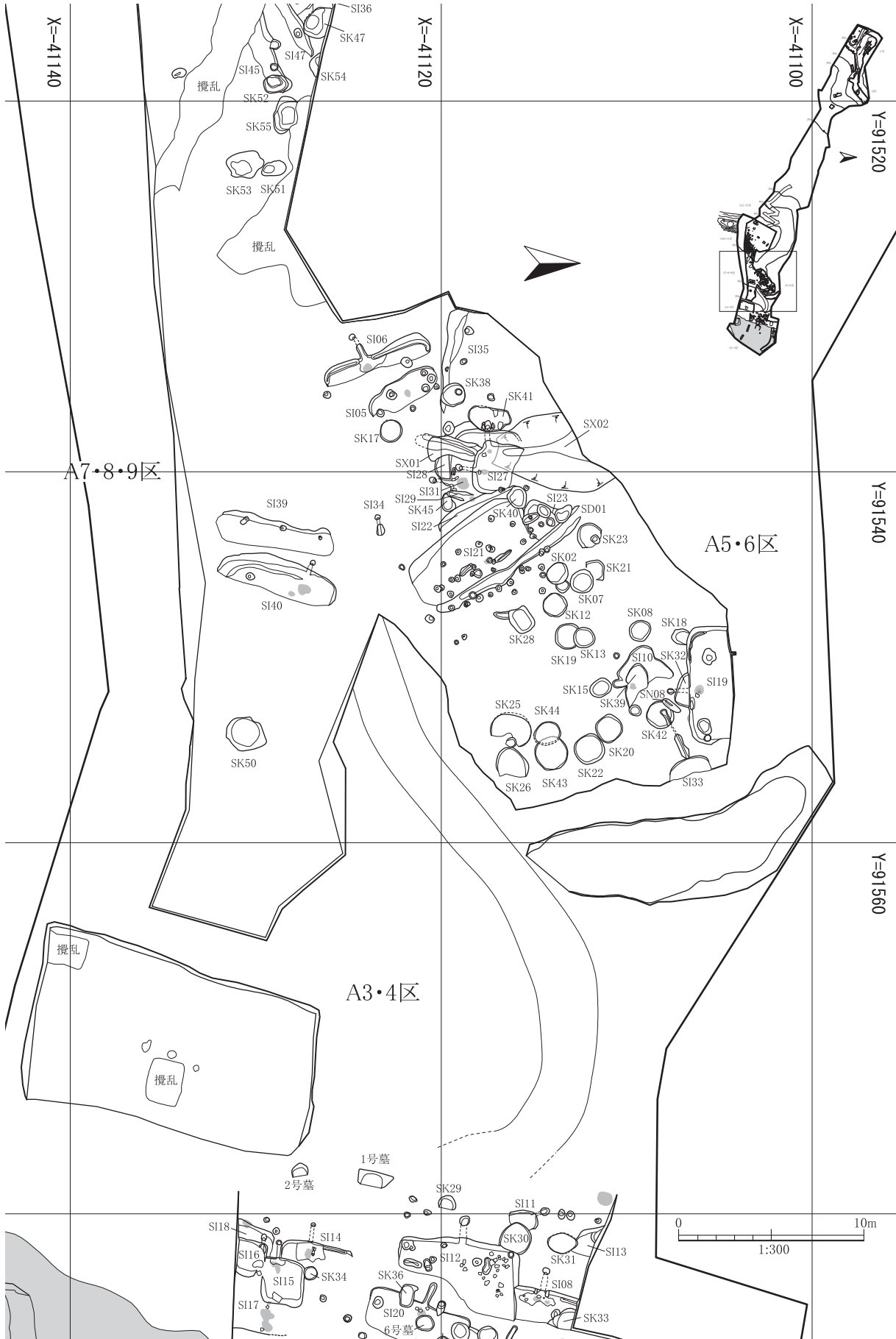
第7図 遺構配置図6



第8図 遺構配置図7



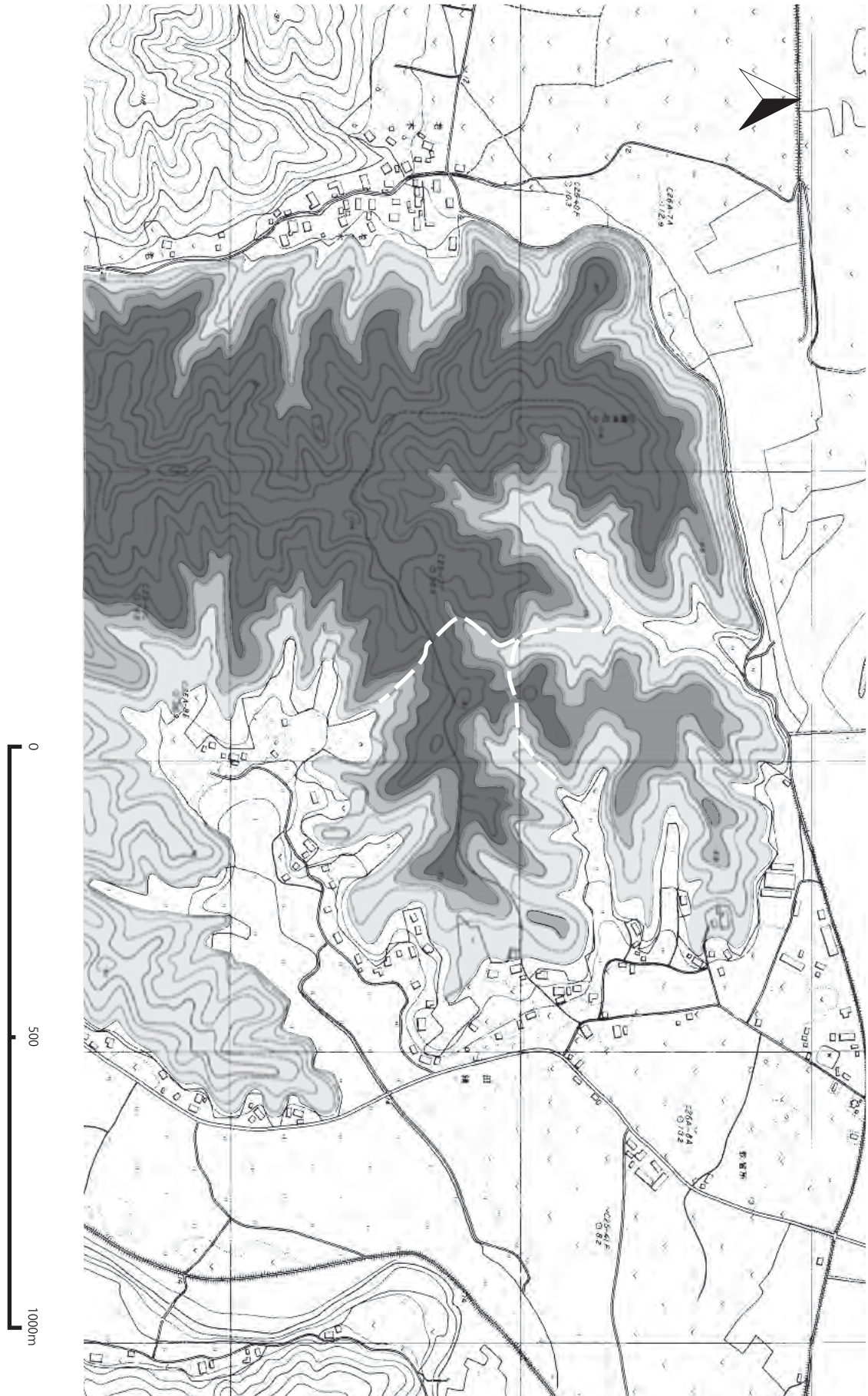
第9図 遺構配置図8



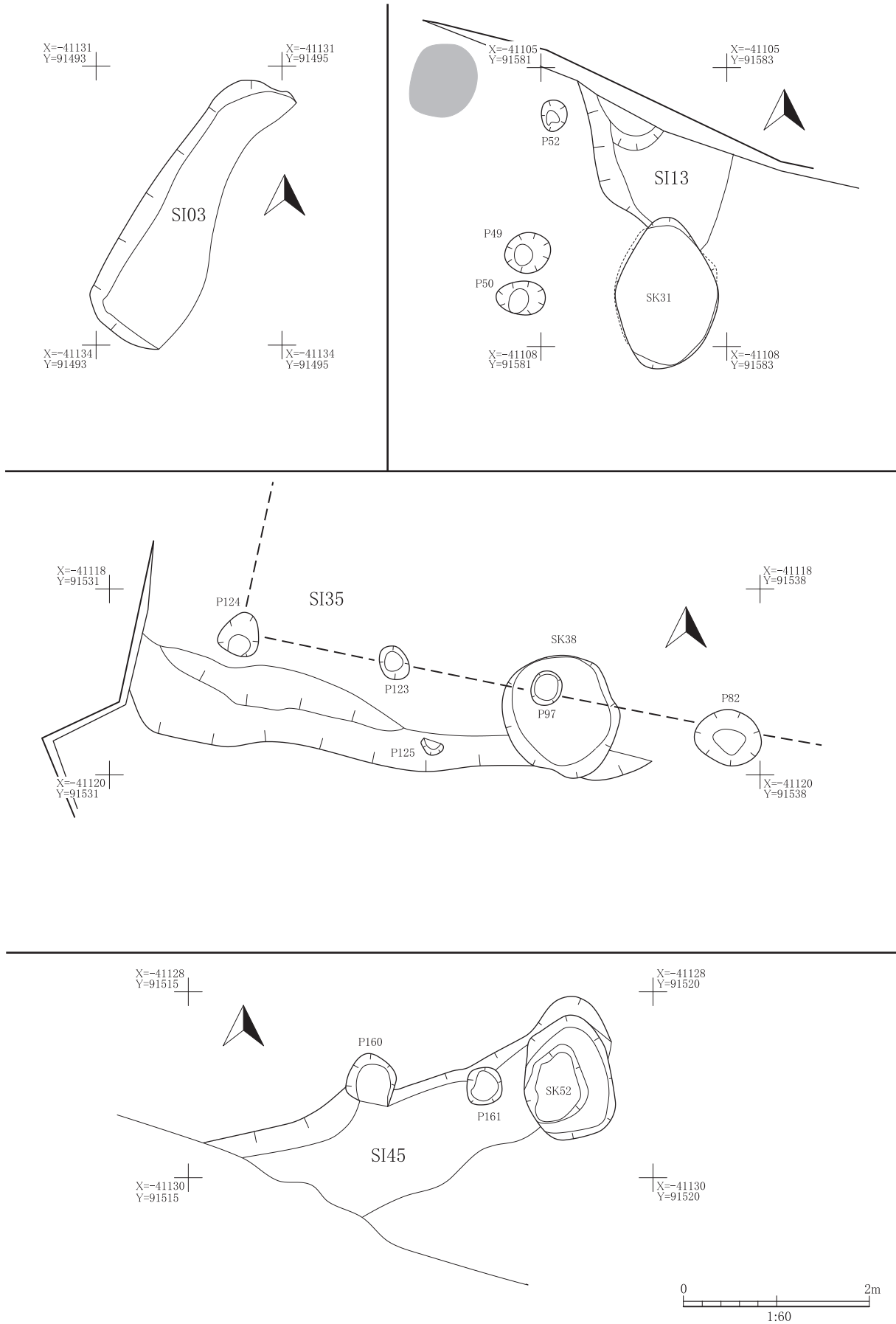
第 10 図 遺構配置図 9



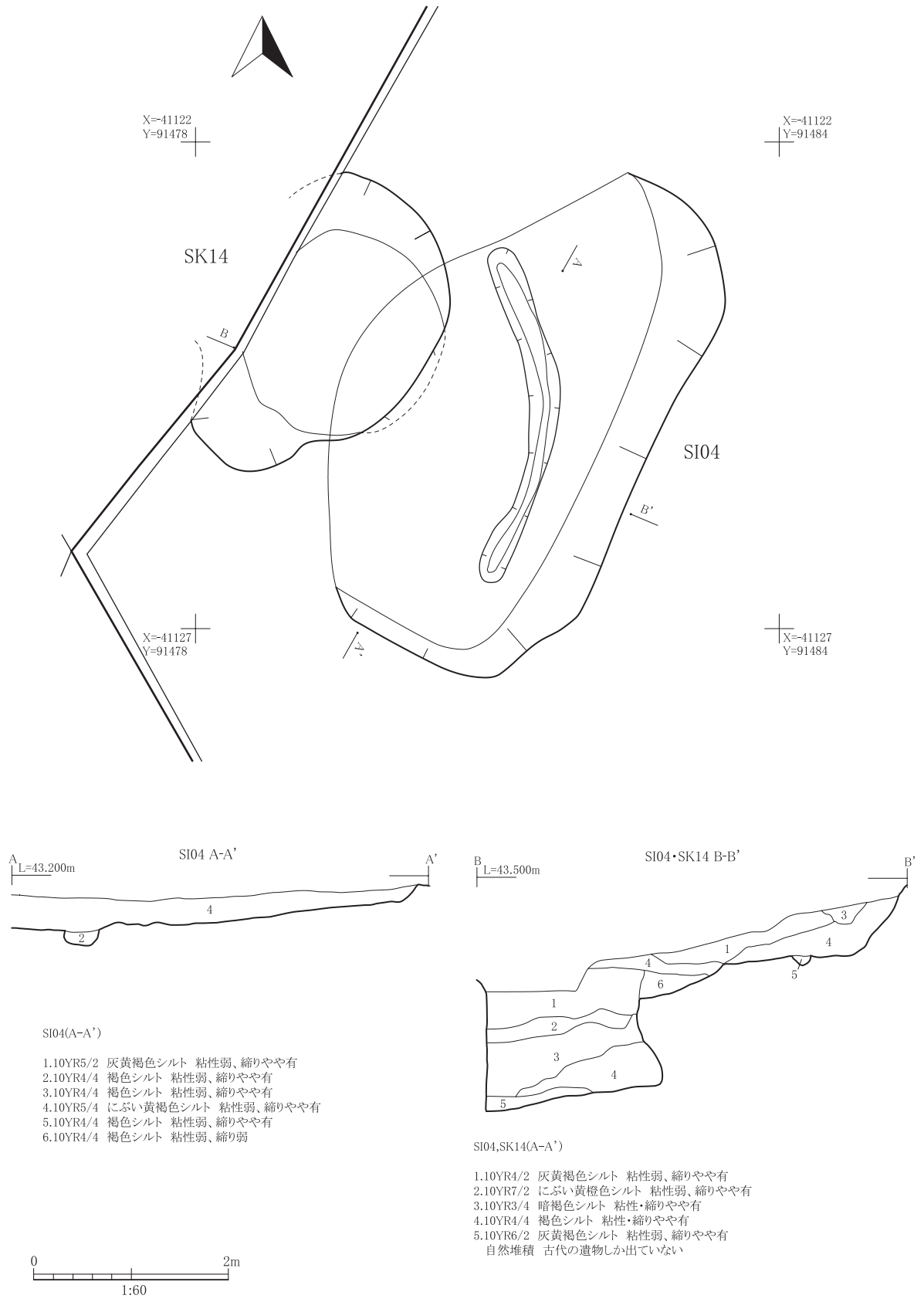
第11図 遺構配置図10



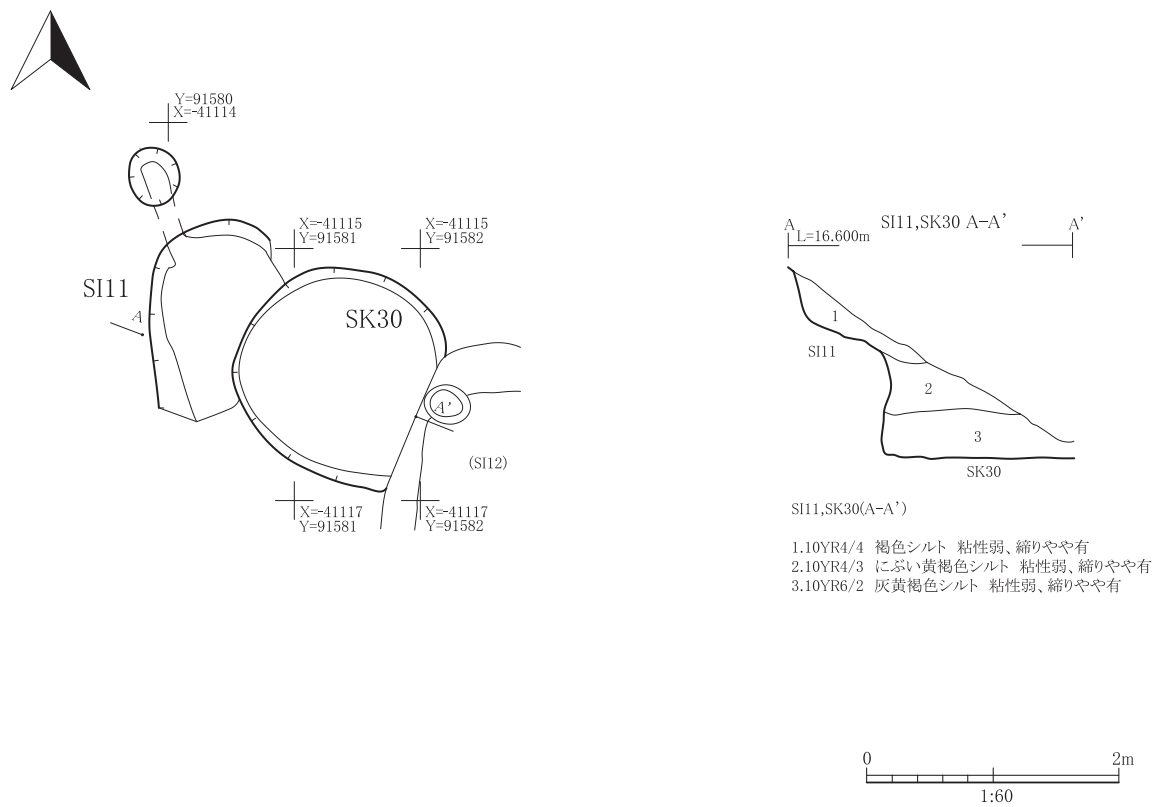
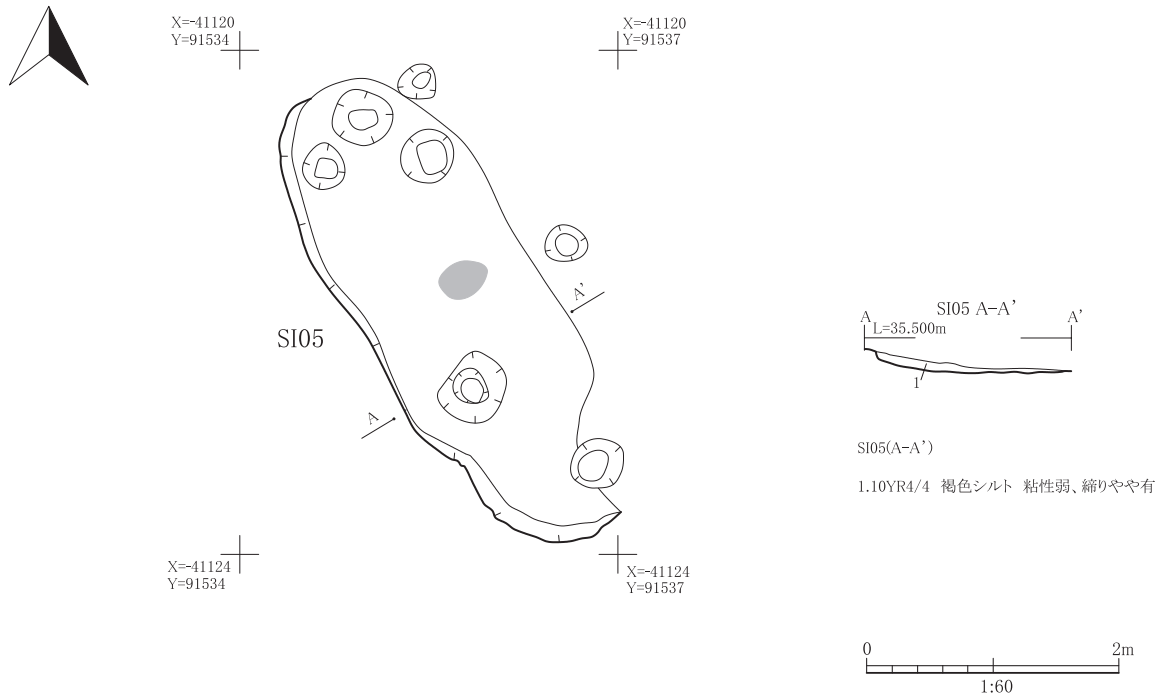
第 12 図 遺構配置図 11



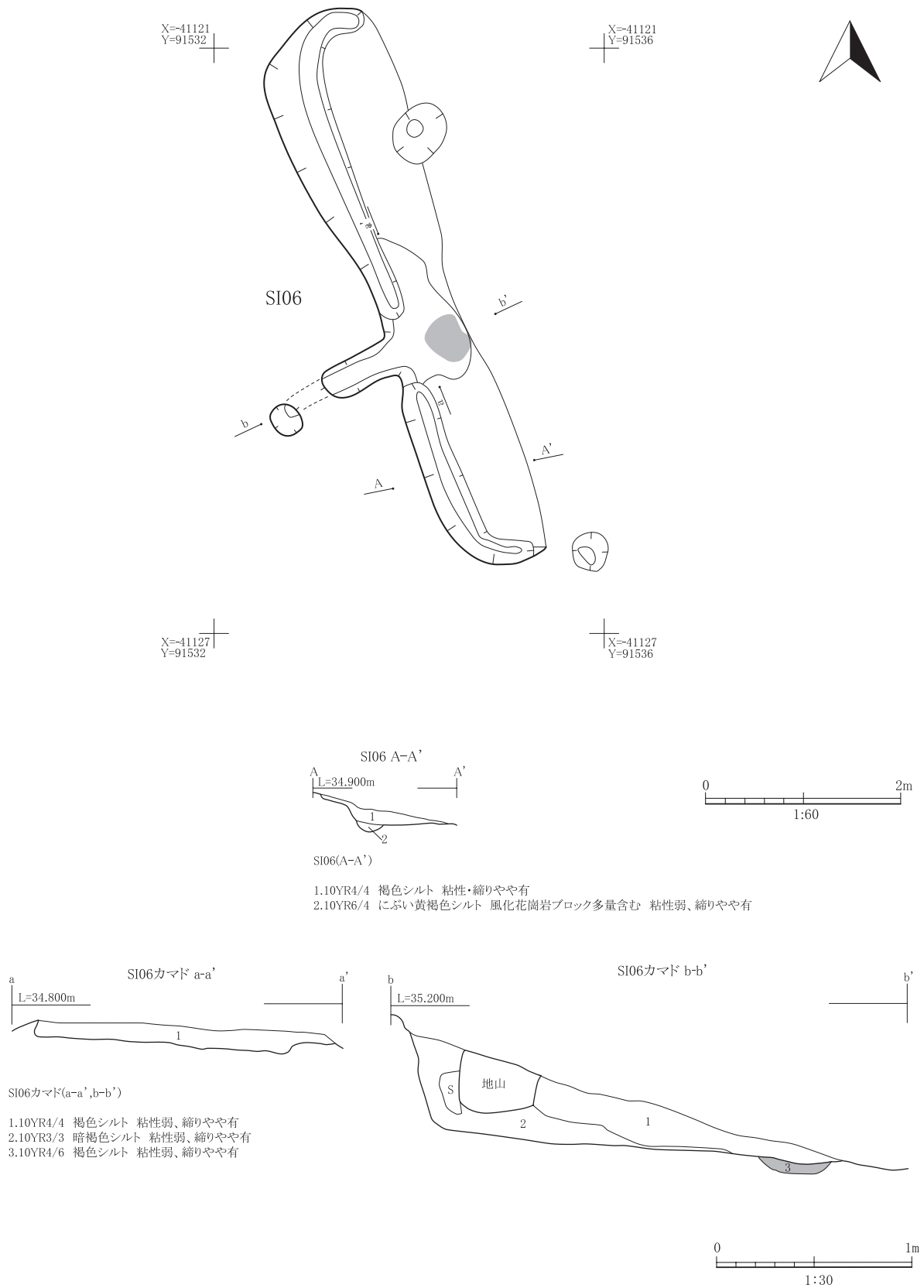
第 13 図 SI03・13・35・45



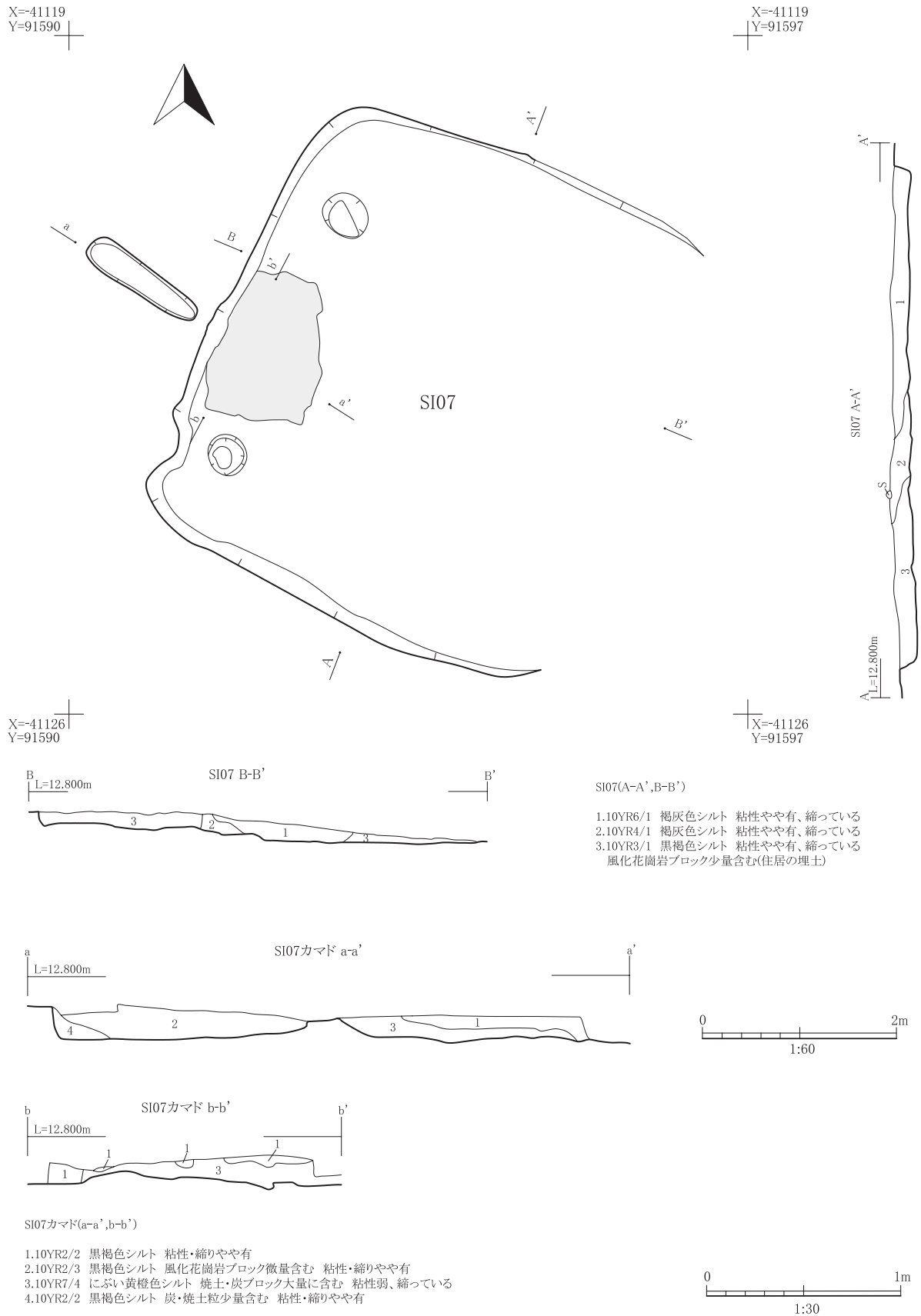
第 14 図 SI04, SK14



第 15 図 SI05・11, SK30

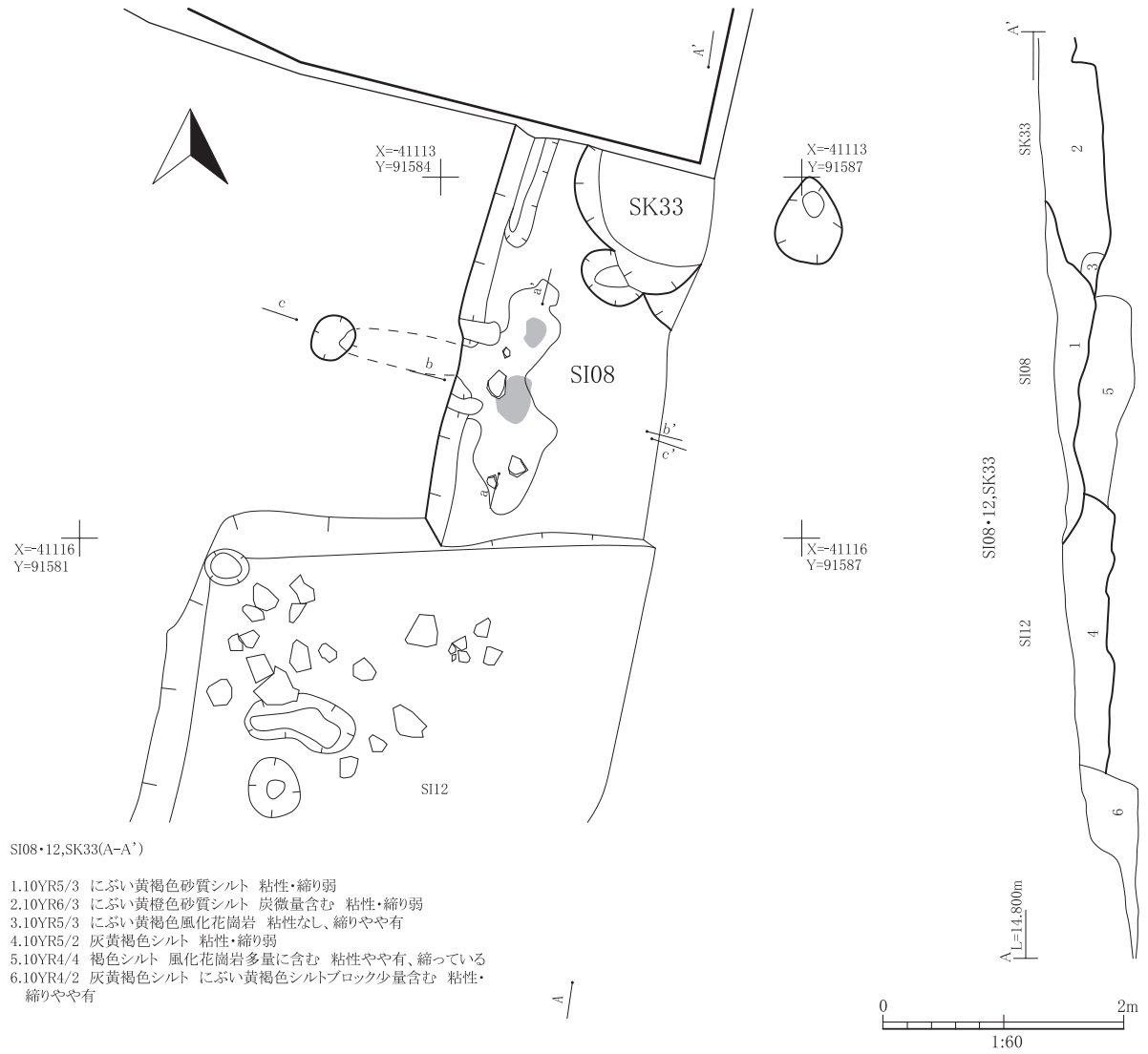


第 16 図 SI06



第17図 SI07

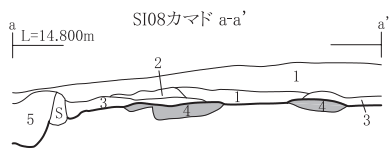
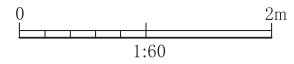
3 小 結



SI08・I2,SK33(A-A')

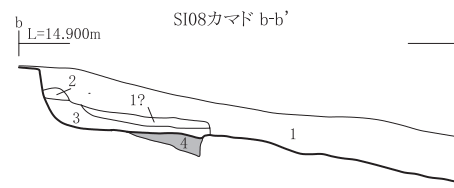
- 1.10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト 粘性・縮り弱
- 2.10YR6/3 にぶい黄褐色砂質シルト 炭微量含む 粘性・縮り弱
- 3.10YR5/3 にぶい黄褐色風化花崗岩 粘性なし、縮りやや有
- 4.10YR5/2 灰黄褐色シルト 粘性・縮り弱
- 5.10YR4/4 褐色シルト 風化花崗岩多量に含む 粘性やや有、縮っている
- 6.10YR4/2 灰黄褐色シルト にぶい黄褐色シルトブロック少量含む 粘性・縮りやや有

A /

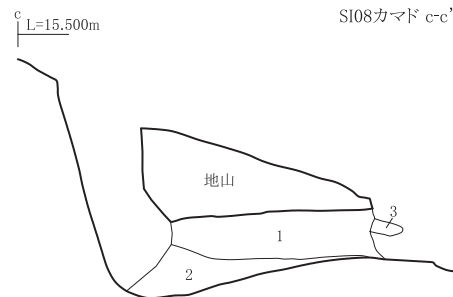


SI08カマド(a-a', b-b')

- 1.10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 炭粒を微量含む 粘性弱、縮りやや有
- 2.10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 粘性やや有、縮っている
- 3.10YR2/2 黒褐色シルト 炭粒・焼土粒を少量含む 粘性・縮りやや有

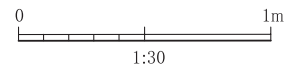


- 4.10YR4/2 灰黄褐色シルト 炭粒・焼土粒を少量含む 粘性・縮りやや有
- 5.10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 風化花崗岩少量含む 粘性・縮り弱

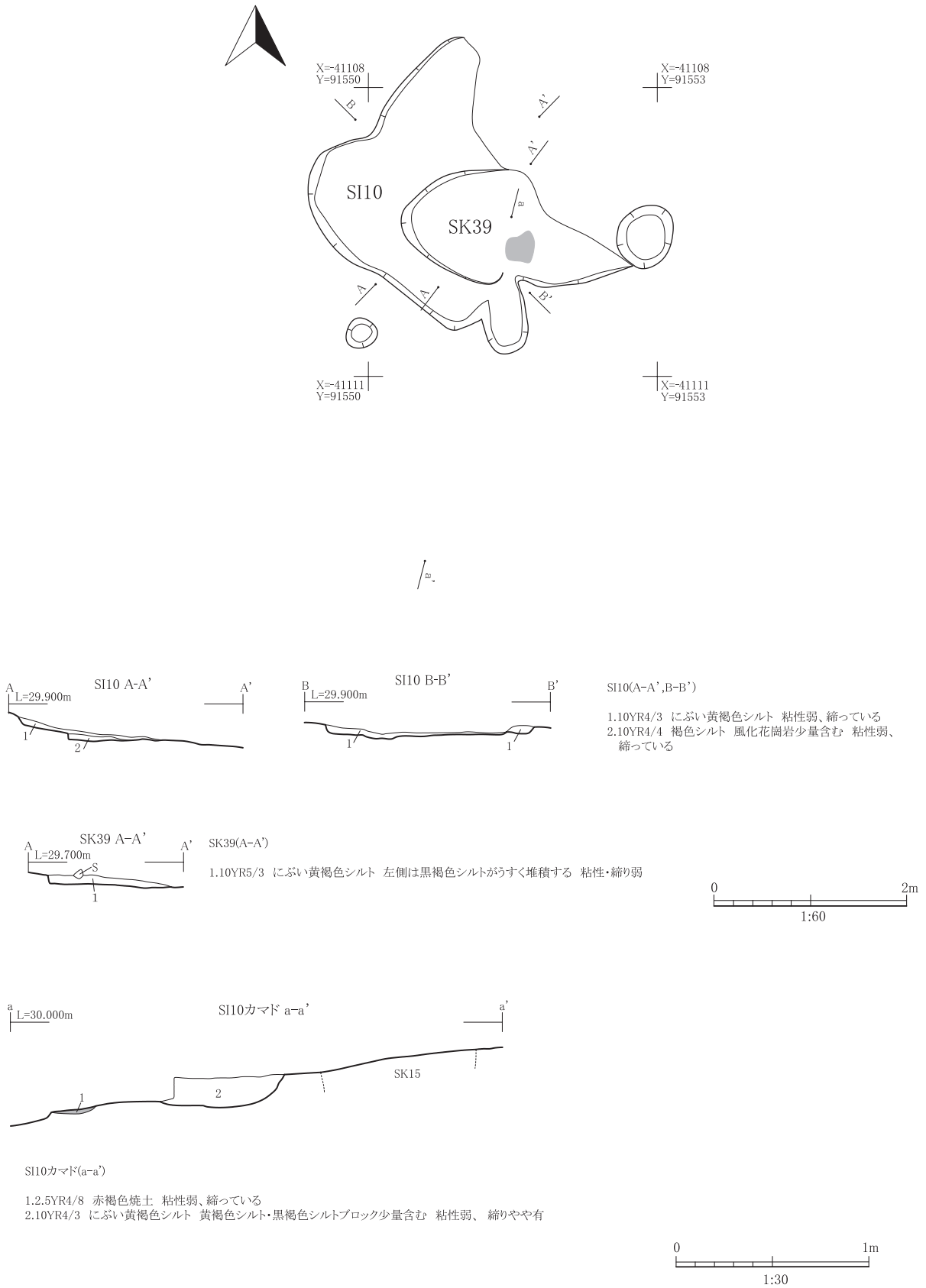


SI08カマド(c-c')

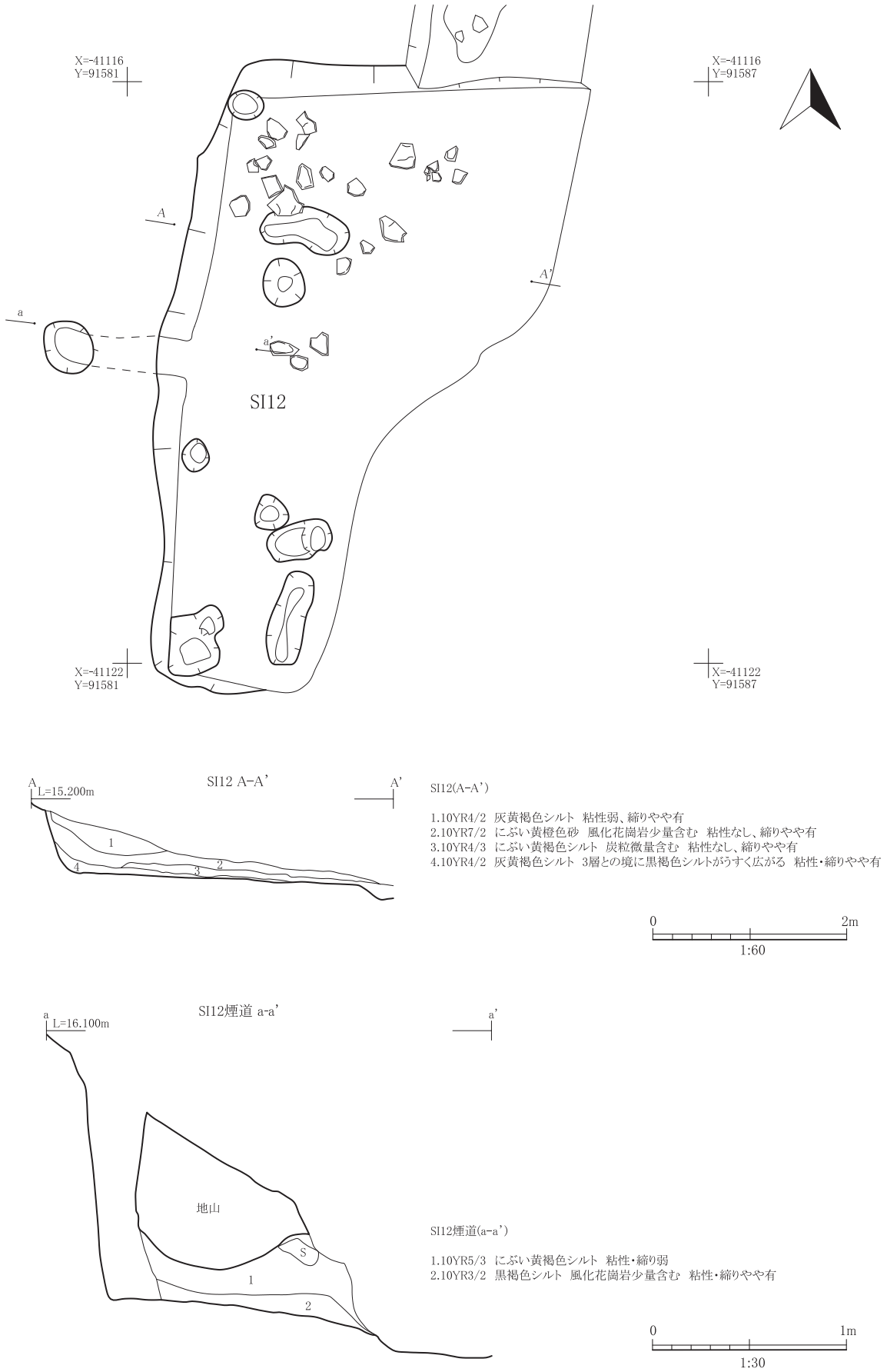
- 1.10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 風化花崗岩ブロック少量含む 粘性・縮り弱
- 2.10YR2/2 黒褐色シルト 粘性・縮りやや有
- 3.10YR7/4 にぶい黄褐色粘土 下部焼土がうすく見られる 粘性やや有、縮っている
- 4.10YR4/2 灰黄褐色シルト 炭粒・焼土を大量含む 粘性弱、縮っている



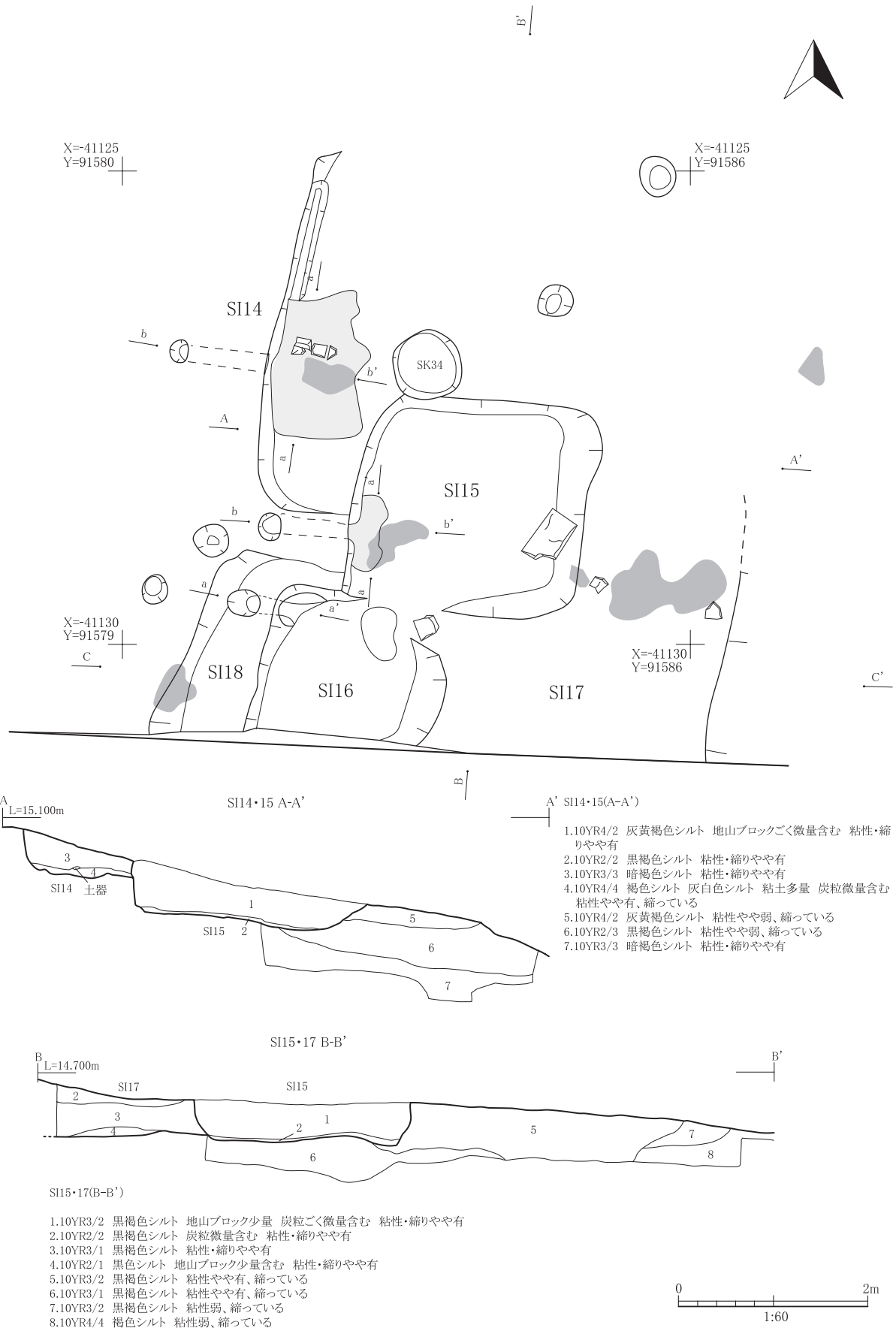
第 18 図 SI08, SK33



第 19 図 SI10, SK39

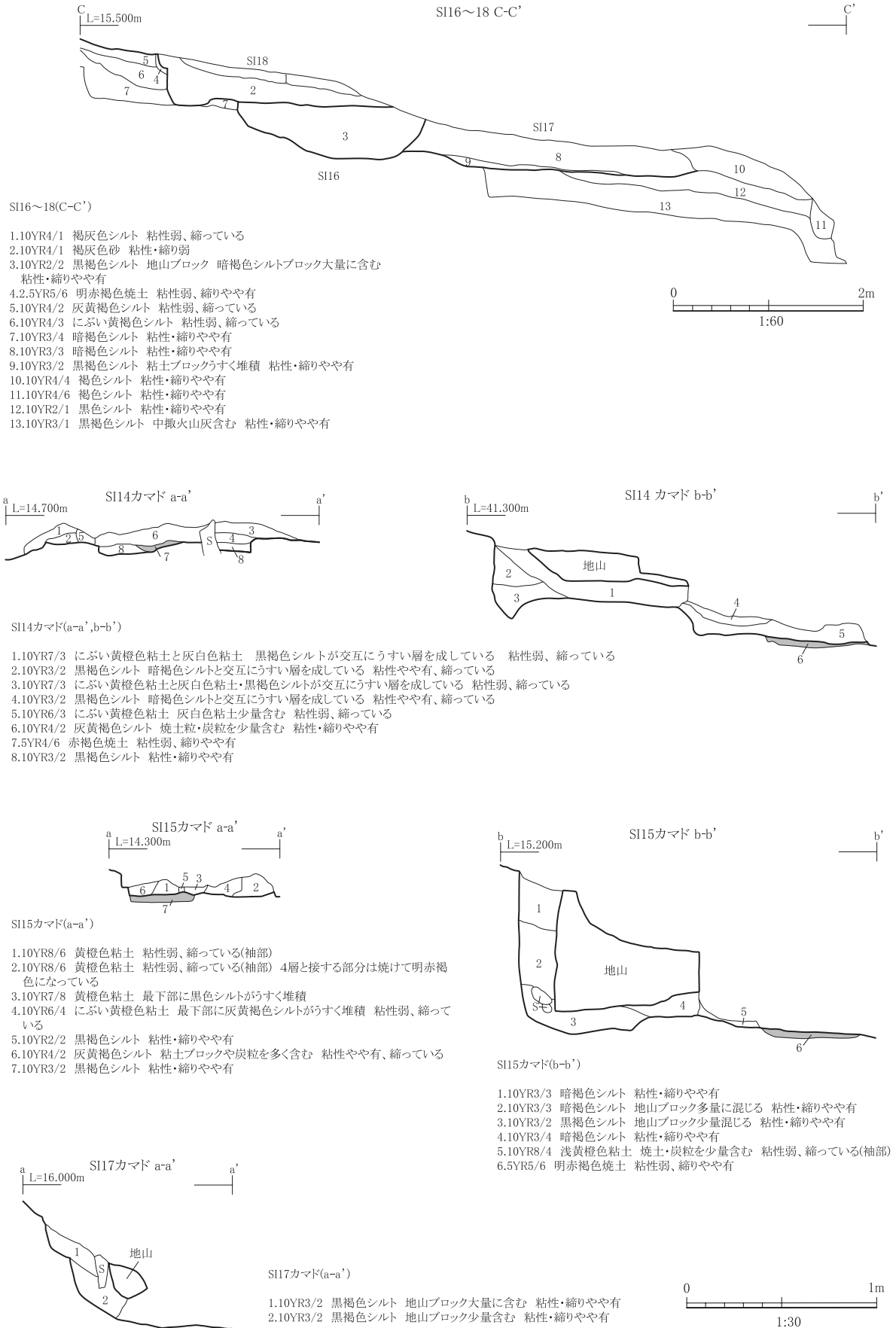


第 20 図 SI12

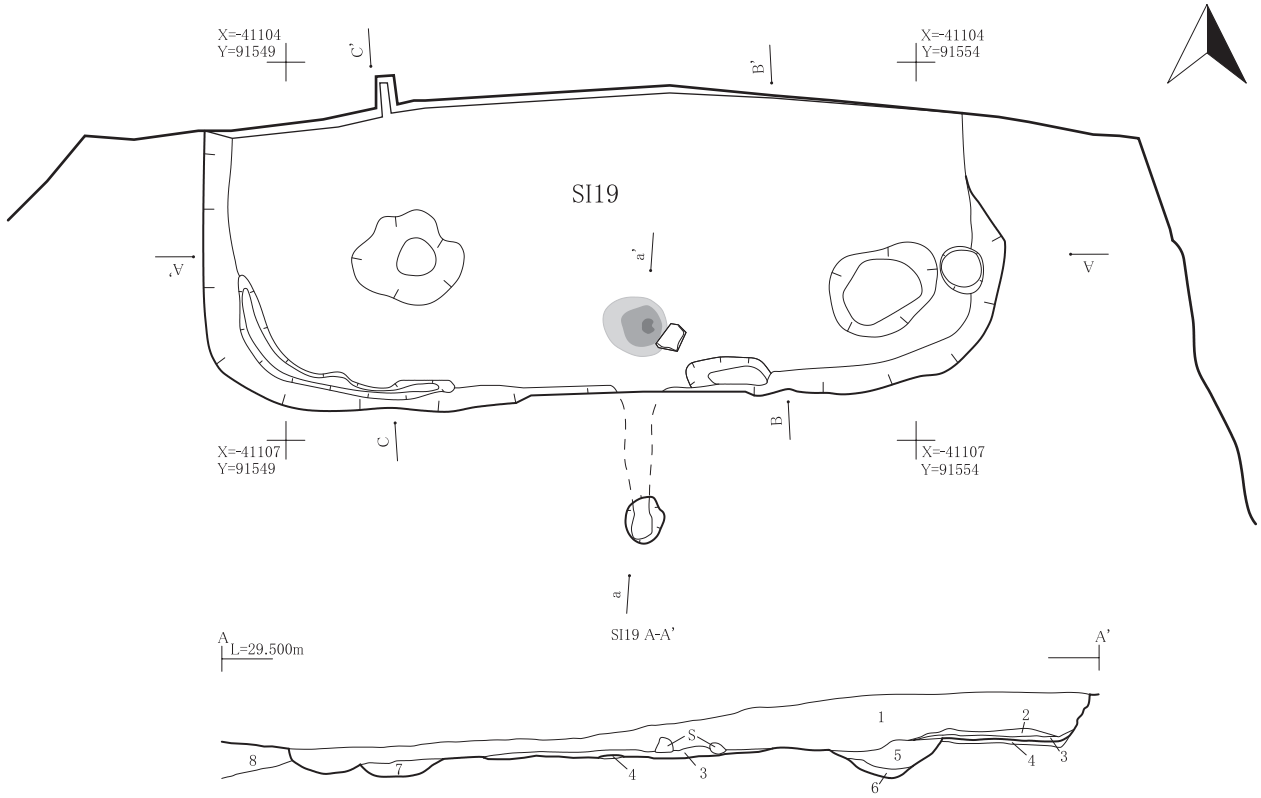


第 21 図 SI14 ~ 18(1)

3 小 結



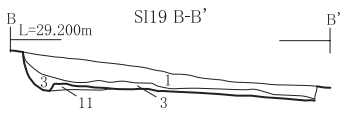
第 22 図 SI14 ~ 18(2)



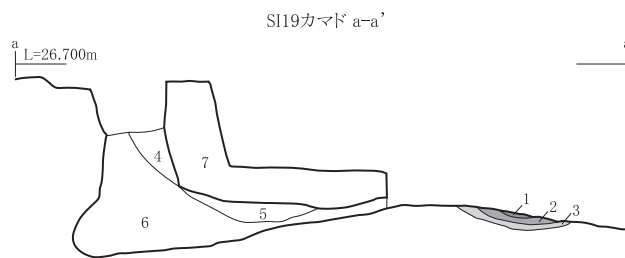
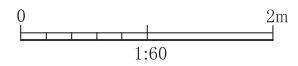
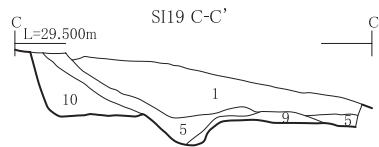
SI19(A-A', B-B', C-C')

- 1.10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 地山ブロックを多量に含む 粘性・縮りやや有
- 2.10YR5/2 灰黄褐色シルト 地山ブロックを少量含む 粘性・縮りやや有
- 3.10YR2/2 黒褐色シルト 粘性・縮りやや有
- 4.10YR4/6 褐色シルト にぶい黄褐色シルトを微量含む 粘性・縮りやや有

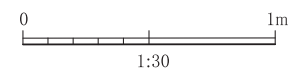
- 5.10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 粘性・縮りやや有
- 6.10YR3/2 黒褐色シルト 暗褐色シルトを少量含む 粘性・縮りやや有
- 7.10YR4/2 灰黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有
- 8.10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有



- 9.10YR2/2 黒褐色シルト 粘性・縮りやや有
- 10.10YR6/3 にぶい黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有
- 11.10YR4/2 灰黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有

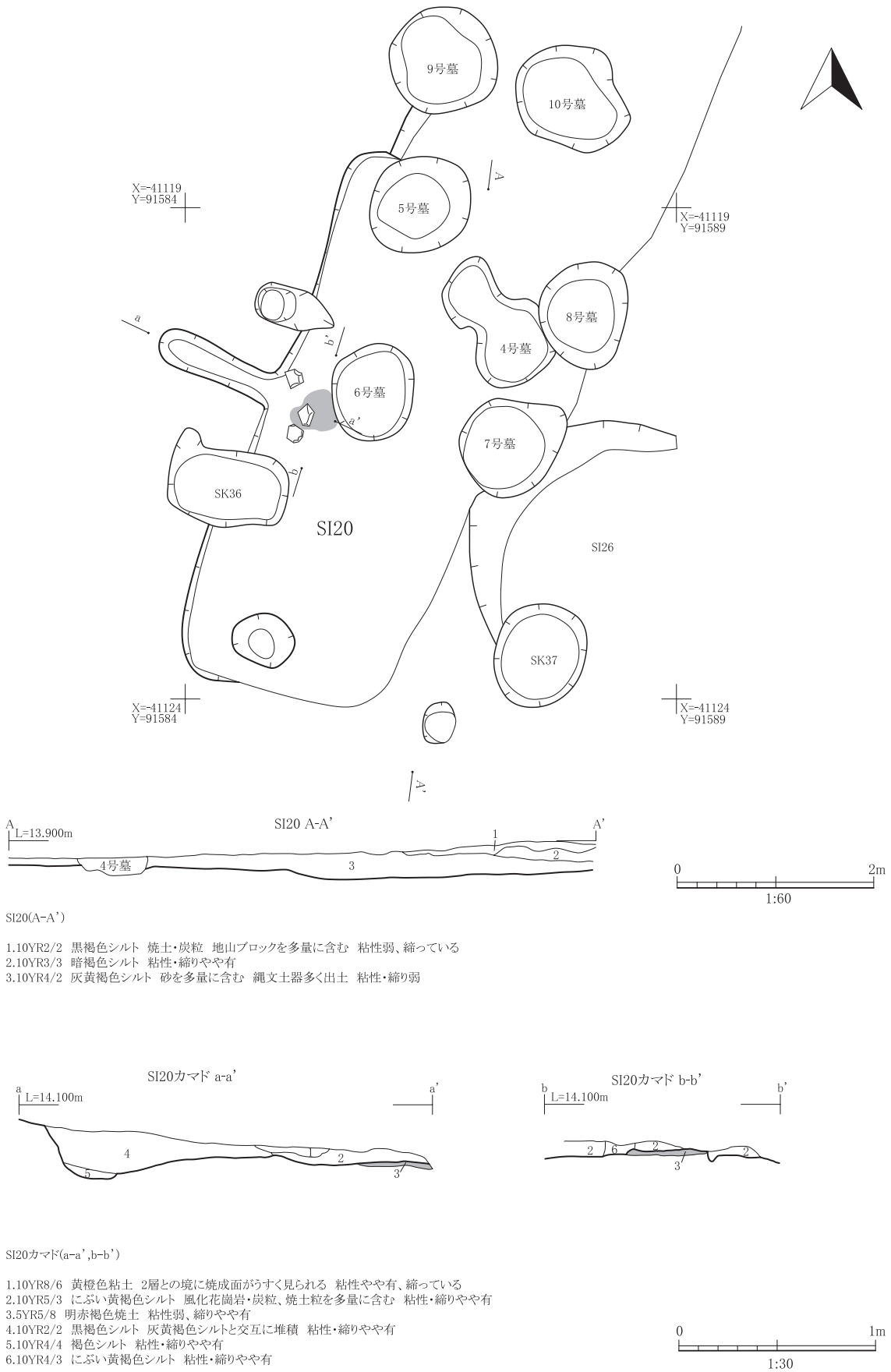


- SI19カマド(a-a')
- 1.5YR5/8 明赤褐色焼土 粘性弱、縮っている
 - 2.10YR4/8 赤褐色焼土 粘性弱、縮っている
 - 3.10YR5/6 明赤褐色焼土 粘性弱、縮っている
 - 4.10YR4/4 褐色シルト 黒褐色シルト少量含む 粘性・縮りやや有
 - 5.10YR3/4 にぶい黄褐色シルト 粘性・縮りやや有
 - 6.10YR2/2 黒褐色シルト 粘性・縮りやや有
 - 7.10YR6/3 にぶい黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有

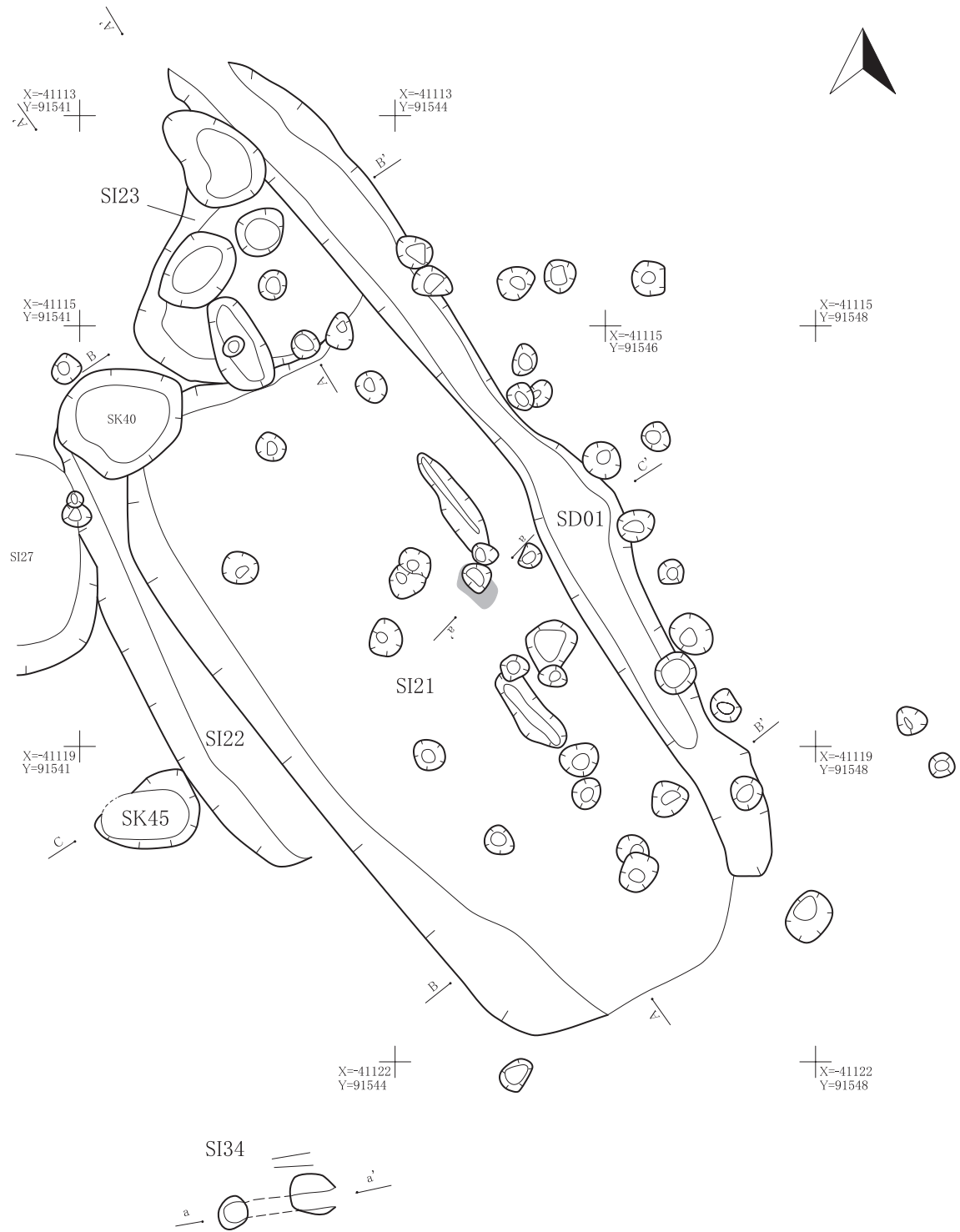


第23図 SI19

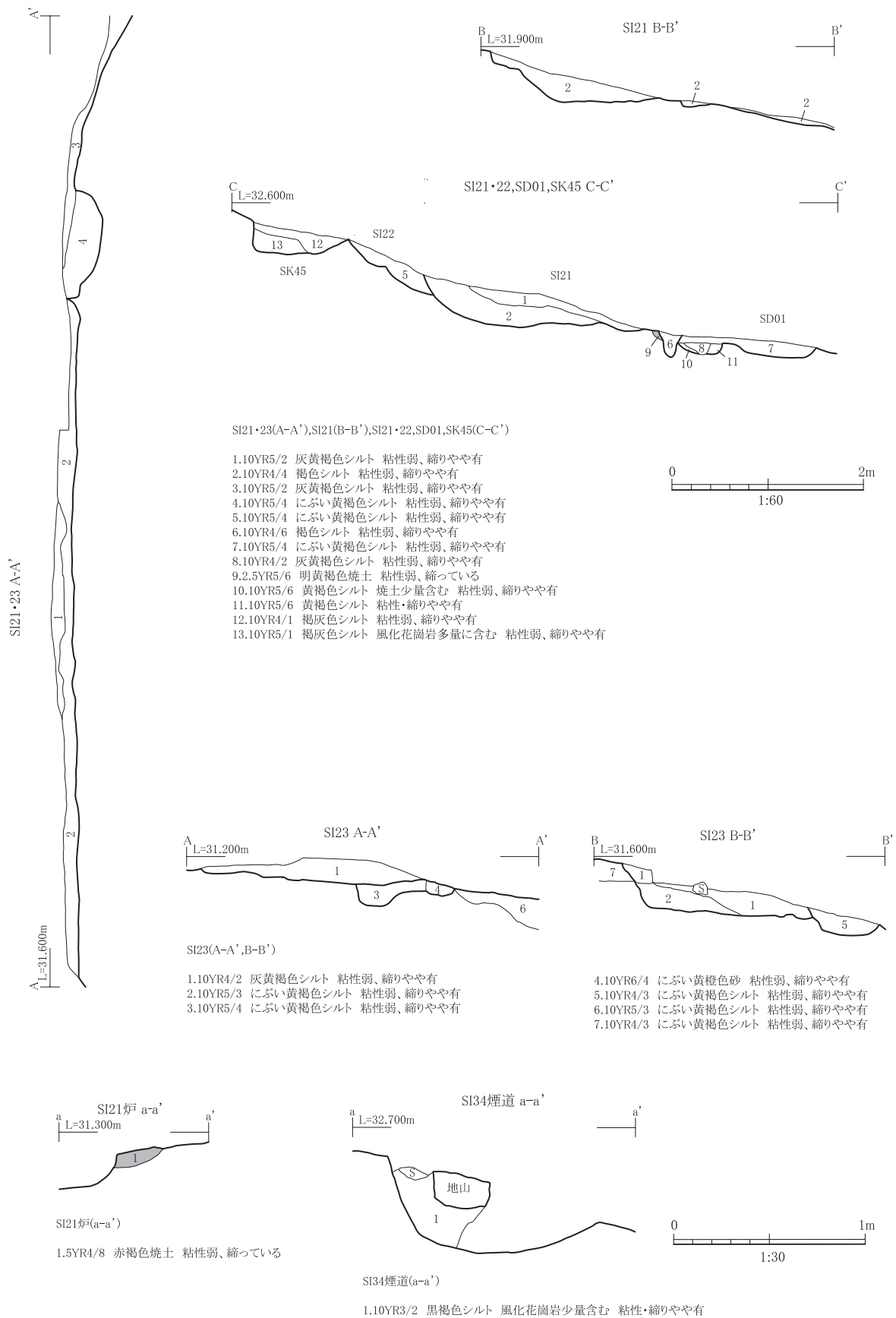
3 小 結



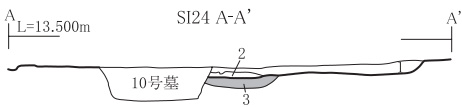
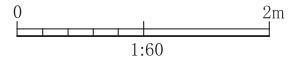
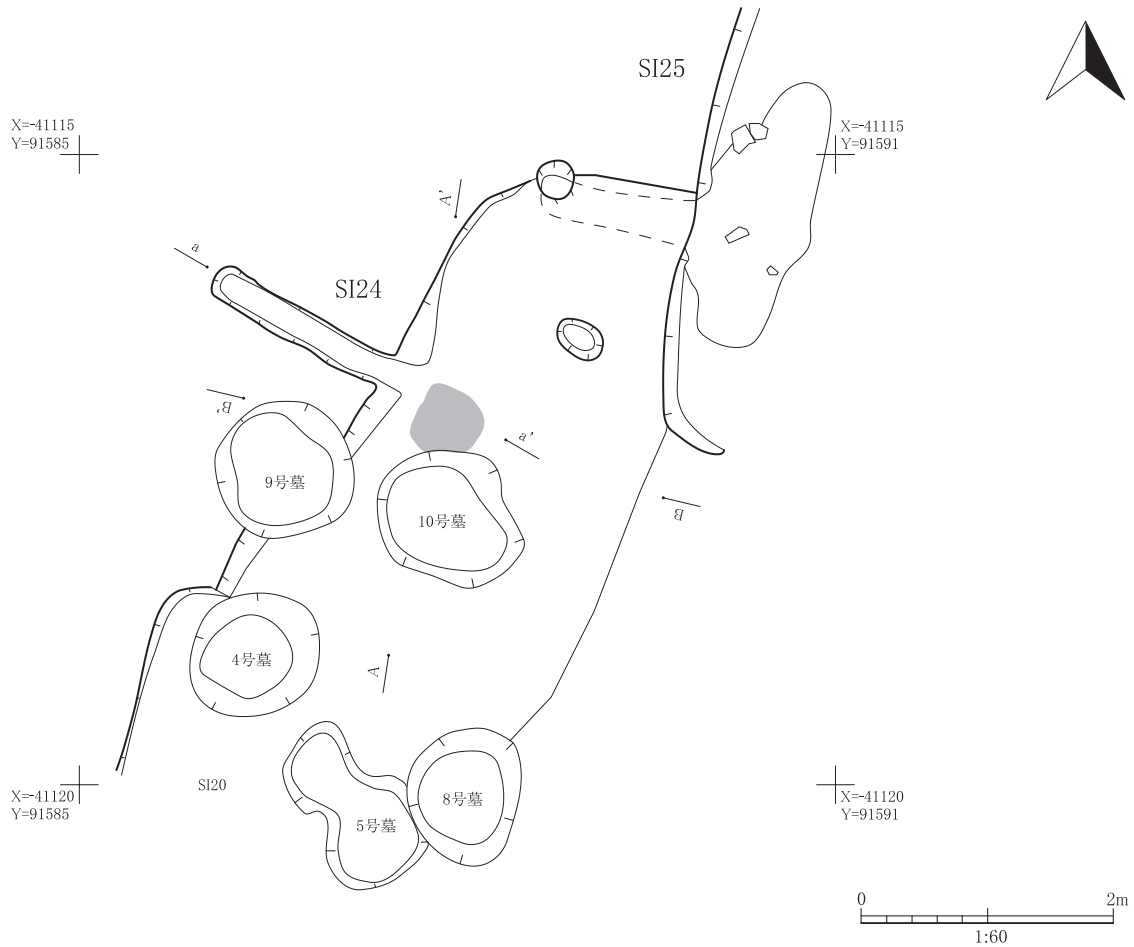
第 24 図 SI20



第25図 SI21～23・34、SK45、SD01(1)

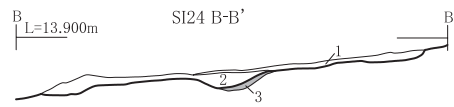


第 26 図 SI21 ~ 23・34、SK45、SD01(2)



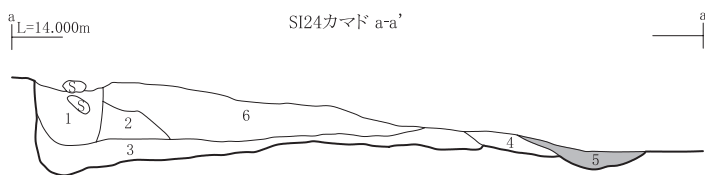
SI24(A-A')

- 10号墓 粘性・縮り弱
- 1.10YR4/2 灰黄褐色シルト 焼土・炭粒を少量含む 粘性やや有、縮っている
- 2.5YR5/6 明黄褐色焼土 粘性弱、縮っている
- 3.10YR4/4 褐色シルト 焼土・炭粒を少量含む 粘性弱、縮りやや有



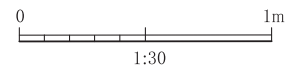
SI24(B-B')

- 1.10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性弱、縮っている
- 2.10YR2/2 黒褐色シルト 焼土粒・焼土ブロック・炭粒を多く含む 粘性弱、縮りやや有
- 3.2.5YR4/8 赤褐色焼土 この場で焼成されたもの 粘性なし、縮っている

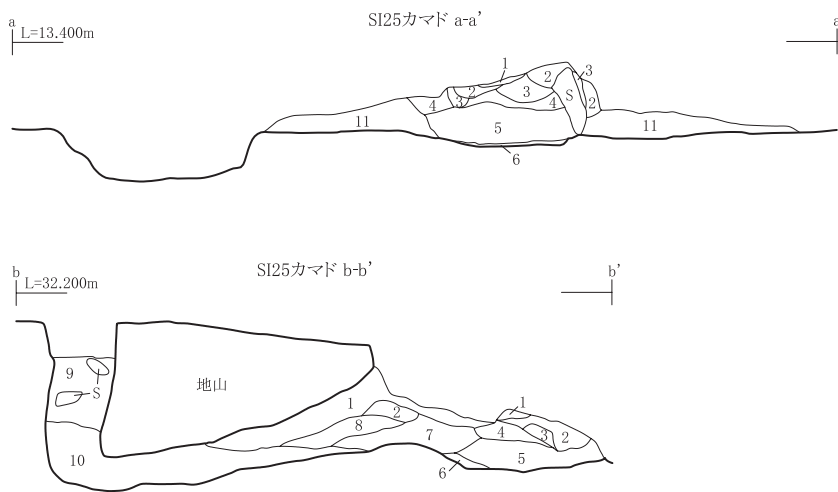
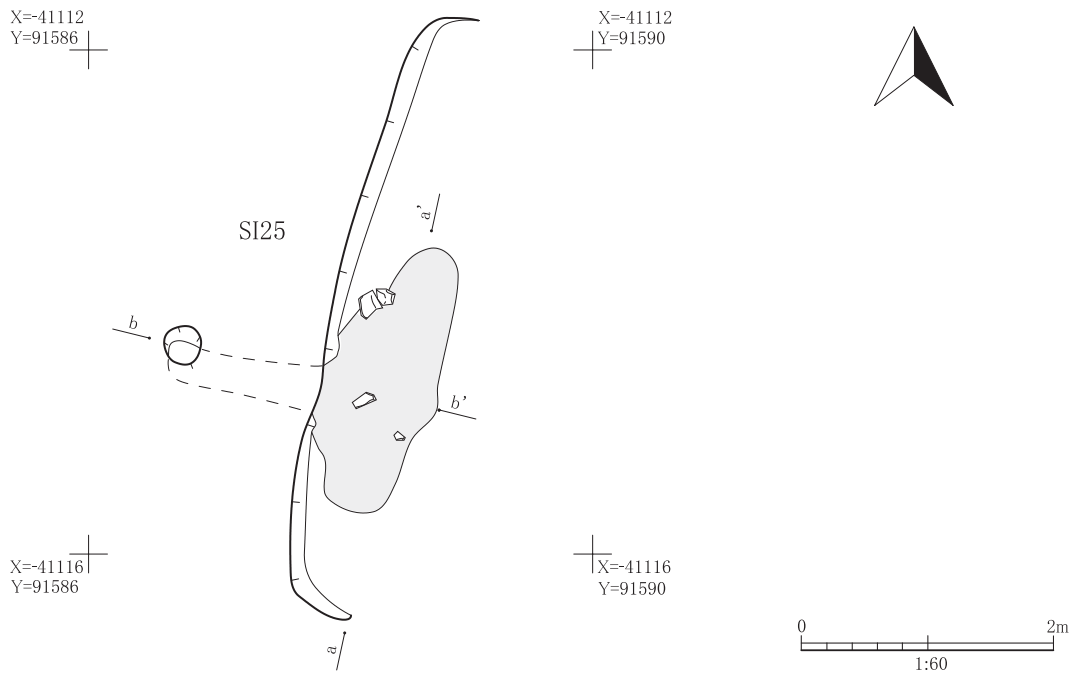


SI24カマド(a-a')

- 1.10YR4/2 灰黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有(礫有)
- 2.10YR4/4 褐色シルト 暗褐色シルトを少量含む 粘性弱、縮りやや有
- 3.10YR2/2 黒褐色シルト 粘性・縮りやや有
- 4.10YR8/3 浅黄橙色粘土 にぶい黄褐色シルト 黒褐色シルトを多く含む 粘性弱、縮り有
- 5.5YR5/8 明赤褐色シルト 粘性弱、縮り有
- 6.10YR4/6 褐色シルト 粘性弱、縮り有

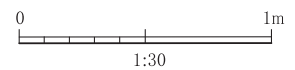


第27図 SI24

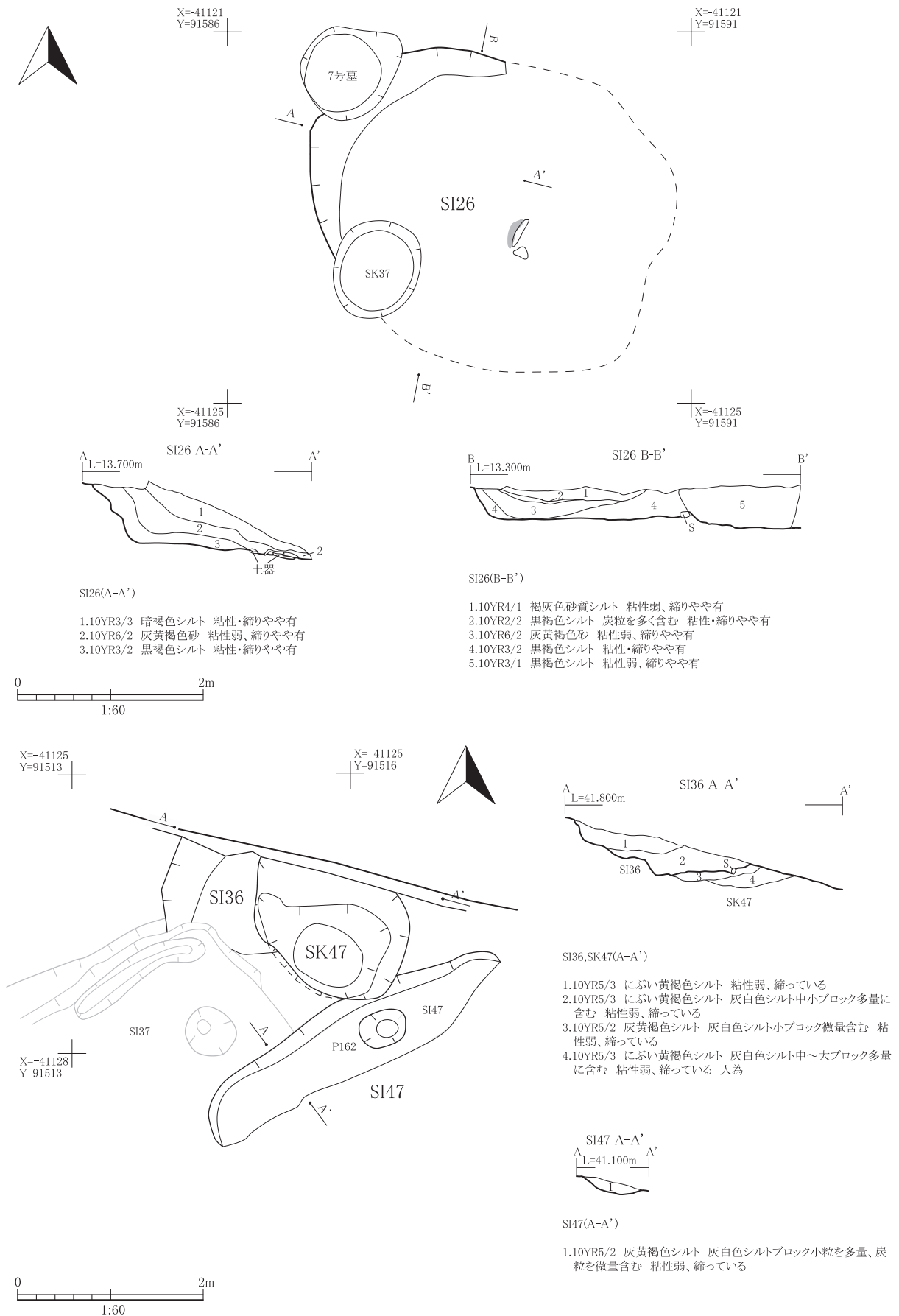


SI25カマド(a-a', b-b')

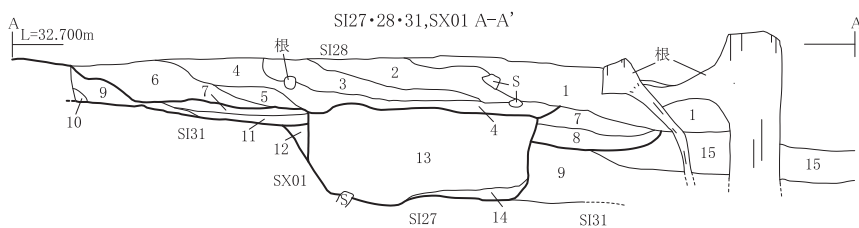
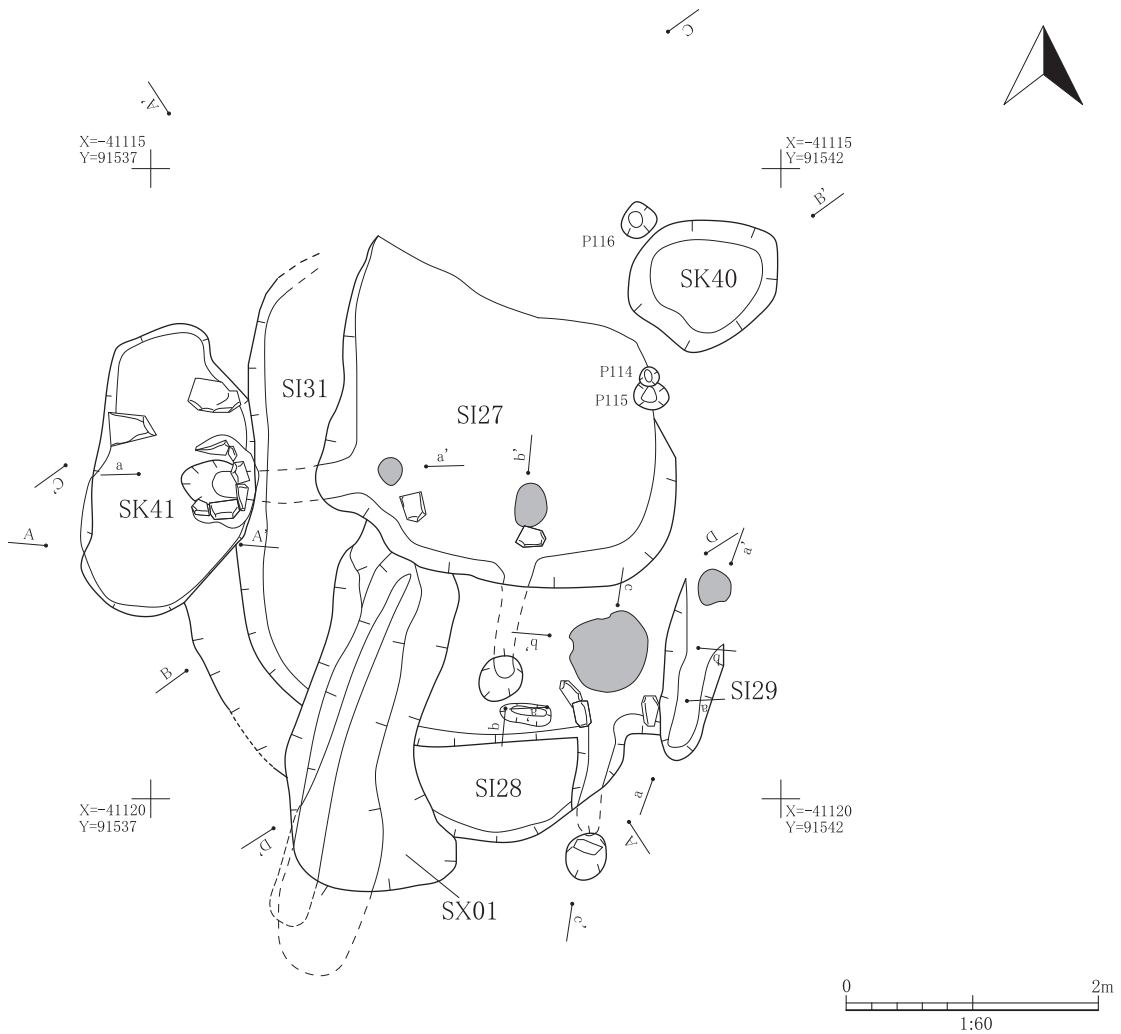
- 1.10YR4/2 灰黄褐色シルト 地山ブロック微量含む 粘性弱、縮りやや有
- 2.10YR8/3 浅黄褐色粘土 粘性弱、縮っている
- 3.2.5YR5/8 明赤褐色焼土 粘性弱、縮っている(2層が焼けたもの)
- 4.10YR4/2 灰黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有
- 5.10YR6/2 灰黄褐色シルト 灰・炭粒ごく微量含む 粘性・縮り弱
- 6.2.5YR6/8 橙色焼土 粘性弱、縮っている
- 7.2.5YR5/8 明赤褐色焼土 粘土ブロック 灰黄褐色シルトブロック多量に含む 粘性弱、縮りやや有
- 8.10YR4/2 灰黄褐色シルト 粘土ブロック大粒を1層との境に有する 粘性・縮りやや有
- 9.10YR5/2 灰黄褐色シルト 大小の礫含む 粘性弱、縮りやや有
- 10.10YR2/2 黒褐色シルト 粘性・縮りやや有
- 11.10YR4/2 灰黄褐色シルトと粘土・炭・焼土がラミナを成している(貼床) 粘性弱、縮っている



第 28 図 SI25

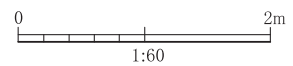


第 29 図 SI26・36・47、SK47

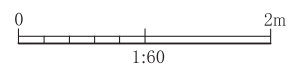
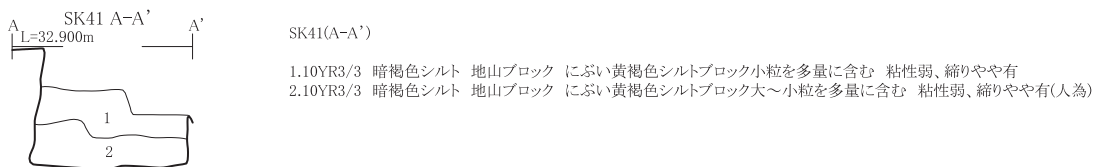
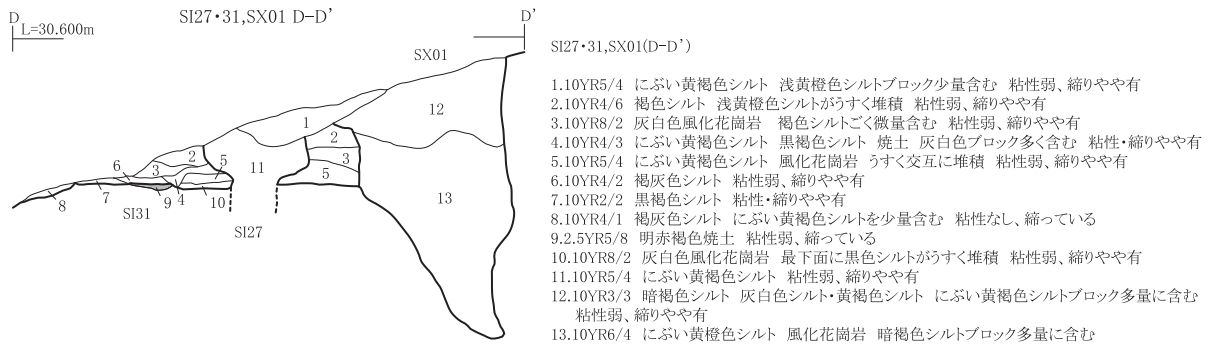
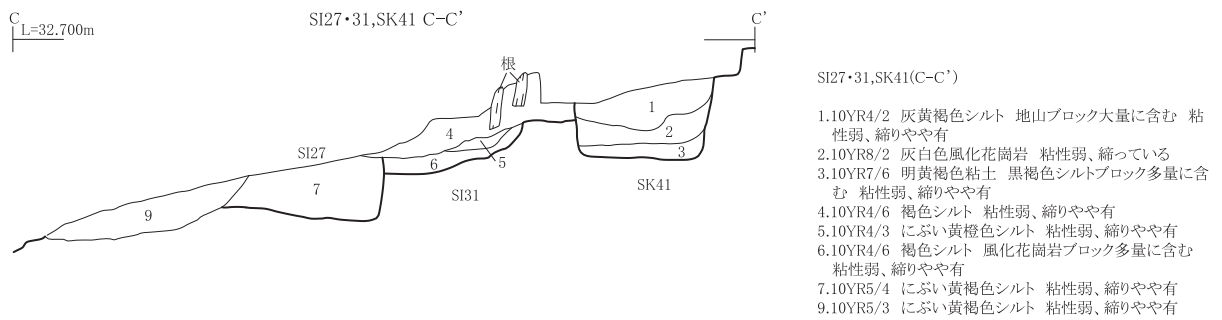
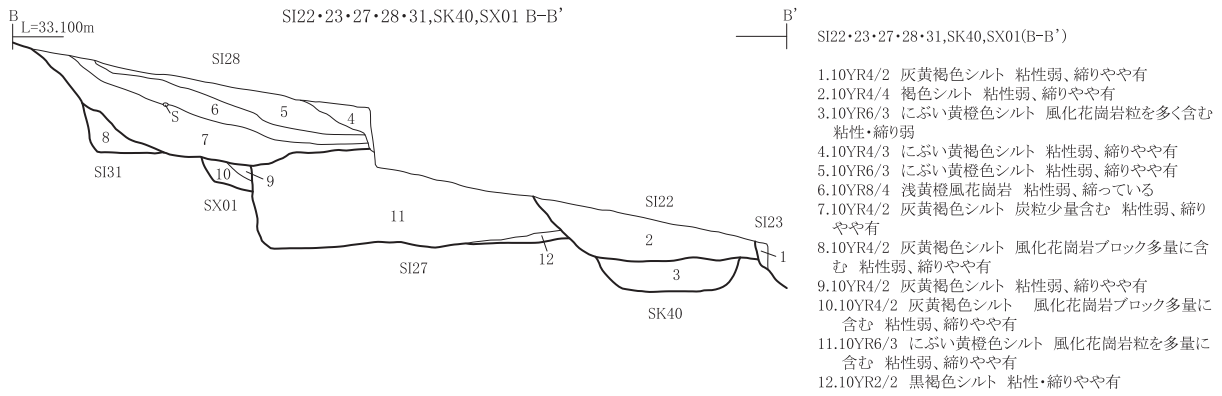


SI27・28・31, SX01(A-A')

- | | |
|---|---|
| <p>1.10YR4/2 灰黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有</p> <p>2.10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有</p> <p>3.10YR8/4 浅黄褐色風化花崗岩 粘性弱、縮っている</p> <p>4.10YR4/2 灰黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有</p> <p>5.10YR5/2 灰黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有</p> <p>6.10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 風化花崗岩少量含む 粘性弱、縮りやや有</p> <p>7.10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 粘性弱、縮っている 黒褐色シルトがうすく堆積</p> <p>8.10YR4/6 褐色シルト 炭粒少量含む 粘性弱、縮っている</p> | <p>9.10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 風化花崗岩多量に含む 粘性弱、縮りやや有</p> <p>10.10YR3/2 黒褐色シルト 粘性・縮りやや有</p> <p>11.10YR8/3 浅黄褐色風化花崗岩 粘性弱、縮っている 黒褐色シルトがうすく何枚か層を成して見られる</p> <p>12.(記載なし)</p> <p>13.10YR6/3 にぶい黄褐色シルト 風化花崗岩多く含む 粘性弱、縮りやや有</p> <p>14.10YR6/2 灰黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有</p> <p>15.10YR5/8 黄褐色シルト 粘性・縮りやや有</p> |
|---|---|

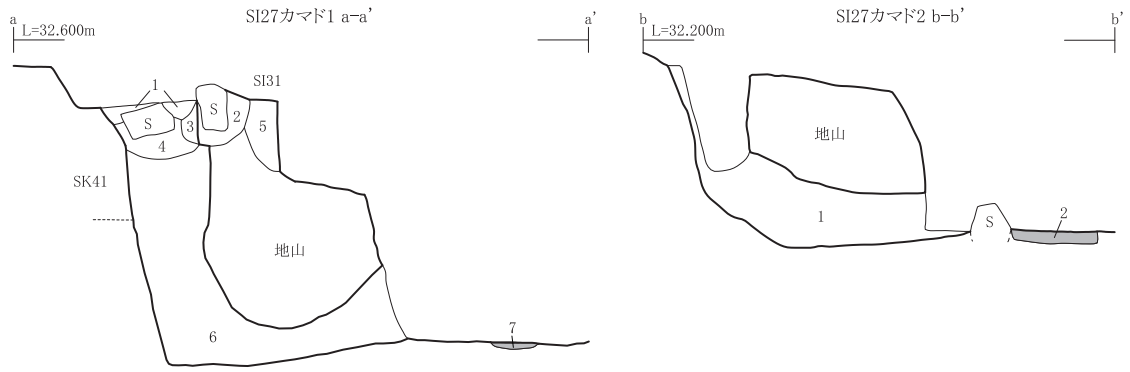


第 30 図 SI27 ~ 29・31、SK40・41、SX01(1)



第 31 図 SI27 ~ 29・31、SK40・41、SX01 (2)

3 小 結

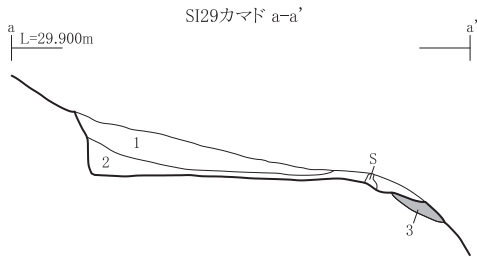


SI27カマド1(a-a')

- 1.10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有
- 2.10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有
- 3.10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 風化花崗岩ブロック少量含む 粘性弱、縮りやや有
- 4.10YR4/6 褐色シルト 粘性・縮りやや有
- 5.10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 風化花崗岩少量含む 粘性弱、縮りやや有
- 6.10YR4/2 灰黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有
- 7.10R6/8 赤褐色焼土 粘性弱、縮っている

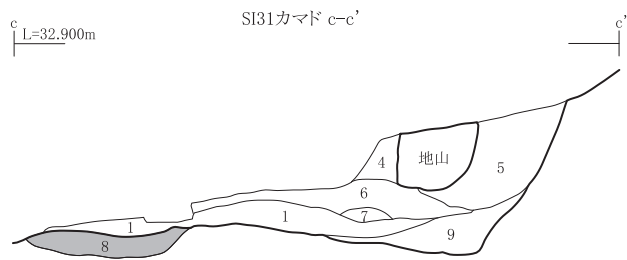
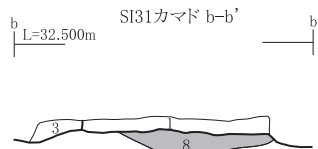
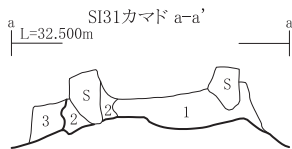
SI27カマド2(b-b')

- 1.10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 粘性・縮りやや有
- 2.10R6/6 赤橙色焼土 粘性弱、縮っている



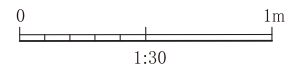
SI29カマド(a-a')

- 1.10YR5/2 灰黄褐色シルト 灰白色シルトブロック少量含む 粘性弱、縮りやや有
- 2.10YR3/2 黒褐色シルト 粘性・縮りやや有
- 3.焼土

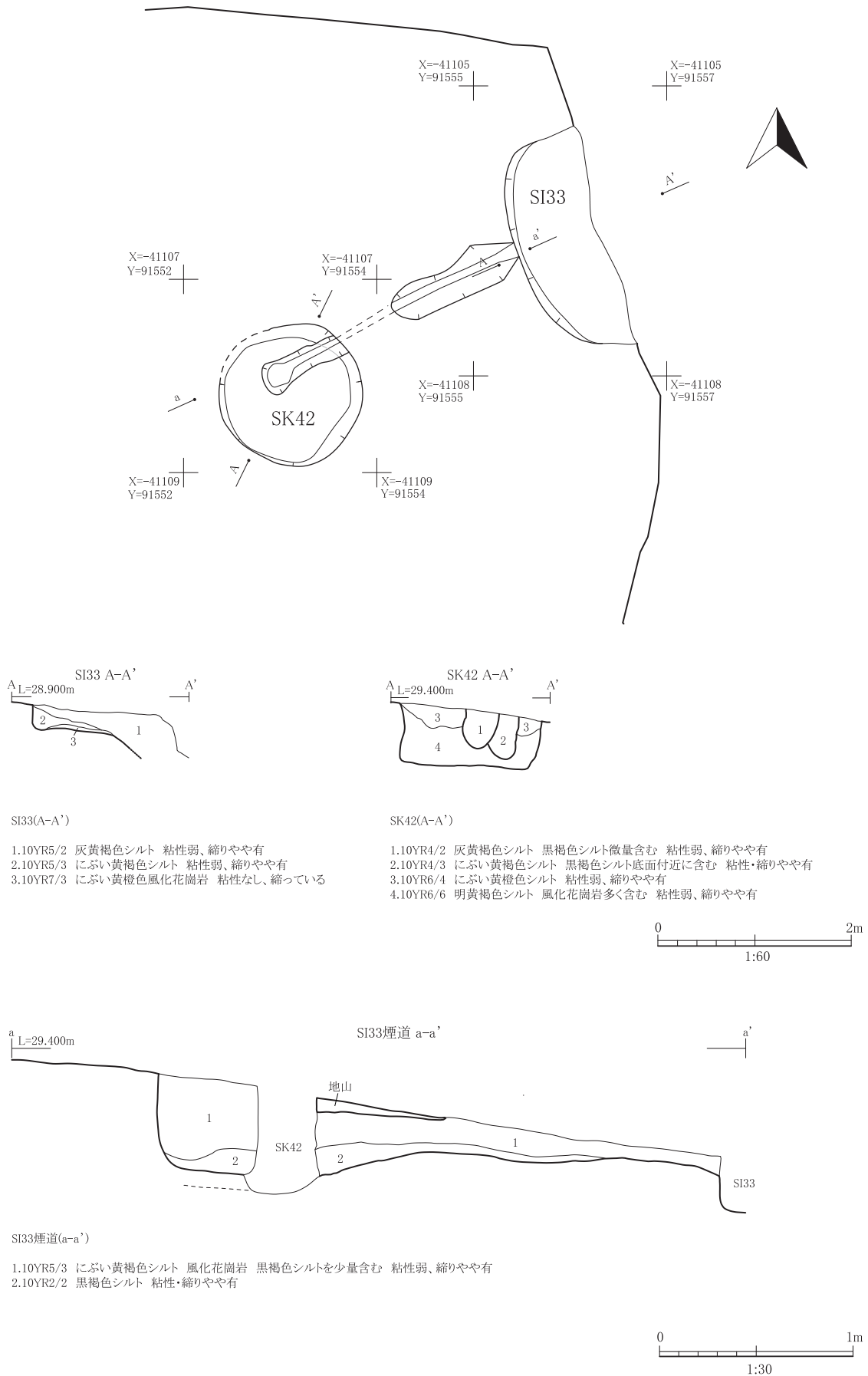


SI31カマド(a-a', b-b', c-c')

- 1.10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 焼土ブロック・地山ブロックを少量含む 粘性弱、縮りやや有
- 2.10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 地山ブロック多量に含む 粘性弱、縮っている
- 3.10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有
- 4.10YR7/3 にぶい黄褐色シルト 粘性・縮り弱
- 5.10YR4/6 褐色シルト 地山ブロック少量含む 粘性・縮りやや有
- 6.10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 粘性・縮り弱
- 7.10YR4/2 灰黄褐色シルト 粘性・縮り弱
- 8.2.5YR5/6 明赤褐色焼土 粘性なし、縮っている
- 9.10YR2/2 黒褐色シルト 粘性・縮りやや有



第 32 図 SI27 ~ 29・31、SK40・41、SX01(3)



SI33(A-A')

- 1.10YR5/2 灰黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有
- 2.10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有
- 3.10YR7/3 にぶい黄橙色風化花崗岩 粘性なし、縮っている

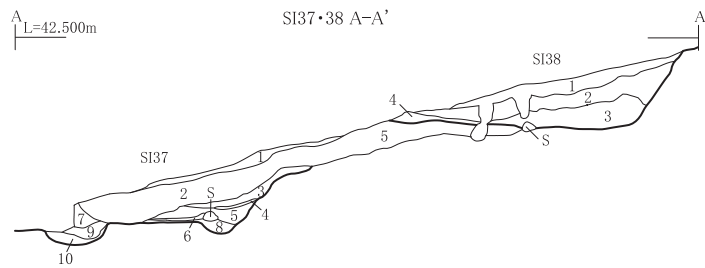
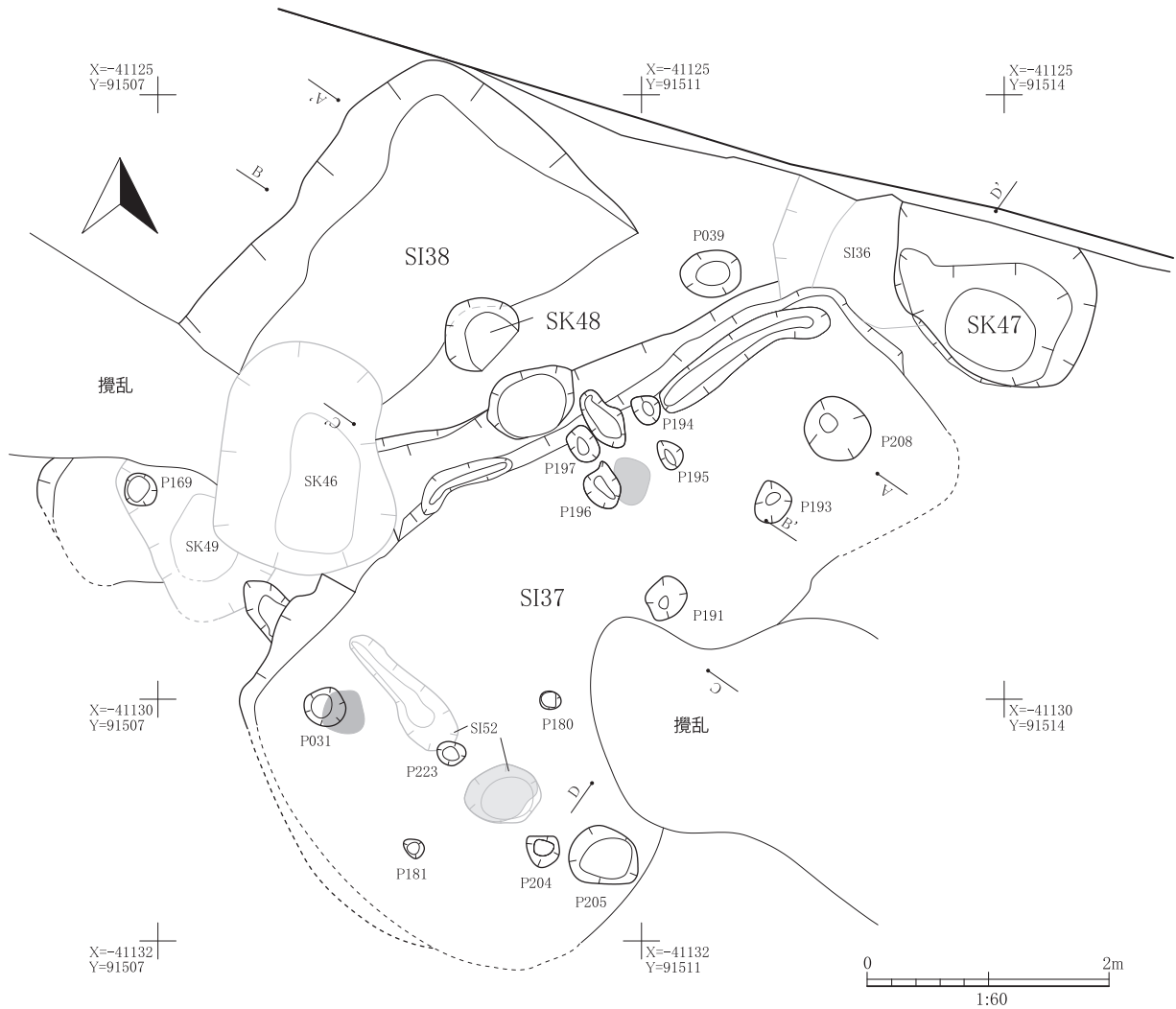
SK42(A-A')

- 1.10YR4/2 灰黄褐色シルト 黒褐色シルト微量含む 粘性弱、縮りやや有
- 2.10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 黒褐色シルト底面付近に含む 粘性、縮りやや有
- 3.10YR6/4 にぶい黄橙色シルト 粘性弱、縮りやや有
- 4.10YR6/6 明黄褐色シルト 風化花崗岩多く含む 粘性弱、縮りやや有

SI33煙道(a-a')

- 1.10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 風化花崗岩 黒褐色シルトを少量含む 粘性弱、縮りやや有
- 2.10YR2/2 黒褐色シルト 粘性、縮りやや有

第 33 図 SI33、SK42



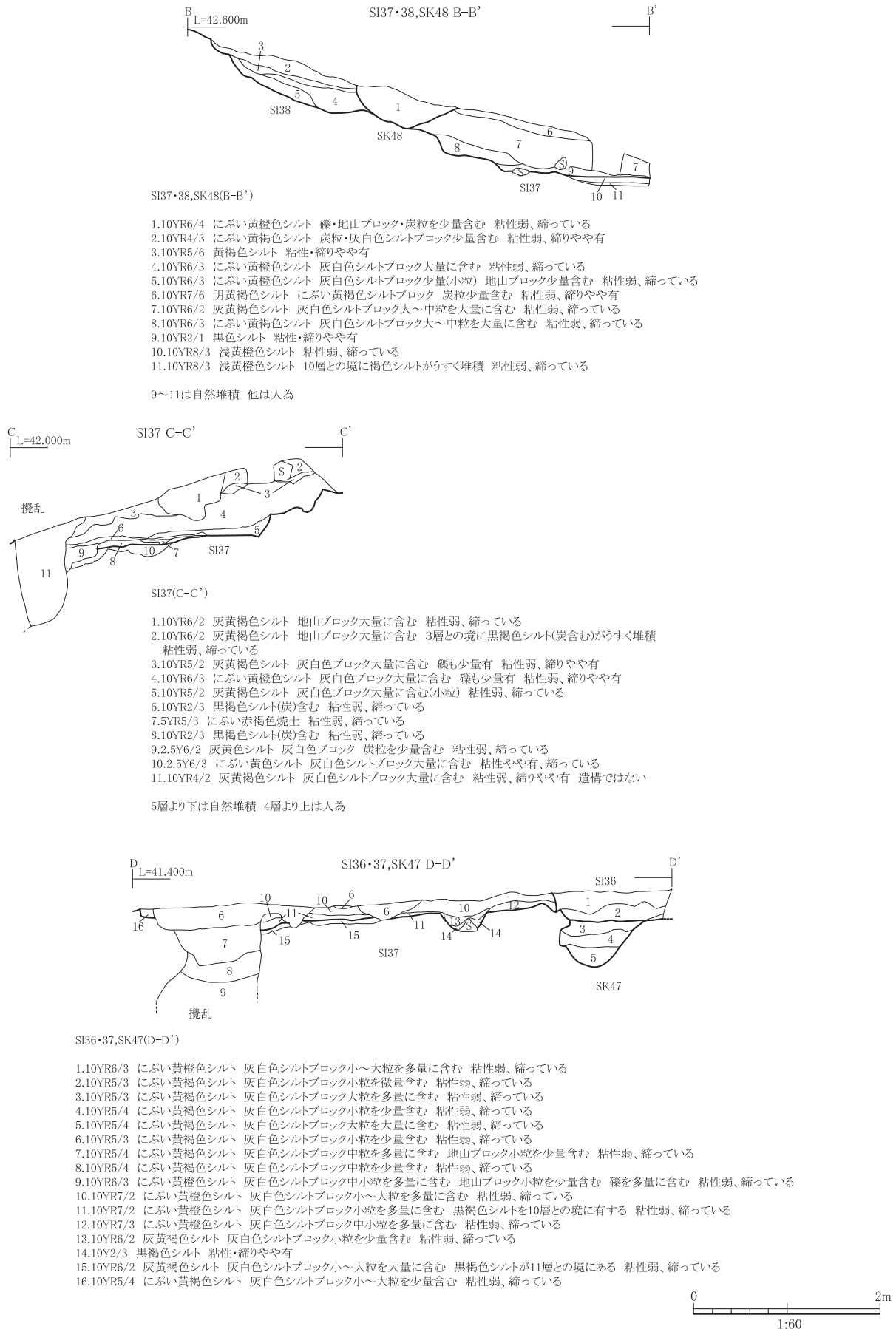
SI38(A-A')

1. 10YR5/2 灰黄褐色シルト 黒褐色シルト微量含む 粘性弱、縮っている
2. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 地山ブロック 炭粒をごく微量含む 粘性・縮りやや有
3. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 地山ブロック 炭粒を多量に含む 粘性・縮りやや有
4. 10YR8/1 灰白色シルト 5層との境に黒褐色シルト 粘性弱、縮っている
5. 10YR7/3 にぶい黄褐色シルト 灰白色シルトブロック多量に含む 粘性弱、縮っている

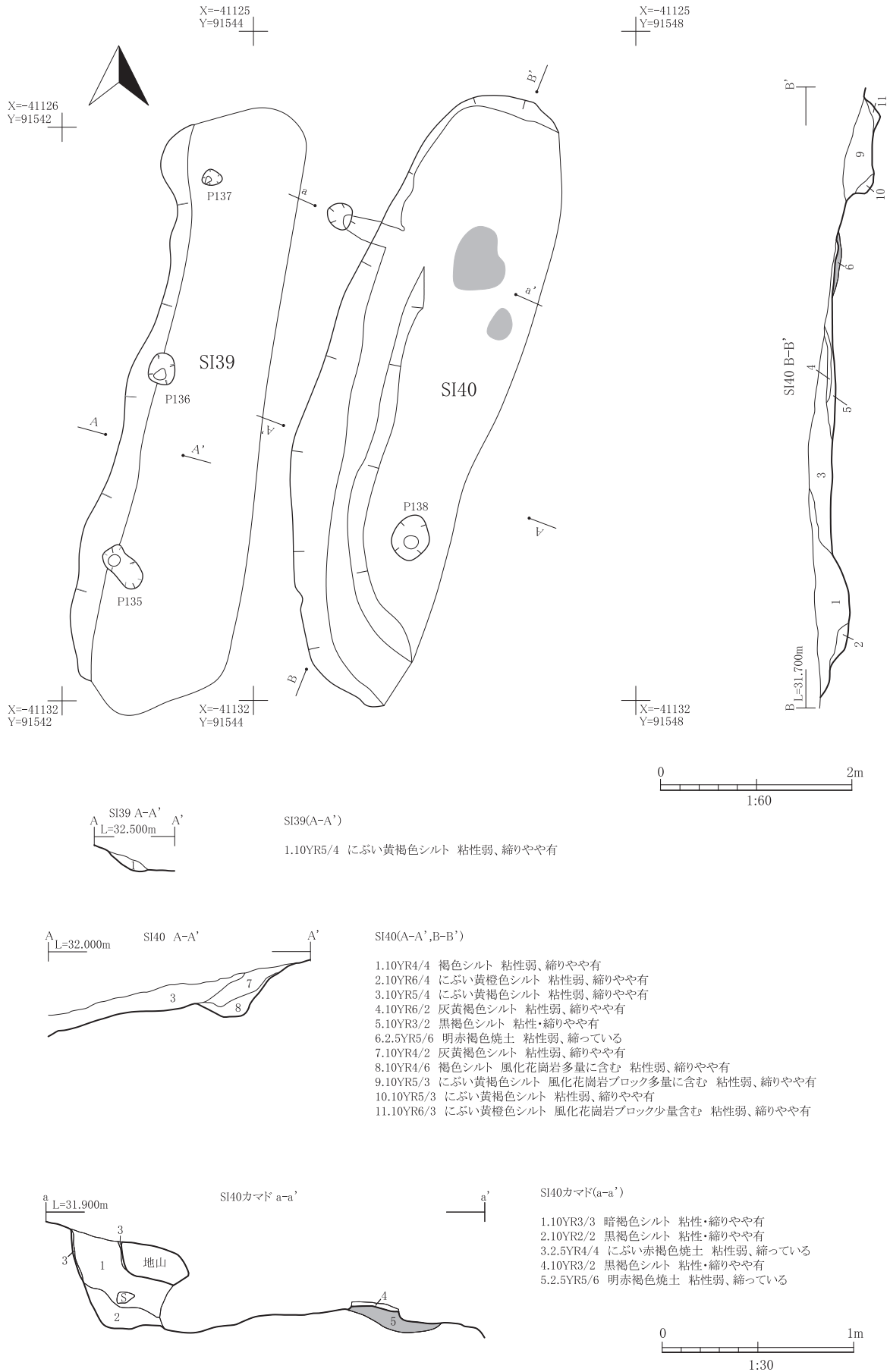
SI37(A-A')

1. 2.5Y6/2 灰黄色シルト 灰白色ブロック少量含む 粘性弱、縮りやや有
2. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト 灰白色ブロック大量に含む 粘性弱、縮りやや有
3. 10YR8/2 灰白色シルト 粘性弱、縮りやや有
4. 10YR4/1 褐灰色シルト 炭粒多量に含む 粘性弱、縮りやや有
5. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 灰白色ブロック多量 炭少量含む 粘性弱、縮りやや有
6. 10YR4/1 褐灰色シルト 炭粒多量に含む 粘性弱、縮りやや有
7. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト 灰白色ブロック微量含む 粘性弱、縮りやや有
8. 10YR7/4 にぶい黄褐色シルト 灰白色ブロック多量に含む 粘性弱、縮りやや有
9. 10YR6/2 灰黄褐色シルト 灰白色ブロック微量 炭微量含む 粘性弱、縮りやや有
10. 10YR4/1 褐灰色シルト 炭粒多量に含む 粘性弱、縮りやや有

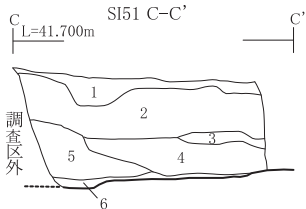
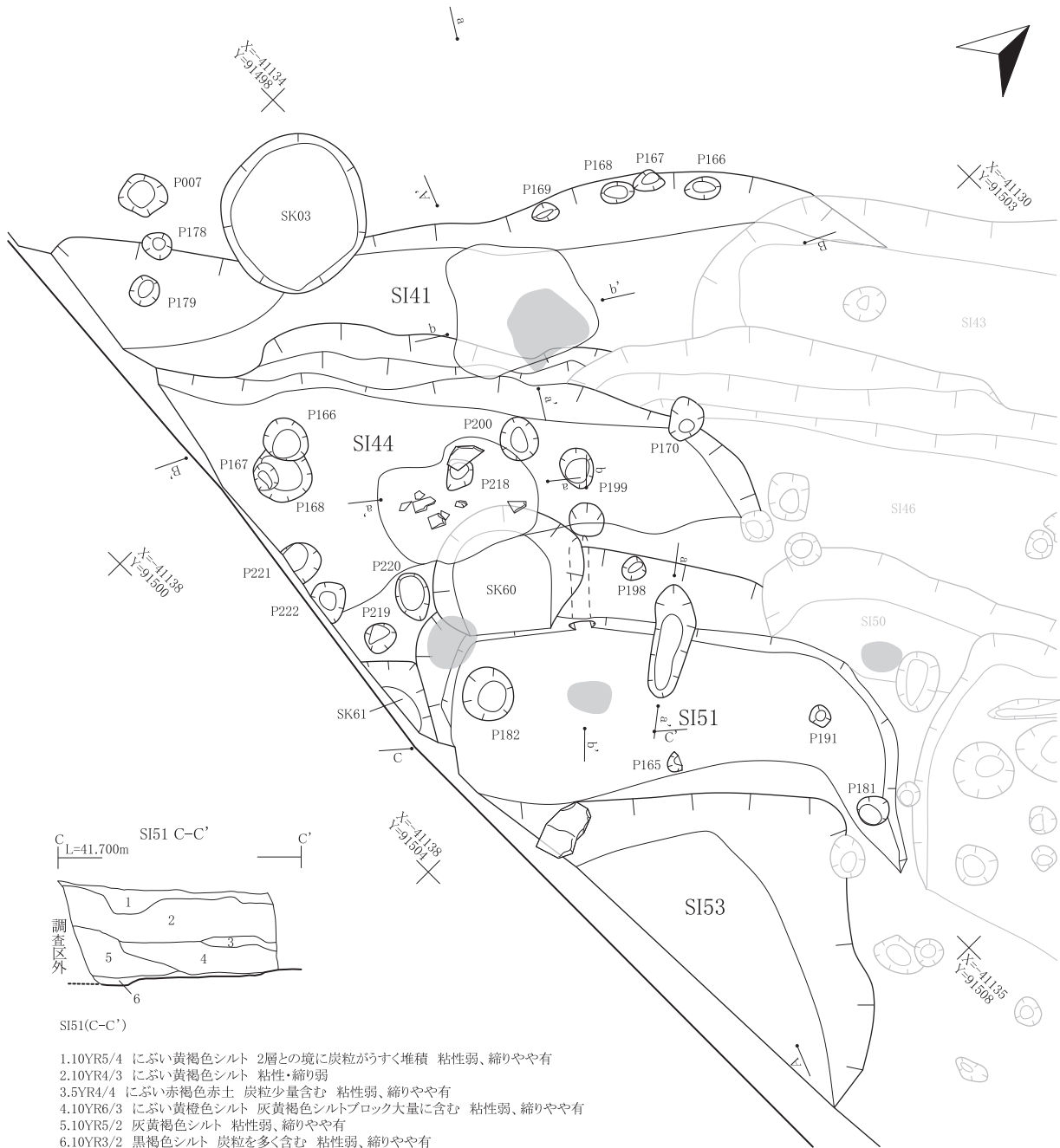
第 34 図 SI37・38、SK47・48(1)



第 35 図 SI37・38、SK47・48(2)

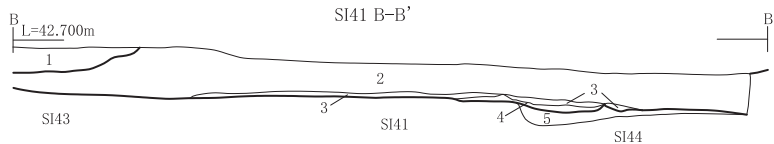


第 36 図 SI39・40



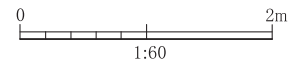
SI51(C-C')

1. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 2層との境に炭粒がうすく堆積 粘性弱、縮りやや有
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 粘性・縮り弱
3. 5YR4/4 にぶい赤褐色赤土 炭粒少量含む 粘性弱、縮りやや有
4. 10YR6/3 にぶい黄褐色シルト 灰黄褐色シルトブロック大量に含む 粘性弱、縮りやや有
5. 10YR5/2 灰黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有
6. 10YR3/2 黒褐色シルト 炭粒を多く含む 粘性弱、縮りやや有

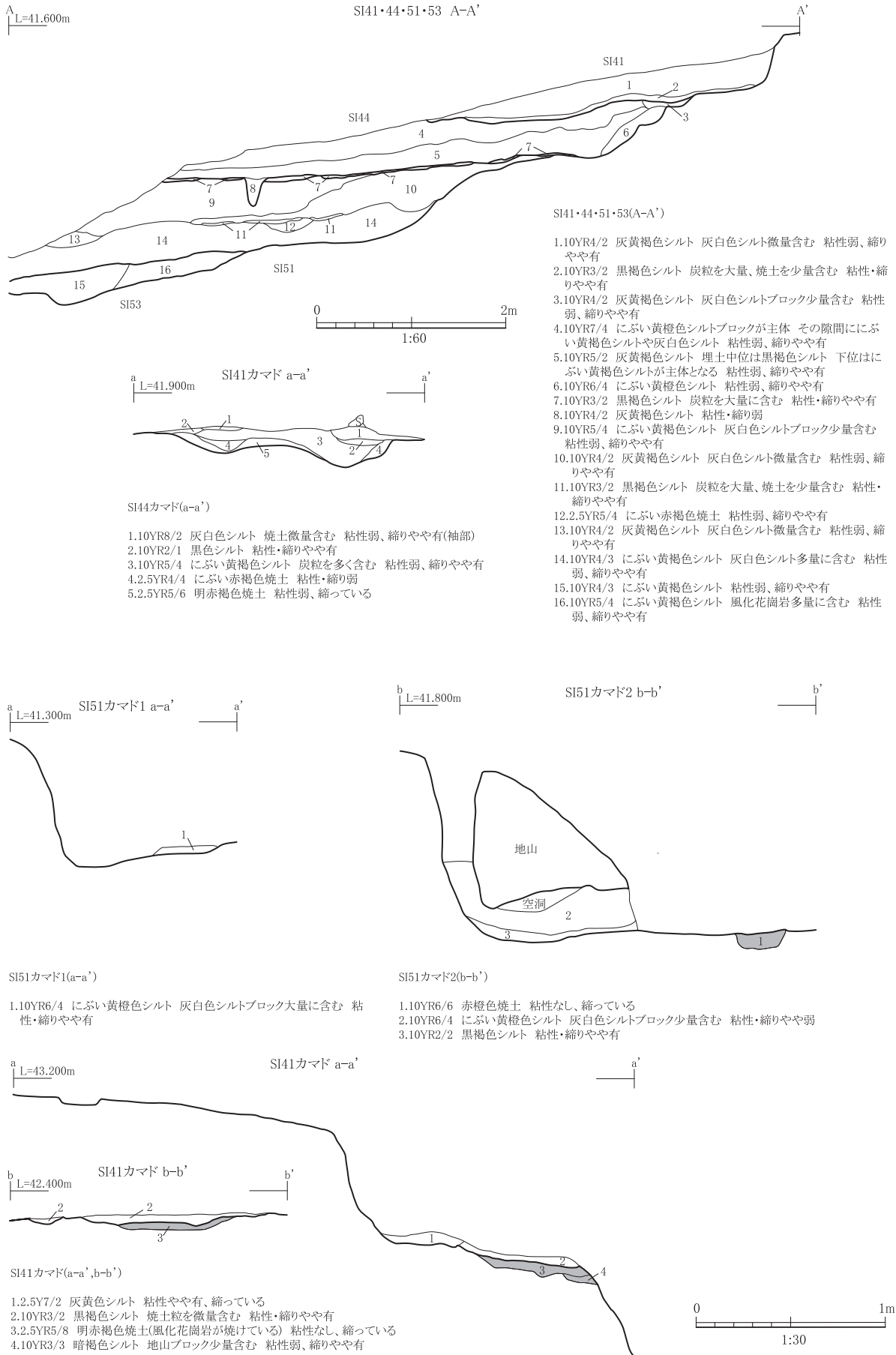


SI41(B-B')

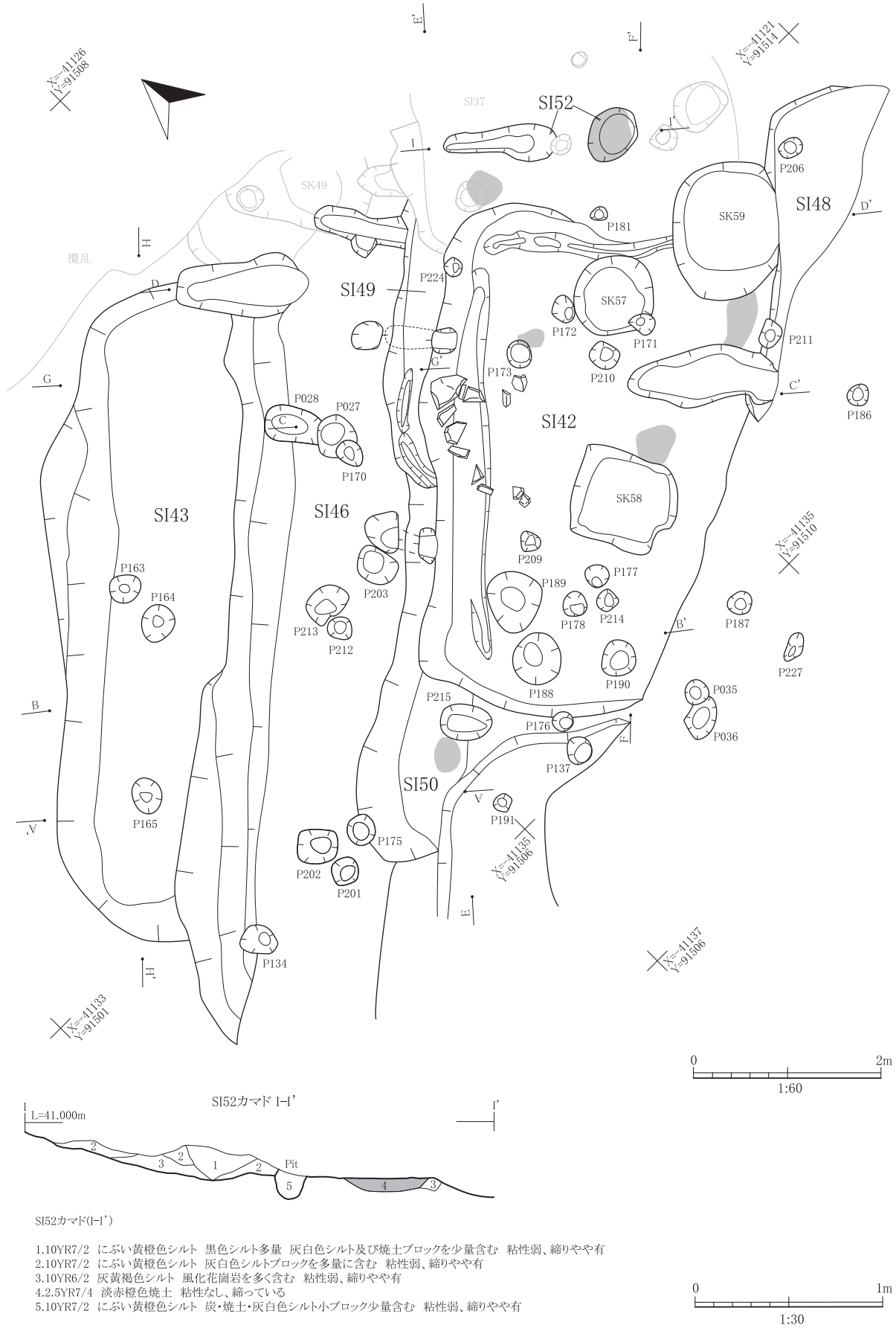
1. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 地山ブロックを多量に含む 粘性弱、縮りやや有
2. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有
3. 10YR2/2 黒褐色炭粒 粘性弱、縮りやや有
4. 10YR8/3 浅黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有
5. 10YR4/1 褐色シルト 粘性弱、縮りやや有



第 37 図 SI41・44・51・53(1)

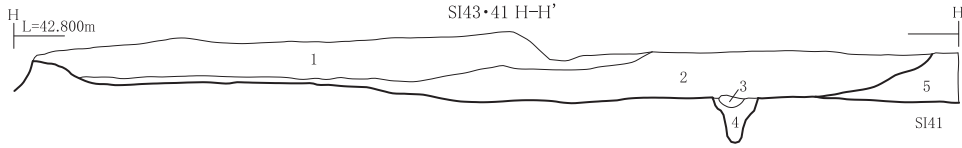


第 38 図 SI41・44・51・53(2)



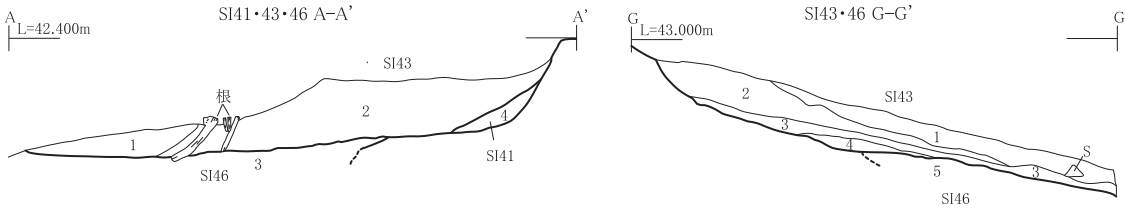
第 39 図 SI37・41～43・46・48～52(1)

3 小 結



SI41・43(H-H')

- 1.10YR6/4 にぶい黄褐色シルト 灰白色・黄褐色シルトブロック(小)を多量に含む 粘性弱、縮りやや有
- 2.10YR4/2 灰黄褐色シルト 灰白色・黄褐色シルトブロック(小～大)を多量に含む 粘性弱、縮りやや有
- 3.10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 粘性・縮り弱
- 4.10YR5/2 灰黄褐色シルト 黒褐色シルト・灰白色シルト少量含む 粘性・縮り弱
- 5.10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有

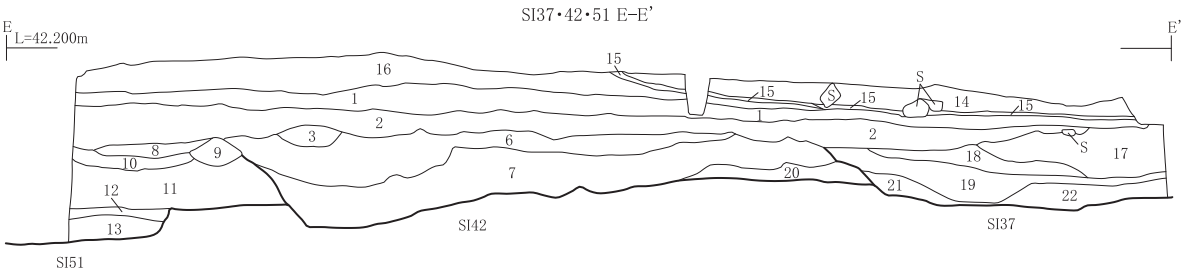


SI41・43・46(A-A')

- 1.10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 黄褐色シルトブロック中小粒を多く含む 粘性弱、縮りやや有
- 2.10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 黄褐色シルトブロック中小粒を多く含む 褐灰色シルトブロックも多く含む 粘性弱、縮りやや有
- 3.10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 灰白色シルト小ブロック多量に含む 粘性弱、縮りやや有
- 4.10YR3/3 暗褐色シルト 粘性弱、縮りやや有

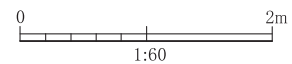
SI43・46(G-G')

- 1.10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 地山ブロック中大粒を多量に含む 2層との境にうすい炭の層がある 粘性弱、縮りやや有
- 2.10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 地山ブロック小粒を少量含む 粘性弱、縮りやや有
- 3.10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有
- 4.10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 地山ブロック中大粒を少量含む 粘性弱、縮りやや有
- 5.10YR4/2 灰黄褐色シルト 地山ブロック小中粒を少量含む 粘性弱、縮りやや有

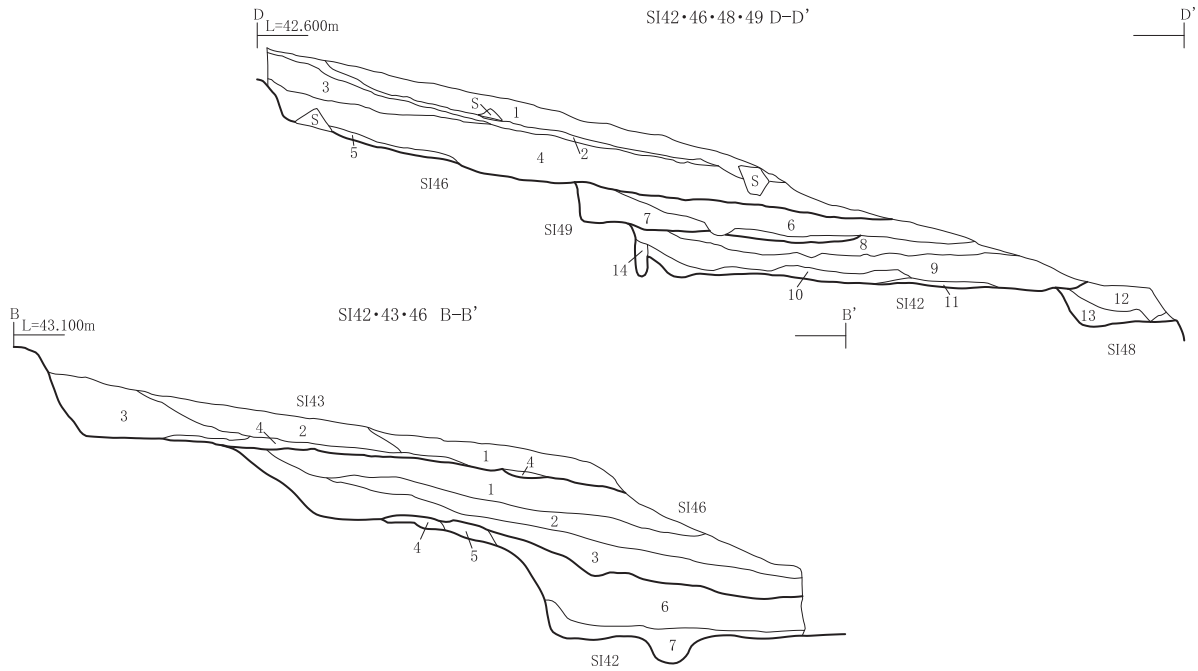


SI37・42・51(E-E')

- 1.10YR6/4 にぶい黄褐色シルト 灰白色ブロック少量含む 粘性弱、縮りやや有
- 2.10YR6/3 にぶい黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有
- 3.10YR7/4 にぶい黄褐色シルト 灰白色シルトブロック少量含む 粘性弱、縮りやや有
- 6.10YR4/4 褐色シルト 地山ブロックや炭粒を微量含む 粘性弱、縮りやや有
- 7.10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 炭・焼土多量に含む 粘性弱、縮りやや有(焼失している) SI42
- 8.10YR6/3 にぶい黄褐色シルト 灰白色シルト及び地山ブロックを少量含む 粘性弱、縮りやや有
- 9.10YR5/2 灰黄褐色シルト下位に多くの風化花崗岩が見られる 粘性弱、縮りやや有
- 10.10YR6/3 にぶい黄褐色シルト 灰白色シルトブロック 炭・焼土を多く含む 粘性弱、縮りやや有 焼土は9層側に多い
- 11.10YR6/3 にぶい黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有
- 12.10YR6/8 明黄褐色シルト 風化花崗岩 灰白色シルトを少量含む 粘性弱、縮りやや有
- 13.10YR6/4 にぶい黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有
- 14.10YR7/8 黄褐色シルト 灰白色シルトブロック多量に含む 粘性弱、縮っている(中世盛土 整地層か)
- 15.10YR4/1 褐灰色シルト 粘性弱、縮っている
- 16.10YR6/4 にぶい黄褐色シルト 灰白色シルトブロック多量に含む 粘性弱、縮りやや有
- 17.10YR7/2 にぶい黄褐色シルト 灰白色シルトブロック多量に含む 礫も多量に含む 粘性弱、縮りやや有
- 18.10YR6/4 にぶい黄褐色シルト 地山ブロック多量、炭粒微量含む 粘性弱、縮りやや有
- 19.10YR4/4 褐色シルト 灰白色シルト小ブロック微量含む 最も低い部分に炭と焼土堆積する 粘性弱、縮りやや有
- 20.10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 風化花崗岩 灰白色シルトブロックを多く含む 粘性弱、縮りやや有
- 21.10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 炭少量含む 粘性弱、縮りやや有
- 22.10YR6/2 灰黄褐色シルト 炭少量含む 灰白色シルトブロックを大量に含む 粘性弱、縮りやや有



第 40 図 SI37・41～43・46・48～52(2)

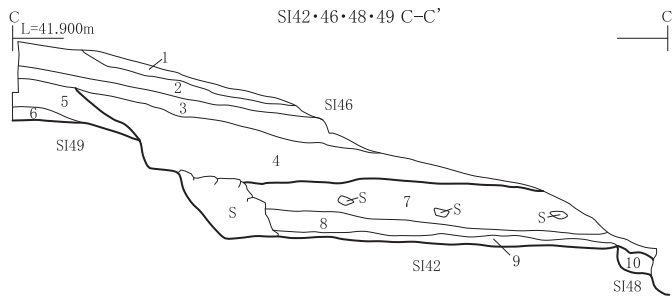


SI42・46・48・49(D-D')

- 1.10YR6/4 にぶい黄褐色シルト 灰白色ブロック中大粒を少量 礫微量含む 粘性弱、縮りやや有
- 2.10YR2/2 黒褐色シルト 部分的に焼土も含む 粘性・縮りやや有
- 3.10YR6/6 明黄褐色シルト 風化花崗岩少量含む 粘性・縮りやや有
- 4.10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 風化花崗岩少量含む 粘性・縮りやや有
- 5.10YR2/2 黒褐色シルト 部分的に焼土も含む 粘性・縮りやや有
- 6.10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 炭粒や地山ブロックを微量含む 粘性弱、縮りやや有
- 7.10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 灰白色シルトブロック多量、炭粒を少量含む 粘性弱、縮りやや有
- 8.10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 灰白色シルトブロック多量、炭粒は9層との境にうすく堆積 粘性弱、縮りやや有
- 9.10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 灰白色シルトブロック多量、炭粒は10・11層との境にうすく堆積 粘性弱、縮りやや有
- 10.10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有
- 11.10YR4/4 褐色シルト 粘性弱、縮りやや有
- 12.10YR4/4 褐色シルト 地山ブロック微量 礫含む 粘性弱、縮りやや有
- 13.10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有
- 14.10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 炭少量含む 粘性弱、縮りやや有

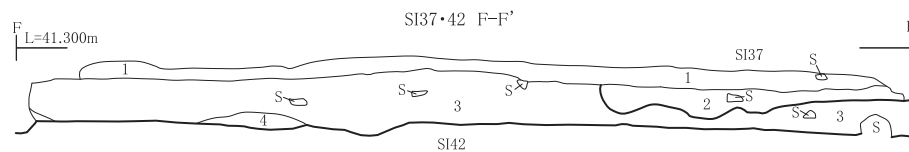
SI42・43・46(B-B')

- 1.10YR6/4 にぶい黄褐色シルト 灰白色ブロック少量含む 粘性弱、縮りやや有
- 2.10YR6/3 にぶい黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有
- 3.10YR7/4 にぶい黄褐色シルト 灰白色シルトブロック少量含む 粘性弱、縮りやや有
- 4.10YR5/2 灰黄褐色シルト 灰白色シルトブロック少量含む 粘性弱、縮りやや有
- 5.10YR6/4 にぶい黄褐色シルト 焼土粒少量含む 粘性弱、縮りやや有
- 6.10YR4/4 褐色シルト 地山ブロックや炭粒を微量含む 粘性弱、縮りやや有
- 7.10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 炭・焼土多量を含む 粘性弱、縮りやや有(焼失している)SI42



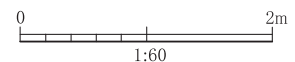
SI42・46・48・49(C-C')

- 1.10YR7/4 にぶい黄褐色シルト 2層との境には黒褐色シルトがうすく堆積 粘性弱、縮りやや有
- 2.10YR7/2 にぶい黄褐色シルト 灰白色シルトブロック多量を含む 粘性弱、縮りやや有
- 3.10YR7/2 にぶい黄褐色シルト 風化花崗岩多量を含む 粘性弱、縮りやや有
- 4.10YR4/2 灰黄褐色シルト 地山ブロック(小)、炭粒も微量含む 粘性弱、縮りやや有
- 5.10YR4/4 褐色シルト 粘性弱、縮りやや有 炭微量含む
- 6.10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 床面付近に灰白色シルトブロック(大)少量含む 粘性弱、縮りやや有
- 7.10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 礫・炭少量 灰白色ブロック多量を含む 粘性弱、縮りやや有
- 8.10YR4/2 灰黄褐色シルト 地山ブロック(小)、炭粒も微量含む 粘性弱、縮りやや有
- 9.10YR4/1 褐灰色シルト 炭粒多量を含む 粘性・縮りやや有
- 10.10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有

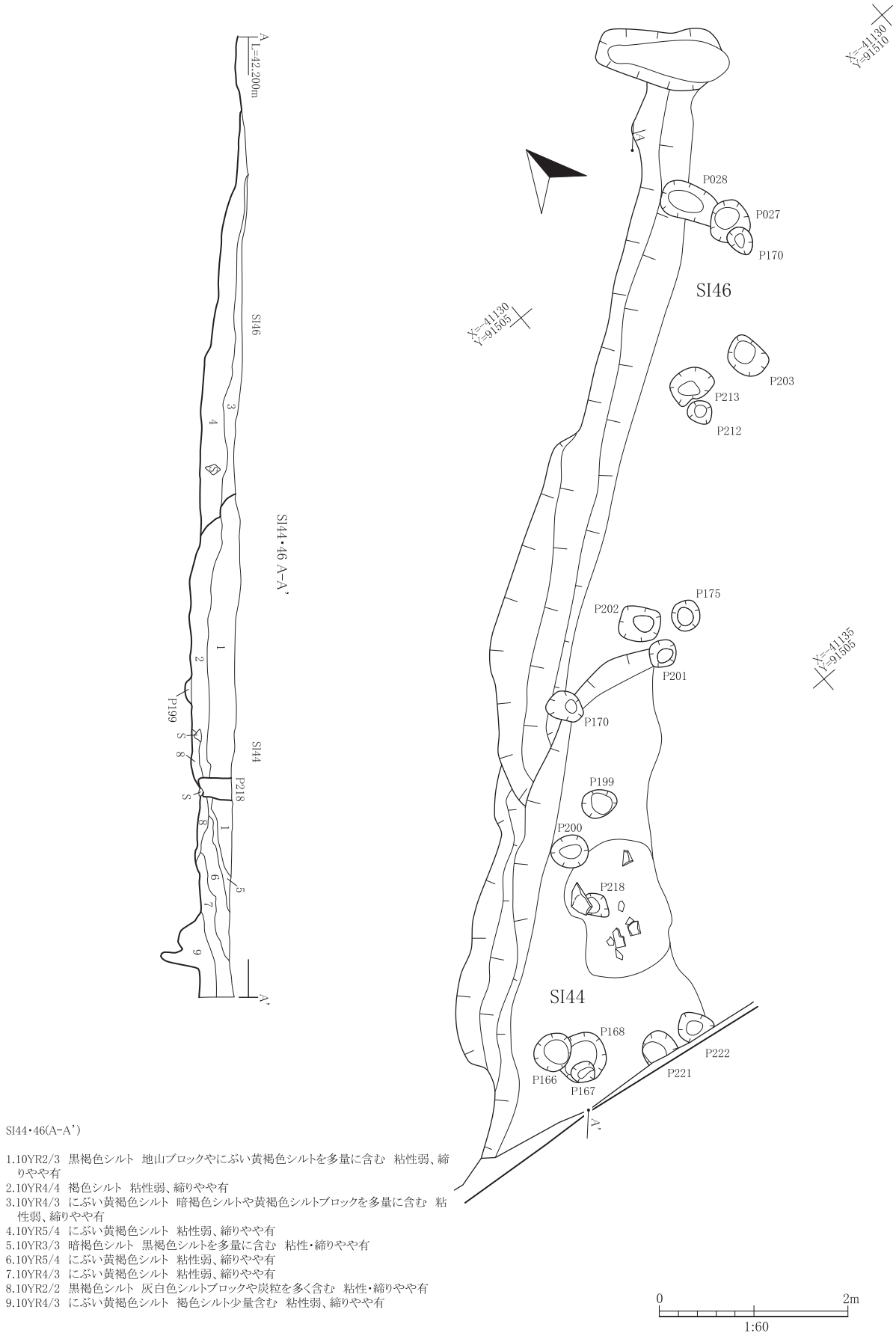


SI37・42(F-F')

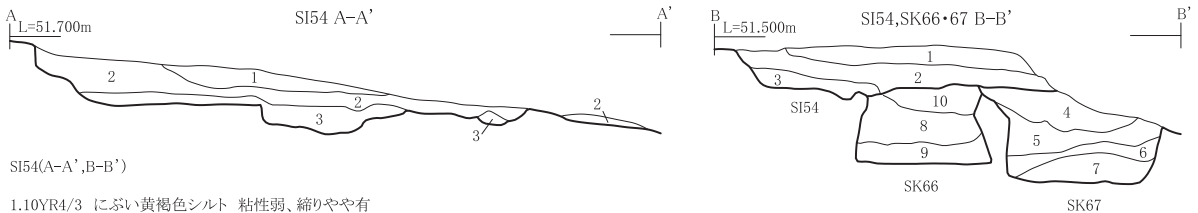
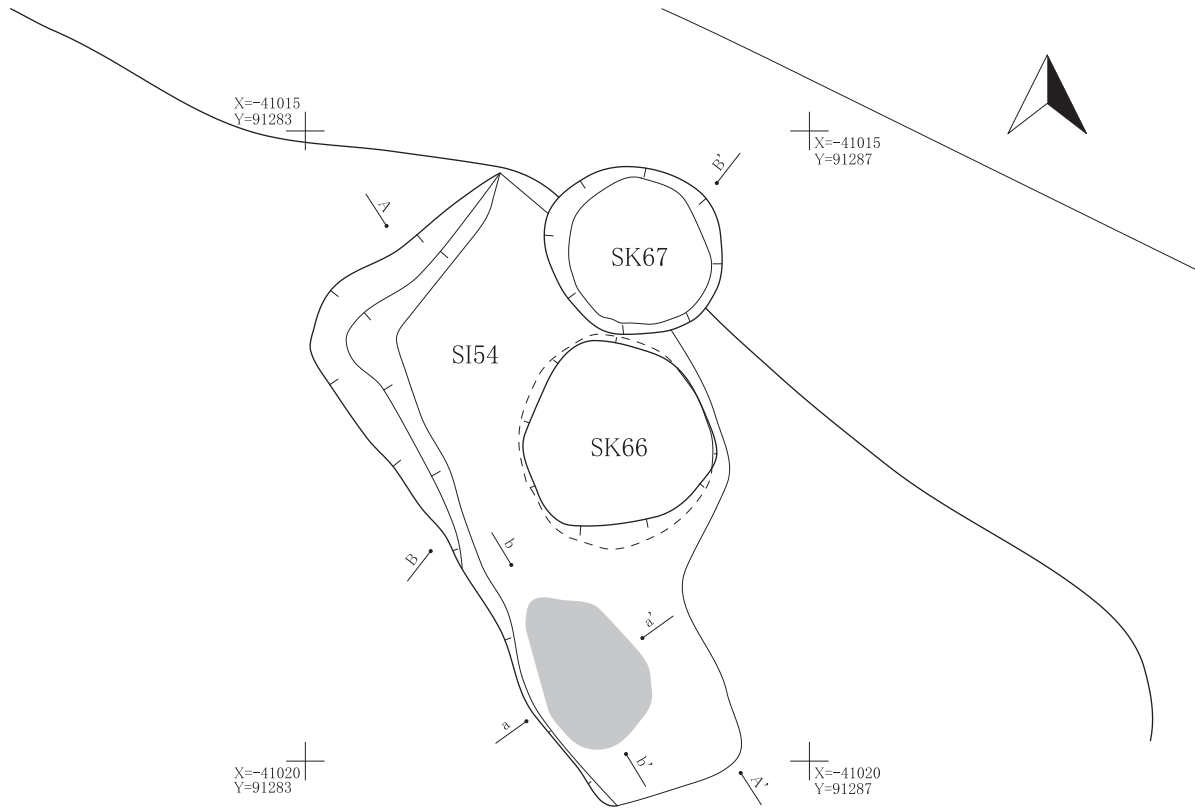
- 1.10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有
- 2.10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 灰白色大小ブロック・礫を多量を含む 炭粒をごく微量含む 粘性弱、縮っている
- 3.10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 灰白色大小ブロックを多量を含む 炭のうすい層が1~2枚ある 粘性弱、縮っている
- 4.10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有



第41図 SI37・41~43・46・48~52(3)

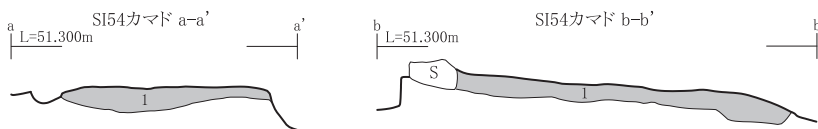
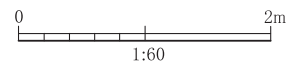


第 42 図 SI44・46



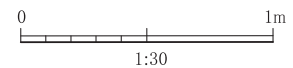
SI54(A-A',B-B')

- 1.10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有
- 2.10YR6/4 にぶい黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有
- 3.10YR7/2 にぶい黄褐色シルト 風化花崗岩少量含む 粘性弱、縮りやや有
- 4.10YR4/2 灰黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有
- 5.10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有
- 6.10YR4/1 褐色シルト 粘性弱、縮りやや有
- 7.10YR7/2 にぶい黄褐色風化花崗岩 粘性・縮り弱
- 8.10YR6/3 にぶい黄褐色風化花崗岩 粘性・縮り弱
- 9.10YR6/2 灰黄褐色風化花崗岩ブロック 炭粒微量 褐色シルト少量含む 粘性・縮り弱
- 10.10YR4/2 灰黄褐色シルト 風化花崗岩ブロック少量 炭粒微量含む 粘性弱、縮りやや有(人為)

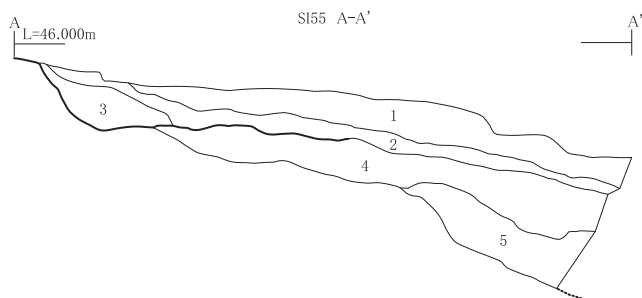
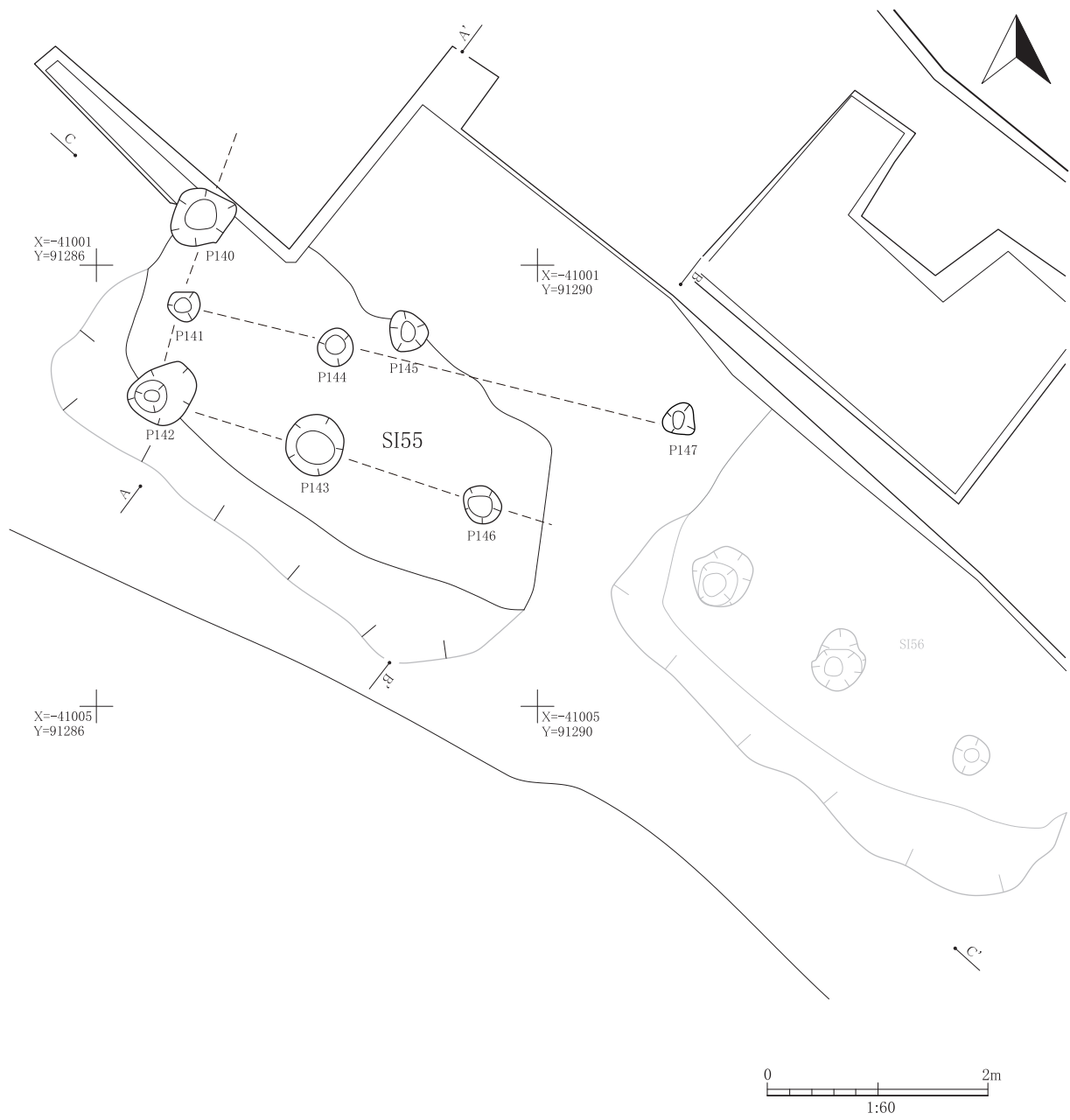


SI54カマド(A-A',B-B')

- 1.10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 灰白色シルトブロック少量含む 上面に焼土が1cm厚で部分的に広がっている



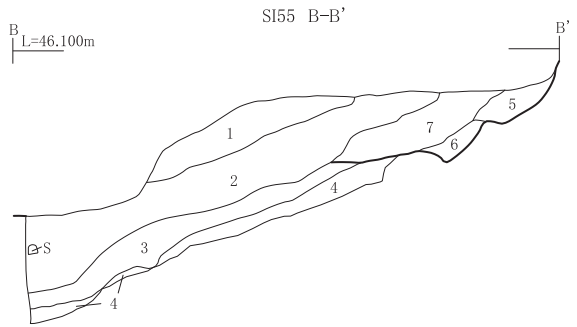
第 43 図 SI54、SK66・67



SI55(A-A')

1. 10YR5/2 灰黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有 遺物含む
2. 10YR4/1 褐灰色シルト 粘性弱、縮りやや有 遺物含む
3. 10YR7/2 にぶい黄橙色シルト 風化花崗岩と交互に堆積している
粘性弱、縮っている
4. 10YR4/1 褐灰色シルト 風化花崗岩多量に含む とくに左側に多く
含む 粘性弱、縮りやや有
5. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性・縮りやや有 旧表土 遺物なし

第 44 図 SI55(1)

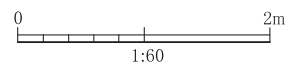
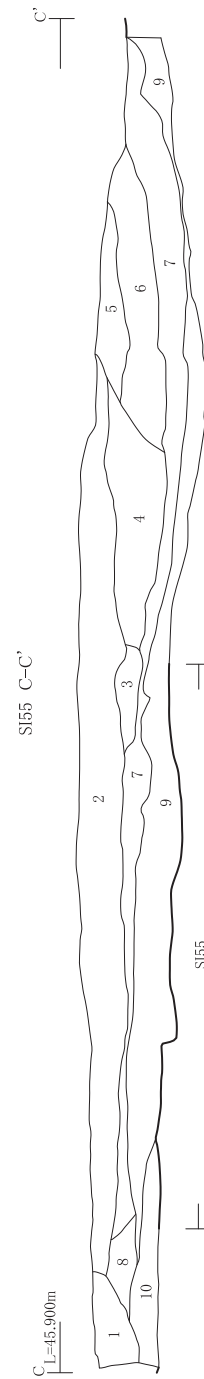


SI55(B-B')

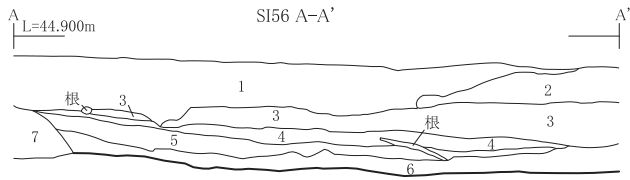
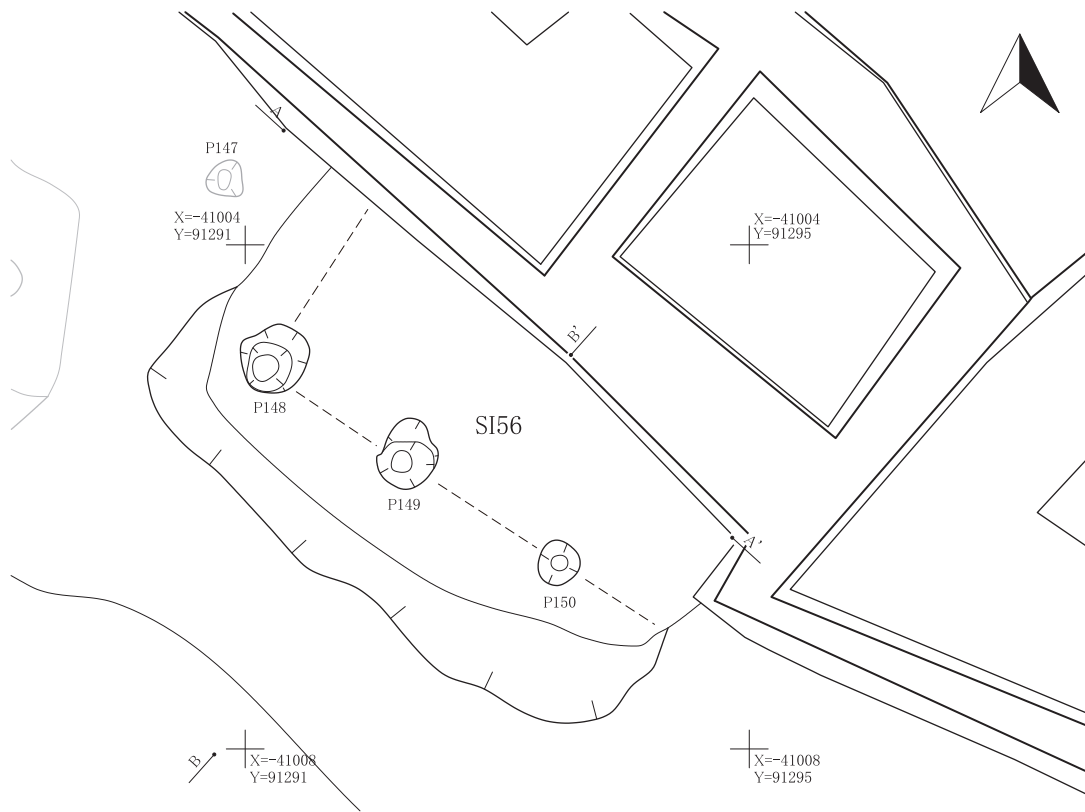
- 1.10YR4/2 灰黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有
- 2.10YR5/2 灰黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有
- 3.10YR2/2 黒褐色シルト 浅黄橙色シルト少量含む 粘性弱、縮りやや有
- 4.10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 浅黄橙色シルト少量含む 粘性弱、縮りやや有
- 5.10YR6/3 にぶい黄橙色シルト 風化花崗岩少量含む 粘性弱、縮りやや有
- 6.10YR3/2 黒褐色シルト 灰黄褐色シルト少量含む 粘性弱、縮りやや有(SI55 埋土)
- 7.10YR2/2 黒褐色シルト 浅黄橙色シルト少量含む 粘性弱、縮りやや有(SI55 埋土)

SI55(C-C')

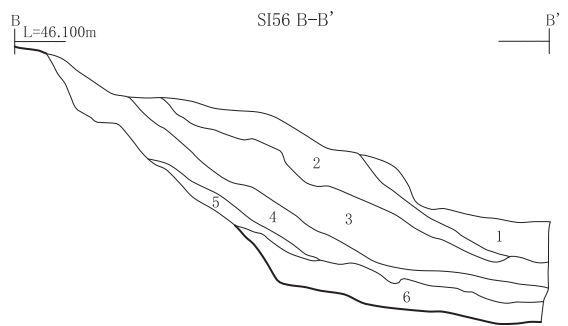
- 1.10YR6/4 にぶい黄橙色シルト 粘性弱、縮りやや有
- 2.10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有
- 3.10YR8/6 黄橙色シルトブロック にぶい黄橙色シルト少量含む 粘性弱、縮りやや有
- 4.10YR6/3 にぶい黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有
- 5.10YR6/3 にぶい黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有
- 6.10YR8/4 浅黄橙色風化花崗岩 粘性弱、縮りやや有
- 7.10YR2/2 黒褐色シルト 明黄褐色シルトを部分的に少量含む 粘性・縮りやや有
- 8.10YR4/2 灰黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有
- 9.10YR8/6 黄橙色シルトブロック にぶい黄褐色シルト少量含む 粘性弱、縮りやや有
- 10.10YR2/2 黒褐色シルト 明黄褐色シルトを部分的に少量含む 粘性・縮りやや有



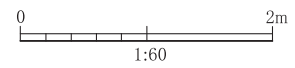
第 45 図 SI55(2)



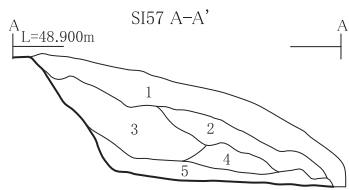
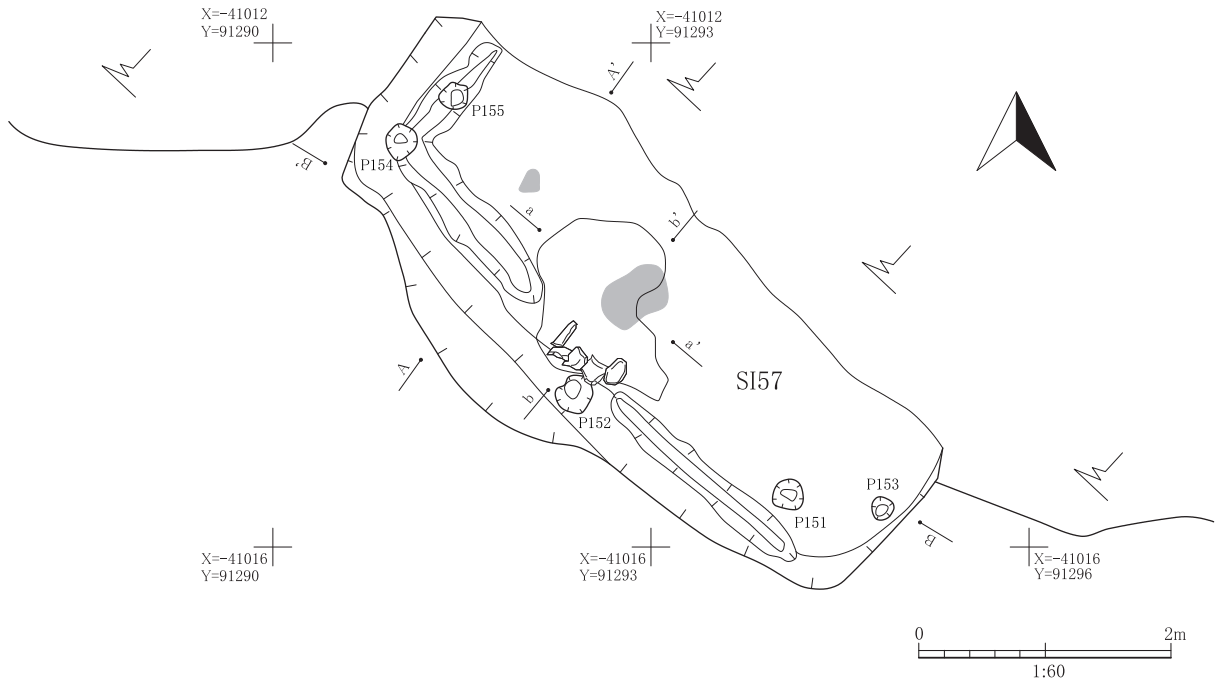
- SI56(A-A')
1. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有
 2. 10YR7/6 明黄褐色風化花崗岩 黒褐色シルト少量含む 粘性弱、縮りやや有
 3. 2.5Y6/2 灰黄色シルト 粘性弱、縮りやや有
 4. 10YR4/1 褐灰色シルト 粘性弱、縮りやや有
 5. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 風化花崗岩を少量含む 粘性弱、縮りやや有
 6. 10YR2/2 黒褐色シルト 灰黄褐色シルトを少量含む 粘性弱、縮りやや有
3~6層がSI57埋土のようだ
 7. 10YR4/2 灰黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有



- SI56(B-B')
1. 10YR4/1 褐灰色シルト 粘性弱、縮りやや有
 2. 10YR5/2 灰黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有
 3. 10YR8/3 浅黄橙色風化花崗岩 砂と交互に堆積 粘性弱、縮りやや有
 4. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性・縮りやや有
 5. 10YR7/2 にぶい黄褐色風化花崗岩 粘性弱、縮りやや有
 6. 10YR5/2 灰黄褐色シルト 黒褐色シルトを少量含む 粘性弱、縮りやや有

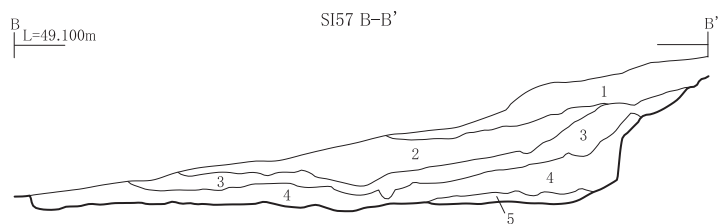


第 46 図 SI56



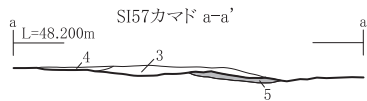
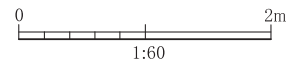
SI57(A-A')

- 1.10YR6/2 灰黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有
- 2.10YR4/1 褐灰色シルト 粘性弱、縮りやや有
- 3.10YR6/4 にぶい黄橙色風化花崗岩 粘性弱、縮りやや有
- 4.10YR6/2 灰黄褐色シルト 風化花崗岩を少量含む 粘性弱、縮りやや有
- 5.10YR3/1 黒褐色シルト 風化花崗岩を少量含む 粘性・縮りやや有



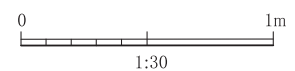
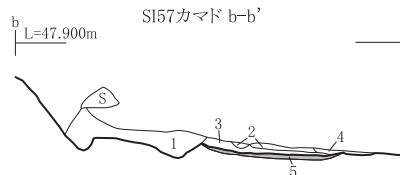
SI57(B-B')

- 1.10YR6/2 灰黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有
- 2.10YR5/8 黄褐色浮石 粘性弱、縮りやや有
- 3.10YR7/4 にぶい黄橙色シルト 粘性弱、縮りやや有
- 4.10YR3/3 暗褐色シルト 風化花崗岩 焼土粒を少量含む
- 5.10YR7/2 にぶい黄橙色シルト 粘性弱、縮りやや有

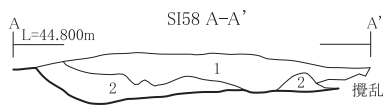
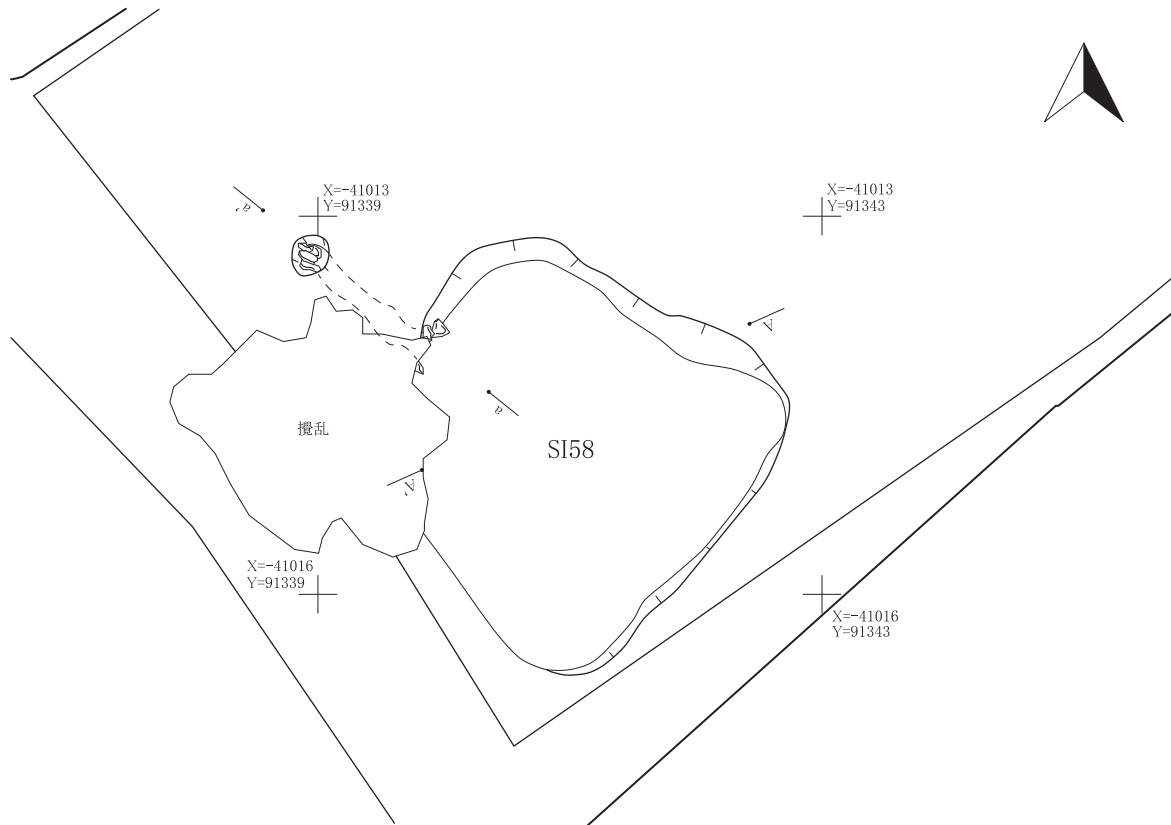


SI57カマド(a-a', b-b')

- 1.10YR3/2 黒褐色シルト 粘性弱、縮りやや有
- 2.10YR4/2 灰黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有
- 3.10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有
- 4.10YR2/1 黒色シルト 粘性・縮り弱
- 5.2.5YR5/6 明赤褐色焼土 粘性弱、縮っている

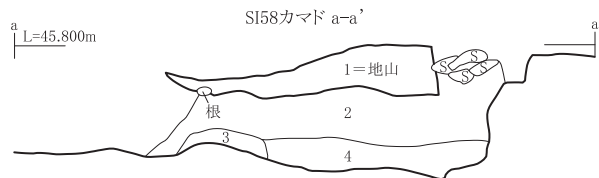
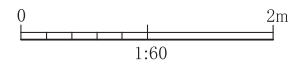


第 47 図 SI57



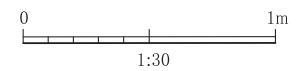
SI58(A-A')

- 1.10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有
- 2.10YR6/3 にぶい黄褐色シルト 地山ブロック少量含む 粘性弱、縮りやや有

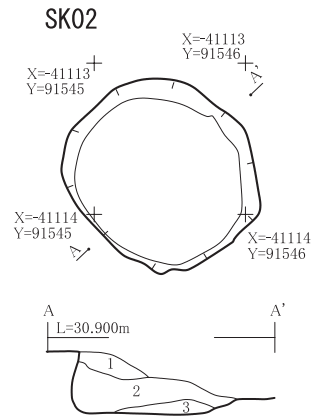


SI58カマド(a-a')

- 1.10YR6/4 にぶい黄褐色シルト 風化花崗岩ブロック少量含む 粘性弱、縮りやや有
- 2.10YR6/4 にぶい黄褐色シルト 粘性・縮り弱
- 3.10YR3/2 黒褐色シルト 粘性弱、縮りやや有
- 4.10YR6/2 灰黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有



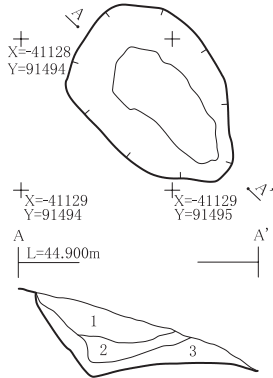
第 48 図 SI58



SK02 (A-A')

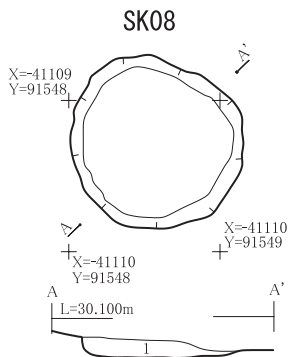
1. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト
粘性弱、縮りやや有
2. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト
粘性弱、縮りやや有
3. 10YR4/4 褐色砂質シルト
粘性弱、縮りやや有
自然堆積

SK05



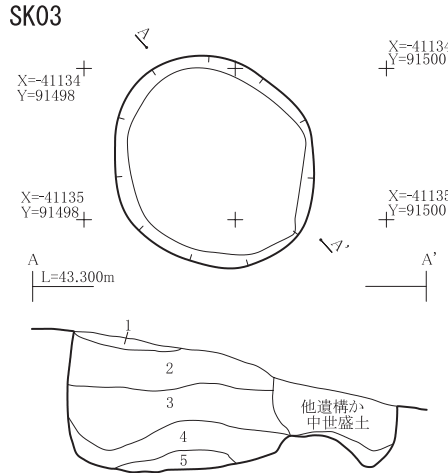
SK05 (A-A') HSK04

1. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
粘性・縮りやや有
2. 10YR3/2 黒褐色シルト 褐色シルト少量含む
粘性・縮りやや有
3. 10YR5/8 黄褐色シルト 褐色シルト少量含む
粘性・縮りやや有 自然堆積



SK08 (A-A')

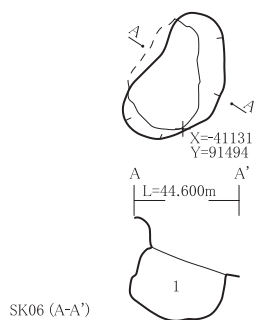
1. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト
粘性弱、縮りやや有



SK03 (HSK14)

1. 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性やや有、縮っている
2. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 粘性弱、縮っている
3. 10YR4/4 褐色シルト 粘性弱、縮っている
4. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 粘性弱、縮っている
5. 10YR7/2 にぶい黄褐色シルト 粘性弱、縮っている
自然堆積

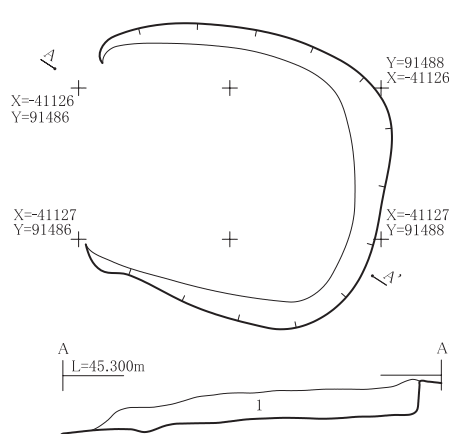
SK06



SK06 (A-A')

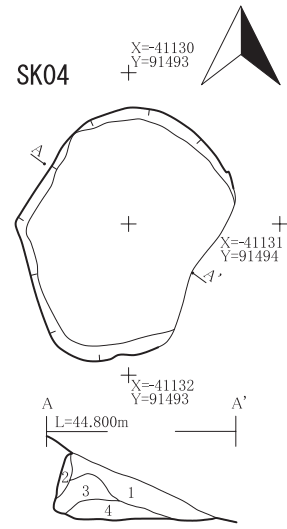
1. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
粘性弱、縮りやや有 自然堆積

SK09



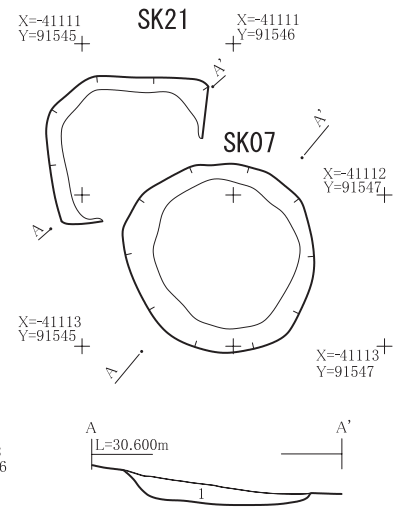
SK09 (A-A')

1. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
粘性弱、縮りやや有 (自然堆積) 古代か



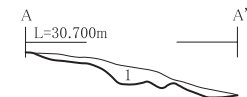
SK04 (A-A') HSK03

1. 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性弱、縮りやや有
2. 10YR7/6 明黄褐色風化花崗岩
灰黄褐色シルト少量混じる 粘性弱、縮りやや有
3. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 粘性・縮り弱
4. 10YR4/2 灰黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有
自然堆積



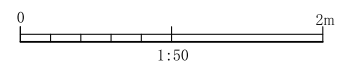
SK07 (A-A')

1. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト
暗褐色シルトを微量含む
粘性弱、縮りやや有
自然堆積

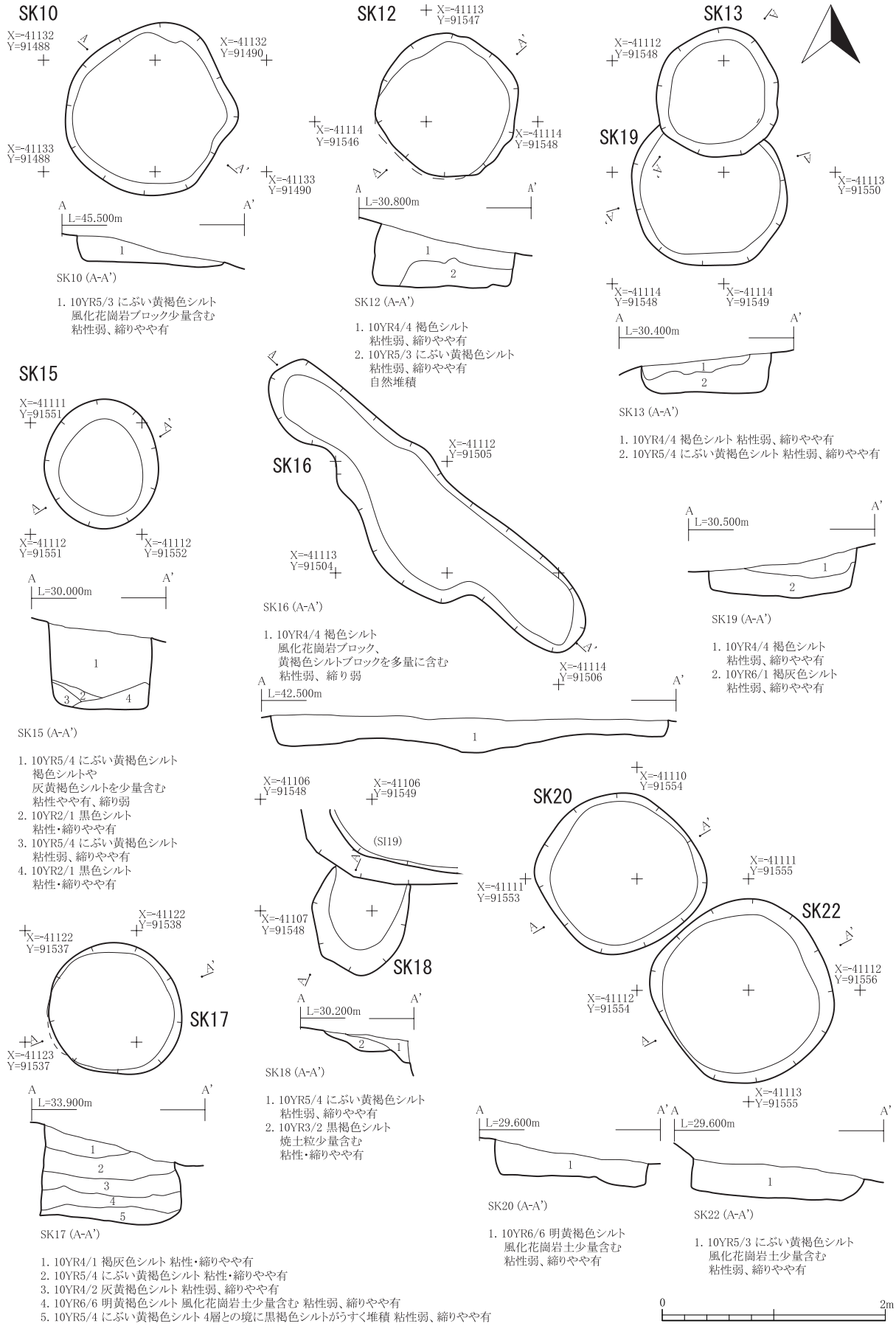


SK21 (A-A')

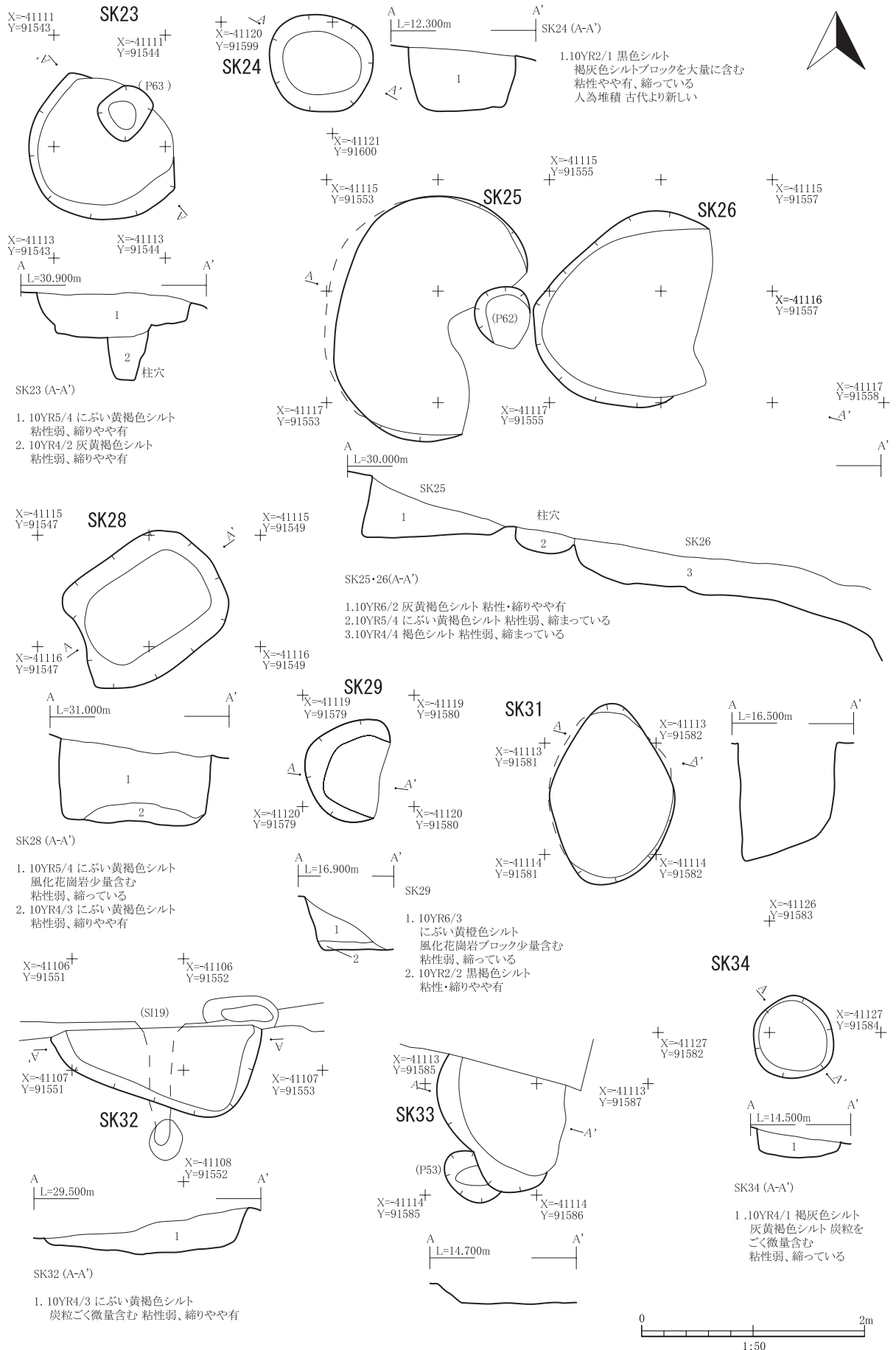
1. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
粘性なし、縮っている



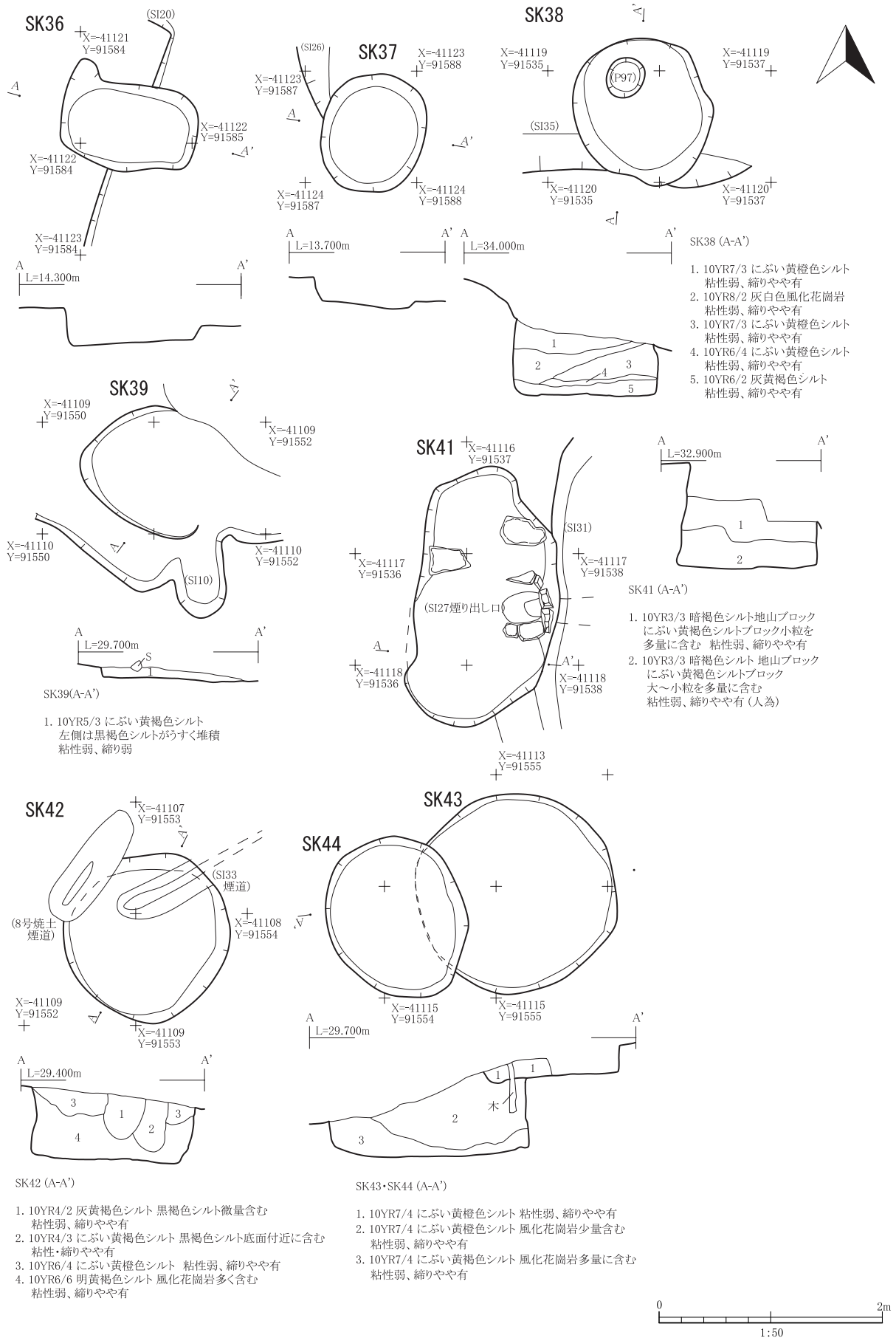
3 小 結



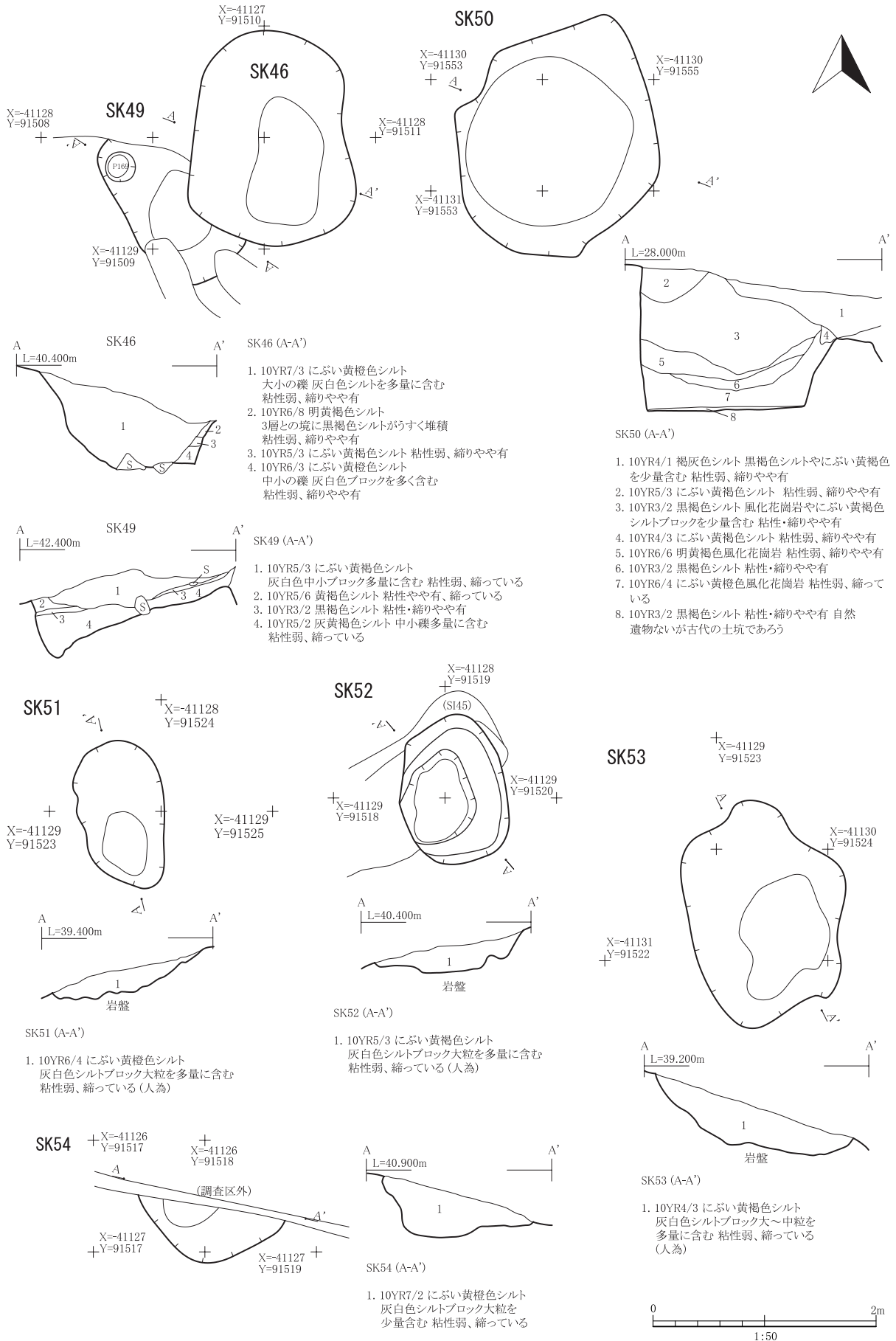
第 50 図 SK10・12・13・15～20・22



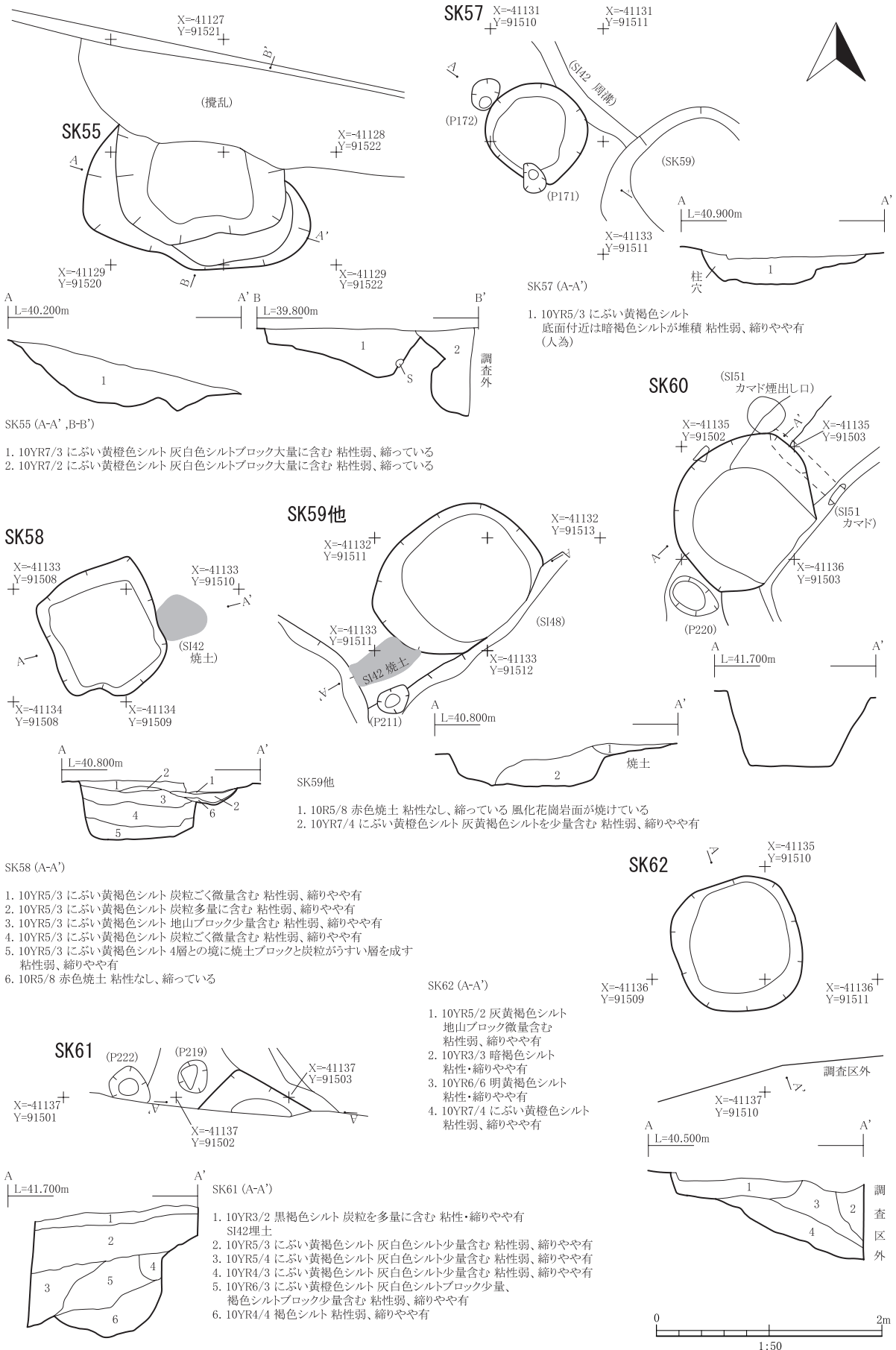
第 51 図 SK23 ~ 26・28・29・31 ~ 34



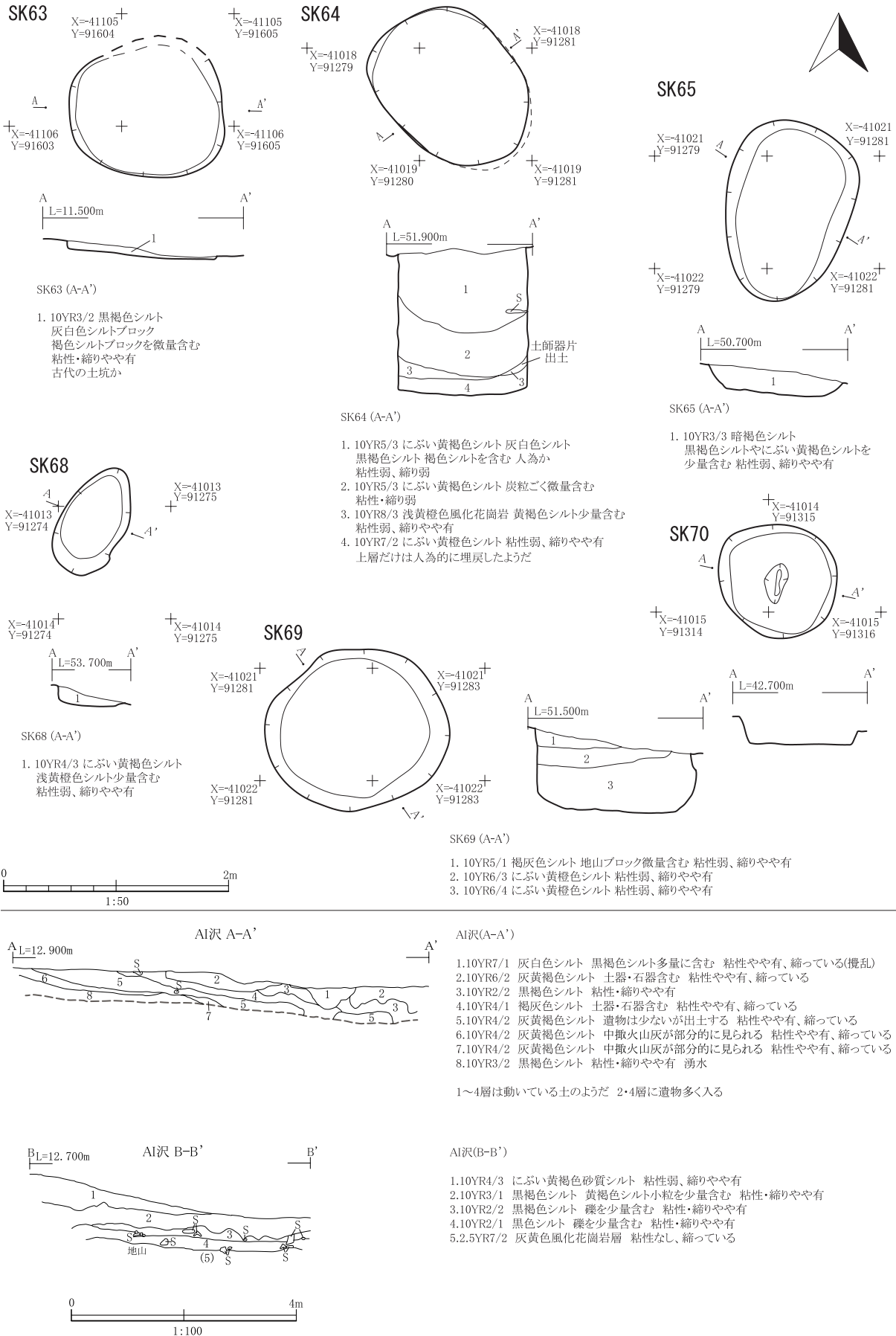
第 52 図 SK36 ~ 39・41 ~ 45



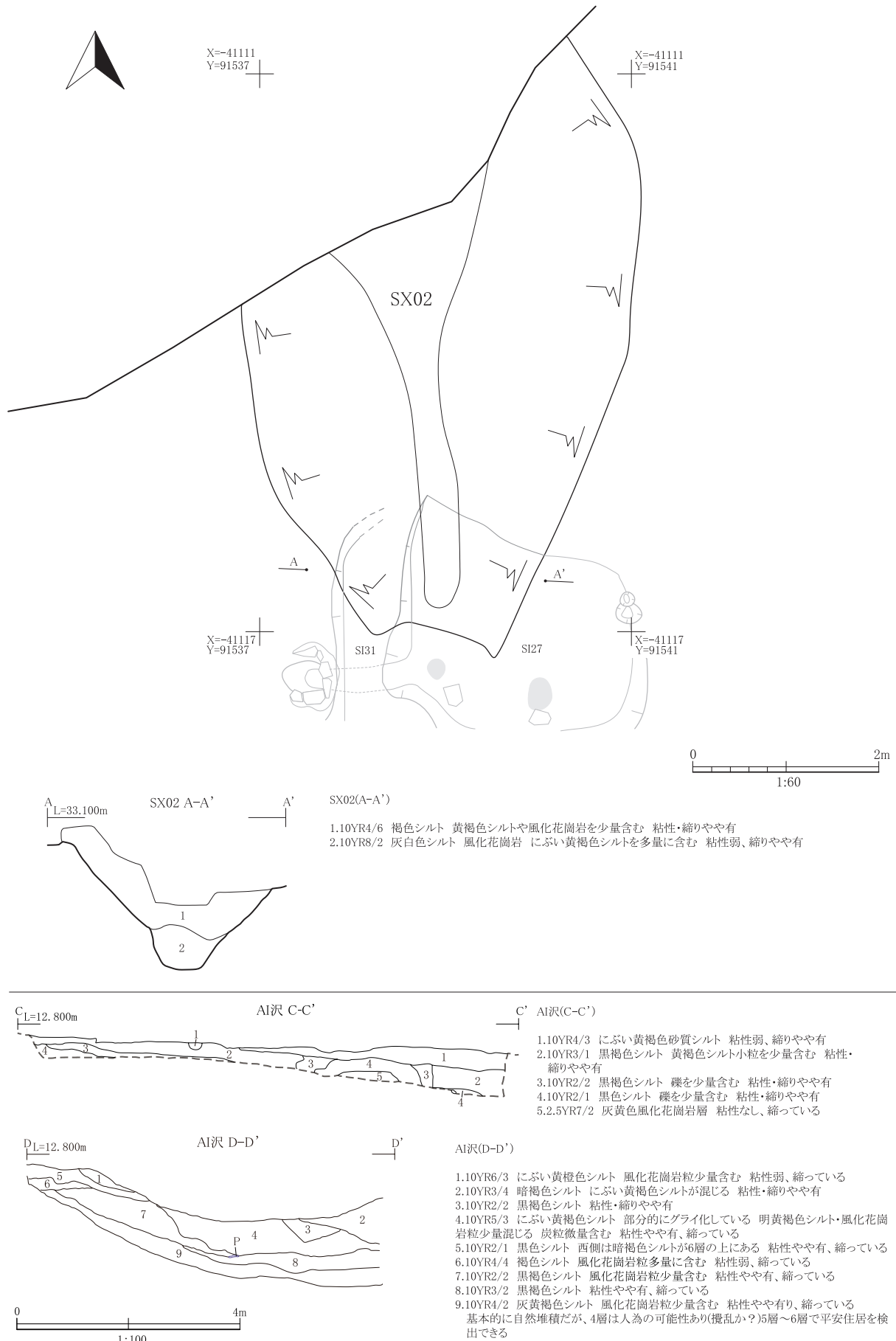
第 53 図 SK46・49～53



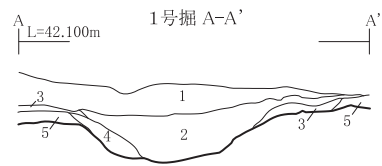
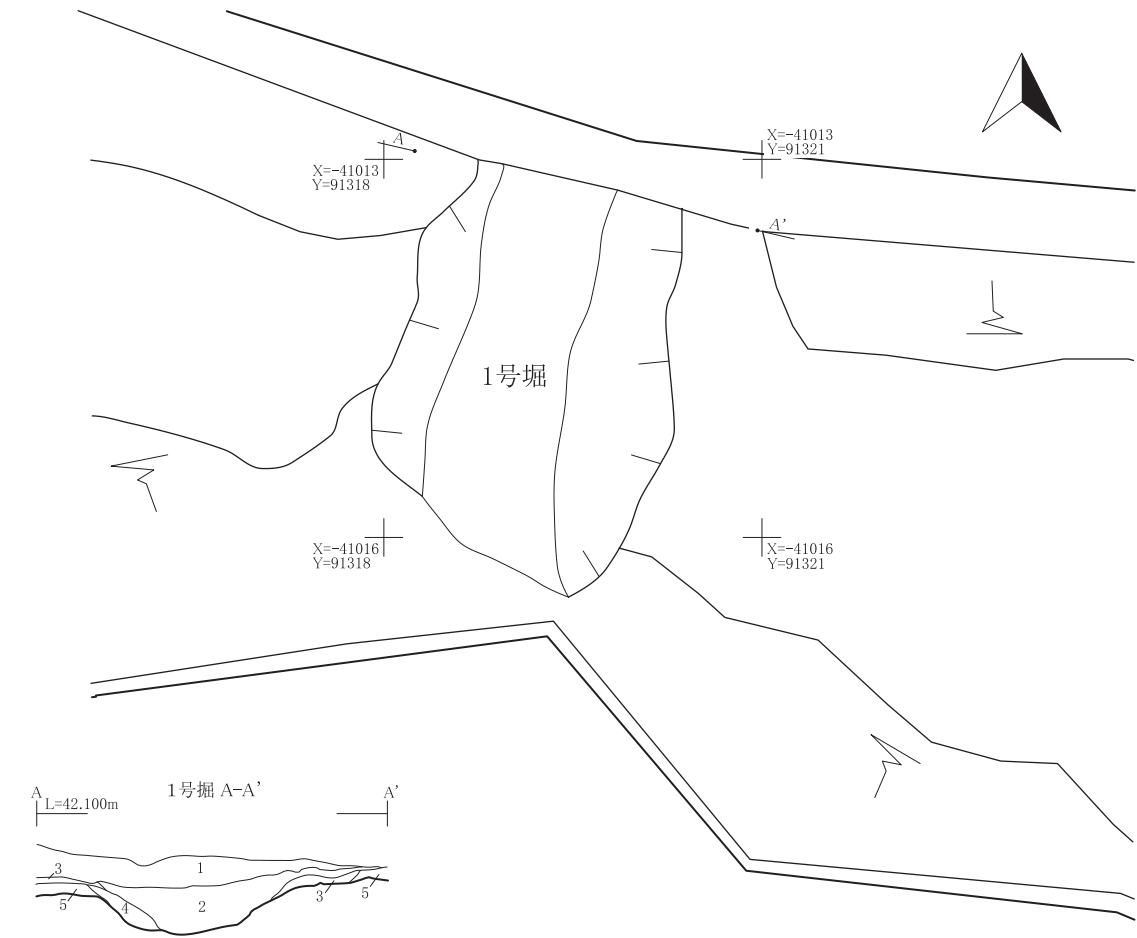
第 54 図 SK55・57～62



第 55 図 SK63 ~ 65・68 ~ 70、沢 1

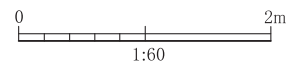


第 56 図 SX02、沢 2

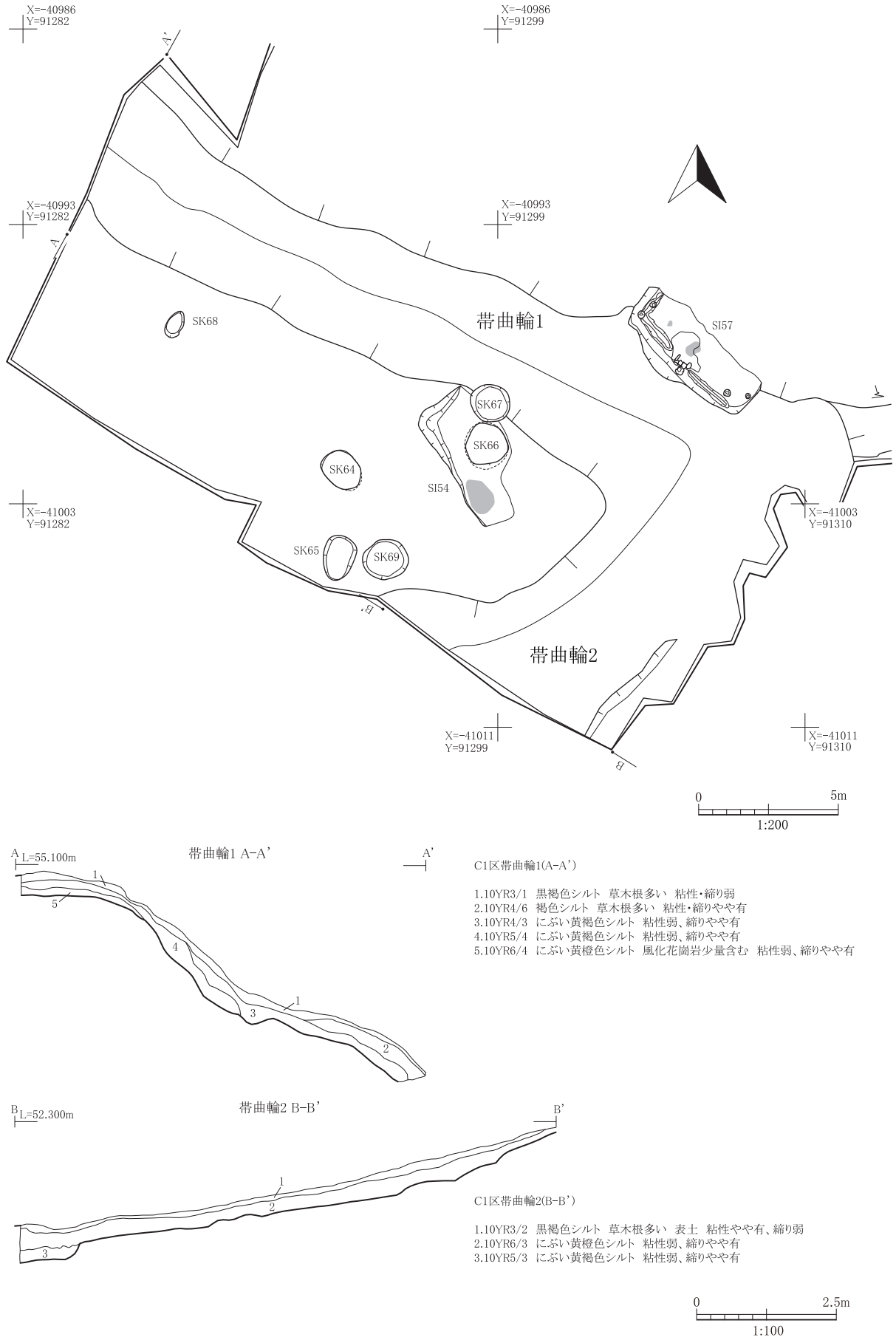


1号堀(A-A')

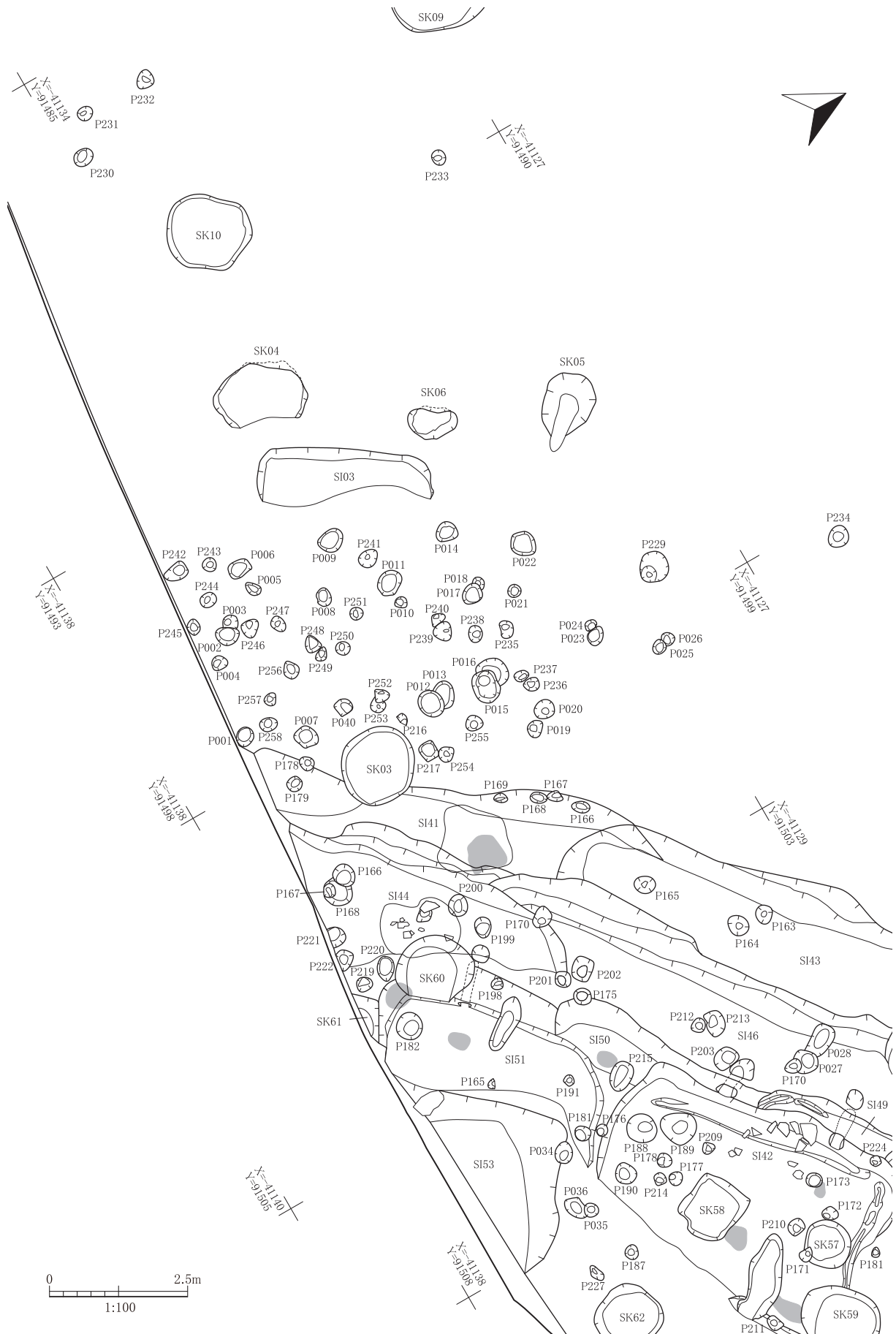
- 1.2.5Y4/1 黄灰色シルト 黒褐色シルトや地山ブロック 草木根を多く含む 現在の整地層 粘性・縮りやや有
- 2.10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有
- 3.10YR6/3 にぶい黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有
- 4.10YR7/3 にぶい黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有
- 5.10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 粘性弱、縮りやや有



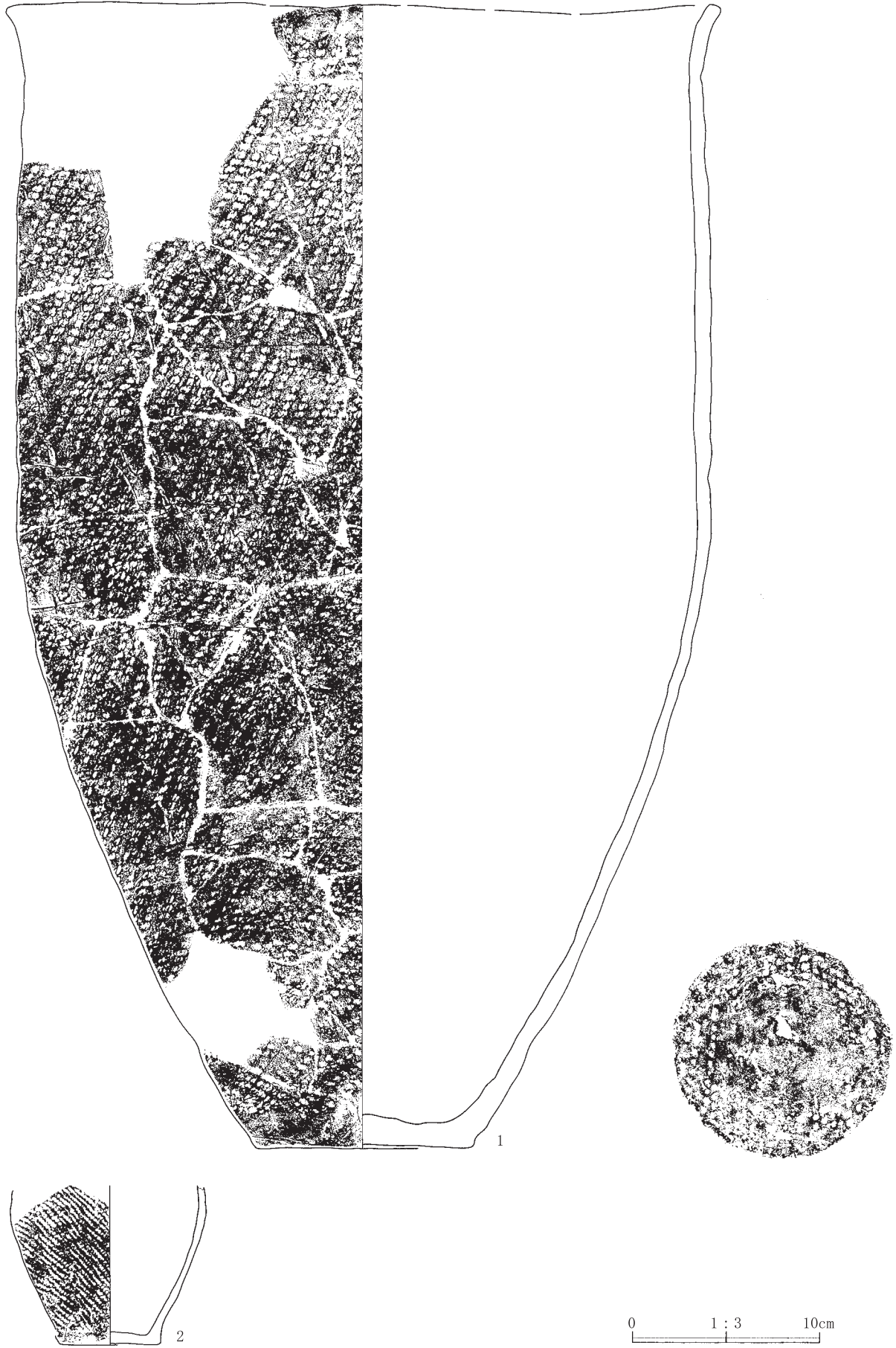
第 57 図 1号堀



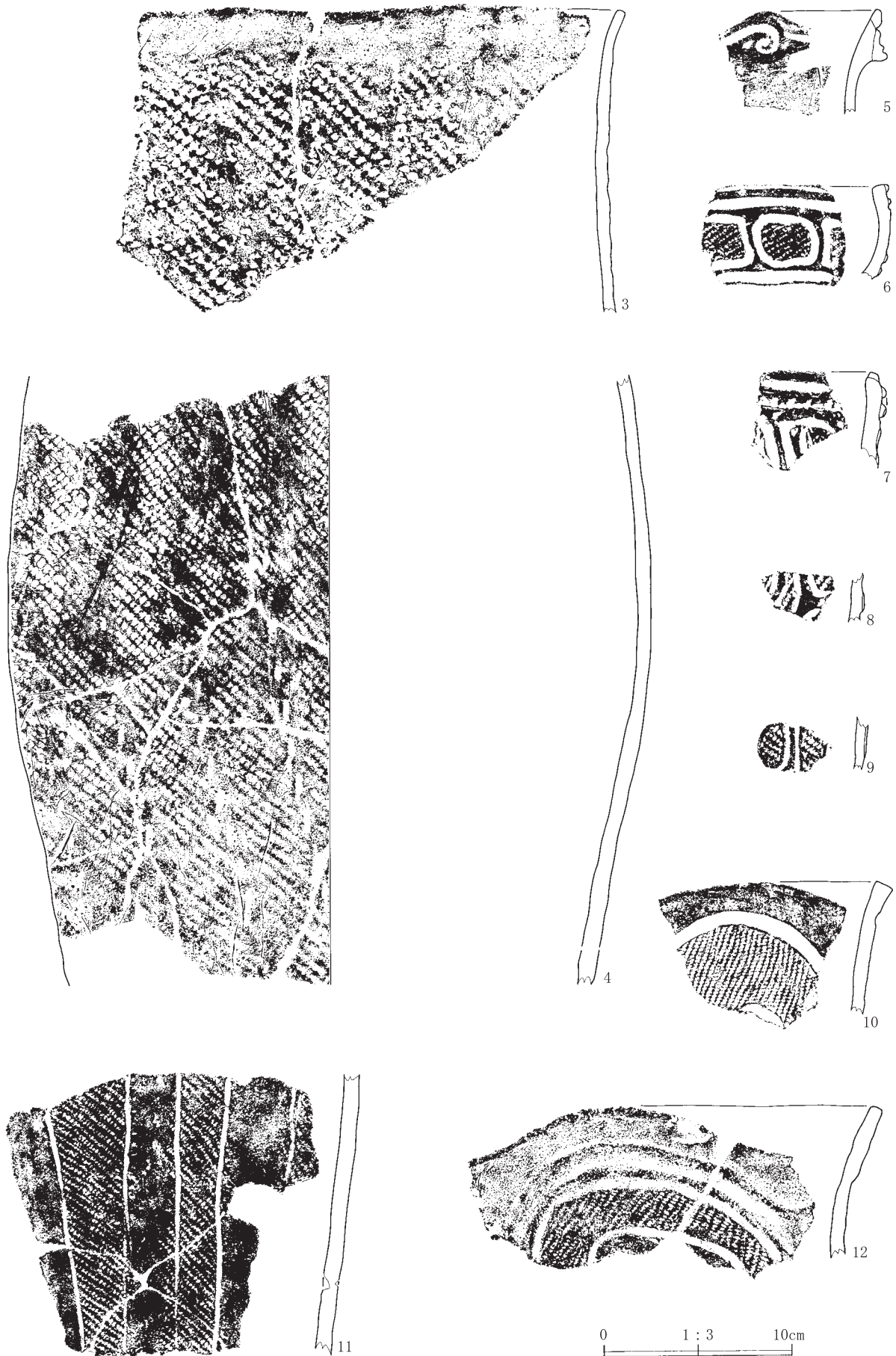
第 58 図 帯曲輪



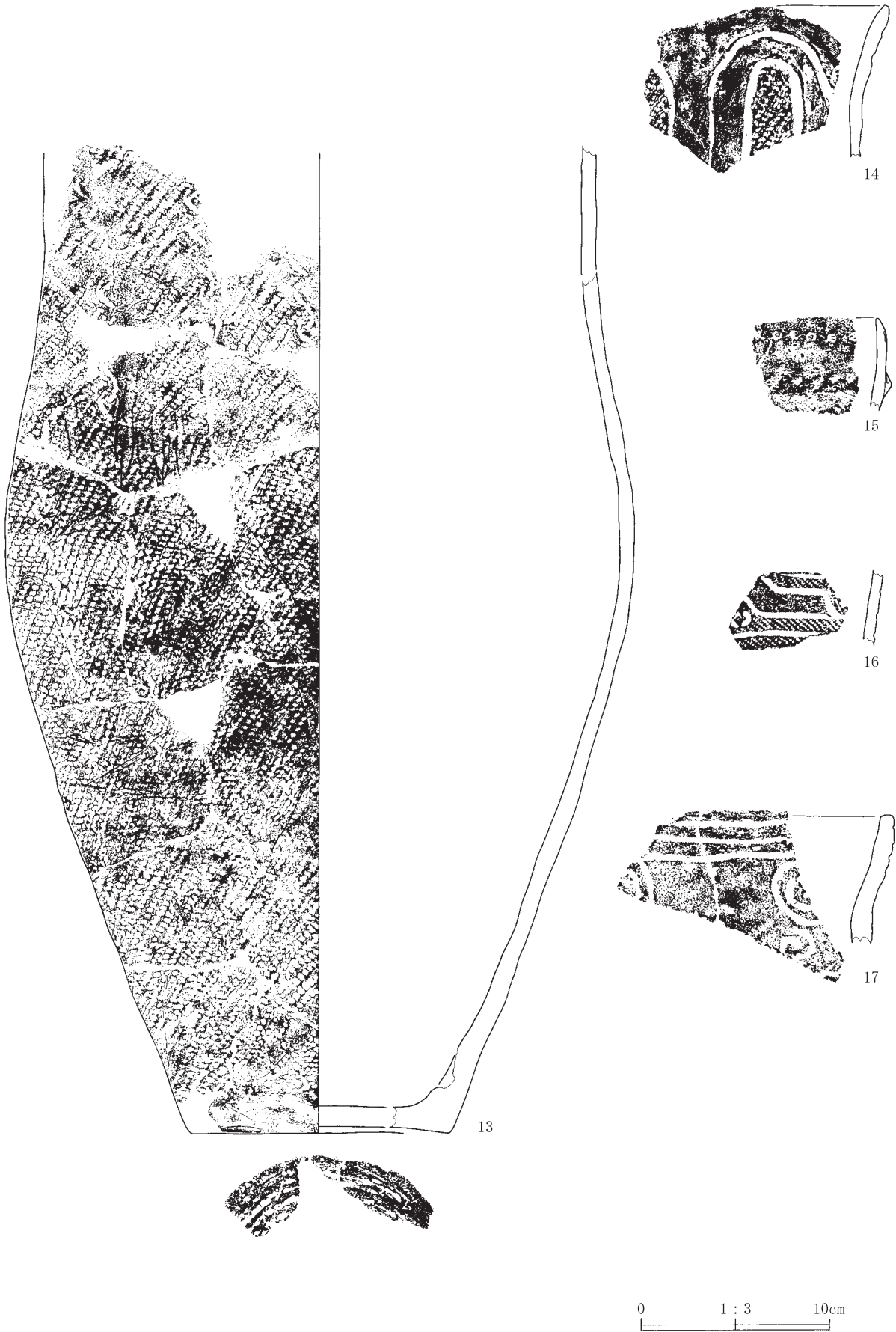
第 59 図 柱穴群



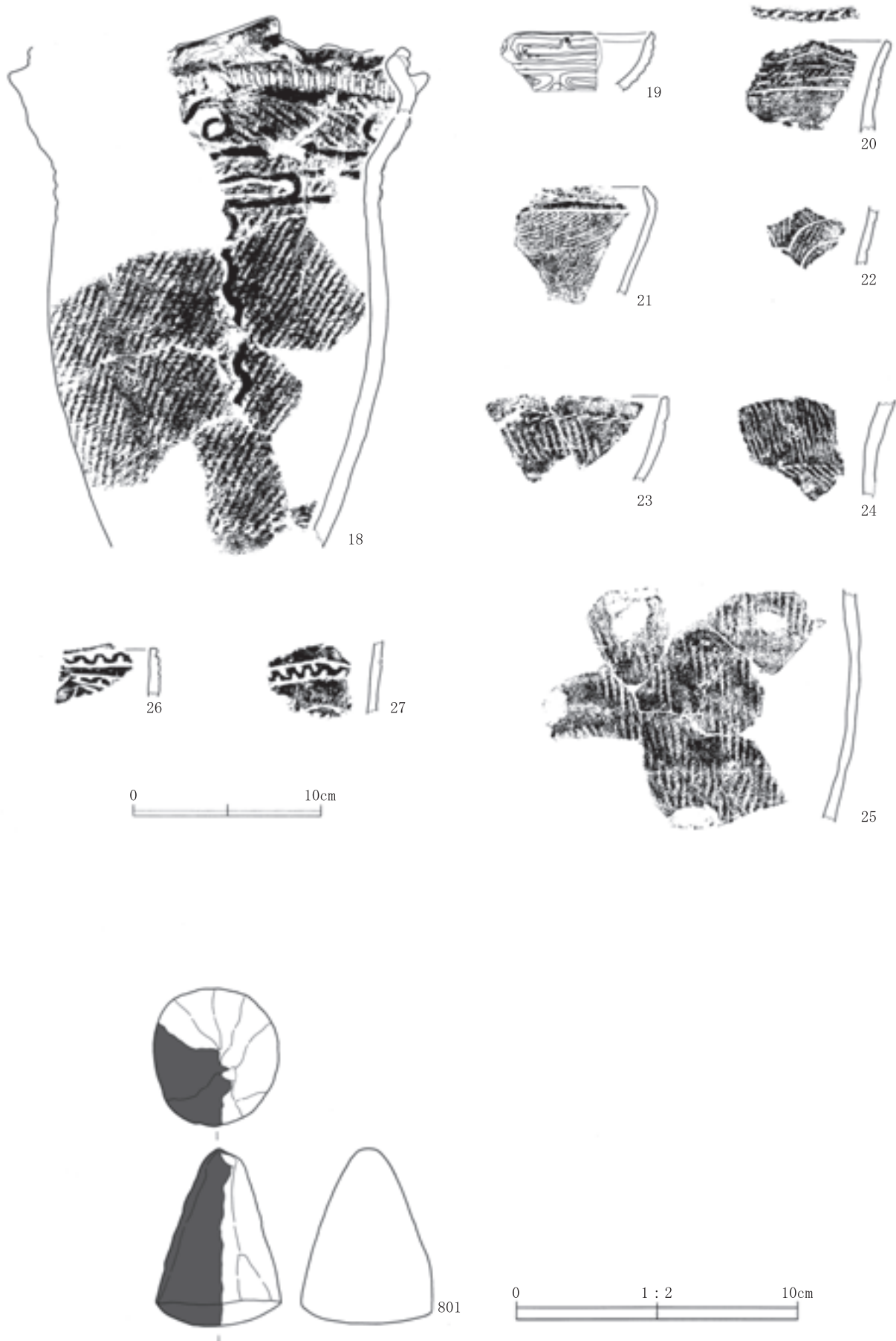
第 60 図 出土遺物 1 (1・2)



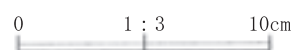
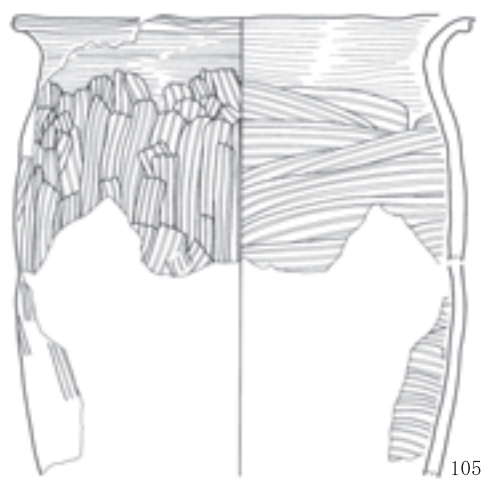
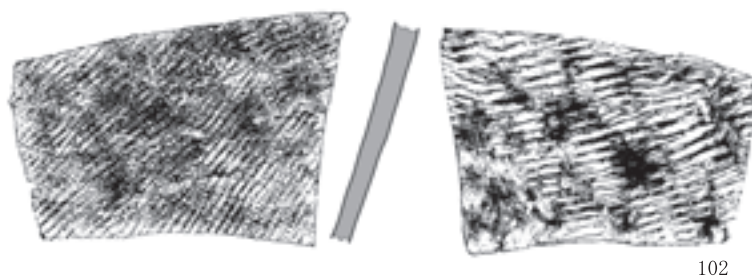
第 61 図 出土遺物 2 (3~ 12)



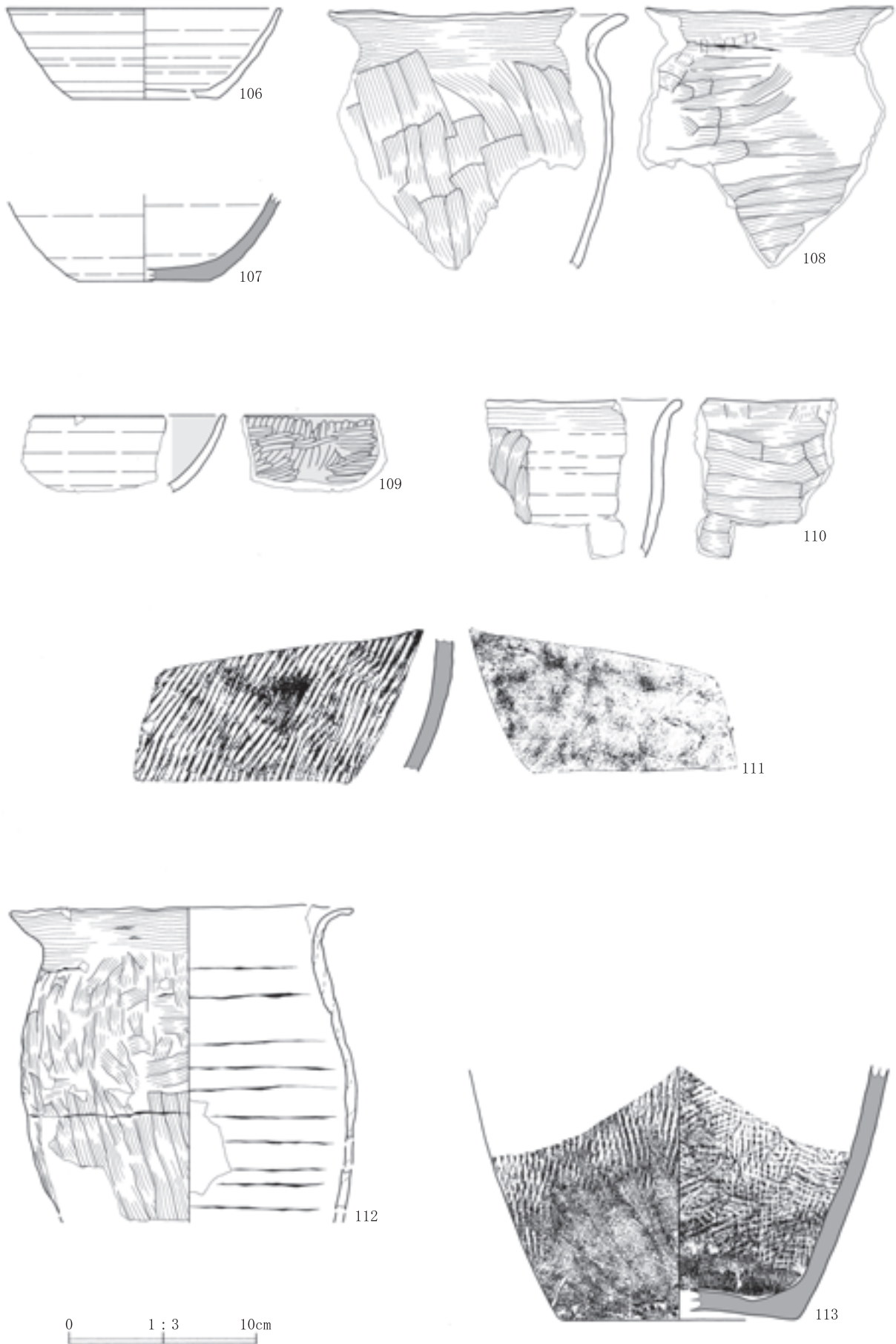
第 62 図 出土遺物 3 (13~17)



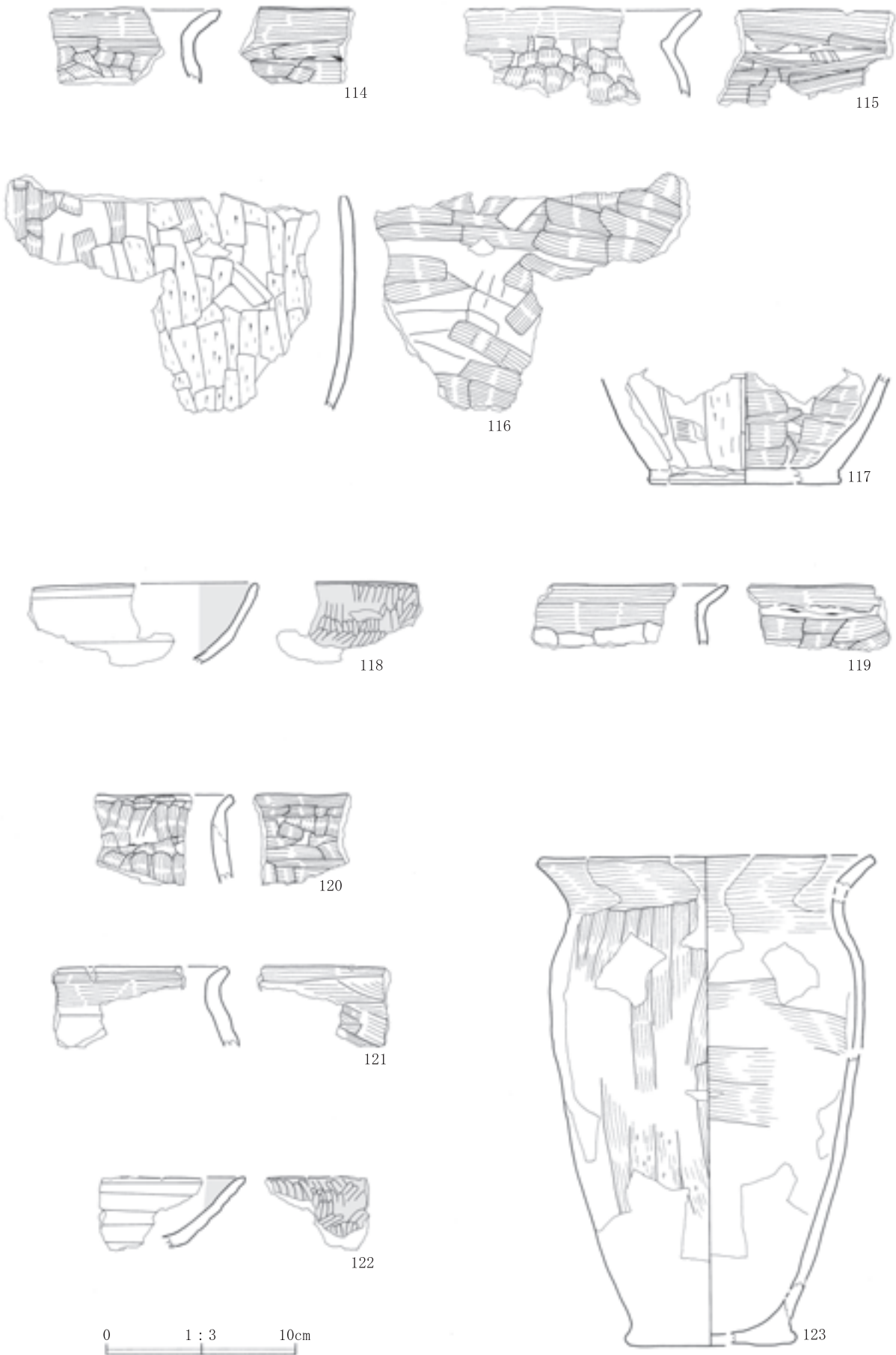
第 63 図 出土遺物 4 (18~27・801)



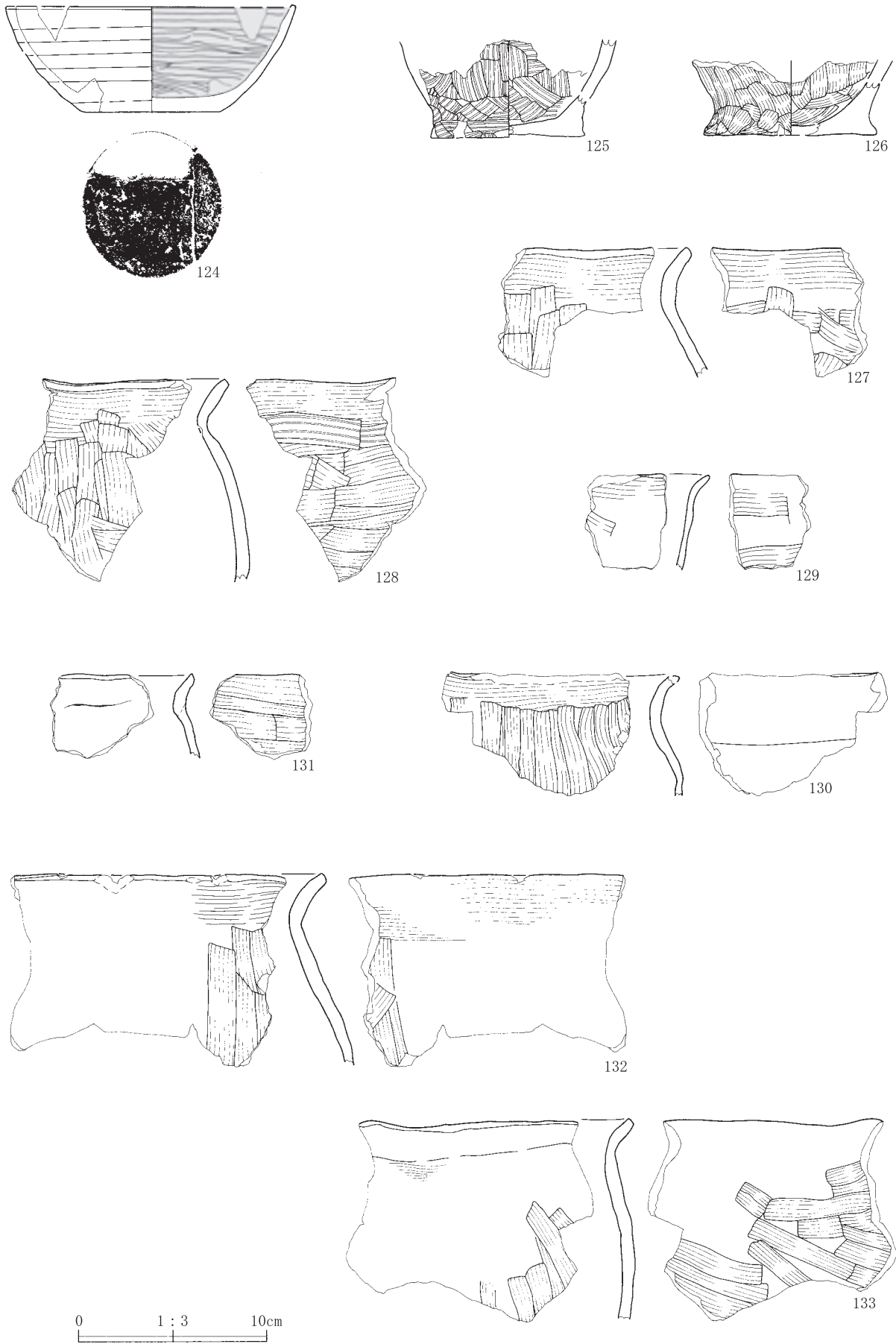
第 64 図 出土遺物 5 (101~105)



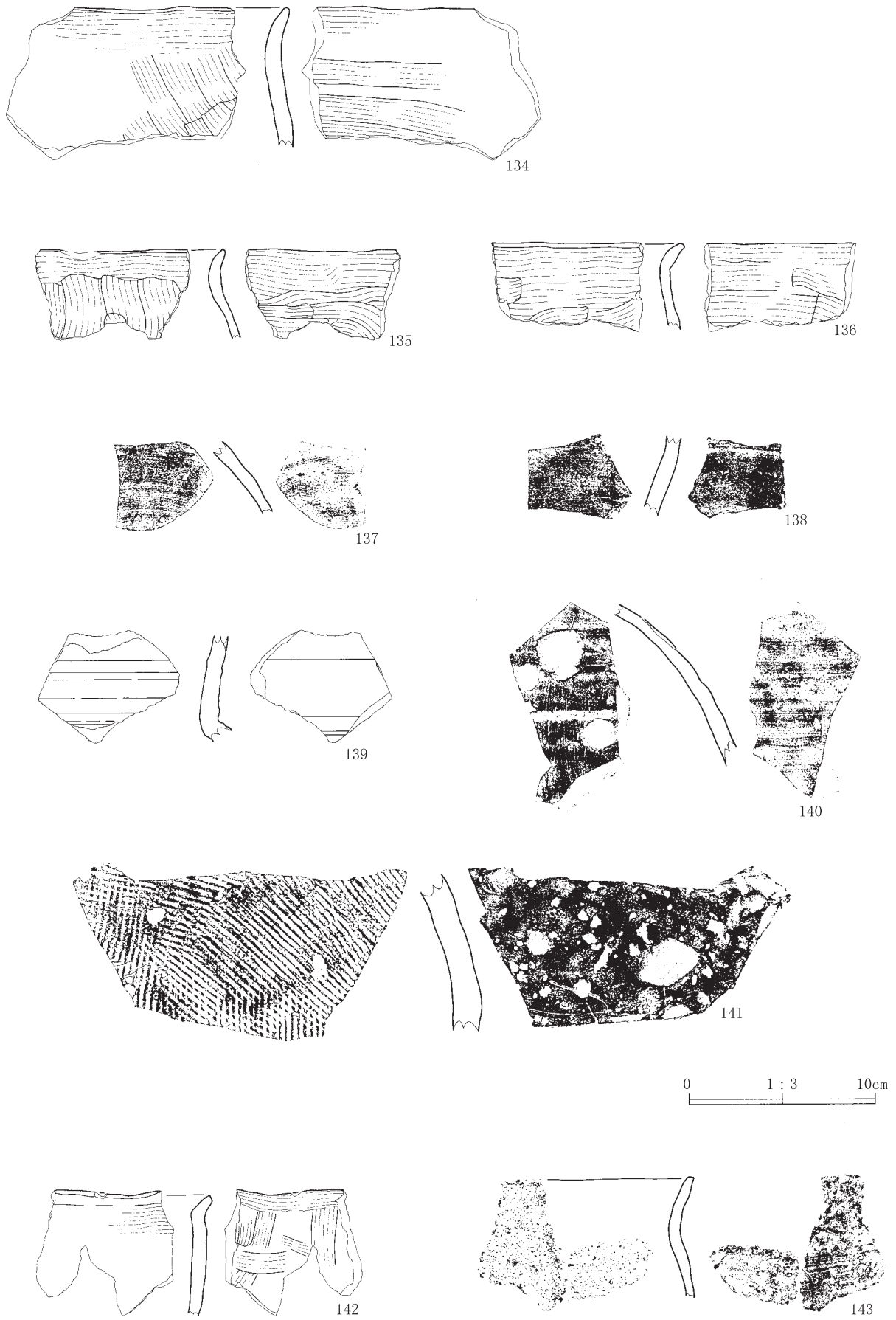
第 65 図 出土遺物 6 (106~113)



第 66 図 出土遺物 7 (114~ 123)



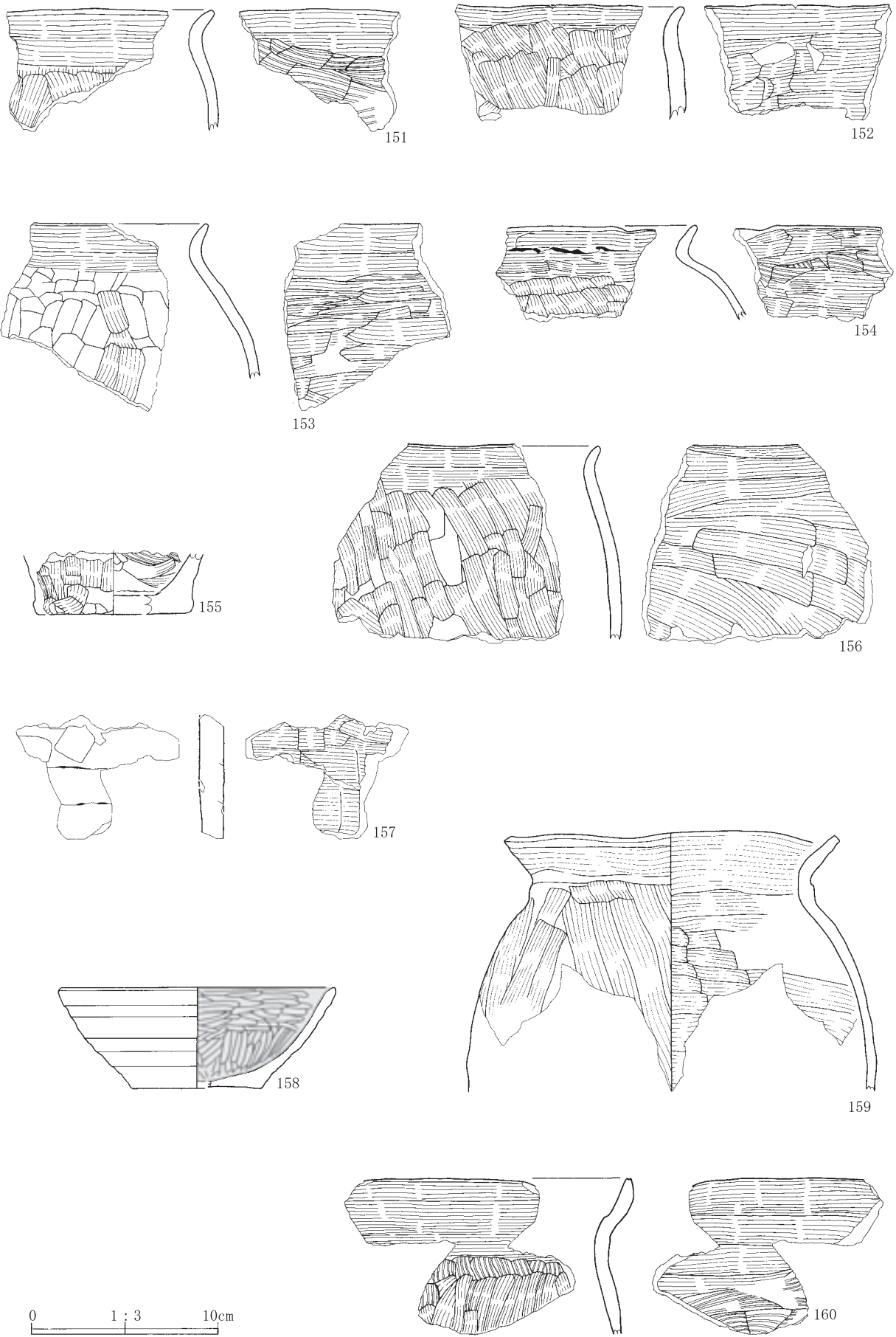
第 67 図 出土遺物 8 (124~133)



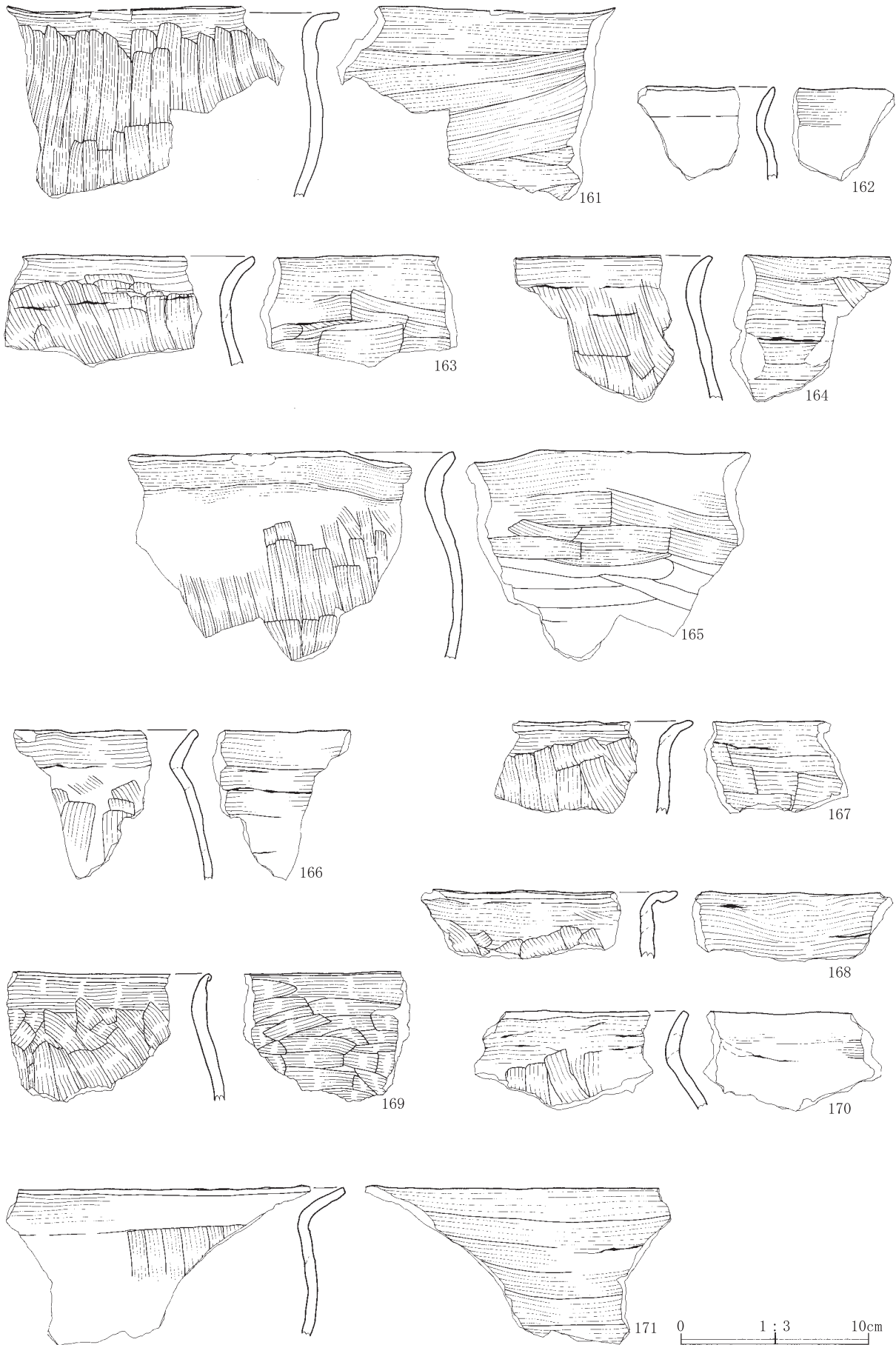
第 68 図 出土遺物 9 (134~143)



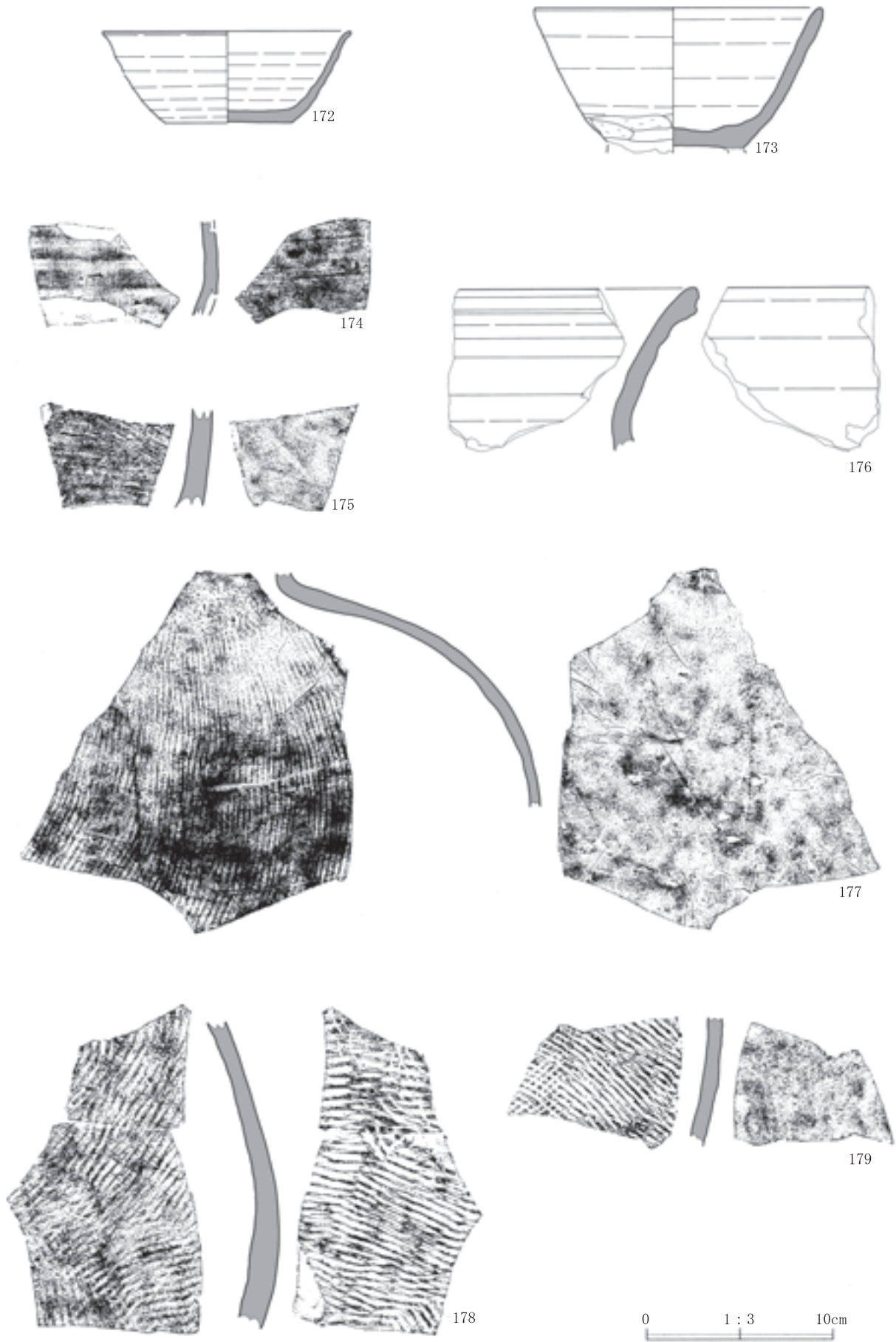
第 69 図 出土遺物 10 (144~150)



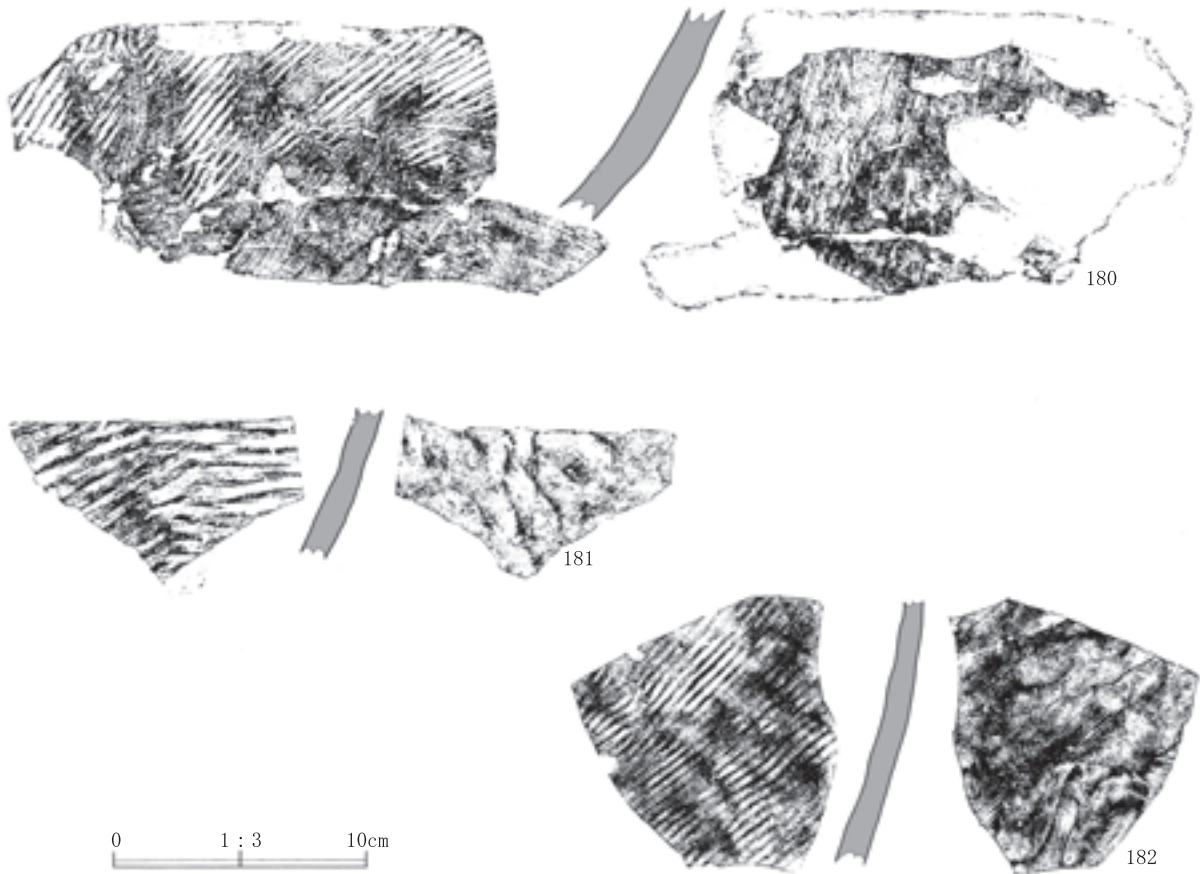
第 70 図 出土遺物 11 (151~160)



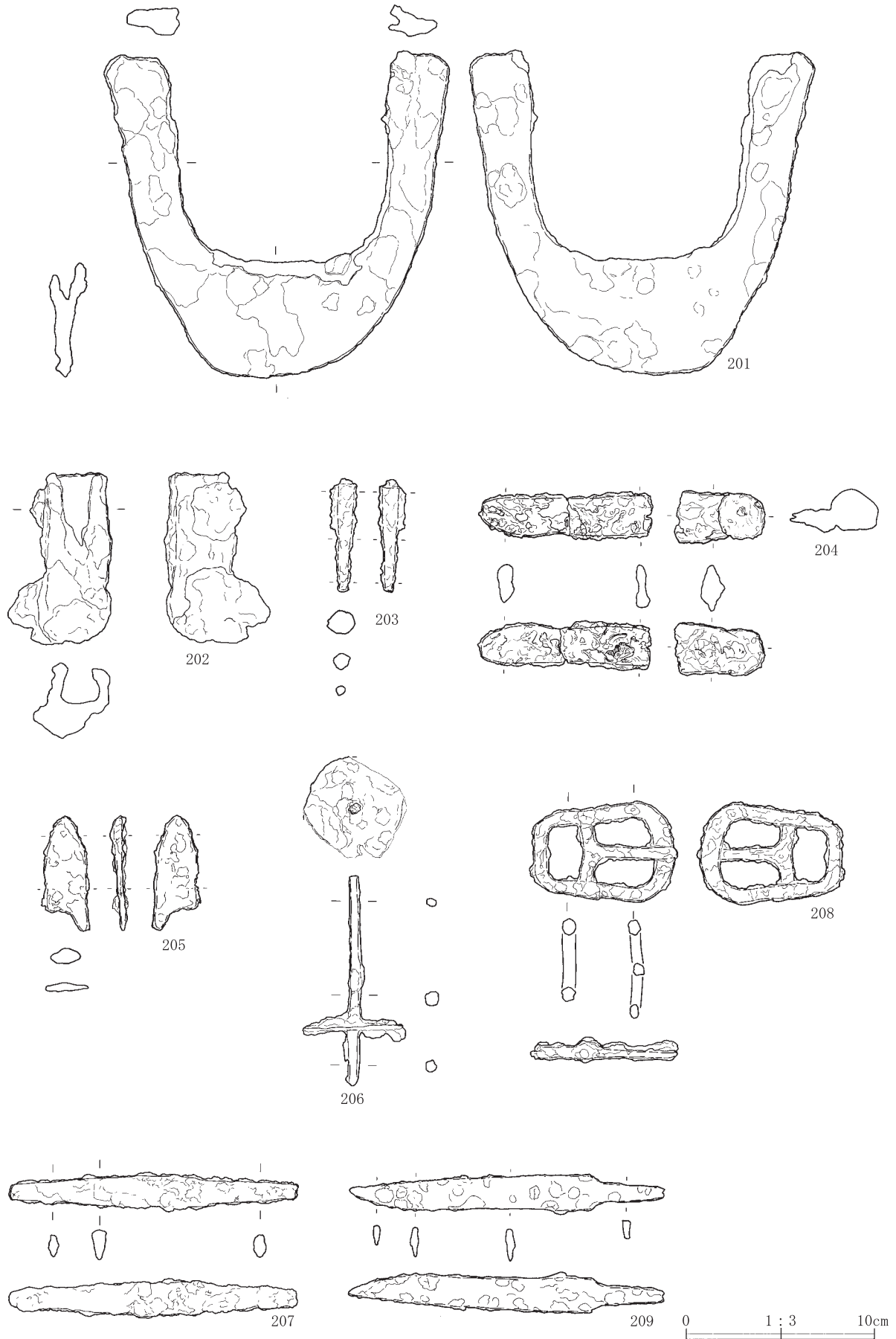
第 71 図 出土遺物 12 (161~171)



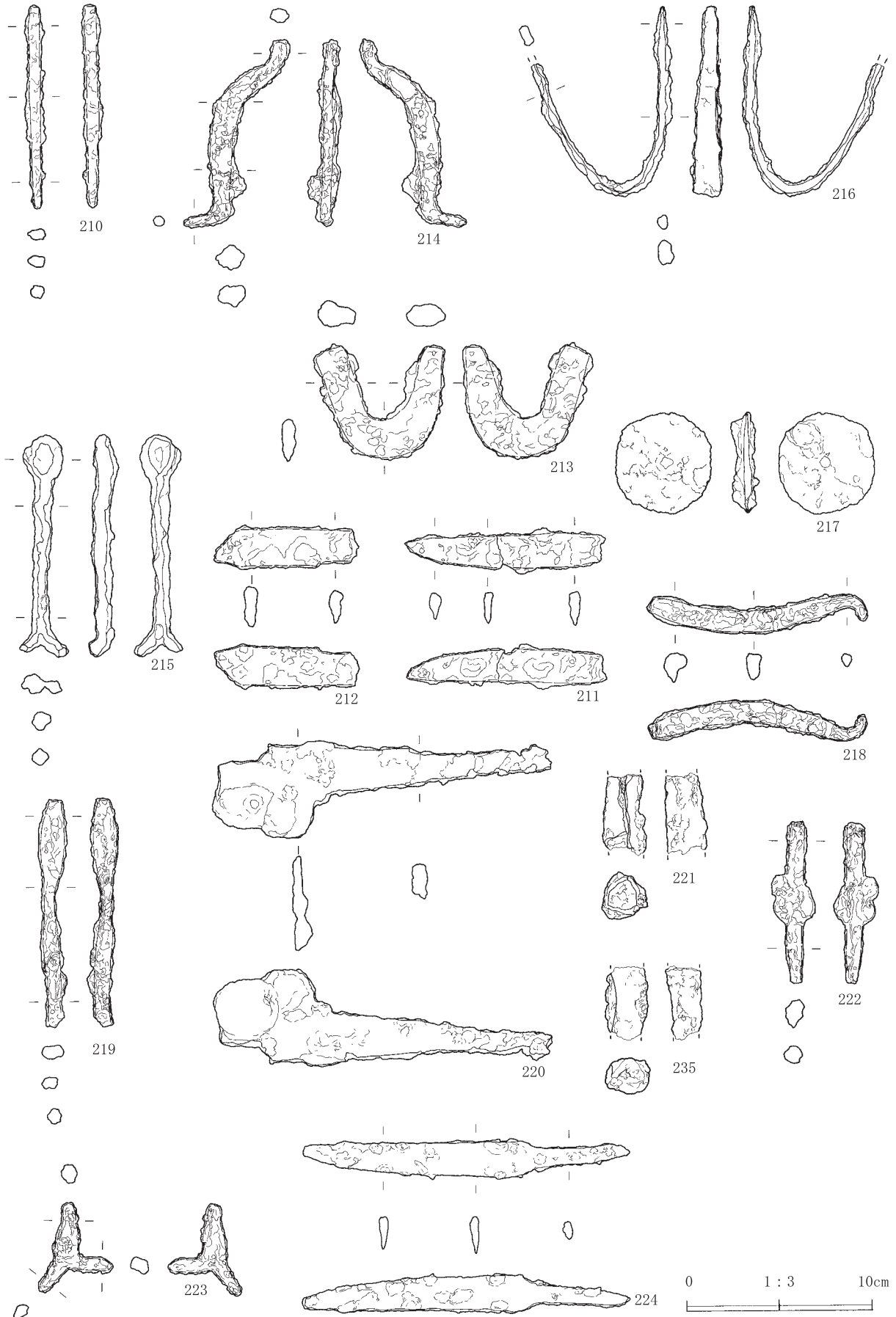
第 72 図 出土遺物 13 (172~179)



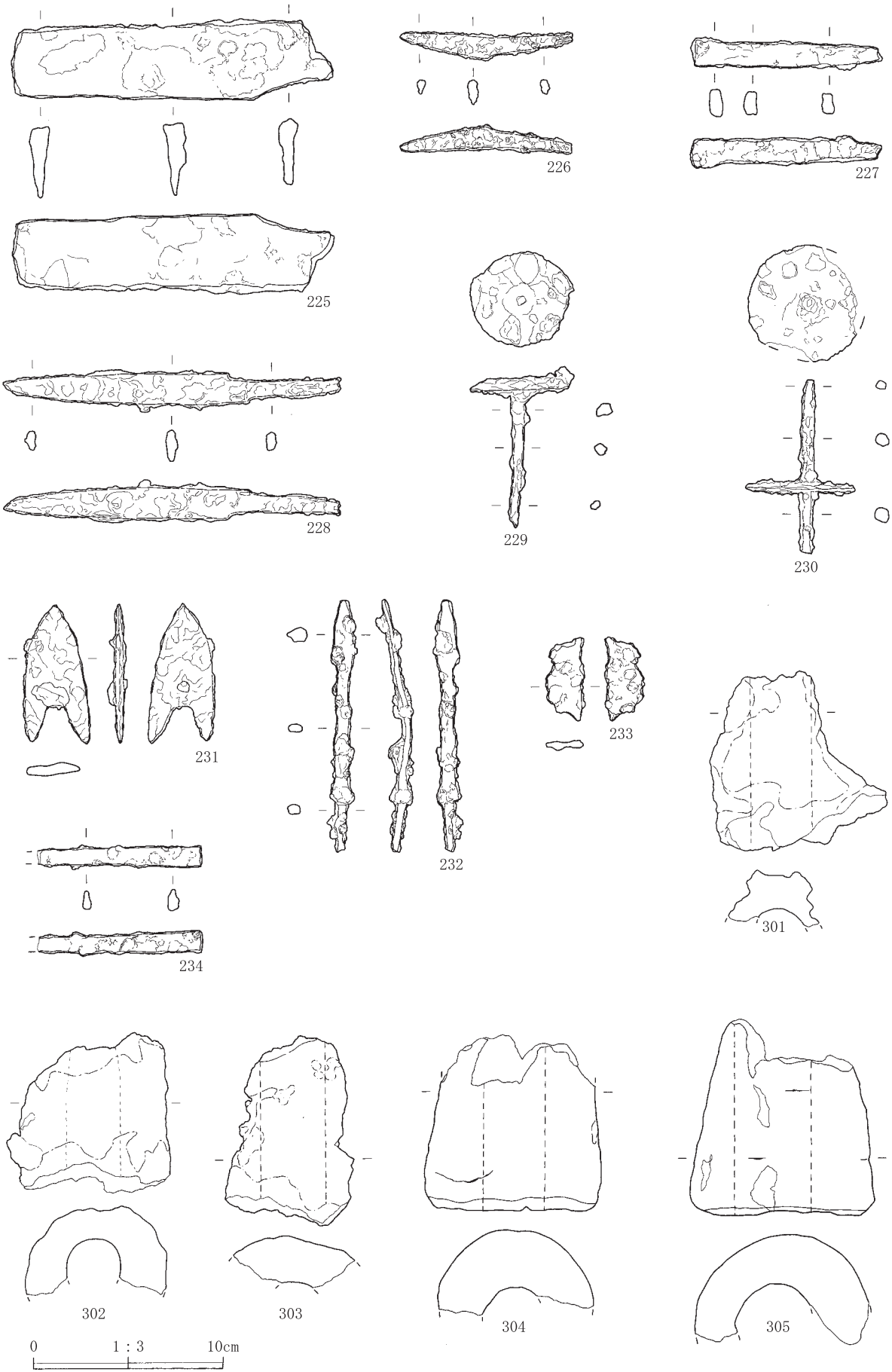
第 73 図 出土遺物 14 (180~182)



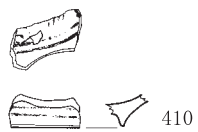
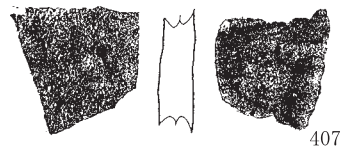
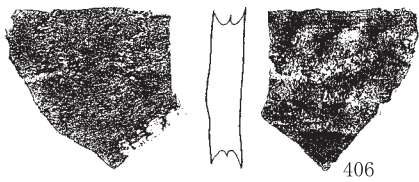
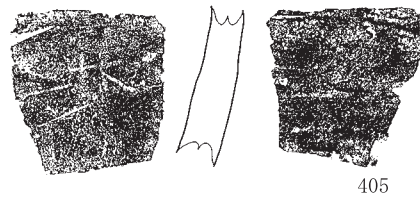
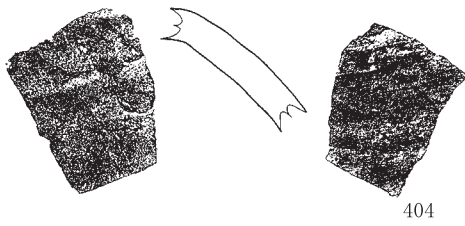
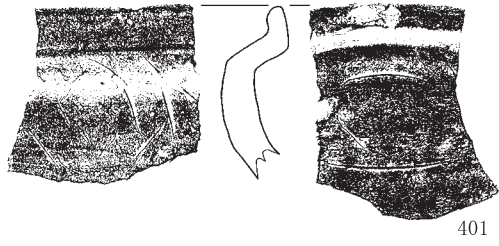
第 74 図 出土遺物 15 (201~209)



第 75 図 出土遺物 16 (210~224・235)

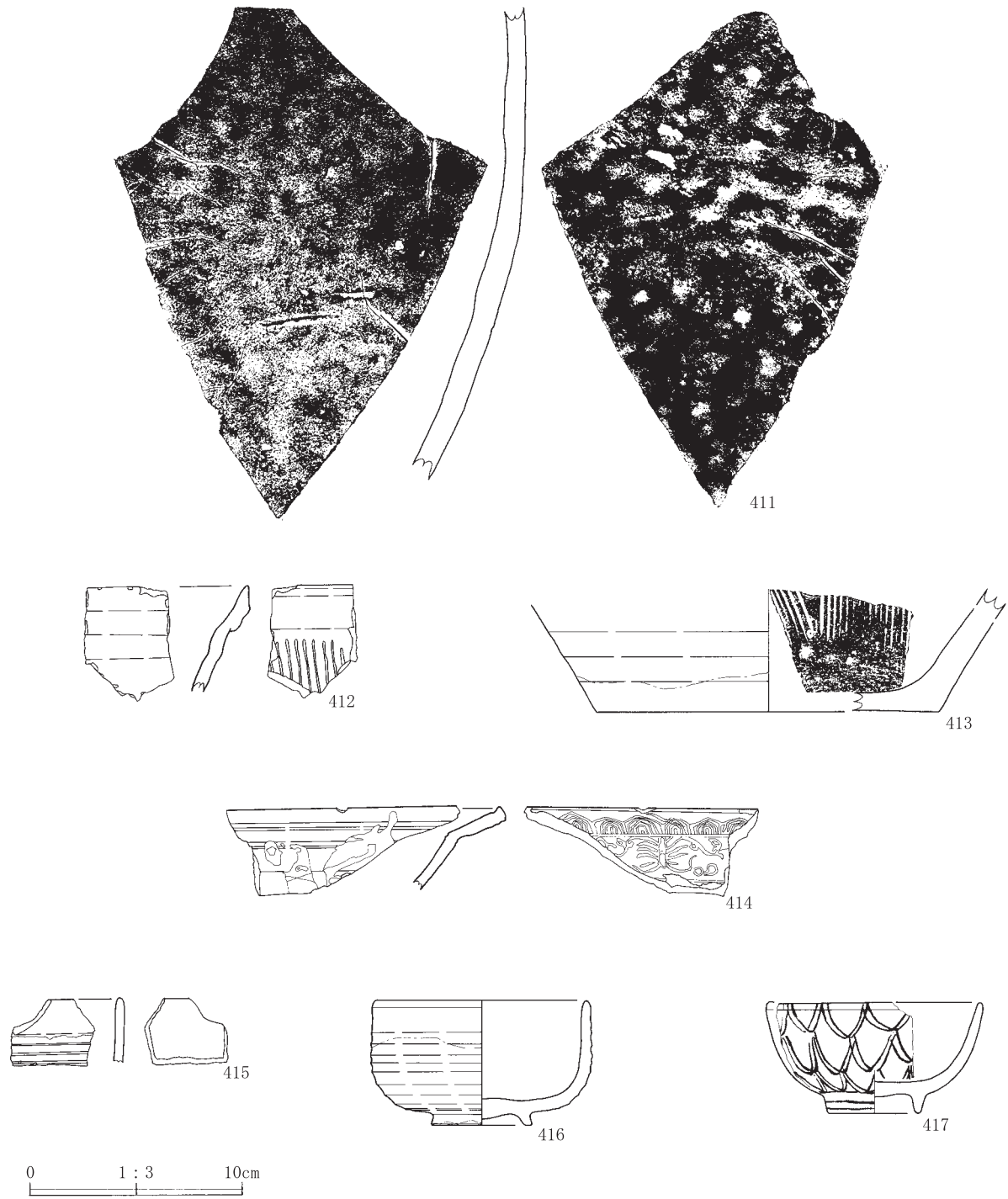


第 76 図 出土遺物 17 (225~ 234・301~ 305)

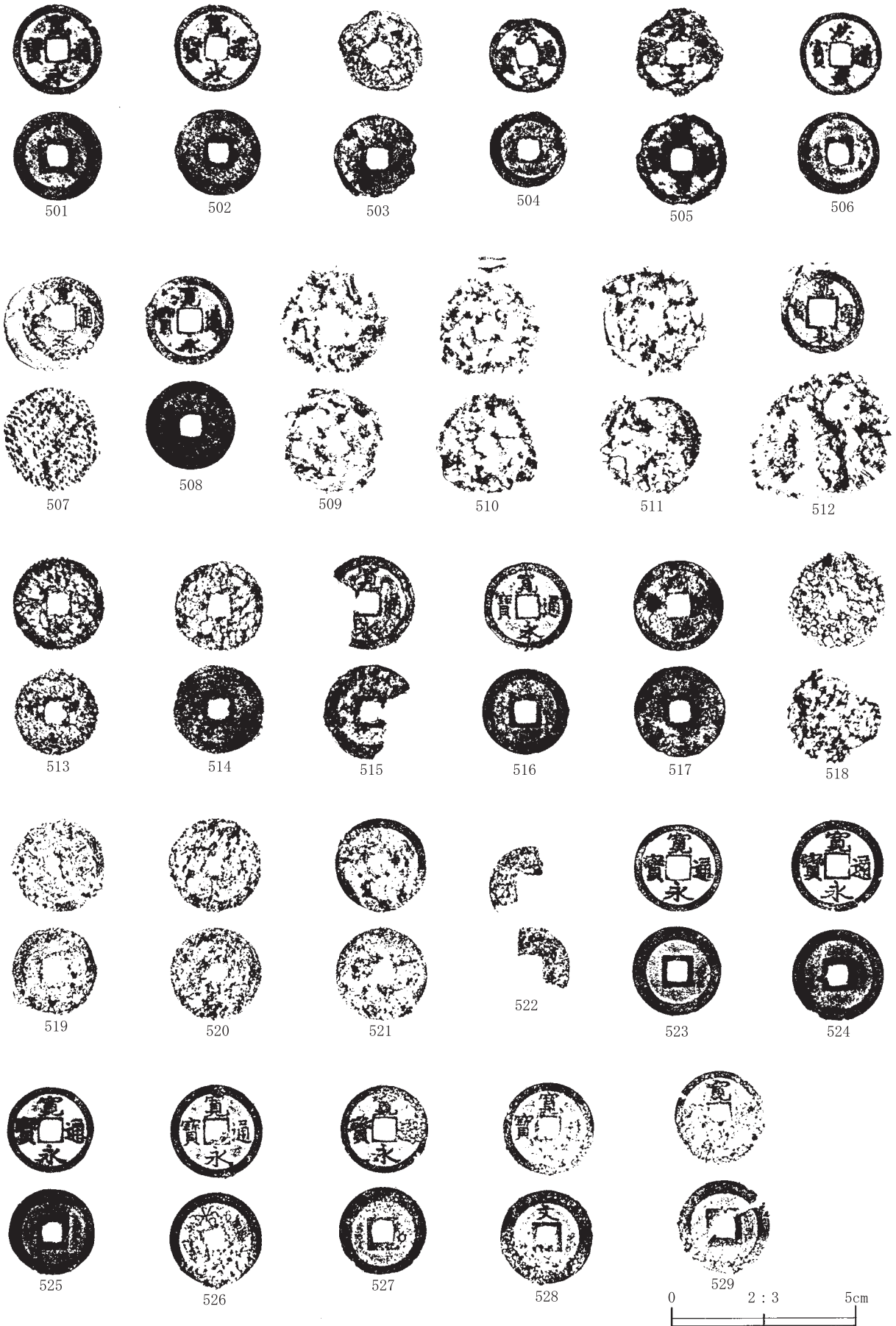


0 1 : 3 10cm

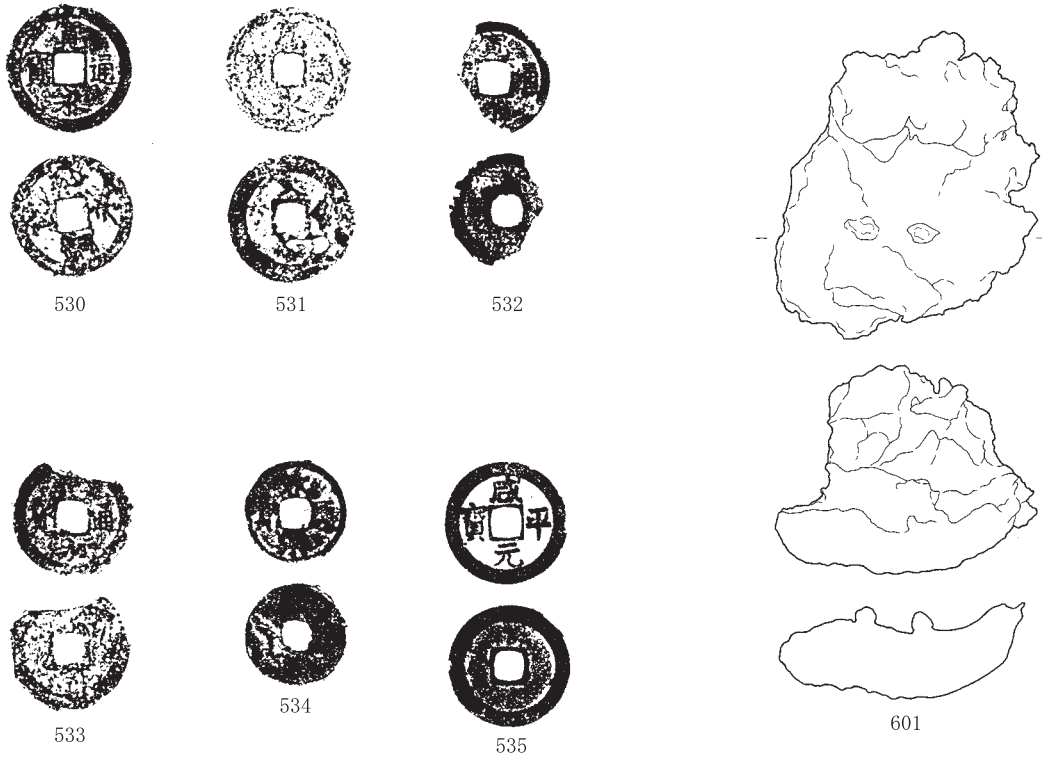
第 77 図 出土遺物 18 (401~ 410)



第 78 図 出土遺物 19 (411~ 417)



第 79 図 出土遺物 20 (501~ 529)



0 2 : 3 5cm

0 1 : 3 10cm



0 1 : 2 10cm

0 1 : 3 10cm

第 80 図 出土遺物 21 (530~ 535・601・701~ 705)



第 81 図 出土遺物 22 (706~711)